

丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

たか まつ じょう あと まる うち ち く
高松城跡(丸の内地区)

2015年7月

穴吹興産株式会社
高松市教育委員会

例 言

- 1 本報告は、共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（高松城跡（丸の内地区））の報告書である。
- 2 調査地は高松市丸の内 15 番地 1 に所在する。調査期間は平成 26 年（2014 年）4 月 21 日～6 月 30 日である。
- 3 本遺跡の確認調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員波多野篤及び同課埋蔵文化財担当職員池見渉が担当した。本調査は池見が担当し、同課非常勤嘱託職員杉原賢治が補佐した。本調査後の整理作業は池見が担当し、同課非常勤嘱託職員片桐節子・西尾明美・森原奈々が補佐した。
- 4 本書の執筆・編集は池見が担当した。
- 5 第 3 図は国土地理院 2.5 万分の 1 の地図をもとに作成し、一部改変した。
- 6 高度はすべて標高を表す。方位は座標北を示す。
- 7 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 8 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々の御協力を賜った。
宮城一木 様（徳島市教育委員会社会教育課）

目 次

第 1 章	調査の経緯と経過	
第 1 節	調査の経緯	1
第 2 節	調査の経過	1
第 2 章	地理的・歴史的環境	
第 1 節	地理的環境	5
第 2 節	歴史的環境	6
第 3 章	調査の成果	
第 1 節	調査区の設定 / 基本層序	11
第 2 節	遺構・遺物	17
第 4 章	総括	
第 1 節	検出遺構について	131
第 2 節	絵図との比較	133
第 3 節	建物及び溝の主軸方向に関する検討	136
	遺物観察表	139

挿 図 目 次

第 1 図	調査地位置図 (1)	6
第 2 図	調査地位置図 (2)	6
第 3 図	高松城周辺遺跡位置図	7
第 4 図	調査区南壁断面図	13-14
第 5 図	調査区東壁断面図	15-16
第 6 図	第 1 遺構面遺構配置図 (1/100)	19-20
第 7 図	整地層検出状況模式図 (1/100)	21
第 8 図	整地層・遺構合成図	23-24
第 9 図	A・B 層出土遺物	26
第 10 図	B (2)・C・D 層出土遺物	27
第 11 図	D 層 (2) 出土遺物	28
第 12 図	D・E 層 (1) 出土遺物	29
第 13 図	E (2)・K・L・G 層出土遺物	30
第 14 図	SP101～105 平面図・断面図	33
第 15 図	SP106～110 平面図・断面図	33
第 16 図	柱穴平面図・断面図 (1)	34
第 17 図	柱穴平面図・断面図 (2)	35
第 18 図	柱穴平面図・断面図 (3)	36
第 19 図	大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図 (1)	42
第 20 図	大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図 (2)	43
第 21 図	大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図 (3)	44
第 22 図	SK101・102 出土遺物	45
第 23 図	SK103・109・110・111・107 (1) 出土遺物	46

挿 図 目 次

第 24 図	SK107 (2)・116 (1) 出土遺物	47	第 55 図	大形土器据え付け土坑平面図・断面図	93
第 25 図	SK116 (2)・113・115・117・118 出土遺物	48	第 56 図	SK201 出土遺物	93
第 26 図	木桶据え付け土坑平面図・断面図 (1)	51	第 57 図	廃棄土坑平面図・断面図	94
第 27 図	木桶据え付け土坑平面図・断面図 (2)	52	第 58 図	その他の土坑平面図・断面図 (1)	98
第 28 図	SK122 出土遺物	53	第 59 図	その他の土坑平面図・断面図 (2)	99
第 29 図	SK122-3 (2)・SK123・125・126 出土遺物	54	第 60 図	その他の土坑平面図・断面図 (3)	100
第 30 図	SK124 出土遺物	55	第 61 図	SK202・205・207・211 出土遺物	101
第 31 図	廃棄土坑平面図・断面図	57	第 62 図	SK212 出土遺物	102
第 32 図	その他の土坑平面図・断面図 (1)	61	第 63 図	SK218・221 出土遺物	103
第 33 図	その他の土坑平面図・断面図 (2)	62	第 64 図	SK224・228・230・233 出土遺物	104
第 34 図	その他の土坑平面図・断面図 (3)	63	第 65 図	SD201～203 平面図・断面図	105
第 35 図	SK127・132 出土遺物	64	第 66 図	SD204 平面図・断面図	107
第 36 図	SK134 出土遺物	65	第 67 図	SD205 平面図・断面図	109
第 37 図	SK147・148・149・150 出土遺物	66	第 68 図	SD202・204 出土遺物	110
第 38 図	SK150 (2)・152 出土遺物	67	第 69 図	SD205 出土遺物	111
第 39 図	SD101 平面図・立面図 (1/60) (1)	71-72	第 70 図	SE202 平面図・断面図	112
第 40 図	SD101 平面図・立面図 (1/80) (2)	73	第 71 図	SE202 出土遺物	113
第 41 図	SD101 断面図及び立面図	74	第 72 図	SX201 平面図・断面図	115
第 42 図	SD101 エレベーション図	75	第 73 図	SX201 出土遺物	115
第 43 図	SD101 II 層 (1) 出土遺物	77	第 74 図	③層直上・②層 (焼土層) 出土遺物	117
第 44 図	SD101 II 層 (2) 出土遺物	78	第 75 図	第 3 遺構面遺構配置図 (1/100)	119-120
第 45 図	SD101 II 層 (3)・III 層・石組み裏込め・I 層出土遺物	79	第 76 図	柱穴平面図・断面図	121
第 46 図	SD101 I 層 (2) 出土遺物	80	第 77 図	SK301 平面図・断面図	122
第 47 図	瓦溜り平面図・断面図 (1/50)	82	第 78 図	SK301 (1) 出土遺物	123
第 48 図	瓦溜り出土遺物	83	第 79 図	SK301 (2) 出土遺物	124
第 49 図	石列断面図	84	第 80 図	木桶据え付け土坑及びその他の土坑平面図・断面図	126
第 50 図	SE101 平面図・断面図	85	第 81 図	SD301 平面図・断面図	127
第 51 図	SE101 出土遺物	85	第 82 図	SE301・302 平面図・断面図	129
第 52 図	第 2 遺構面遺構配置図 (1/100)	89-90	第 83 図	SP306・SK307・309・SD301・SE301 出土遺物	130
第 53 図	柱穴平面図・断面図 (1)	91	第 84 図	高松城絵図 (1)	134
第 54 図	柱穴平面図・断面図 (2)	92	第 85 図	高松城絵図 (2)	135
			第 86 図	近代住宅基礎及び石組み溝検出状況	137

挿 表 目 次

第 1 表	遺構番号対照表	3	第 10 表	土器観察表 (7)	146
第 2 表	整理作業工程表	5	第 11 表	土器観察表 (8)	147
第 3 表	整地土一覧表	25	第 12 表	土器観察表 (9)	148
第 4 表	土器観察表 (1)	140	第 13 表	土器観察表 (10)	149
第 5 表	土器観察表 (2)	141	第 14 表	土器観察表 (11)	150
第 6 表	土器観察表 (3)	142	第 15 表	瓦観察表	151
第 7 表	土器観察表 (4)	143	第 16 表	木製品観察表	152
第 8 表	土器観察表 (5)	144	第 17 表	金属製品観察表	152
第 9 表	土器観察表 (6)	145			

本文図版目次

写真1	調査区基本層序 (1Tr 北壁断面) (南から)……………2	写真5	近代住宅基礎及び近代石組み溝検出状況 (4Tr) (南東から)……………2
写真2	近代住宅基礎検出状況 (2Tr) (東から)……………2	写真6	近世石組み溝検出状況 (4Tr) (南から)……………2
写真3	近代造成土断面 (1Tr 東壁断面) (西から)……………2		
写真4	第1・2遺構面遺構検出状況 (東から)……………2		

写真図版目次

図版 1	1. 調査前状況 (北西から)	37. SK122-1 木桶出土状況 (南から)	
	2. 近代住宅基礎等検出状況 (東から)	38. SK122-2 断面 (南から)	
	3. 近代石組み溝検出状況 (北から)	39. SK122-2 木桶出土状況 (南から)	
	4. 第1遺構面 (西半) 遺構検出状況 (東から)	40. SK122 ~ 126 木桶出土状況 (東から)	
	5. 第1遺構面 SD101 検出状況 (北から)	図版 6	41. SK122 ~ 126 完掘状況 (東から)
	6. SP101 ~ 105 完掘状況 (西から)		42. SK134 断面 (北から)
	7. SP106 断面 (南から)		43. SK147 陶器出土状況 (南から)
	8. SP109 断面 (南から)		44. SK150 断面 (西から)
図版 2	9. SP115 断面 (北から)		45. SK150 完掘状況 (西から)
	10. SP122 断面 (北から)		46. SD101 断面 a (北から)
	11. SP124・125 断面 (南から)		47. SD101 断面 b (北から)
	12. SP127 断面 (西から)		48. SD101 完掘状況 (南から)
	13. SP132 断面 (南から)	図版 7	49. SD101 西側側壁 (古階段) 検出状況 (北東から)
	14. SP133 断面 (南から)		50. SD101 西側側壁 (古階段) 検出状況 (東から)
	15. SK101 断面 (北から)		51. SD101 西側側壁 (北東から)
	16. SK101 土器出土状況 (北から)		52. SD101 東側側壁 (北西から)
図版 3	17. SK103 断面 (南から)		53. SD101 東側側壁裏込め断面 (北から)
	18. SK103 土器・陶器出土状況 (南から)		54. 瓦溜まり検出状況 (南から)
	19. SK106 断面 (南から)		55. 石列全景 (西から)
	20. SK107 断面 (南から)		56. 石列西側断割り断面 (北半部) (西から)
	21. SK107 土器出土状況 (南から)	図版 8	57. 石列西側断割り断面 (南半部) (西から)
	22. SK110 断面 (南から)		58. SE101、SK118・148 重複状況 (南から)
	23. SK110 土器出土状況 (南から)		59. SE101 断面 (東から)
	24. SK111 断面 (西から)		60. SE101 木製井戸枠検出状況 (東から)
図版 4	25. SK112 断面 (南から)		61. 整地 A-B 間断割り断面 (南東から)
	26. SK114 断面 (南から)		62. 整地 E-F 間断割り断面 (東から)
	27. SK114 土器出土状況	図版 9	63. 第1遺構面 (東半) 完掘状況 (西から)
	28. SK115 断面 (西から)		64. 第1遺構面 (西半) 完掘状況 (西から)
	29. SK116 断面 (南から)	図版 10	65. 第2遺構面 (西半) 遺構検出状況 (東から)
	30. SK116 土器出土状況 (南から)		66. SP204 断面 (西から)
	31. SK117 断面 (南から)		67. SP206 断面 (西から)
	32. SK117 土器出土状況 (南から)		68. SP204 ~ 208 完掘状況 (北西から)
図版 5	33. SK121 断面 (南から)		69. SK201 断面 (南から)
	34. SK121 完掘状況 (南から)		70. SK201 土器出土状況 (南から)
	35. SK122-1 断面 (南から)		71. SK201・212・213 完掘状況 (南から)
	36. SK122-1 銅銭出土状況 (東から)		72. SK202 断面 (北から)

写真図版目次

- 図版 11** 73. SK204 断面 (南から)
74. SK205 断面 (南から)
75. SK206 断面 (南から)
76. SK209 断面 (南から)
77. SK211 断面 (西から)
78. SK222 断面 (北から)
79. SK224 断面 (南から)
80. SK227 断面 (南から)
- 図版 12** 81. SK228 断面 (南から)
82. SK232 断面 (西から)
83. SX201 断面 (南から)
84. SX201 桁状木製品出土状況 (南から)
85. SX201 井戸枠状木製構造物検出状況 (東から)
86. SD201 断面 (西から)
87. SD202 断面 b (東から)
88. SD201・202 完掘状況 (西から)
- 図版 13** 89. SD203 断面 (西から)
90. SD204 断面 a (西から)
91. SD204 断面 b (西から)
92. SD204 完掘状況 (西から)
93. SD205 木桶検出状況 (北西から)
94. SD205 木桶痕検出状況 (西から)
95. SD205 断面 a (西から)
96. SD205 断面 b (西から)
- 図版 14** 97. SD205 接続部検出状況 (北西から)
98. SD205、SX201 完掘状況 (西から)
99. SE202 断面 (1) (南から)
100. SE202 断面 (2)
101. SE202 下位列石検出状況 (南から)
- 図版 15** 102. 第2遺構面 (東半) 完掘状況 (西から)
103. 第2遺構面 (西半) 完掘状況 (西から)
- 図版 16** 104. 第3遺構面遺構検出状況 (西から)
105. SP301 断面 (南から)
106. SP305 断面 (南から)
107. SP310 断面 (南から)
108. SK301 断面 (北西から)
109. SK308 断面 (南から)
110. SD301 断面 (西から)
111. SD301 完掘状況 (西から)
- 図版 17** 112. SE201 断面 (南から)
113. SE302 断面 (1) (南から)
114. SE302 断面 (2) (南から)
115. 第3遺構面完掘状況 (西から)
- 図版 18** 116. 調査区南壁断面 (北東から)
117. 調査区東壁断面 (南半) (西から)
118. 調査区東壁 (北半) ①~③層堆積状況 (北西から)
- 図版 19** 1. SD101 出土遺物 (1)
2. SD101 出土遺物 (2)
3. SD101 出土瓦 (3)
- 図版 20** 4. SK122 出土遺物 (1)
5. SK132 出土遺物
- 図版 21** 6. SK134 出土遺物
7. SK150 出土遺物
- 図版 22** 8. SK122 出土遺物 (2)
9. SK103 出土遺物
10. 整地D層出土遺物
11. SK150(195)・SD101(243) 出土遺物
12. SK147 出土遺物
13. SE201 出土遺物
- 図版 23** 14. SK109(75)・SK110(74)・SK107(82)・SK117(98) 出土遺物
15. SK116(83)・SK101(67) 出土遺物
16. SK116(83) 上面
- 図版 24** 17. SD202 出土遺物
18. SK202 出土遺物
- 図版 25** 19. SK212 出土遺物
20. SK201 出土遺物
21. 銅銭
22. ③層直上・②層 (焼土層) 出土遺物
- 図版 26** 23. SK301 出土遺物
24. SE301 出土遺物
25. SD301 出土遺物
26. SK301 出土漆器 (外面)
27. SK301 出土漆器 (内面)
- 図版 27** 28. 木製品集合
29. 曲げ物
30. SE202 出土漆器 (1)
31. SE202 出土漆器 (2)
32. SX201 出土漆器
- 図版 28** 33. SD205 出土丸瓦 (凸面)
34. SD205 出土丸瓦 (凹面)
35. SK202 出土瓦
36. 瓦溜り 出土瓦
37. SK202(293)・SE202(377) 出土瓦
38. SK301 出土瓦

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

調査に至る経緯

調査対象地は近世城郭である高松城跡外曲輪内に位置するとともに、周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（丸の内地区）」に隣接することから、周知の埋蔵文化財包蔵地外であるが、高松城跡に関連する遺構が残存する可能性が考えられていた。当該地で共同住宅建設工事が計画されたことから、埋蔵文化財の有無を確認することを目的とした「試掘調査」の任意協力を事業者の説明したところ、平成26年2月5日付けで、確認調査依頼文が事業者より提出されたことから、同年3月10日～3月11日の日程で試掘調査を実施した。その結果、事業対象地のほぼ全域に近世の遺構が包蔵されている状況を確認した。よって、調査対象地を周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（丸の内地区）」に追加した。

上記試掘調査の結果を受けて協議を重ねた結果、工事により埋蔵文化財が破壊される範囲を最小限に抑えるよう一部設計の変更がなされるとともに、平成26年7月から工事に着手する計画が立てられた。そこで、工事着手に先立ち、平成26年3月27日付けで、埋蔵文化財発掘届出が事業者より香川県教育委員会教育長へ提出された。それに対し、共同住宅本体部分についてのみ、地下の埋蔵文化財が掘削され、破壊される恐れがあるとの理由から、同年4月2日付けで、香川県教育委員会教育長より事業者あてに「発掘調査」の行政指導がなされた。これに従い、高松市教育委員会は平成26年4月21日～6月30日に発掘調査を実施し、共同住宅本体部分についてのみ保護措置を完了した。本報告では、上記発掘調査の成果を報告する。

試掘調査の概要（写真1～6）

平成26年3月に実施した試掘調査では、工事対象範囲内全域に計4本のトレンチを設定して調査を実施した。また、遺構面の面数や下位遺構面における遺構の有無は、上位遺構面において遺構が皆無であった空白範囲における部分的な掘り下げにより判断した。

試掘調査の結果、現代造成土、太平洋戦争時の戦災層、レンガ・ガラス片等を含む近代造成土を除去した段階で、炭化物や焼土、陶磁器類、礫を含む黄色系粗砂～シルトの堆積層を確認した（第1遺構面）。さらに、下位ではオリーブ褐色～黄色系粗砂～細砂

の堆積層を確認した（第2遺構面）。なお、第1遺構面を構成する堆積層は陶磁器類や礫等を多量に含むことから人為的な整地層であると考えられる。一方、第2遺構面を構成する堆積層は炭化物や焼土が含まれるものの、一部でラミナがみられることから自然堆積層である可能性が高いと考えた。現地表面から遺構面までの深度は、第1遺構面が約-0.9m、第2遺構面が約-1.1mである。なお、第2遺構面下位における遺構の有無は、確認範囲が狭小であり、試掘調査時には確認することができなかった。※1

第1遺構面及び第2遺構面上面で遺構精査を行った結果、両遺構面において土坑・柱穴等を確認した。第1遺構面では、調査対象地西端部において、南北方向に平行して延びる2列の切石列を確認した。一部埋土の掘削を行った結果、列石は少なくとも2段以上積み上げられた状況を呈し、平坦面が向かい合うように揃えられていることから、石組み溝であると判断した。当該石組み溝開削箇所は武家屋敷と町屋（「上横町」）の境界付近にあたることから、武家屋敷と町屋の区画を主目的として開削されたものである可能性が考えられた（第4章参照）。なお、第1遺構面上位に位置する近代整地層上面では、太平洋戦争時の空襲で廃絶したと考えられる、焼土層に覆われた住宅基礎を検出しており、当該地における土地利用の変遷過程を知ることができた。

第1遺構面では検出遺構の埋土及び整地層から多量の遺物が出土し、第2遺構面では検出遺構の埋土から遺物が出土している。いずれも、17世紀～18世紀に属するものであり、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器等が出土している。

※1 本発掘調査時の断割り調査の結果、第2遺構面下位に第3遺構面が存在することが判明し、急遽記録保存を図った。

第2節 調査の経過

発掘作業の経過

発掘作業は平成26年4月21日～6月30日の日程で実施した。

<調査区の設定>（第2図）

調査着手に先立ち、既存のコンクリート塀、看板、アスファルトの撤去・処分が行われ、調査着工時には、アスファルト直下の花崗土が露出し、敷地全体が平坦にならされた状況であった。

共同住宅建設工事のうち、共同住宅本体部分につ



写真1 調査区基本層序 (1tr 北壁断面) (南から)



写真4 第1・2遺構面遺構検出状況 (3tr) (東から)



写真2 近代住宅基礎検出状況 (2tr) (東から)



写真5 近代住宅基礎及び近代石組み溝検出状況 (4tr) (南東から)



写真3 近代造成土断面 (1tr 東壁断面) (西から)



写真6 近世石組み溝検出状況 (4tr) (南から)

いてのみ、地下の埋蔵文化財が掘削され、破壊される恐れがあることから、共同住宅本体部分約 350 m² を調査区とした。

<重機掘削>

事業対象地が狭く、廃土を仮置きするスペースを確保することが困難であったことから、調査地を東西に二分し、西半を第1調査区、東半を第2調査区として調査を実施した。調査は、試掘調査時の所見から各遺構面の層序を捉えやすいと考えられた第1

調査区から行い、第1調査区の調査終了後、引き続いて第2調査区の調査に着手した。

第1調査区では、近代の住宅基礎や石組み溝が比較的良好に残存する状況を試掘調査時に確認していた。また、近代の住宅基礎・石組み溝下位には近世の石組み溝をはじめとする遺構が残存することが判明していた。以上のような状況から、近代住宅基礎及び石組み溝撤去時に下位の近世遺構を破壊する恐れが想定されたこと、また近代住宅基礎及び石組み溝

第1表 遺構番号対照表

報告書掲載番号	調査時番号	報告書掲載番号	調査時番号	報告書掲載番号	調査時番号
SP101	1-2-11	SK131	2-2-14	SK225	1-3-26
SP102	1-2-12	SK132	2-2-01	SK226	1-3-27
SP103	1-2-13	SK133	2-2-79	SK227	1-3-17
SP104	1-2-14	SK134	1-2-25	SK228	1-3-24
SP105	1-2-15	SK135	1-2-27	SK229	1-3-23
SP106	2-2-52	SK136	1-2-26	SK230	1-3-20
SP107	2-2-53	SK137	1-2-29	SK231	1-3-21
SP108	2-2-54	SK138	1-2-06	SK232	2-3-21
SP109	2-2-55	SK139	2-2-25	SK233	2-3-03
SP110	2-2-56	SK140	2-2-44	SD201	1-3-10
SP111	2-2-63	SK141	1-2-52	SD202	1-3-12/2-4-13
SP112	2-2-64	SK142	1-2-49	SD203	2-4-09
SP113	2-2-70	SK143	2-2-50	SD204	1-3-22
SP114	2-2-72	SK144	2-2-62	SD205	2-3-23
SP115	1-2-07	SK145	2-2-34	SE201	2-3-06
SP116	1-2-10	SK146	2-2-45	SE202	1-3-29
SP117	1-2-09	SK147	2-2-23	SX201	2-3-19
SP118	1-2-23	SK148	2-2-38	SP301	2-4-13
SP119	1-2-22	SK149	2-2-66	SP302	2-4-14
SP120	1-2-48	SK150	2-2-61	SP303	2-4-15
SP121	1-2-47	SK151	1-2-56	SP304	2-4-12
SP122	2-2-02	SK152	1-2-57	SP305	2-4-11
SP123	2-2-08	SK153	2-2-73	SP306	2-4-06
SP124	2-2-16	SK154	1-2-44	SP307	2-4-30
SP125	2-2-17	SD101	溝2	SP308	2-4-07
SP126	2-2-15	SE101	2-2-36	SP309	2-4-08
SP127	2-2-07	石列	石列	SP310	2-4-17
SP128	2-2-76	瓦溜まり	雨落ち溝	SP311	2-4-16
SP129	2-2-19	SP201	2-3-18	SP312	2-4-02
SP130	2-2-77	SP202	2-3-14	SP313	欠番
SP131	2-2-65	SP203	2-3-15	SK301	2-4-19
SP132	2-2-60	SP204	2-3-26	SK302	2-4-01
SP133	2-2-59	SP205	2-3-24	SK303	2-4-03
SP134	1-2-61	SP206	2-3-28	SK304	2-4-04
SP135	2-2-69	SP207	2-3-25	SK305	2-4-24
SP136	2-2-71	SP208	2-3-29	SK306	欠番
SP137	2-2-68	SP209	2-2-20	SK307	2-4-23
SP138	2-2-78	SP210	2-3-04	SK308	2-4-22
SK101	2-2-04	SP211	2-3-05	SK309	2-4-18
SK102	2-2-10	SP212	2-3-02	SK310	2-4-50
SK103	1-2-30	SP213	2-3-17	SD401	2-4-401
SK104	1-2-21	SP214	2-4-05	SE301	2-4-28・48
SK105	1-2-36	SP215	1-3-01	SE302	2-4-21
SK106	1-2-33	SP216	1-3-13		
SK107	1-2-31・32	SP217	2-3-20		
SK108	1-2-38	SP218	2-3-27		
SK109	1-2-58	SK201	2-3-13		
SK110	1-2-37	SK202	1-3-14		
SK111	2-2-28	SK203	1-3-02		
SK112	2-2-32	SK204	1-3-03		
SK113	2-2-35	SK205	1-3-05		
SK114	2-2-31	SK206	1-3-04		
SK115	2-2-75	SK207	2-3-01		
SK116	2-2-27	SK208	2-3-07		
SK117	1-2-53	SK209	2-3-10		
SK118	2-2-37	SK210	2-4-20		
SK119	2-2-58	SK211	2-3-12		
SK120	2-2-74	SK212	2-3-09		
SK121	1-2-59	SK213	2-3-08		
SK122-1	2-2-46	SK214	2-3-16		
SK122-2	2-2-47	SK215	1-3-07		
SK122-3	2-2-48	SK216	1-3-08		
SK123	2-2-43	SK217	1-3-06		
SK124	2-2-40	SK218	1-3-25		
SK125	2-2-42	SK219	1-3-09		
SK126	2-2-49	SK220	2-3-22		
SK127	2-2-41	SK221	1-3-15		
SK128	2-2-03	SK222	1-3-28		
SK129	2-2-09	SK223	1-3-18		
SK130	2-2-24	SK224	1-3-19		

と近世石組み溝の石材を混同し、誤って近世遺構を破壊する事態を避ける必要性から、まずは戦災層を除去して、戦災層直下に遺存する近代住宅基礎及び石組み溝を露出させ、各石材を人力及び重機で慎重に取り除いた上で、近代造成土を重機により掘削し、第1遺構面を露出させる手法をとった。上記の都合上、戦災層及び近代住宅基礎が確実に遺存することが試掘調査の結果から判明している調査区南西隅部から重機掘削を開始した。なお、近代住宅基礎及び石組み溝は今回の調査対象外ではあるが、下位に遺存する近世遺構の歴史的意義を理解する上で参考になると判断したため、平面図の作成のみ実施した。(第86図)

第1調査区第1遺構面の調査終了後、重機により整地層を除去し、第2遺構面を露出させた。第1遺構面を構成する整地層は互いに重複関係にある複数単位の整地層で構成されていたため、各整地層の形成順序の前後関係を明確化することを目的として、重機による掘り下げに先立ち、整地層境界付近をトレンチ状に掘削して形成順序の把握を試みた(第7図参照)。第2遺構面までの重機掘削に際しては、上記トレンチ調査の結果を参考にして可能な限り整地層毎に掘削を行い、整地層毎に遺物を回収することで、各整地層の形成時期の特定を試みた。

第1調査区第2遺構面の調査終了後、重機による埋戻しを行い、第2調査区の調査に着手した。第1調査区調査時の所見から近代住宅基礎を除去しても第1遺構面を傷付ける恐れは極めて小さいことが判明していたこと、且つ調査期間の都合上、近代住宅基礎の検出を行わずに第1遺構面まで重機で掘削を行った。掘削にあたっては、第1調査区第1遺構面の検出レベルを目安にするため、調査区層序が明瞭に把握できる調査区南壁際、第2調査区南西隅部から掘削を開始した。

第2調査区第1遺構面調査終了後、重機により整地層を除去し、第2遺構面を露出させた。当該重機掘削も上記と同じ理由で第2調査区南西隅部から実施した。なお、第2調査区についても第1遺構面を構成する整地層は複数単位に分類可能であったが、遺構壁面等に現れた整地層断面を参考に前後関係を整理しえたことから、先行するトレンチ調査は実施しなかった。また、可能な限り整地層毎に掘削を行い、整地層毎に遺物を回収することで、各整地層の形成時期の特定を試みた。

第2調査区第2遺構面調査終了後、第2遺構面下

位の自然堆積層の状況確認を行うため、調査区断面を作成する南壁面沿いで断割り調査を実施した。その結果、第2遺構面下位で遺構を検出し、試掘調査時には確認できなかった、第3遺構面が存在することが判明した。よって、急遽第2調査区全面の重機掘削に移行し、第3遺構面の調査を実施した。

すべての調査終了後、重機による埋め戻し作業及び資材の撤去を行い、調査を完了した。

なお、調査対象地西辺及び東辺については、調査対象地に接する現有道路の崩落防止及び仮囲いフェンス設置のため、幅50cm程度掘り残した。

<遺構精査・遺構掘削>

各遺構面における遺構精査及び遺構掘削は人力で行ったが、一部の井戸調査時の断割り作業のみ壁面崩落の危険性があったことから重機を用いて実施した。柱穴・土坑等小規模な遺構は半裁、溝は埋土をベルト状に残して掘削し、断面観察・記録(断面図・写真)を行った上で完掘した。また、掘削の過程で原位置を保つ遺物が出土した場合には、遺物出土状況図を作成して、取り上げを行った上で完掘した。

<記録>

作成した記録は、調査区南壁・東壁断面図、遺構平面図、遺構断面図であり、石組み溝のみ石垣立面図を作成した。また、原位置を保つ状態で出土した遺物については、適宜出土状況図を作成した。平面図はポール撮影による写真測量により、石組み溝の断面図・立面図及び瓦溜りの断面図はレーザー測量により作成した。写真測量・レーザー測量は株式会社四航コンサルタントに業務委託して行った。また、必要に応じて遺構平面図や遺物出土状況図をトータルステーション等を用いて作成した。調査区断面図や遺構断面図は手測りにより作成した。作成した平面図は、基準点を用いて国土座標にはめ込む方法をとった。また、断面図・立面図等作成時に必要な標高も上記基準点の標高をもとに算出した。

図面作成と併せて遺構検出状況、調査区南壁・東壁断面、遺構断面、遺構完掘状況の写真撮影を実施した。また、原位置を保つ状態で出土した遺物については、適宜遺物出土状況の写真撮影を実施した。

整理作業の経過(第2表)

整理作業は平成26年度に実施した。まず、平成26年7月に出土遺物の洗浄・選別を行った。出土遺物が膨大であったことから、選別にあたっては、遺構形成時期の特定に直接的に結びつく資料(整地層出土遺物・遺構掘方出土遺物のうち比較的新相の遺物)

であり、且つ各遺構（整地層）出土遺物中、比較的残存状況の良い資料を中心に選び出すことを原則とした（井戸・溝状遺構等埋没時期特定が必要な場合は適宜、新相の遺物も掲載した）。また、特に陶磁器類の産地別の割合も、当該遺構（整地層）形成時期を特定する際の重要な手掛かりの一つとなることから、選別にあたっては産地別割合を概ね反映するよう留意した。

平成26年8月～12月に出土遺物の実測作業・拓本作業と遺構図のデジタルトレース作業を並行して実施し、その後、遺物実測図のアナログトレース作業を実施した。複雑な絵柄の染付等を有し、且つ残存状況の比較的良好な陶磁器類については、株式会社文化財サービスに業務委託して、平成26年11月～平成27年2月にデジタル画像処理により実測図への写真はめ込みを実施した。

平成27年1月から報告書原稿執筆を開始し、4月から編集作業を開始した。なお、出土遺物の写真撮影は3月に「西大寺フォト」に業務委託して実施した。

なお、当初の工期は、平成27年3月31日までであったが、当初想定していたよりも出土遺物及び遺構数が膨大であったことから、工期を7月末迄延長することとし、3月31日付けで事業者と変更契約を締結した。

第2表 整理作業工程表

	平成26年						平成27年					
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
遺物洗浄・選別												
遺物実測/拓本												
遺物・遺構図トレース												
遺物写真撮影												
レイアウト												
原稿執筆												
編集												
印刷/刊行												

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本遺跡が所在する香川県高松市は四国北東部の瀬戸内海に面した地域に属する。高松市域の大部分を占める平地は高松平野である。香川県内には、山塊に画された小規模な平野が複数単位存在し、いずれも一様に北方の瀬戸内海へと下る状況を呈する。高松平野も例外ではない。西を五色台・勝賀山、南を阿讃山脈、東を立石山塊により画され北方に開けた状況を呈する。市内を縦断する主要な河川として、平野南部の丘陵地帯・山地帯を源流とする香東川や春日川、本津川等がある。高松平野は、これらの河川活動により形成された河成堆積平野であると言える。

調査地が位置する高松城跡周辺、現在の高松市街地中心部は平野北端部の海浜部に位置する。特に香東川水系の河川活動の影響を直接的に受けた地域にあたる。中世以前は香東川が香川町大野付近から東西2股に分かれており、西側の流路が石清尾山塊西側を、東側の流路が高松市街地方面へと流れていた。1630年代に、生駒家の奉行であった西嶋八兵衛により香東川東側流路が堰き止められて以降、流路は西側に一本化されている。

現在高松市街地中心部は開発が進み、旧地形を復元し難い状況にあるが、現在の御坊川流路や栗林公園地下の伏流水（地下水）の存在に、当時の地形環境の一端が反映されている。東側流路は稲荷山東麓付近でさらに幾筋かの流路に枝分かれしており、細分化された流路間に形成された中州状の砂州帯の1つが現在の高松市街地中心部となる。当該地には中世に港町である「野原」、近世には高松城及び城下町が形成されるが、これらは河川間に形成された比較的安定した微高地上に形成されたと言える。

参考文献

- 香川県教育委員会（編）2006『栗林公園東門周辺再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 栗林公園』香川県教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2012『高松丸亀町商店街G街区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書亀井戸跡-高松城下における上水施設の調査-』高松市教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2012『史跡高松城跡整備報告書第6冊 史跡高松城跡（天守台）-発掘調査編-』高松市教育委員会

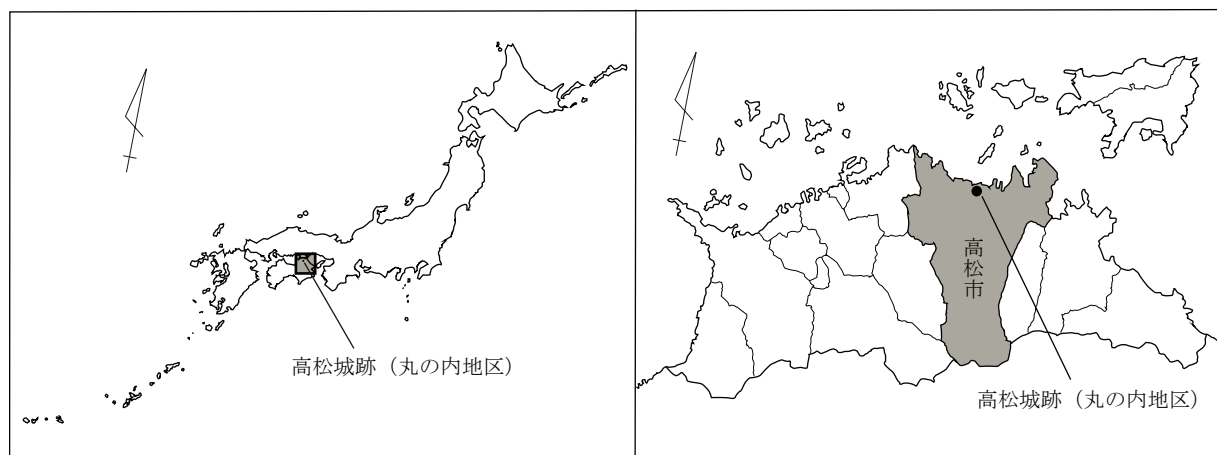
第2節 歴史的環境

<原始・古代>

本遺跡が位置する海浜部では、高松城跡（丸の内地区）における松平大膳家上屋敷跡（高松城跡（丸の内地区））の調査時に、近世の遺構面下位から弥生時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡と考えられる柱穴群が確認されている（高松市教育委員会（編）2004）。形成時期は出土遺物の年代観から弥生時代後期後葉であると考えられる。加えて、高松城跡における既往調査地においても弥生時代後期後葉の遺物が、後世の遺構埋土へ混入する形で多数出土している。高松城及び城下町が形成された地域は、前述のとおり

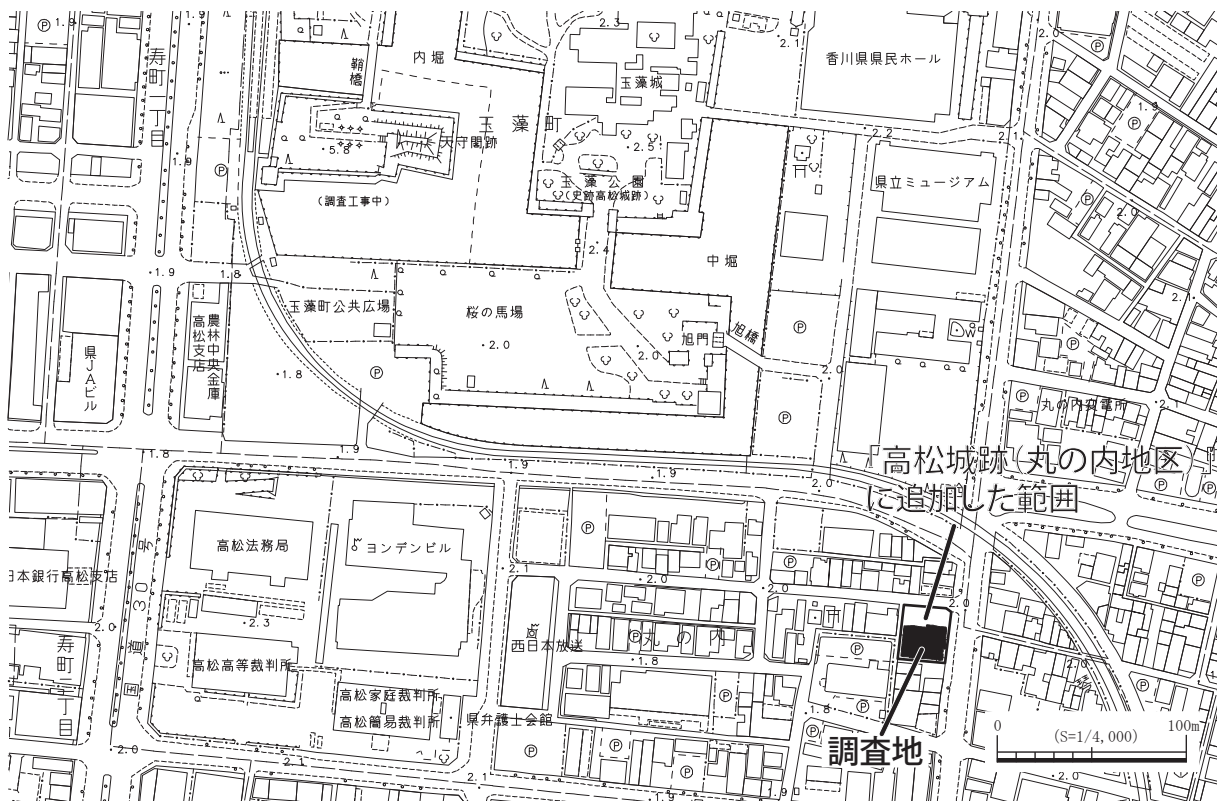
香東川河口付近に形成された中州状の砂州であるが、当該地における土地利用の開始時期は、少なくとも弥生時代後期後葉までさかのぼると言える。海浜部に形成された砂州上に弥生時代後期後葉の居住域が展開していた可能性が考えられる。当該期には、県内各地の平野部で集落数が増加し、山間の谷部や海岸線付近まで居住域が拡大する傾向が指摘されている（渡邊2014・池見2014）。上記事例もその一例として位置付けられよう。

高松城及び城下の調査において、古墳時代の遺跡は未だ確認されていない。しかしながら、都市計画道路高松海岸線拡幅工事に伴う発掘調査（報告書未刊）



第1図 調査地位置図 (1)

※左図アミ部を右に拡大



第2図 調査地位置図 (2)



1. 東ノ丸跡 2. 水手御門 3. 県民小ホール地区 4. 県立歴史博物館地区 5. 西の丸町地区Ⅱ 6. 西の丸町地区Ⅲ 7. 作事丸 8. 西内町 9. 地久橋 10. 高松北署地区 11. 内町 12. 三の丸 13. 西の丸町地区Ⅰ 14. 地久橋台 15. 丸の内地区 16. 松平大膳家中屋敷跡 17. 松平大膳家上屋敷跡 18. 三の丸、竜橋台北側 19. 西の丸町D地区 20. 丸の内 21. 寿町一丁目（無量壽院跡） 22. 中堀、北浜町 23. 丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業 24. 丸の内、再生水管布設工事 25. 丸の内、個人住宅建設 26. 二の丸、玉藻公園西門料金所整備工事 27. 外堀、西内町、共同住宅建設 28. 丸の内、共同住宅 29. 東町奉行所跡 30. 西の丸町 31. 丸の内 32. 丸の内 33. 鉄門 34. 厩跡 35. 外堀、兵庫町 36. 寿町二丁目地区 37. 天守台 38. 江戸長屋跡Ⅰ 39. 江戸長屋跡Ⅱ 40. 丸の内 41. 丸の内 42. 城内中学校 43. 中堀南岸石垣 44. 本町 45. 丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業（整理作業中） 46. 丸の内 47. 丸の内、共同住宅（整理作業中） 48. 浜ノ町遺跡 49. 片原町遺跡 50. 紺屋町遺跡 51. 生駒親正夫妻墓所 52. 扇町一丁目遺跡 53. 亀井戸跡 54. 大井戸 55. 雑賀城跡 56. 二番丁小学校遺跡

第3図 高松城周辺遺跡位置図

では、古墳時代中期に属すると考えられる円筒埴輪片が1点出土しており、海岸線付近の砂州上に当該期の古墳が形成されていた可能性が考えられる。また、古墳時代後期後葉の須恵器片も出土していることから、当該期の居住域が形成されていた可能性が考えられる。いずれも遺構が未確認であることから状況は判然としない。今後の調査の進展を待ちたい。

古代の遺構として、前述の松平大膳家上屋敷跡の調査において平安時代（8世紀末～9世紀）の溝状遺構1条と土坑1基が確認されている。溝状遺構は条里制の地割方向とは合致しないことから、海浜部への条里の施工は平野中央部よりもやや遅れた可能性が考えられる。また、上記遺構の存在は海浜部において平安時代にも居住域が形成されていた可能性を示唆し、海浜部の自然地形をそのまま港湾施設とした小規模な港が形成されていた可能性が考えられる。

<中世>

中世段階の高松市街地の状況については、平成7

年度から開始されたJR高松駅を中心とした市街地再開発に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果と『さぬきの道者一円日記』（永禄8年（1565））の記載内容から詳細に復元されつつある（香川県歴史博物館2007）。

当時の高松市街地は「野原荘」にあたり、11世紀末に皇室領として成立したものである。「野原荘」は、「野原中黒里」「野原浜」「野原西浜」「野原中ノ村」「野原天満里」の5単位の集落で構成されていたとされる。これらはそれぞれ、寺院と有力商人の集落（野原中黒里）、漁撈活動や手工業をも行う港町（野原浜・野原西浜）、香西氏の家臣団で構成される集落（野原中ノ村・野原天満里）といった、性格の異なる集落の複合体であったとされる。このうち、「野原中黒里」は近世高松城を含む範囲を指し、寺院群が存在したとされる。また、高松駅南線整備事業に伴う高松城跡（無量壽院）の調査では「野原濱村无量壽院」の銘文を有する丸瓦が出土しており（高松市教育委員会（編）2005）、16世紀中葉に室山山麓の坂田郷から

移転した「無量寿院」の存在が明らかになっている。さらに、周辺部における発掘調査や高松城跡天守台をはじめとする櫓台の石垣裏込めとして中世の五輪塔が多量に転用されていることが判明している。これらは、当該地周辺に中世の寺院や寺院に伴う墓域が存在したことを裏付けている。

また、「野原浜」「野原西浜」にあたる浜ノ町遺跡では、自然地形を利用しつつ、荷揚げ場として海岸線に安山岩板石を貼り付けた状況等が確認されている。「野原荘」では輸入磁器を含む他地域産の陶磁器や土師質土器、瓦器が多量に出土している。その一方で、高松平野産穀物を多量に搬出していることが『兵庫北関入船納帳』（文安2年（1445））の記載から読み取れる。加えて、当時としては先進的なトイレや結桶井戸、灯火具の使用が確認されており、先進的な生活様式の取入れがいち早く行われた地域であると言える。これらのことから「野原荘」は、背後に高松平野という広大な生産域、すなわち交易上の安定的な基盤を有し、自律的な住民自治の仕組みを備えた、交易拠点であったと考えられる。このような歴史的背景が、後の高松城築城の基礎になっている可能性が考えられよう。

<近世>

（城郭と城下町の形成過程）

天正15年（1587）8月、播磨国赤穂の領主であった生駒親正は、豊臣秀吉から讃岐一国の領主として封じられた。生駒氏は、まず東讃の引田城に入城し、宇多津の聖通寺城、仲郡の亀山、山田郡の由良山などの候補地はあったが、天正16年（1588）に「野原」を山田郡高松郷の名称をとり「高松」と改名し、高松城築城を開始した。築城当初の縄張りは『讃羽綴遺録』によると黒田孝高又は細川忠興によるとされ、『南海通記』によると黒田孝高と藤堂高虎によるとされるが、未だ不明な点が多い。また、高松城については、『南海通記』において黒田孝高が「此ノ山（西ノ山）ナイテハ此ノ所ニ城取り成シ難ク候、此ノ山アリテ西ヲ塞キ寄口南一方成ル故ニ要害ヨシ、殊ニ山陰阻ニシテ人馬ノ足立ナク、北ハ海岸ニ入テ海深ク、山ノ根ハ潮汐ノサシ引有リテ、敵ノ止リ居ル事成ラズ、東ハ遠干潟川入有リテ敵ノ止リ居リガタシ、南一口ノ禦計也、身方千騎ノ強ミトハ此ノ山ノ事也」と語ったとされているように、北側に瀬戸内海、東側に入江、西側に入江と山塊（石清尾山塊）が存在し、自然の要害を生かした防御が可能な土地であるとされている。築城後の城郭の変遷は不明な点が多いが、生駒

期の状況を図示したと考えられる「寛永四年高松城図」（寛永4年（1627））や「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」（寛永15～16年（1638～1639））、続く松平初期初期の状況を図示したと考えられる「高松城下図屏風」（17世紀中葉）等を見る限り、大きな改変は行われなかったと考えられる。また、寛永4年（1627）に実施された幕府隠密による探索の報告書である『讃岐伊豫土佐阿波探索書』には、石垣や塀の一部が崩れ、改修されずに放置された状況が記されている。

なお、生駒期に属する1630年代に、生駒家奉行の西嶋八兵衛により香東川東側流路が堰き止められ、西側に一本化されている。

初代藩主生駒親正から一正、正俊、高俊と続いた後、家臣の対立に起因するお家騒動「生駒騒動」が起こり、寛永17年（1640）7月、生駒氏は幕府から領地を没収され、堪忍料として出羽国矢島1万石が与えられた。代わって、寛永19年（1642）に徳川御三家の水戸藩主徳川頼房の長子である松平頼重が東讃岐12万石の領主となった。なお、生駒氏改易後、松平氏入部までの間、讃岐は伊予3藩により分治され、高松城は大洲藩加藤泰興に預けられた。

入部後の寛永21年（1644）～寛文10年（1670）にかけて、松平氏は二ノ丸への藩主御殿の整備、二ノ丸や三ノ丸の石垣修築、多門・櫓の普請など順次城の修築・再整備を行った（『小神野筆帖』）。また、天守の建替えが行われたのもこの時期である（正保4年（1647）～寛文10年（1670））。生駒時代に建築された3重の天守を3重5階（内1階は地下室）の天守に改築した。天守改築にあたっては、豊前の小倉城天守を参考にしており、2段に分かれた3重目の上段が下段よりも張り出す「南蛮造り」を採用している。なお、天守台では平成18年～20年度にかけて石垣解体修理工事に伴う発掘調査が実施されており、地下室（穴蔵）内に天守礎石が「田」字状に設置された状況や穴蔵入口の構造等詳細が判明している。また、穴蔵からは柱材が残存する柱穴が2基確認されており、出土した柱材のAMS法による放射性炭素年代測定の結果、1630～1660年頃に伐採されたものであることが判明している。

天守完成の翌年の寛文11年（1671）9月～延宝5年（1677）5月には松平頼重と2代目藩主頼常による大規模な高松城の再整備「高松城普請」が実施された。この時、三ノ丸北東部を拡張し、石垣で区画することで「北ノ丸」を整備した。また、中堀東側に形成されていた町人町「いおのたな町」の東辺に新たな中

堀を開削し、米蔵丸・作事丸からなる「東ノ丸」を整備した。この「高松城普請」により城の内曲輪が拡大されたと言えよう。さらに、東ノ丸整備に伴い、桜ノ馬場南面に架けられていた大手（中之御門）の木橋が撤去され、桜ノ馬場東面に新たな入口（旭御門）が設けられた。なお、新たな曲輪の造成に伴い、延宝4年（1676）には北ノ丸に「月見櫓」が、東ノ丸北東隅に「艮櫓」が建設された。また、旭御門設置に際して、中之櫓が旭御門南側に移築され、「太鼓櫓」となった。さらに、「北ノ丸」整備後、三ノ丸に御殿である「披雲閣」が造営されたことにより、城内で分掌されていた政庁機能が「披雲閣」に一本化された。高松城普請による城再整備は後述する城下町の完成とも関連し、松平氏による高松藩内の政治支配体制を考える上で重要である。

なお、高松城普請により高松城は完成形に達したとみなすことが可能であり、以降明治維新までその形態が維持される。ただし、高松城普請完了以降も小規模な修築や堀の浚渫等は適宜実施されていたようである。

一方、城下町の状況についても絵図等の資料をもとに復元されつつある。「寛永四年高松城図」や「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」に図示された状況から、主として外堀の内側、いわゆる外曲輪には武家屋敷が形成され、特に中堀沿いには重臣の屋敷が立ち並んでいた様子を読み取ることができる。一方、外堀外側には主として町屋域が形成されていたと言える。ただし、外堀内側、外曲輪の北東部の一部で例外的に「いおのたな町」「つるや町」「ときや町」をはじめとする町人町の記載が見え、今回の調査地も築城当初から町屋域であったことがわかる。また、外曲輪の西辺を画する外堀の西側にも武家屋敷が形成された状況を看取できる。

松平入部後には、家臣の増加に伴って武家屋敷の形成範囲が拡大された。延宝元年（1673）に六番丁から八番丁まで武家屋敷が設けられた。天明6年（1786）には九番丁が、文化年間（1804～1817）初頭には十番丁が設けられたとされる。なお、享保9年（1724）～11年（1726）にかけての「大浪人」に伴い武家屋敷の整理が行われ、一部町人町に振り替えられる場合もあったとされる。

一方、松平期には町人をはじめとする非武家層の人口増加も進んだ。町人町拡大に際しては、上記のように武家屋敷を町人町に振り替える他、田畑や寺領を町人町に組み込む形で拡大が進んだとされる。木

原溥幸氏により高松城下図等を参考に算出された町数の推移を見ると、寛永16年（1639）頃には22町前後であったが、享保11年（1726）頃以降42～50町前後で推移しており、この時期までに町屋域がほぼ完成したと解釈することが可能である（木原2003）。前述のように、高松城普請による城域の拡大、新櫓の建設、政庁機能の集約等により17世紀末には城郭が完成形に達していたとみなすことが可能であることから、17世紀末葉～18世紀前葉段階に城郭を中心とした高松城・高松城下全域の整備が一旦完成したとみることも可能であると考えられる。この時期、農村では寛文検地が実施され領内の農民支配が確立したと考えられることから、この17世紀後葉～18世紀前葉段階に松平氏による高松藩の政治支配体制が完成したとみなすことが可能であろう。

城下町には複数の寺院が建立されていた。「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」によると生駒期には城下町の南端付近（紺屋町付近）に東西に並んでいた状況が読み取れる。その後、「諸国当城之図」（～寛文10年（～1670））では浜ノ町や紺屋町から塩屋町、宮脇通りにも寺院が複数建立された状況が図示されている。

城下東方及び西方は前述のとおり、海岸線が入り込み、船着場が形成されていた。西側は「西浜舟入」「堀川」と呼ばれ藩船が出入りしていたとされる。一方、東側は「東浜舟入」「新湊（東浜）」と呼ばれ民間の商船（廻船）が出入りしていたとされる。「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」や「高松城下図屏風」の描写から、いずれも外堀と海が接する部分に形成されており、石積みと雁木を用いた先進的構造を取り入れていたとされる。また、「高松城下図屏風」では前述の中世の港湾の名残と考えられる自然地形を利用した船着場が西浜に、同じく自然地形を利用した内町の船着場が本遺跡北方の「いおのたな町」北側の海浜部に形成されている。加えて、城郭の付属施設として、海手門から出入り可能な船着場が整備されている。

（上水道の整備）

高松城下では水不足に対応するため、正保元年（1644）に上水道が整備された。主な水源は「新井戸」「今井戸」「大井戸」であるとし、その他番町や西浜新町、古新町にも水源があったとされている。いずれも町人町への配水を目的としたものであり、武家の居住域へは異なる水源から配水した可能性が高いとされている。なお、寛永15～16年（1638～1639）の「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」には外堀南外

方の「ときや町」（現 磨屋町付近）の辻や「けいさん寺」の境内に井戸が図示されている。また、松平初期初期のものと考えられる「高松城下図屏風」には先の2箇所の井戸に加え、亀井町付近に井戸が図示されている。その上で、『翁嫗夜話』（延享2年（1745））では、磨屋町の井戸を「今井戸」、亀井町の井戸を「新井戸」と記載しており、少なくとも「今井戸」の起源は17世紀前葉に、「新井戸」の起源は17世紀中葉に求めることができよう。さらに、寛政元年（1789）の「寛政元年巳酉年五月高松之図」には瓦町の西方に「上水源」という記載があり、それが文化年間（1804～1818）の「高松市街古図」では「大井戸」と表記されていることから、「大井戸」は少なくとも18世紀には築造されていたと考えられる。「大井戸」の配水範囲は城下南西方の福岡町・築地町方面であり、18世紀前葉に福田町が形成され、町人町が拡大したことから、それに伴い築造されたとの解釈もある。いずれにしても、上記の絵図や史料の存在は17世紀中葉以降に上水道が整備されたとの記録を補強するものであると言える。

上水道の構造については、史料や考古資料から推測することができる。まず、『増補高松藩記』では「高松城下水乏しく、士民これを患う。此に至り地中に就き、暗溝を作り清水を井に引く。衆皆大いに喜ぶ」と記載されている。また、昭和10・11年には、城下町西部、番丁系統の上水道に使用した土管や木樋が発見されている。さらに、平成22年度に実施された亀井戸（新井戸）跡の調査では、石垣により囲われた貯水施設と石組みあるいは木樋・土管による導水施設が確認されている。これらは、衛生的な水をより安定的に供給しようとする意図を反映していると評価されている。これらの状況から、「新井戸」「今井戸」「大井戸」を代表とする大規模な貯水施設に地下からの湧水を貯水し、石組み溝や木樋等の暗渠を通して城下へ配水したと考えることが妥当であろう。なお、地下水を水源とした上水施設の例としては国内で最古例となる。

なお、近世高松城下に整備された上水施設、少なくとも詳細が判明している亀井戸（新井戸）については、他地域で近代的な水道システムが導入される中、明治年間をとおして利用され続けたことが判明しており、近世高松城下における上水施設の水準の高さを反映していると考えられている（高松市教育委員会（編）2012）。

（高松城下の災害史）

高松城下における災害としては、地震・火災・高潮を挙げることができる。特に多い災害は火災である。特に、享保3年（1718）の火災は城下西から東まで及ぶ大規模なものであったとされ、「高松大火」とされている。松平期には「冬向い大風吹き候時は、風触と申して御家中相廻り、火の元念入れ、居屋敷屋根に水打申すべき旨仰せ出され候故、少し風吹き候へば、人々居屋敷の屋根へ水を打ち申し候、常々足だまりを屋根に致し置き、早々人数を上げ水を打ち申し候、殊の外やかましき事にて候」と記載されるように、冬の風の強い日には特に入念に防火対策が施されていたとされる。

地震については特に宝永4年（1707）の大地震や安政元年（1853）の大地震による被害が大きく、城下の多くの建物が全壊し、多くの死傷者が出たとされる。また、城郭内においても屋根瓦の落下や石垣・土塀の崩壊、橋の崩落等の被害が出たとされる。

高潮をはじめとする水害についての被害状況は不明な点も多いが、今回の調査においても複数時期の粗砂層が遺構面を覆うように堆積する状況を確認しており、水害の痕跡として認識し得るものであると考える。

これらの災害は、土地利用変換点の1つの契機としても位置付けられることから、具体的調査成果と照らし合わせて、城下町の変遷過程を復元していく必要があると考える。

参考文献

- 木原博幸他 1989『香川県史 第3巻 通史編 近世Ⅰ』香川県
- 木原博幸他 1989『香川県史 第4巻 通史編 近世Ⅱ』香川県
- 木原博幸 2003『地域にみる讃岐の近世』美巧社
- 香川県歴史博物館（編）2007『海に開かれた都市 高松－港湾都市900年のあゆみ』香川県歴史博物館
- 渡邊 誠 2014「弥生時代中期から後期における高松平野の集落動態」『東アジア古代論攷2』中国書店
- 池見 渉 2014「弥生時代集落構造の基礎的考察－「基礎単位」の構成と継続性の検討を中心に－」『香川考古 第13号』香川考古刊行会
- 高松市教育委員会（編）2005『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊 高松城跡（無量寿院跡）』高松市教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2012『高松丸亀町商店街G街区第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 亀井戸跡－高松城下における上水施設の調査－』高松市教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 調査区の設定 / 基本層序

調査区の設定

建物本体建設予定範囲である約350㎡を調査区とした。調査は、前述のとおり調査区を東西に二分して行った。

基本層序 (第4・5図)

調査区内の層序は7層に大別可能である。a層は戦後の造成土、b層は太平洋戦争時の焼土層、c層は戦前の造成土である。c層下位には近世以前の遺構面を構成する堆積層が見られ、概ね4層に分類可能である。以下、①～④層として詳細を記述する。

(①層)

第1遺構面を構成する堆積層である(22～34層)。ガラス片、コンクリート片、円礫等を含み黒色系を呈するc層を除去した段階で検出した。調査区南西端付近でc層よりもやや明るい色調の比較的均質なシルト層を確認し、この上面を第1遺構面として認識した。上面には近代以降の攪乱が激しく切り込んでおり、凹凸が激しい。よって、遺構面検出レベルは計測地点によりばらつきがあるが、比較的残存状況の良い部分で計測すると、南壁での東西レベルは標高1.3～1.35mと概ね平坦である。また、東壁中央付近が標高1.2m前後とやや低くなるが、北端付近では標高約1.35mとなることから、第1遺構面レベルはほぼ平坦であったと考えられる。東壁中央付近における検出面レベルの低下は後述する④層上面の状況から原地形を反映しているとはみなし難く、調査時の所見からも調査区中央付近で広範囲にレベルが低下する状況は見られなかったことから、近代以降の削平の影響であるとしておきたい。また、調査区東端付近では①層の層厚が薄く、一部下位の②層や洪水砂が露出していた。後述するように③層以下は東に向かって上昇することから、東西レベルを平坦にするため、西から東に向けて層厚を減じている可能性が高い。

①層は黄褐～黒褐色細砂～シルトを主体とする堆積層であり、陶磁器・土師質土器片・円礫等を多量に含む。また、後述する③層を構成する堆積層をブロック状に含むとともに、③層上面に堆積していたものと考えられる焼土・炭化物(②層)も含む。加えて、本章第2節で詳説するが、含有物や色調、土質により明確に区分可能な複数単位の整地土が複雑に重複した結果として①層を形成していることが判明した。以上のような所見から、①層は自然の営力により形

成された堆積層ではなく、人為的に形成された整地層であると考えられる。さらに踏み込むならば、①層は②・③層をブロック状に巻き込むことから、①層形成に先立ち、②・③層上面を一定程度削平した可能性が推測できる。このことは、第2遺構面に掘り込まれた遺構上面が一定程度削平を受けている点、及び①層中に③・④層形成時期に属すると考えられる遺物が一定量含まれる点からも推測可能である。

上記のように①層は人為的な整地層であると言える。整地の手順等の詳細は本章第2節で記載する。第7図は遺構面上面精査により検出した整地層の単位である。含有物や色調、土質により明確に区分可能な位置を境目として検出した。第1遺構面調査終了後、これら整地土の形成順序を確認する目的で、整地土の境目付近にトレンチを設定して掘削を行った。また、可能な場合は遺構や攪乱の壁面で堆積状況を確認した。これらの整地土に包含される遺物は、下位遺構面までの重機掘削に際して、可能な限り整地土単位ごとに取り上げを行った。その結果、①層は様相7(松本2003:P17参照)に形成され、少なくとも様相8には再度大規模な整地が行われていたことが判明した。様相8に形成された整地土包含遺物には極めて残存状況の良いものが多量に含まれるため、整地に際して不要となった雑器類を廃棄した可能性が考えられる。

(②層)

第2遺構面上面に堆積した焼土・炭化物層である(36～39層)。南壁断面Ⅱでは③層上面の凹部にのみ残存する状況を確認できるが、前述のとおり①層形成に先立ち削平された可能性が考えられることから、局所的な堆積とみるよりはむしろ、本来③層上面を面的に広く覆っていた堆積層である可能性が考えられる。

後述するように②層からは少量の陶磁器片が出土しており、様相4～5以降に形成されたものであると考えられる。また、特に調査区南西部付近において多量の瓦片が出土している。高松城内では、享保3(1718)年に大規模な火災(高松大火)が発生したことが判明している。後述する③層は様相4～5前後の遺構面であり、②層にも様相4～5の遺物が含まれる。また、②層上位の①層は様相7～8に形成されたことが分かっていることから、②層は高松大火に伴う焼土層である可能性が高い。

(③層)

第2遺構面を構成する堆積層である(43～56層)。

①層又は②層直下で検出した比較的多量の砂粒を多く含む堆積層が③層にあたり、この上面を第2遺構面として認識した。③層も①層形成時又は近代以降の造成時に削平を受け、上面に起伏が見られる。よって、遺構面検出レベルは計測地点によりばらつきがあるが、比較的残存状況の良い部分で計測すると、南壁での東西レベルは西端付近が標高約0.7m、東端付近が標高約0.9mと東に向かって上昇する状況が見られる。南壁断面Ⅱでは読み取りにくい、東に向かって遺構面レベルが上昇する傾向は後述する④層上面でも見られたことから、海岸線付近の本来の微地形を反映している可能性が高い。また、東壁では、中央付近が標高0.7～0.8mとやや低くなるが、北端付近では標高約1.2mとなる。ただし、後述するように④層上面では地形面が北に向かって下降する状況を示していることから、東西方向と同様にこの傾斜が原地形を反映しているか否かは不明である。

③層は暗灰黄～オリーブ褐色シルトを主体とする堆積層であり、細砂や粗砂を多く含むことから、①層よりもしまりが弱い。また、詳細に見るとシルト層ではラミナが見られる。さらに、シルト層上位又は下位には粗砂層が面的に堆積している。この粗砂層は河川の氾濫に伴う洪水砂、又は海岸線に近接することから高潮等に伴い海底から陸へ運び上げられたものである可能性が考えられる。以上のような堆積構造から、③層は人為的な整地層ではなく、自然堆積層であると考えられる。③層上面では様相4～5前後の遺構を確認している。また、後述するように④層上面では中世～様相2・3の遺構を確認している。よって、③層は様相2・3～様相4・5の間に形成された堆積層であると考えられる。

(④層)

第3遺構面を構成する堆積層である(第4図南壁断面Ⅱ 61～66)。④層は調査対象範囲東半部の③層直下で検出した粗砂～細砂を主体とする堆積層であり、この上面を第3遺構面として認識した。なお、前述のとおり第3遺構面の調査は第2調査区のみで実施したため、西半部の土層堆積状況の情報が欠落している。

④層上面は①・③層に比して起伏が少なく、比較的平坦である。第2調査区における遺構面検出レベルは、南壁断面図を見ると標高約0.6mとほぼ一定であり東西比高差が無いように見える。しかしながら、調査時の所見及び平面図作成時に記録したレベルの情報から復元すると、東西方向では西から東に向かっ

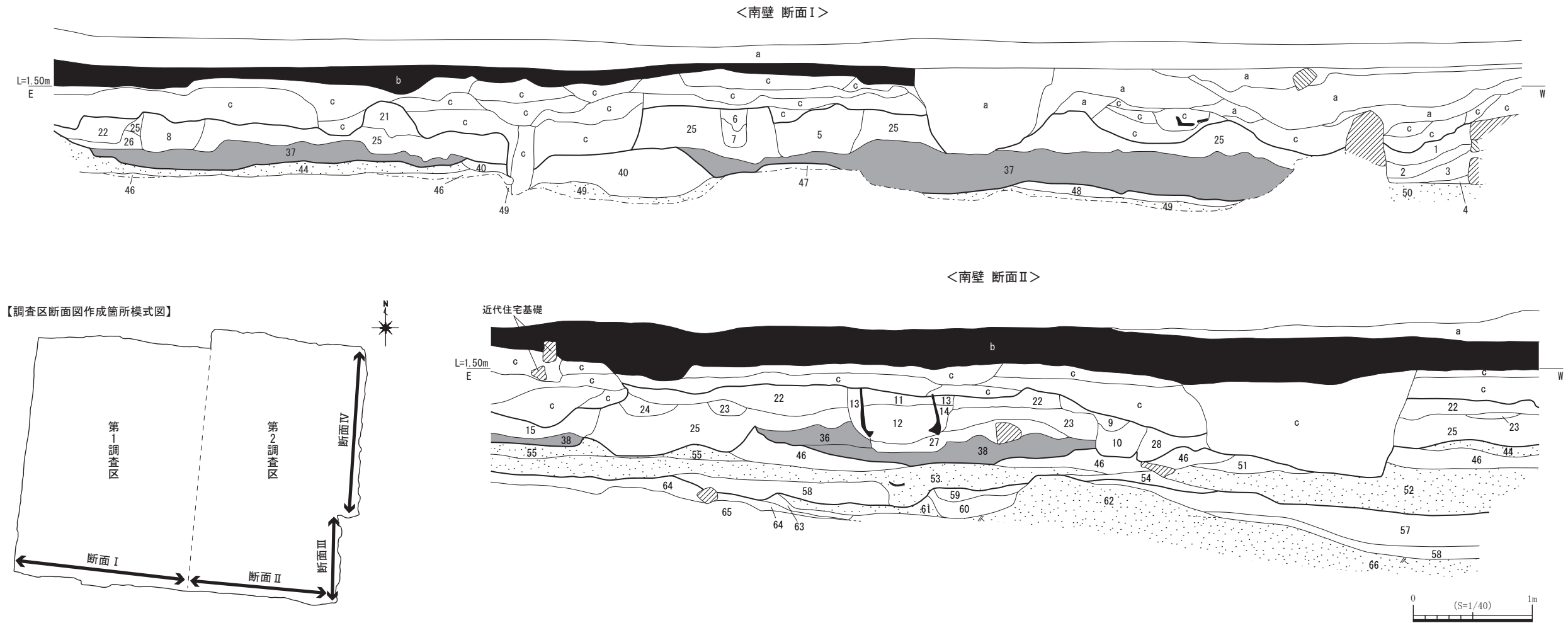
て10cmほど高くなる状況が読み取れた。一方、南北方向では、調査時の所見及び平面図作成時に記録したレベルの情報から復元すると、南から北に向かって約10cm下る状況が読みとれた。よって、④層上面は東に向かって高くなり、北に向かって下る地形面を呈していたと考えられる。③層上面同様、これらは、海岸線付近の本来の微地形を反映している可能性が高い。

④層は灰色系粗砂や細砂を主体とする堆積層であり、東端部付近では粗砂及び細砂下位でシルト層を確認している。シルト層上位に粗砂や細砂層が堆積していると考えられる。また、同様に砂質を呈する③層よりもしまりが弱い。④層も人為的な整地層ではなく、自然堆積層であると考えられる。④層上面では中世及び様相2・3の遺構を確認している。よって、④層は中世以前に形成された堆積層であると考えられる。

(まとめ)

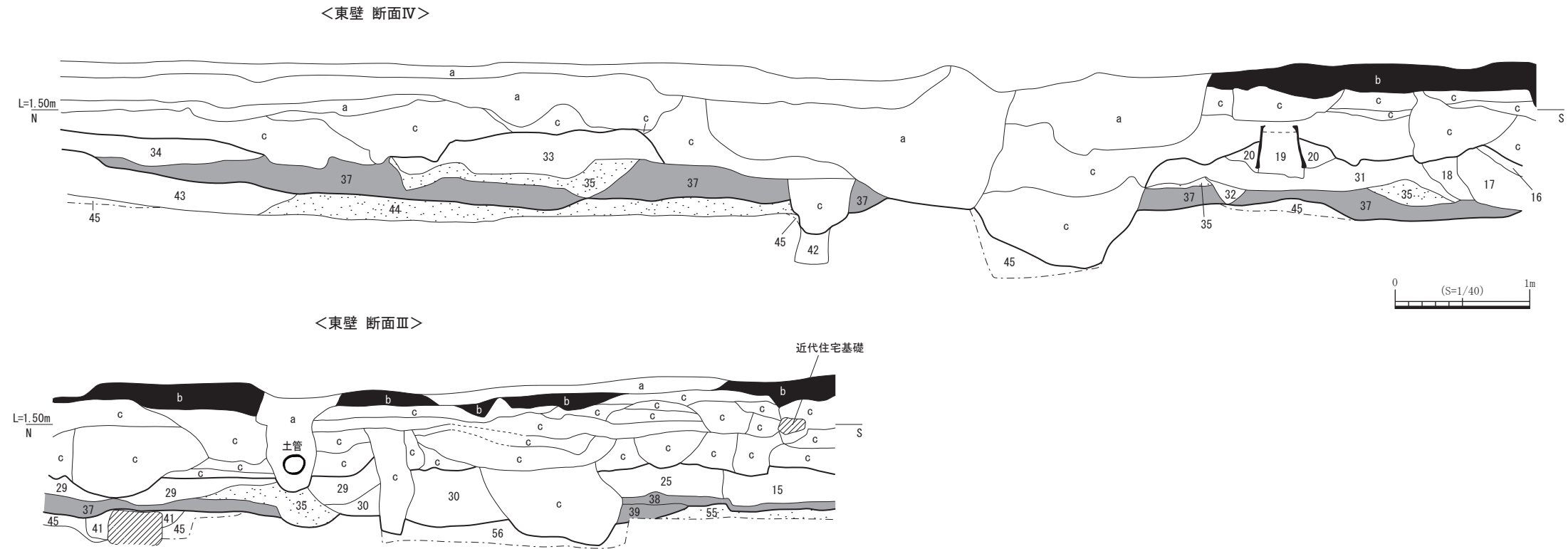
以上まとめると、調査対象地の原地形は南から北へ下降し、西から東へ上昇する地形であると言える。③・④層は層相から自然堆積層であると考えられるが、④層上面に比して③層上面における地形面の傾斜の度合いはやや小さくなる。西から東に向かって④層は約10mで10cm上昇するのに対し、③層は約22mで10cm上昇する。さらに付け加えるならば、④層上面における南北方向のレベルを比較すると、約18mで約10cm北に下る地形面を呈する。このことは、南北方向の傾斜が東西方向に比して緩やかであった状況を示すと考える。①層は人為的な整地層であり、調査範囲内ではほぼ均一なレベルとなる。時期が下るにつれて調査区内でのレベル差は小さくなり、最終的に人為的な整地により均一化されたと言える。もともと南北の標高差が小さく、緩やかな傾斜を呈する南北方向のレベル差は、いち早く③層上面で既に平準化が達成されていた可能性が高い。

第2章第1節で、調査地周辺は香東川東側流路が分岐することにより形成された中州状の砂州帯に位置することを指摘した。本調査地の所在地は砂州帯を挟む東西の支流路のうち、東側支流路寄りに位置することから、調査以前には東方に向かって下る地形面を呈することが予想されたが、調査の結果、東方へ上る地形面が確認された。本調査地西方で実施された厩跡(第3図34)の調査では、南西から北東方向に向かって延びる旧河道が確認されている(高松市教育委員会(編)2006)。今回の調査地は当該旧河道が形成された谷状地形から東方に向かって上昇



1. 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック 7%、φ3～5cm 大の円礫、土師質土器片等を多量に含む) SD101 埋土
2. 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック 20%、φ3～5cm 大の円礫、炭化物、土師質土器片等を多量に含む) SD101 埋土
3. 2.5Y2/1 黒 粘土 (炭化物、瓦片を含む) SD101 埋土
4. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/2 灰オリブ 細砂ブロック 30%、φ3～5cm 大の円礫を多量に含む) SD101 埋土
5. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 細砂～シルト (瓦片を多量に含む) SK138 埋土
6. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 7%、炭化物等を含む) SP115 埋土
7. 10YR3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 3%、炭化物等を含む) SP115 埋土
8. 7.5YR3/1 黒褐 シルト～粘土 (陶器、磁器等を多量に含む) SK134 埋土
9. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 粘土 (2.5Y3/2 黒褐 粘土ブロック 7%、2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック 2%、炭化物・焼土等を含む) SP122 埋土
10. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘土 (10YR3/3 暗褐 シルトブロック 3%、2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック 5%、炭化物・焼土を含む) SP122 埋土
11. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐 シルトブロック 15%、10YR3/2 黒褐 シルトブロック、瓦片を多量に含む) SK102 埋土
12. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘土 (2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 7%、炭化物・瓦片を多量に含む) SK102 埋土
13. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 30%を含む) SK102 埋土
14. 2.5Y5/3 黄褐 シルト (2.5Y4/2 暗灰黄 シルトブロック 5%を含む) SK102 埋土
15. 10YR2/2 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリブ シルトブロック 7%、炭化物・焼土・瓦片を多量に含む) SK127 埋土
16. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルト (2.5Y6/2 灰黄 シルトブロック 3%、2.5Y6/2 灰黄 粘土ブロック 3%、2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 3%、5Y4/4 暗オリブ 粘土ブロック 2%、φ5～10cm 大の円礫、炭化物・焼土を含む) SK143 埋土
17. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (5Y5/4 オリブ シルトブロック 7%、2.5Y4/2 暗灰黄 シルトブロック 5%、10YR3/1 黒褐 シルトブロック 5%、焼土を多量に含む) SK143 埋土
18. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂 (2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック 7%、10YR4/2 灰黄褐 シルトブロック 3%、炭化物・焼土を多量に含む) SK143 埋土
19. 2.5Y4/1 黄灰 シルト (2.5Y5/3 黄褐 シルト、2.5Y2/1 黒 シルト、2.5Y3/2 黒褐 シルトのラミナ、底部付近に 5Y4/3 暗オリブ シルトブロックを含む) SK111 埋土
20. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y6/4 にぶい黄 シルトブロック 3%、5Y4/4 暗オリブ シルトブロック 10%、φ3～5cm 大の円礫を多量に含む) SK111 埋土
21. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐 シルト～粘土ブロック 25%、φ10～15cm 大の円礫、炭化物、瓦片を多量に含む) SK137 埋土
22. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルト (10YR3/3 暗褐 シルトブロック 25%、炭化物を含む) ①層
23. 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルト (2.5Y3/2 黒褐 シルトブロック 7%) ①層
24. 2.5Y5/4 黄褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/2 暗灰黄 シルトブロック 15%、炭化物・焼土を少量含む) ①層
25. 10YR3/2 黒褐 細砂～シルト (局所的にφ5～10cm 大の円礫を多量に含む、炭化物・焼土を少量含む) ①層
26. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト (2.5Y5/4 黄褐 シルトブロック 10%、5Y4/2 灰オリブ 粘土ブロック 7%を含む) ①層
27. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (5Y4/4 暗オリブ シルト～粘土ブロック 25%、φ10～30cm 大の円礫を含む) ①層
28. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 (2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 7%、2.5Y5/6 黄褐 粘土ブロック 3%、炭化物・焼土を多量に含む) ①層
29. 2.5Y4/4 オリブ褐 シルト (10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂、2.5Y3/2 黒褐 シルト、炭化物・焼土が互層状に堆積) ①層
30. 2.5Y2/1 黒 粗砂混じり細砂 (5Y4/3 暗オリブ シルトブロック 5%、炭化物・焼土を多量に含む) ①層
31. 5Y4/3 暗オリブ 粗砂混じりシルト (2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック 10%、5Y3/2 オリブ黒 粘土ブロック 5%、2.5Y3/2 黒褐 粗砂ブロック 5%、φ5～10cm 大の円礫を多量に含む) ①層
32. 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (5Y4/3 暗オリブ シルトブロック 5%、φ10～15cm の角礫を含む) ①層
33. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト (2.5Y6/3 にぶい黄 シルトブロック 7%、2.5Y4/2 暗灰黄 シルト 7%、2.5Y3/2 黒褐 粗砂ブロック 3%、φ5～10cm の円礫、炭化物・焼土を含む) ①層
34. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y5/4 オリブ 細砂ブロック 20%、φ10～15cm 大の円礫、炭化物・焼土を含む) ①層
35. 10YR4/3 にぶい黄褐 極粗砂 洪水砂
36. 2.5Y3/3 暗オリブ褐 粗砂混じり細砂 (5Y4/3 暗オリブ 粗砂ブロック 3%、2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂ブロック 5%、炭化物・焼土・瓦片を多量に含む) ②層?

第4図 調査区南壁断面



37. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (炭化物・焼土・瓦片を多量に含む) ②層
 38. 10YR3/1 黒褐 粗砂混じり細砂 (5Y5/3 灰オリブ シルトブロック 7%、2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 3%、炭化物・焼土・瓦片を多量に含む) ②層
 39. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト (2.5Y4/6 オリブ褐 シルトブロック 20%、2.5Y5/3 黄褐 シルトブロック 20%、2.5Y3/2 黒褐 粗砂ブロック 10%、焼土を多量に含む) ②層
 40. 2.5Y3/2 黒褐 粘土 (φ5～20cm 大の円・角礫、土師質土器片を多量に含む) SK202 埋土
 41. 2.5Y4/3 オリブ褐 細砂 (2.5Y5/3 黄褐 細砂ブロック 10%、炭化物を含む) SK211 埋土
 42. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (5Y4/4 暗オリブ シルトブロック 5%、2.5Y4/2 暗灰黄 粘土ブロック 25%、φ3～10cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む) SD205 埋土
 43. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混じりシルト (10YR4/1 褐灰 シルトブロック 3%、2.5Y6/2 灰黄 細砂ブロック 5%、φ5～10cm 大の円礫を含む) ③層
 44. 2.5Y4/4 オリブ褐 粗砂 洪水砂
 45. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～シルト (2.5Y5/4 黄褐 細砂、2.5Y4/2 暗灰黄 細砂、2.5Y3/3 暗オリブ褐 シルトのラミナ) ③層
 46. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 30%を含む) ③層
 47. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック 3%を含む) ③層
 48. 5Y4/2 灰オリブ シルト (2.5Y3/2 黒褐 シルトブロック 30%、炭化物を含む) ③層
 49. 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂 洪水砂
 50. 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂 洪水砂
 51. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 3%、2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック 7%、2.5Y5/2 暗灰黄粗砂ブロック 7%、φ2～5cm 大の円礫を少量含む) ③層
 52. 2.5Y4/3 オリブ褐 粗砂 (2.5Y3/2 黒褐 粗砂ブロック 20%、2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック 5%、φ2～5cm 大の円礫を多量に含む) 洪水砂
 53. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 (2.5Y4/6 オリブ褐 粗砂ブロック 5%、5Y5/4 オリブ 粗砂ブロック 20%、φ3～5cm 大の円礫を多量に含む) 洪水砂
 54. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 10%、炭化物を少量含む) ③層
 55. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (2.5Y3/2 黒褐 粗砂、2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂、5Y5/4 オリブ シルトがラミナ状に堆積) 洪水砂
 56. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (5Y4/4 暗オリブ シルトブロック 10%、炭化物を含む) ③層
 57. 2.5Y2/1 黒 細砂 (5Y3/2 オリブ黒 粘土ブロック 10%、2.5Y4/1 黄灰 粘土ブロック 10%、炭化物・木片を多量に含む、ゲタ、木椀、木柱等を含む) SK301 埋土
 58. 2.5Y4/1 黄灰 粘土 (木片を少量含む、下層に玉砂利を含む) SK301 埋土
 59. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/4 暗オリブ 細砂ブロック 7%、2.5Y5/2 暗灰黄 粘土ブロック 3%を含む) ④層 (遺構埋土か)
 60. 10YR2/2 黒褐 粘土 (2.5Y5/2 暗灰黄 粘土ブロック 5%、上面付近に炭化物を多量に含む) ④層 (遺構埋土か)
 61. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂 (5Y5/4 オリブ 細砂ブロック 15%を含む) 洪水砂
 62. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (2.5Y5/3 黄褐 粗砂ブロック 10%を含む) 洪水砂
 63. 10YR2/2 黒褐 粗砂混じり粘土 (炭化物、木片を多量に含む) ④層
 64. 10YR4/1 褐灰 粘土 (5Y4/4 暗オリブ 細砂ブロック 5%、2.5Y4/4 オリブ褐 細砂ブロック 3%を含む) ④層
 65. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～シルト (2.5Y4/6 オリブ褐 シルトブロックを 25%含む) ④層
 66. 10Y5/1 灰 粗砂 (φ5mm～3cm 大の円礫を多量に含む) 洪水砂

第 5 図 調査区東壁断面図

する緩やかな斜面部に位置する可能性が高い。高松城及び城下町が形成された砂州上は、本来、埋没谷や旧河道の存在により起伏のある地形面を呈していた可能性が高いと言え、時間の経過とともに自然の営力（高潮や河川の氾濫に伴う堆積作用）や人為的な整地により、徐々に平準化が達成されてきた状況を読み取ることができる。

第2節 遺構・遺物

本節では、第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面に分けて検出遺構及び出土遺物の所見を記載する。なお、調査は調査区東半部と西半部に分けて行ったが、ここでは一括して報告することとする。

なお、近世の陶磁器類の年代観については、松本和彦氏による高松城跡（西の丸地区）の調査に基づく様相編年案（松本 2003）に準拠する。また、近世の土師質土器及び瓦の年代観及び分類については、佐藤竜馬氏による高松城跡（西の丸地区）の調査に基づく編年・分類案（佐藤 2003）に準拠する。加えて、少数出土した弥生土器における年代観は大久保徹也氏による編年案（大久保 1990）、須恵器における年代観は陶邑窯跡における編年案（田辺 1981）、中世の土師質土器の年代観は佐藤竜馬氏による編年案（佐藤 1995）に準拠する。

参考文献

- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2003「出土瓦の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会
- 松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会

1 第1遺構面（第6図）

第1遺構面は①層上面に対応する。第1遺構面には近代以降の攪乱（コンクリート基礎、配管、廃棄土坑等）が激しく切り込み、遺構面精査の段階では、

遺構か攪乱か判別が困難なものが多く見られた。そこで、遺構精査時には遺構か否かに関わらずすべての掘り込みを検出し、掘削の段階で遺構と攪乱の判別を行うこととした。

遺構掘削は、遺構と攪乱の判別を行うことから開始した。埋土中にガラス片、レンガ片、コンクリート片等明らかに近代以降に製造されたものが含まれる場合には攪乱とした。また、調査区壁際で検出したものについては、掘削面が①層よりも上位である場合には攪乱とした。その上で、上記攪乱を切り込むものについても攪乱とした。上記のような基準により、ある程度遺構と攪乱の判別を行った上で、先行して攪乱のみ完掘を行った。

攪乱の完掘が完了した後に遺構掘削を開始した。まず、調査区西端の石組み溝から掘削を開始し、その後調査区南壁際の遺構から順次掘削を進めた。重複関係にある遺構については、重複状況において最も上層にある遺構から掘削を行った。遺構として掘削した結果、埋土よりガラス片やコンクリート片等が出土したものについては攪乱扱いとし、記録を作成せずに完掘した。

なお、以下では前述の基準に照らし合わせた結果、攪乱であることが明白であると判断したものを除き、すべて遺構として扱う。

(1) 整地層

a. 観察所見（第7・8図、第3表）

①層は前述のとおり、包含物や色調、土質により明確に分類可能な複数単位の人為的な整地土により形成されている。ここでは、整地土の検出状況に基づき、形成順序及び形成時期を可能な限り復元し、検討を加えた上で、その結果から推測可能な点を指摘するとともに①層形成過程の試案を提示する。

第3表では調査時の所見に基づき分類した整地土の特徴をまとめ、整理作業段階での再検討の所見を反映させた。また、第7図は第3表の内容を図化したものであり、整地土相互の前後関係がわかるよう図示した。ここで、調査時の所見及び整理作業段階での再検討から、以下のような整地土形成順序を復元することができる。

- 1 B → A → C → E → F
- 2 B → A → C → E → D
- 3 E → I → D
- 4 A → H → G → D
- 5 J → E → F → M → L → K 又は

J → E → M → L → F → K

なお、各整地土出土遺物の所属時期の下限は第3表に記載したとおりである。

まず、①層形成初期段階の整地土について検討する。上記1～5について最も先行して形成された整地土としてB・E・A・Jを挙げることができる。このうち、EはA～C・Jより後に形成された整地土である。また、AはBより後に形成された整地土である。よって、①層形成最初段階の整地土として少なくともB・Jを挙げることができる。なお、後述するようにBに類似する整地土はA・C・E・F形成後に築造された石組溝の裏込め土としても利用されている。B・J直下は②層又は洪水砂である。また、A～Lの中でも特にJには②層や洪水砂が多量に含まれており、J形成に際して②層や洪水砂を巻き込んだような層相を呈する。これらの点も、B・Jが①層形成初期段階の整地土に対応することを示唆する。Bからは様相6～7の遺物が、Jからは様相3～4の遺物が出土していることから、①層形成開始期は少なくとも様相3・4～7以降であると言える。第1遺構面で検出した遺構はいずれも様相7以降に形成されたものである。また、Jは下位堆積層を比較的多く巻き込んでいることから、Jには下位遺構面の遺物が二次的に混入している可能性が考えられ、J出土遺物の属する年代がそのままJ形成時期を示すとは言い難い。よって、ここでは、B・Jに様相8以降の遺物が含まれない点を評価し、①層形成開始時期は様相7である可能性が極めて高いと考える。後述する①層形成最終段階の整地土以外はいずれも様相7に形成されたと考えられ、このことも①層形成開始期が様相7であるとする推測を傍証する。

続いて、①層形成最終段階の整地土について検討する。上記1～5について最も遅れて形成された整地土としてF・D・Kを挙げることができる。このうちFは少なくともKに先行する。よって、①層形成最終段階の整地土として少なくともD・Kを挙げることができる。D・K出土遺物の所属時期の上限は様相8であり、D・K以外で様相8の遺物を包含する整地土は皆無である。よって、整地は少なくとも様相8まで続けられたと考えられる。なお、様相8の整地土検出範囲は極めて限定的であるが、一定程度の削平が想定され、本来は面的に施工された整地土が削平の結果、限定的な検出にとどまったと考えられる。

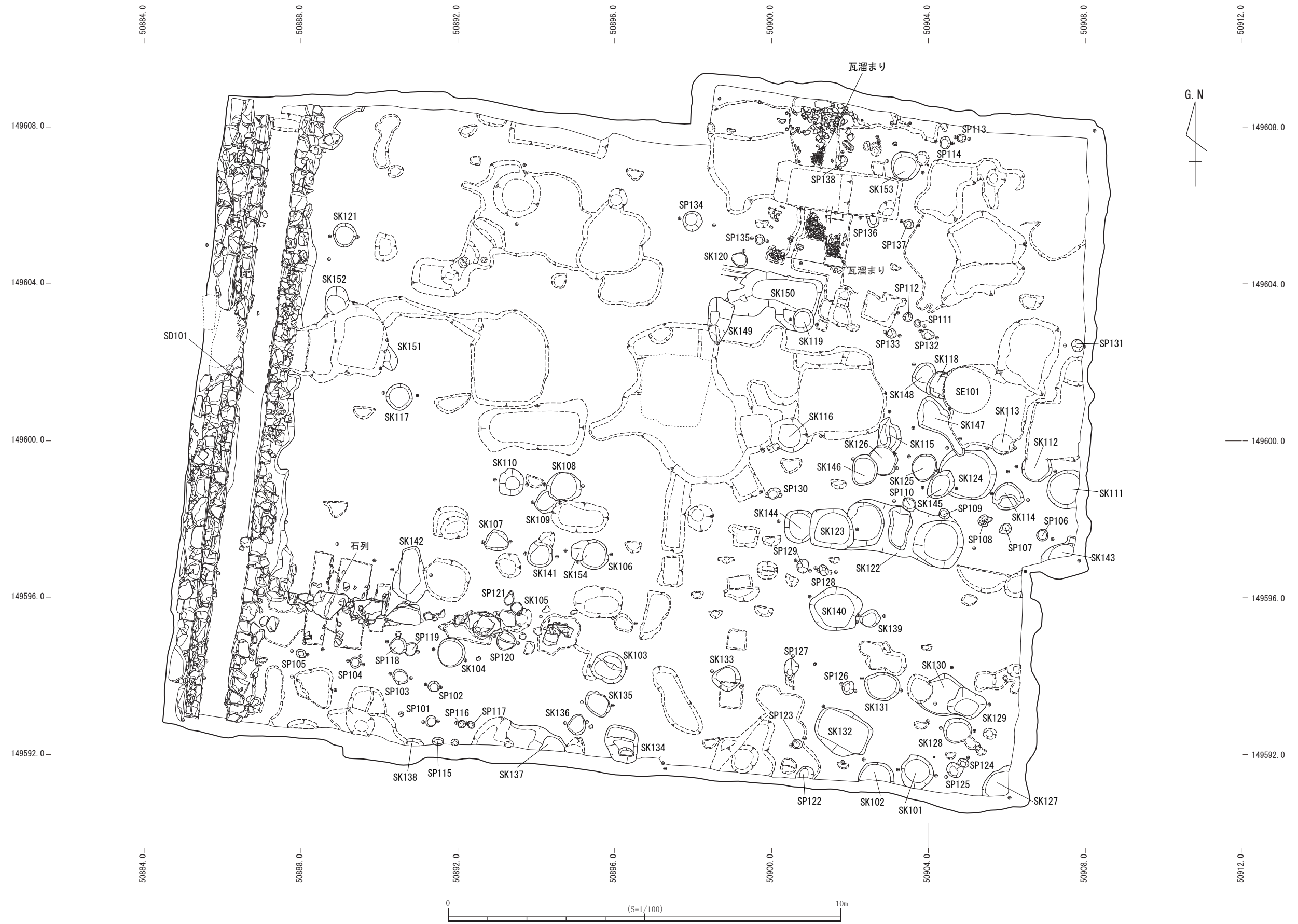
以上、①層形成最初段階と最終段階の整地土を特定し、当該整地土からの出土遺物を検討した結果、

①層は様相7～8にかけて形成された整地土である可能性が高いと言える。

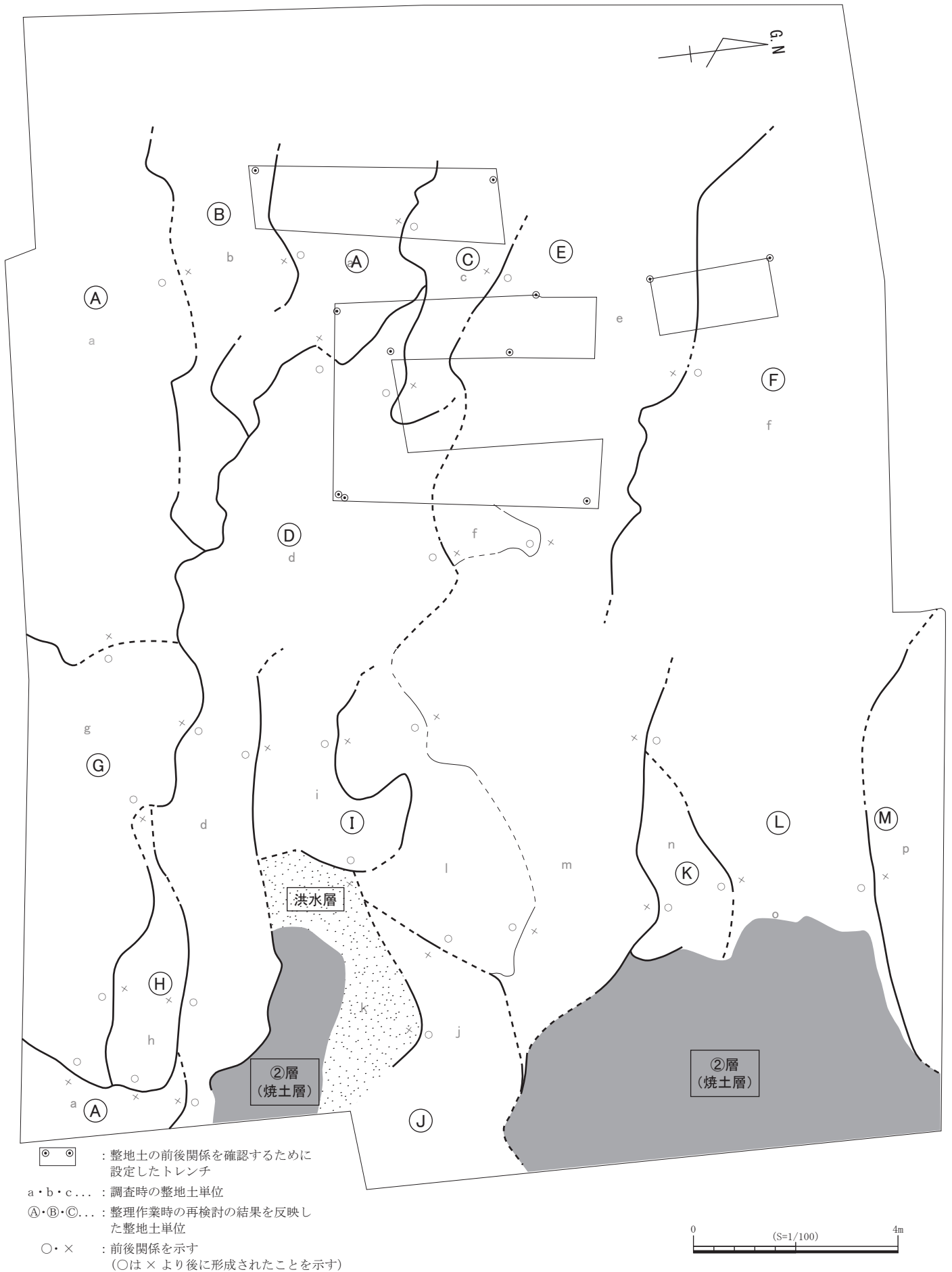
以上を前提に、まずは整地土相互の前後関係について記述する。確実に様相8以降に形成されたと言えるD・Kについては、出土遺物や重複状況から他の整地土よりも時期的に後出することが指摘でき、他の整地土との重複関係は形成「時期差」として捉えられる。一方、D・K以外の様相7に形成された可能性が高い整地土については検討を要する。まず、調査区北端部付近に形成されたF・L・Mについて、いずれも時期を特定可能な出土遺物は皆無であるが、様相7の遺構の遺構面となっていることから、当該期以前に形成されたものであると考えられる。また、いずれもE上位の整地土であり、E形成後に形成された整地土であると言える。F・L・Mは重複する位置関係にあり、M形成後にLが形成されたことまでは判明している。一方、FとL・Mの前後関係は不明である。少なくとも調査時にF下位ではL・Mを確認しておらず、同様にL・M下位ではFを確認していない。よって、少なくともFとL・Mに関しては単純に形成時期に差を設けたい。Fは調査区西半のみで見られ、対称的にL・Mは調査区東半のみ見られる。よって、少なくともFとL・Mの関係については、形成時期の差と見るよりは、むしろ場所による使用整地土の差として捉えることも可能である。

加えて、Bは整地最初段階の整地土であるが、同様の整地土はA・C・E形成後に構築されたと考えられる石組溝(SD101)の裏込めとしても利用されている。よって、この場合も整地土にみられる差異を単純に形成「時期差」として捉えることは適切ではないと考える。このような前提に立った時、D・K以外の整地土間の前後関係は、様相7内での「時期差」ではなく、同一工事内での「工程差」として捉えることが可能である。

続いて、Eについて検討を加える。EはA・B・C・Jより後に形成された整地土であり、調査区中央付近の広範囲に見られる。また、E以降に形成されたI・F・M・L下位でも確認されていることから、少なくとも調査区の北側2/3程度の広い範囲に形成された整地土であると言える。一方、調査区南端付近や東端付近では見られない。前述のとおり当該地の原地形は南から北へ緩やかに下る状況を呈するとともに、西から東へと上昇する状況を呈し、少なくとも③層上面までは原地形を反映した地形面を呈していたことが判明している。一方、①層上面は東西方向・南北方向



第 6 図 第 1 遺構面遺構配置図 (1 / 100)



第7図 整地層検出状況模式図 (1 / 100)

ともに標高差がほとんど見られない。よって、Eは①層形成初期段階に比較的低い箇所を中心に膨大な土量で埋め立てる役割を果たしたと考えられる。なお、調査区内でも比較的標高が高い南端部及び東端部にはEが形成されなかった、あるいは近代以降の造成により削平されたと考えられる。

b. 整地過程の復元

ここまで、①層を構成する整地土についての観察所見に基づき指摘可能な点を列挙した。ここでは、上記の認識に基づき、①層の主体となるEを基準として①層形成過程の復元を試みる。

初めに、様相7段階、E形成に先立ち、JやBが形成され、その後Aが形成され調査区南端部付近の大部分が形作られる。その後、Eにより北半部分が大規模に埋め立てられ、E上面を覆うようにF・I・L・Mが形成される。ここまでで、①層上面の標高は東西・南北ともに平準化される。続く様相8段階に様相7段階の整地土を一部削平しつつ、D・Kが上面を覆う。このように、①層形成、特に様相7段階の工事に際しては南から北へと施工が進められたと考えられる。

また、整地土の色調や土質、包含物に見られる差異は、工事施工時期の差あるいは同一工事内での作業工程差のいずれかを反映していると考えられる。ここで、少なくともD・Kに関しては様相8の遺物を含み、Eをはじめとする様相7の整地土とは「施工時期差」として捉えられる。一方、D・K以外の整地土については、いずれも様相7に形成されたものであると考えられることから、少なくとも出土遺物の年代観の上で積極的な時期差を想定することは困難である。前述のとおりF・L・Mについては同一工事内での「作業工程差」として捉えられる可能性が指摘できる。また、A・B→E→F・L・Mの形成状況からは、主として南から北に向かって順次整地を進めた状況を読み取ることができ、整地作業の計画性がうかがえることから、同一工事内での作業工程の順序を示す可能性が高い。同様に様相7に形成された他の整地土についても同一工事内での「作業工程差」として捉えらるゝならば、調査区南端部付近のシルト層による整地(A・B・G・H)→調査区北半部における礫を高密度に含む整地土による大規模な埋め立て(E)→E形成後のE上面を覆う整地(F・L・M)が同一工事として施工された可能性が高いと言える。

c. 出土遺物(第9～13図)

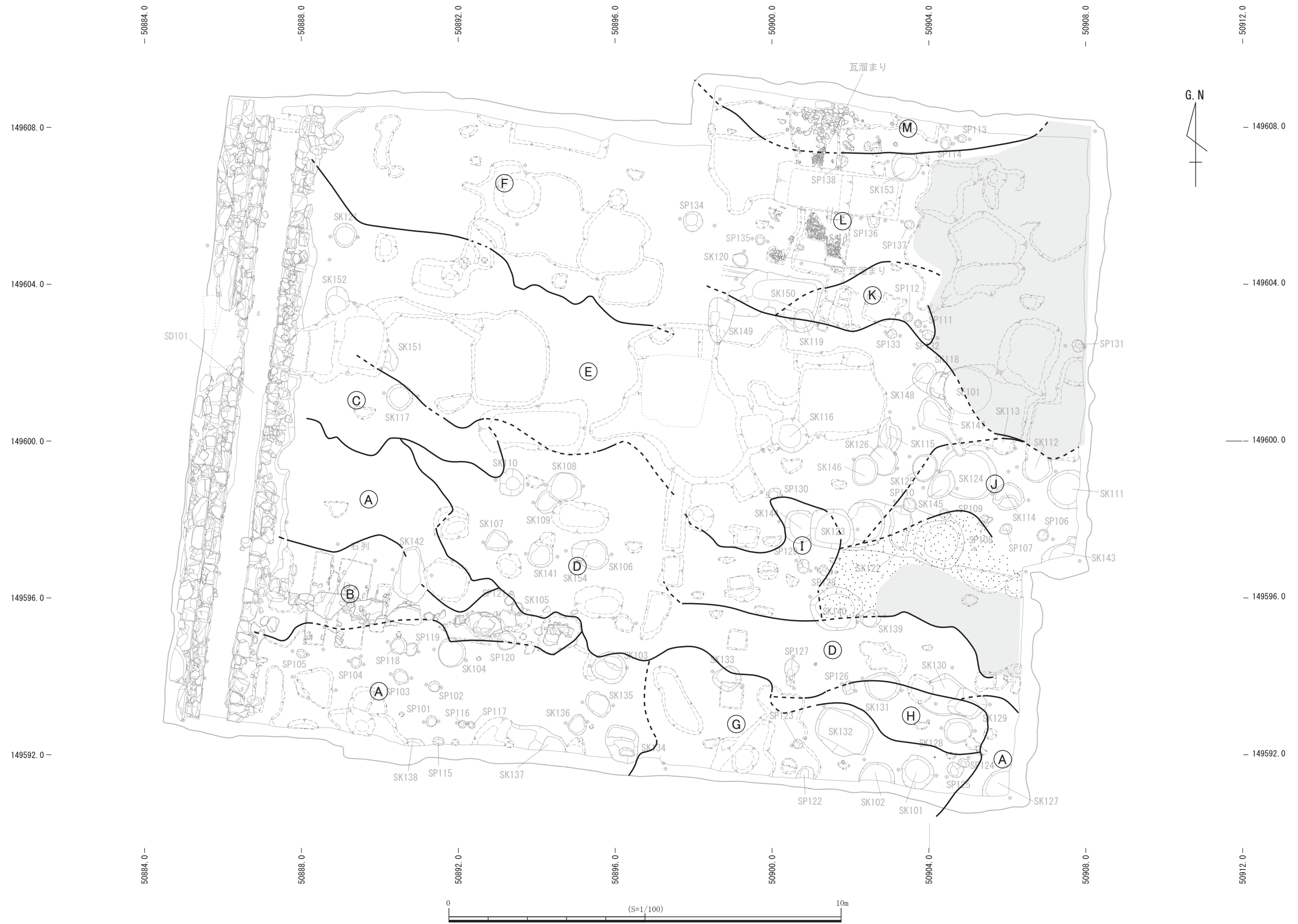
ここでは、時期比定可能な遺物が出土したA～E・G・H・J・Kについて、出土遺物の所見を記載する。

Aからは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、大谷焼、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦、銅製品が出土している。肥前系磁器及び備前系陶器が主体となり、残存状況も良好である。肥前系陶器では、胎土目を有する皿等古相を示す資料を含むが二次的混入であると考えられる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目凹形高台を有する皿や口縁端部が外反気味の広東碗、見込中央に抽象文を描く碗等が見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。軒丸瓦の瓦当は立体的な文様を有し、巴文の尾は短小であり、16個の珠文が巡る。一方で、典型的な端反碗や京・信楽系灯火具が皆無であること等から上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられる。

Bからは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅製品が出土している。肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器の順に多く含まれる。全体に残存状況は不良である。肥前系陶器では、刷毛目鉢が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目釉剥ぎの見られる皿や口縁端部が外反気味の碗等が見られる。備前系陶器では、精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。一方で、典型的な端反碗や京・信楽系灯火具、軟質施釉陶器が皆無であること等から、上記遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考えられる。

Cからは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、丸瓦・平瓦が出土している。肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、他は少量である。肥前系陶器では、刷毛目鉢等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目釉剥ぎの見られる皿等が含まれる。土師質土器には灯火具として利用した皿や中世の足釜脚部が含まれる。一方、典型的な端反碗や京・信楽系灯火具が皆無であること等から、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられる。

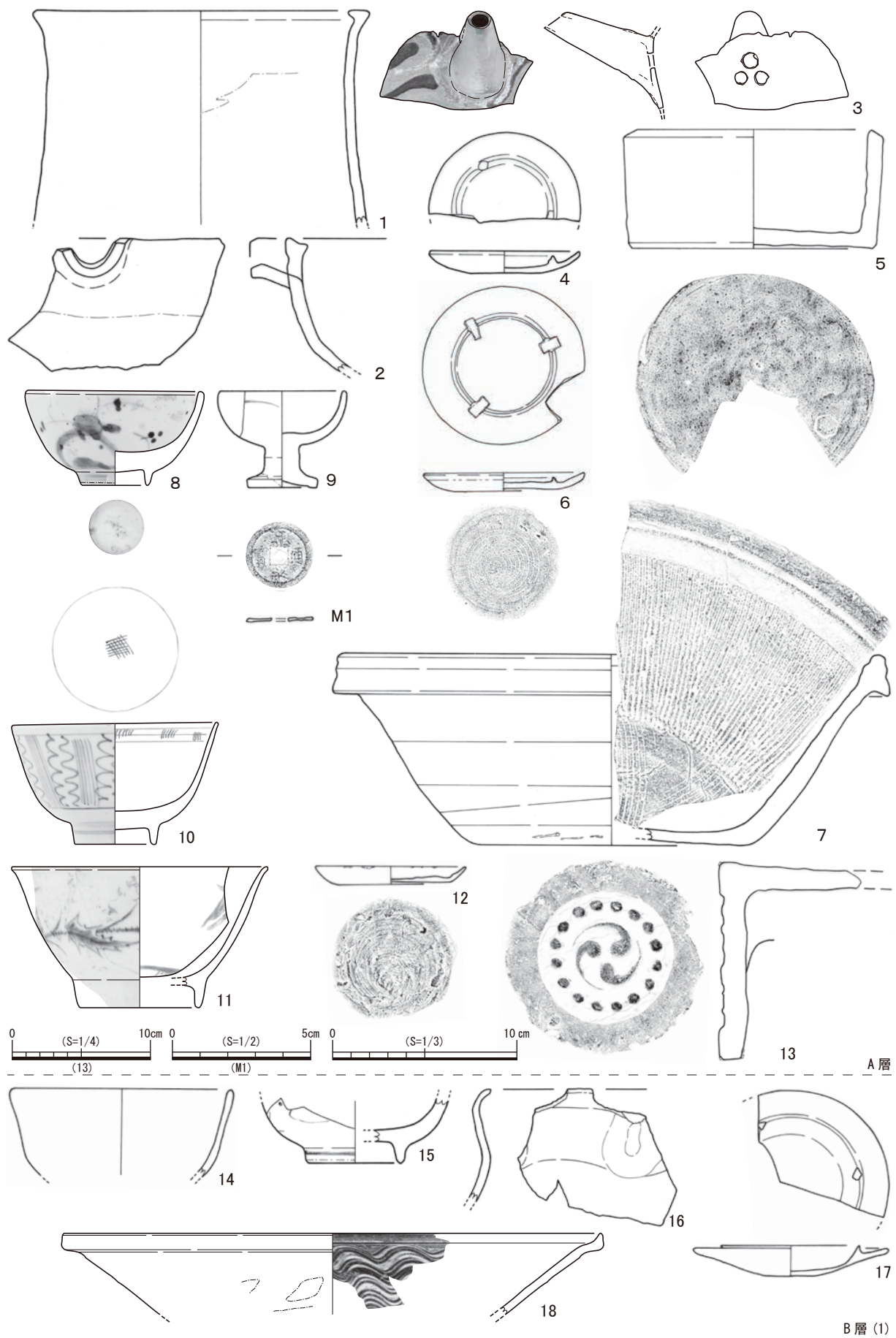
Dからは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、大谷焼、理平焼、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦、平瓦、銅銭が出土している。残存状況の良好な資料が多い。肥前系磁器、肥前系陶器、備前系陶器、瀬戸・美濃系陶器の順に多



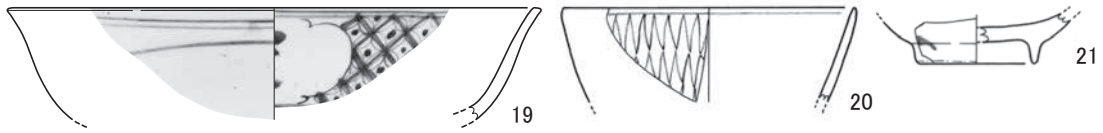
第8図 整地層・遺構合成図

第3表 整地土一覧表

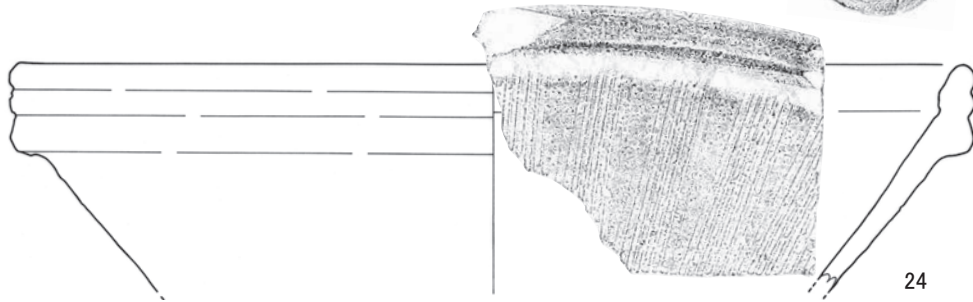
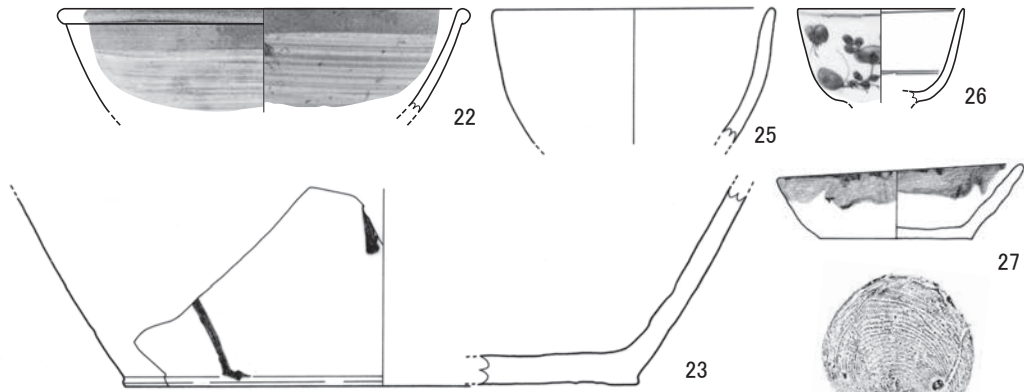
仮記号 (調査時)	土層注記	再検討後 の記号	整地層観察所見	出土遺物所 属時期下限
a	10YR3/2黒褐シルト(炭化物・焼土を含む)	A	黒褐色の色調を呈するシルト層である。炭化物・焼土を含むが礫や陶磁器等は少量であり、極めて均質である。	様相7
b	5Y3/1オリーブ黒シルト～粘土(5Y4/2灰オリーブシルトブロック15%、φ5～15cm大の円礫、陶磁器片、瓦片、炭化物・焼土を含む)	B	黒褐色の色調を呈するシルト～粘土層である。灰オリーブシルトブロックや少量の円礫、陶磁器片、瓦片、炭化物・焼土を含む。石列付近で集中的に見られ、石組み溝掘方埋め戻し土も類似した層相を呈する。	様相6～7
c	5Y3/2オリーブ黒シルト(5Y4/3暗オリーブシルトブロック10～25%、φ5～15cm大の円礫多量、土師質土器片・陶磁器片・炭化物・焼土を含む)	C	黒褐色の色調を呈するシルト層である。暗オリーブシルトブロックや多量の円礫を含む。また、土師質土器や陶磁器片も含むが、D層よりも極端に少量であることから、D層とは明確に区別可能である。	様相7
d	2.5Y3/1黒褐細砂～シルト(5Y4/2灰オリーブシルトブロック・5Y4/3暗オリーブ細砂～シルトブロック10～15%、2.5Y3/2黒褐シルトブロック20～30%、φ2～15cm大の円礫・土師質土器片・陶磁器片・瓦片・巻貝片を多量に含む)	D	黒褐色の色調を呈する細砂～シルト層である。オリーブ系シルトや黒褐色シルトブロックを含む。また、多量の円礫を含むとともに、残存状況の良好なものを含む土師質土器や陶磁器、瓦、巻貝を極めて多量に含む点特徴である。	様相8
e	2.5Y3/1黒褐シルト～粘土(一部で2.5Y4/2暗灰黄シルト)(5Y5/4オリーブシルトブロック10～15%、φ2～10cm大の円礫を多量、陶磁器片を含む)	E	黒褐色又は暗灰黄系の色調を呈する細砂～シルト層である。黄色系又はオリーブ系シルトブロックを含む。また、直径2～5cm程度のものを主体とする小円礫を極めて高密度に含む点特徴である。	様相7
l	2.5Y3/3暗オリーブ褐シルト(2.5Y5/4黄褐シルトブロック10%、φ10～30cm大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)			-
m	2.5Y3/2黒褐細砂(一部で2.5Y4/2暗灰黄細砂)(2.5Y4/2暗灰黄シルトブロック10%、5Y4/3暗オリーブシルトブロック30%、φ2～20cm大の円礫を多量に含む)			様相6～7
f	10YR4/3にぶい黄褐シルト(焼土を多量に含む)	F	黄褐色を呈するシルト層である。炭化物・焼土を比較的多く含むが礫や陶磁器等は少量であり、比較的均質である。類似するA層よりも色調は明るく、しまりが強い。L・M層と重複する位置関係にあるが、F層下位でL・M層を確認していない。また、L・M層下位でF層を確認していない。よって、F・L・M層は部分的な重複にとどまり、主として調査区西西部にはF層、東東部にはL層、M層が形成されたと考えられる。	-
g	2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルト(10YR3/3暗褐シルトブロック25%、炭化物を含む)	G	暗オリーブ系を呈するシルト層である。暗褐シルトブロックや炭化物を含むが、礫や陶磁器等は少量であり、比較的均質である。	様相7
h	2.5Y5/3 黄褐細砂(5Y5/3灰オリーブ細砂ブロック30%、2.5Y3/2黒褐細砂ブロック5%含む)	H	黄褐色を呈する細砂層である。灰オリーブ系や黒褐色を呈する細砂ブロックを含むが、礫や陶磁器等は少量であり、比較的均質である。	様相5以降
i	2.5Y4/4オリーブ褐シルト(2.5Y5/3黄褐粘土ブロック5%、炭化物・焼土を多量に含む)	I	オリーブ褐色を呈するシルト層である。黄褐粘土ブロックや炭化物・焼土を含む。下位でE層を確認している。また、円礫を少量含んでおり下位のE層を一部巻き込んでいると考えられる。	-
j	2.5Y3/2黒褐細砂～シルト(2.5Y5/3黄褐シルトブロック15%、10YR3/2黒褐粘土ブロック20%、5Y4/3暗オリーブシルトブロック5%、炭化物・焼土を含む)	J	黒褐色を呈する細砂～シルト層である。黄褐色、黒褐色等多様な色調のシルト～粘土ブロックを多く含むとともに、炭化物・焼土を含む。II層あるいはII層上面を部分的に覆う洪水砂直上に薄く残存し、II層や洪水砂を巻き込むような状況を示すことから、I層形成初期段階の整地層であると考えられる。	様相3～4
n	2.5Y5/3黄褐細砂(2.5Y4/6オリーブ褐シルト～粘土ブロック10%、2.5Y3/2黒褐シルト～粘土ブロック10%、2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック10%、φ3～5cm大の円礫、炭化物・焼土を多量に含む)	K	黄褐色を呈する細砂層である。オリーブ褐色、黒褐色、黄色系等多様な色調のシルト～粘土ブロックを含むとともに、炭化物や焼土を多く含む。これらのシルト～粘土ブロックは下位のL層を構成する土壌と類似しており、また小礫を少量含むことから下位のL層を一部巻き込んでいると考えられる。	様相8
o	2.5Y4/オリーブ褐細砂～シルト(2.5Y3/2黒褐シルトブロック15%、5Y3/2オリーブ黒シルトブロック3%、φ1～3cm大の小礫、炭化物・焼土を含む)	L	オリーブ褐色を呈する細砂～シルト層である。黒色系シルトブロックや小礫を少量、炭化物・焼土を含む。比較的均質である。L層下位ではわずかながらにE層を確認している。また、下位のM層に類似した細砂を巻き込むような状況を示す。	-
p	2.5Y4/2暗灰黄細砂(5Y5/4オリーブ細砂ブロック20%、φ10～15cm大の円礫、炭化物・焼土を含む)	M	暗灰黄系を呈する細砂層である。オリーブ細砂ブロックが目立つとともに、円礫・炭化物・焼土を含む。なお下位からE層を検出している。	-



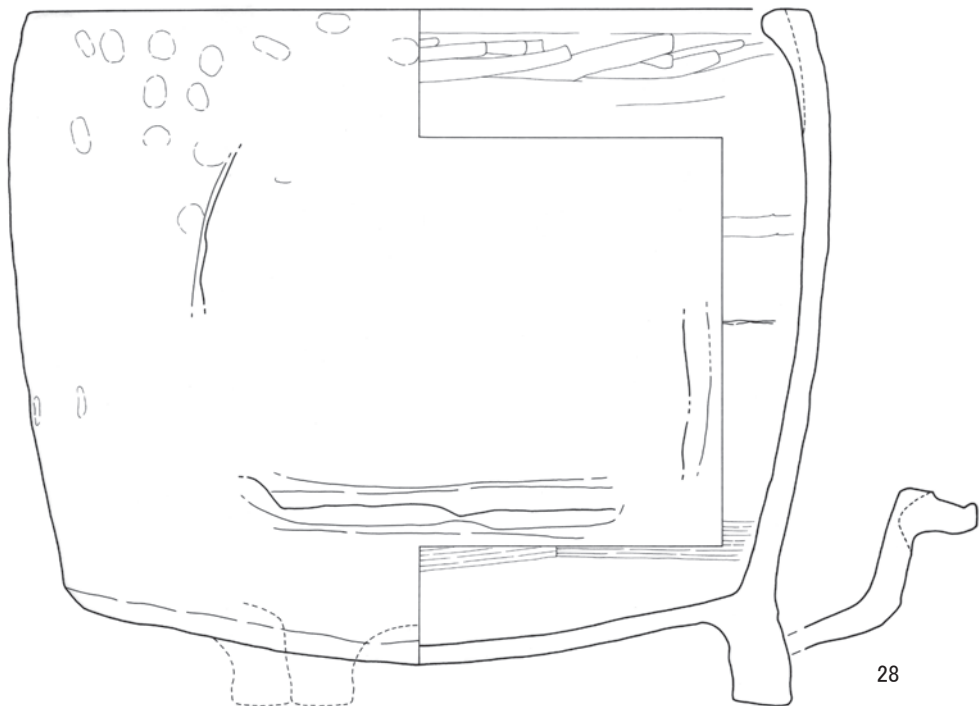
第9圖 A・B層出土遺物



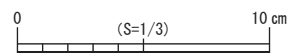
B層 (2)



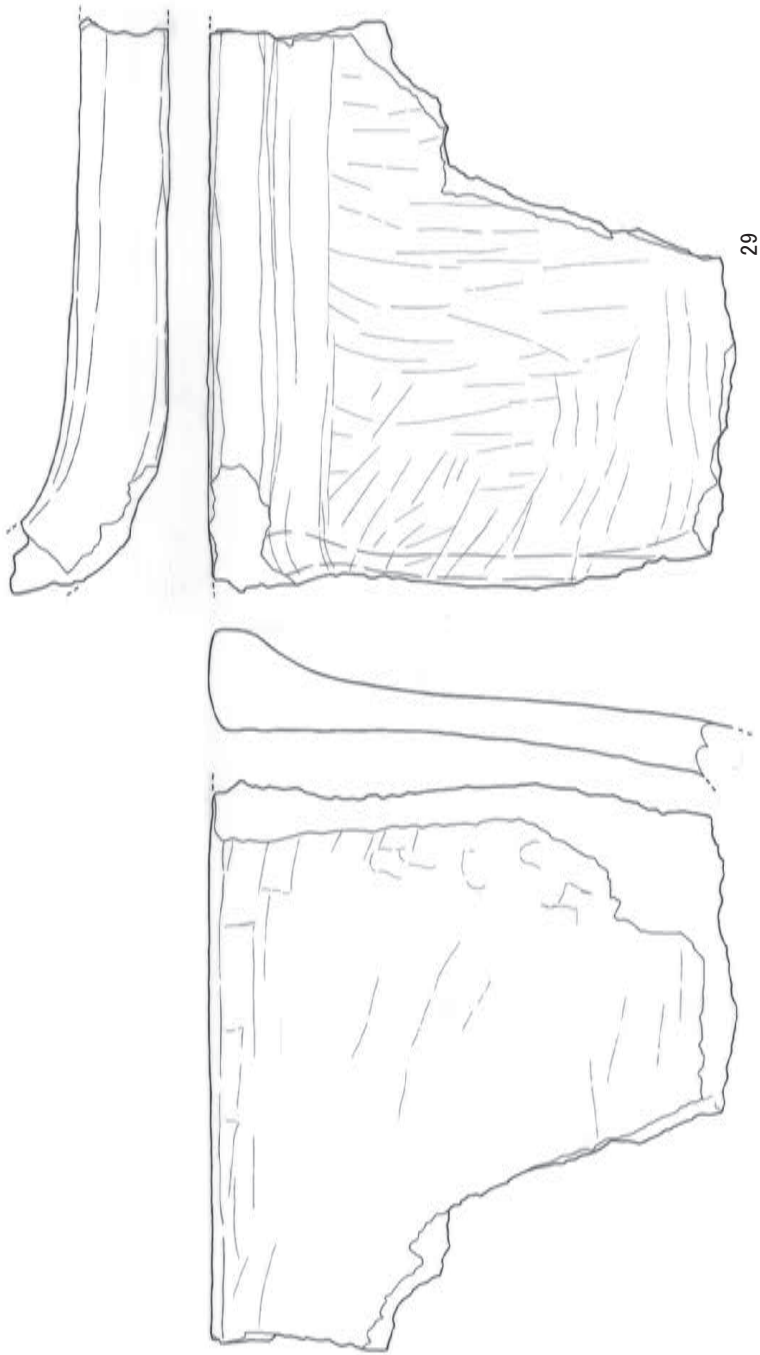
C層



D層 (1)

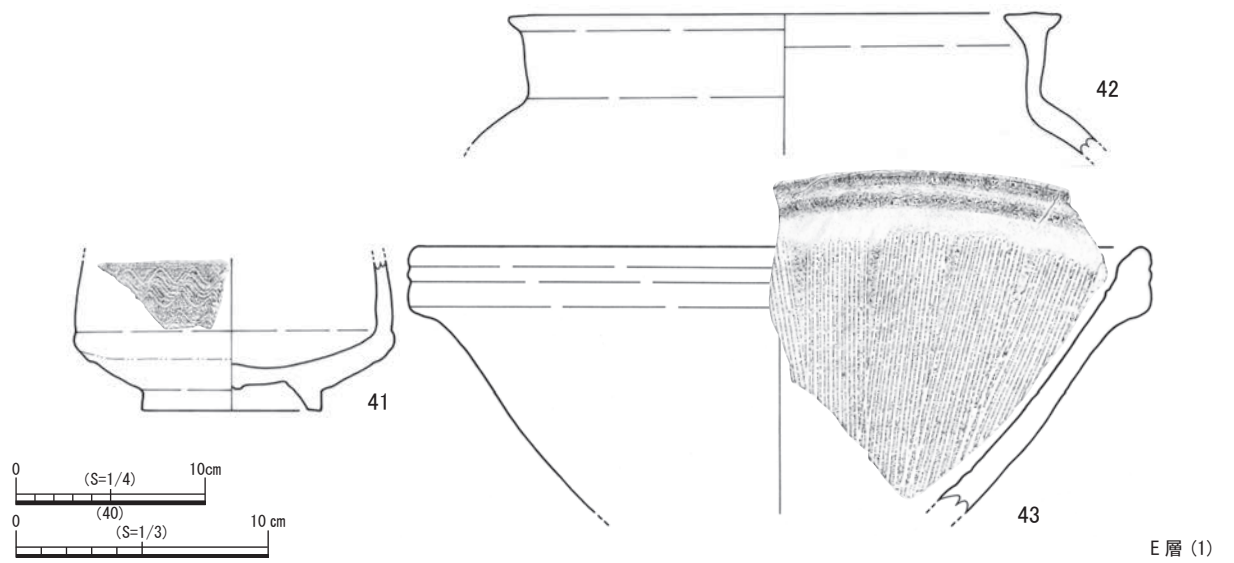
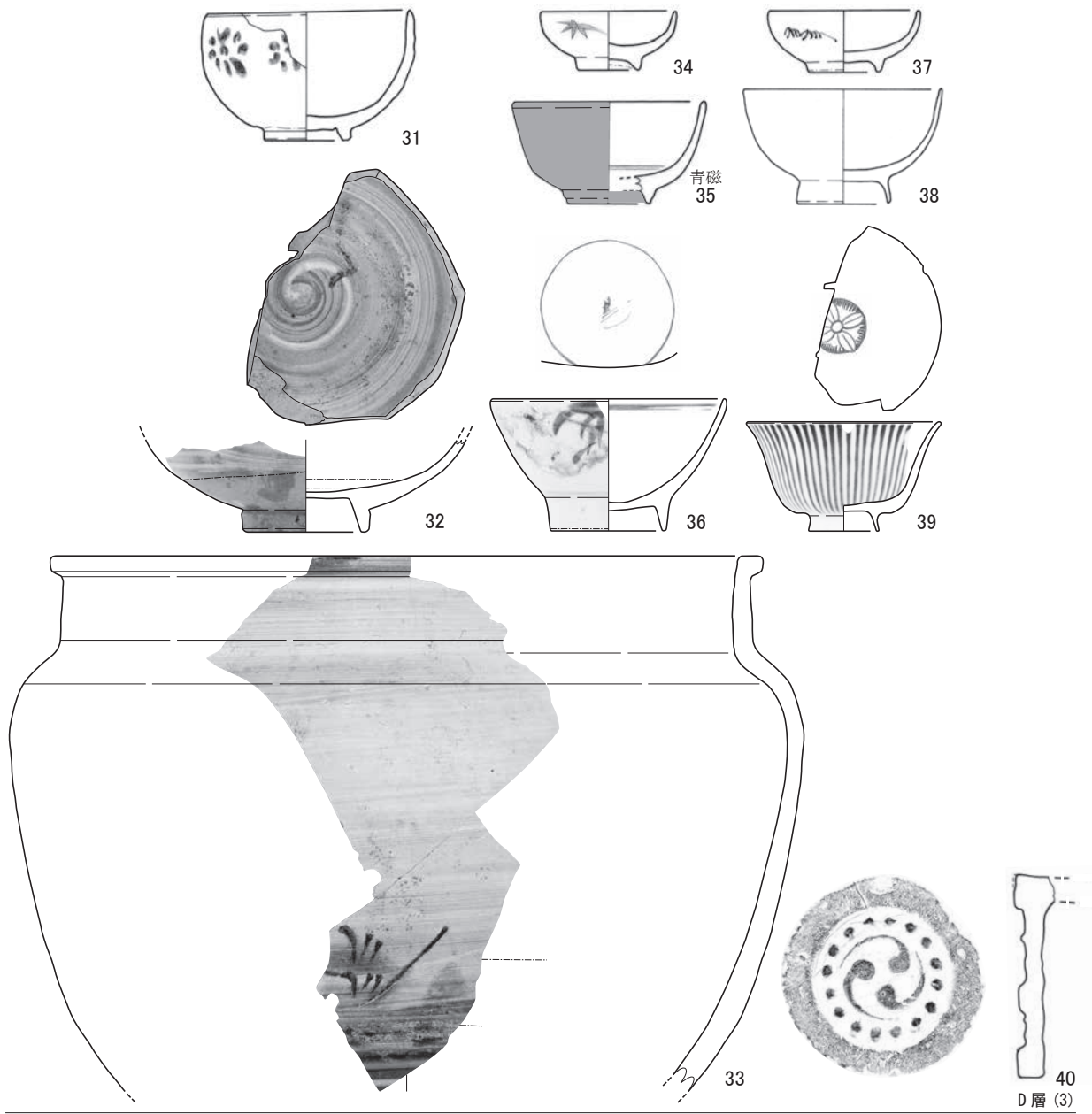


第10図 B (2)・C・D層出土遺物

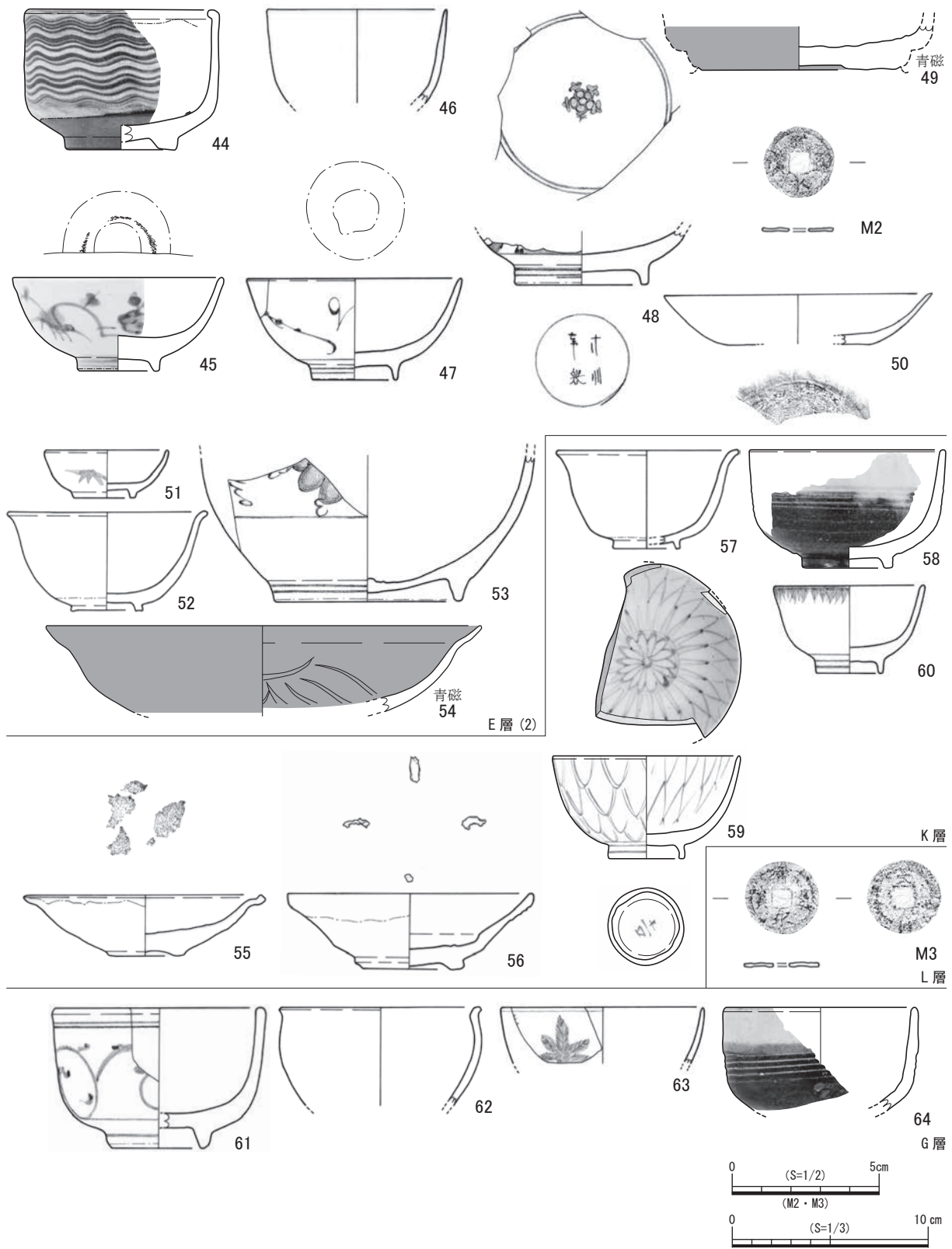


0 10 cm (S=1/3) D層(2)

第 11 図 D層(2) 出土遺物



第12図 D・E層(1)出土遺物



第13図 E(2)・K・L・G層出土遺物

く、他は少量である。肥前系陶器では、大形鉢や大形壺、刷毛目碗等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目凹形高台を有する皿や蛇の目釉剥ぎの見られる皿、端反碗や広東碗、見込中央に手描きで五花文や抽象文を描く碗等が見られる。備前系陶器では卸目が密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具、大甕等が見られる。土師質土器では、残存状況の良好な焜炉等が出土している。陶磁器の産地が多様であるとともに、肥前系磁器において端反碗を含むこと等から、上記遺物群の所属時期の下限は様相 8 であると考えられる。

E からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、銅製品が出土している。肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となる。肥前系陶器では、刷毛目碗等が見られる一方で、古相を示す胎土目を有する皿が含まれる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目凹形高台を有する皿や見込中央に手描きの五花文を描く皿、広東碗等が見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢が見られる。一方で、典型的な端反碗や京・信楽系灯火具が皆無であること等から、上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考えられる。

G からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、京・信楽系陶器や瀬戸・美濃系陶器がそれに次ぐ。肥前系陶器では、胎土目を有する皿や溝縁皿等古相の遺物とともに、刷毛目鉢等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、断面 U 字形状を呈する高い高台を有する碗等が見られる。土師質土器では、播鉢や風呂釜等が見られる。上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考えられる。

H からは肥前系陶器・磁器が 2 個体分出土した。陶器は砂目を有する皿である。磁器は高台断面三角形状を呈する皿である。いずれも古相を示すことから、二次的混入であるとみられる。

J からは完形の肥前系陶器皿が 1 点のみ出土している。砂目を有しており、様相 2～3 に属する遺物である。前述の通り J は下位堆積層（③層）をブロック状に巻き込むことから、その際混入した遺物であると考えられる。

K からは肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、他は少量である。肥前系陶器では胎土目を有する皿や溝縁皿といった

古相を示す遺物とともに、蛇の目釉剥ぎの見られる刷毛目皿等も出土している。肥前系磁器では薄手の資料が主体となる一方で、内外面に網目文を施す碗や見込中央にコンニャク印判による菊花文を施すやや古相の資料も見られる。瀬戸・美濃系陶器では端反碗が見られる。土師質土器では焜炉や大形甕等が見られる。やや古相を示す遺物も含まれるが、瀬戸・美濃系陶器において端反碗が見られる点、土師質焜炉や大形甕を含む点を重視して、上記遺物群の所属時期の下限は様相 8 であると考えられる。

(2) ピット

a. 概要（第 14～18 図）

本遺跡では、直径 50 cm 以下の小規模な掘り込みにおいて柱痕を確認する事例があることから、同規模の遺構は柱跡である可能性が高い。よって、ここでは便宜的に直径 50 cm 以下の遺構をピットとして報告する。

第 1 遺構面において計 38 基のピットを確認した。調査区東半部及び西半部南端付近で特に密に分布する。規模は直径 20～50 cm で、特に 20～30 cm 程度に集中する。また深度は 10～50 cm であり、特に 20～30 cm 程度に集中する。

埋土は 3 種類に分類可能である。遺構ベースとなる整地土と色調・土質の類似する埋土（SP101～110・115・117・118～120・122・128～130・134～136・138）、黒色系シルト～粘土（SP111～114・116・126・127・131・133・137）、褐色系シルト（SP121・124・125）である。このうち、様相 8 以降に形成されたと考えられる整地 D 層及び K 層上面から掘削された遺構埋土はいずれも黒色系粘土～シルトあるいは褐色系シルトであり、当該埋土で埋没するピットは様相 8 以降に形成されたものである可能性が高い。一方、整地土と類似した埋土で埋没するピットは、整地 D・K 層上面以外でのみ確認していることから、様相 7 に形成されたピットである可能性が高い。柱穴は通常、柱据え付け後直ちに埋め戻される。また、柱除去後にできた凹みも埋め戻されると考える。各タイミングにおける埋め戻しに使用される土砂は特別な場合を除き、掘削土をそのまま利用する、あるいは周辺の土であったと考えられる。このような認識に立った時、上記のような埋土の差は柱穴掘り込み面である整地土の差であると考えられる。柱穴埋土は上記のような性質上、当該柱穴のベース土の差を反映しやすいと考えられる。その結果として、様

相7に形成された整地土をベースとする柱穴と様相7に形成された整地土を覆うように(D・Kのように一部切り込むように)形成された様相8の整地土をベースとする柱穴の埋土に差が生じたと考えられる。

柱痕を有するピットはSP106・108・109・114・127・133・137・138の8基のみである。これらは柱除去に際して、根本付近から切除され、土中の柱材が痕跡的に残存した結果として捉えられる。一方で、SP122・127・131・138では、ピット上端部付近において一方向又は全方向に向かってスロープ状に緩やかに立ち上がる状況が見られる。これらは、柱除去に際して、柱穴を再掘削し、柱材を抜き取ろうとした結果として捉えられる。

b. 掘立柱建物の復元(第14・15図)

上記のピットのうち、分布状況及び形成時期(埋土の特徴)に基づき、少なくとも3棟の掘立柱建物跡を復元することができると考える。

SP101～105 調査区南西端部で確認した東西棟の掘立柱建物跡であると考えられ、調査区南外方へと延びる。主軸は座標北から約76°西へ傾く。柱間間隔は桁行が約0.9m～1.4mとややばらつきがある。梁行は約0.9mである。ピット埋土はベース土と類似することから、様相7に形成されたものであると考える。

SP106～110 調査区中央東端部付近で確認した東西棟の掘立柱建物跡である。SK122と重複関係にあり、SK122より後出する。桁行と考えられる柱列のみ1列分確認しており、建物の広がり是不明である。柵列である可能性もある。主軸は座標北から約76°西へ傾く。柱間間隔は概ね0.9～1.0mであるが、SP107・108間のみ0.6mとやや狭い。ピット埋土はベース土と類似することから、様相7に形成されたものであると考える。

SP111～114・131・132・133・137 調査区北東端部付近で確認した南北棟の掘立柱建物跡であると考えられ、桁行と考えられる柱列を1列分、また対になると考えられるピット1基を確認している。調査区東外方へと延びる可能性が高い。北端部と南端部の柱穴周辺には近接して規模・埋土の類似したピットが複数基形成されており、修築を想定することができる。柱間間隔が広い点、複数回の柱建替えが行われている点から、柵列であるとは考えにくい。主軸は座標北から約11°東へ傾く。柱間間隔は南北方向が2.2～2.8m、東西方向が4～5mであるが、中間に削平された、あるいは検出しえなかった柱穴が存

在した可能性も考えられる。ピット埋土は黒色系シルト～粘土であることから、様相8に形成されたものであると考える。

c. 出土遺物

ピット出土遺物は極めて少量であり、残存状況が不良な資料のみであることから実測図を掲載していないが、観察所見のみ記載する。

SP101 備前系陶器灯火具が1点、器種不明の土師質土器小片が数点出土している。

SP102 産地不明の陶器小片が少量出土している。

SP103 橙色系のきめ細かい胎土を用いた土師質皿小片が1点のみ出土している。皿A IXにあたると思われる。様相7・8に属するものであると考える。

SP104 焙烙と考えられる資料を含む土師質土器片が少量出土している。

SP105 薄手の肥前系磁器片、備前系甕片、土師質焙烙片が数点ずつ出土している。

SP107 焙烙と考えられる土師質土器片1点のみ出土している。

SP108 器種不明の土師質土器片が数点出土している。

SP109 皿A VIIと考えられる土師質土器が出土している。

SP110 薄手の肥前系磁器片、土師質焙烙片が少量出土している。

SP113 器種不明の土師質土器片が少量出土している。

SP118 薄手の肥前系磁器片、備前系灯火具片、土師質焙烙片が少量出土している。

SP119 肥前系磁器や土師質羽釜等が出土している。肥前系磁器は型紙摺りにより絵付けされ、口銹を施した皿である。

SP120 肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器が出土している。

SP121 土師質大甕片のみ出土している。

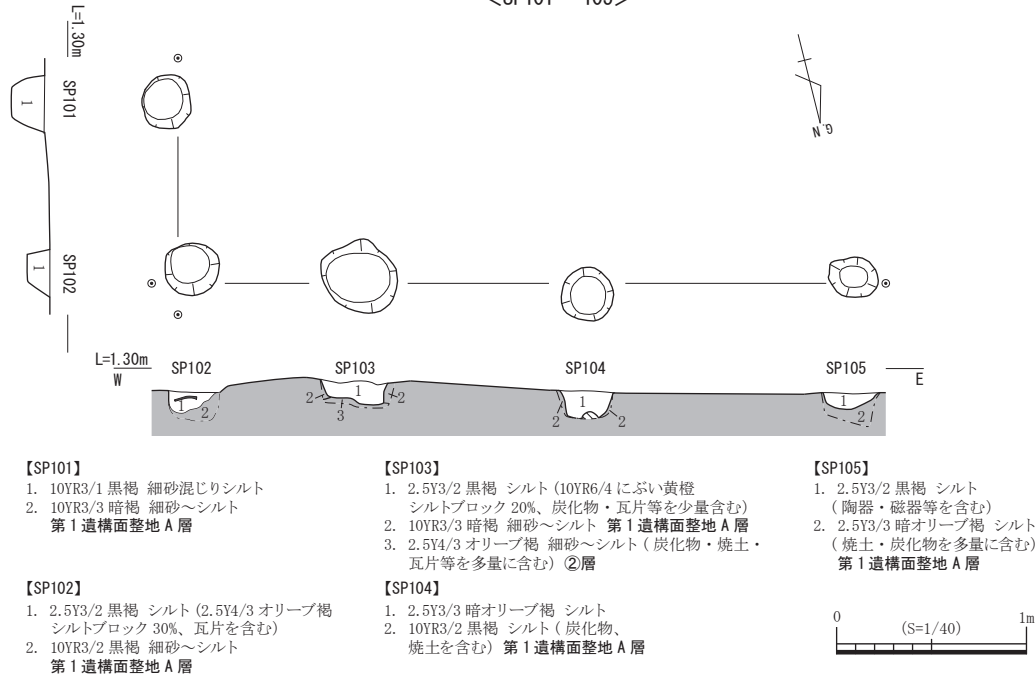
SP123 肥前系陶器片、薄手の肥前系磁器片、土師質土器片が出土している。

SP124 肥前系磁器片と土師質焙烙片が出土している。肥前系磁器は外面に網目文を施す厚手の資料であり、高台断面はU字形状を呈する。

SP125 薄手の肥前系磁器片や備前系陶器片、土師質焙烙片等が出土している。

SP126 薄手の肥前系磁器碗や土師質焙烙片が出土している。

<SP101 ~ 105>



【SP101】

1. 10YR3/1 黒褐 細砂混じりシルト
 2. 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト
- 第1遺構面整地A層

【SP102】

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐 シルトブロック 30%、瓦片を含む)
 2. 10YR3/2 黒褐 細砂～シルト
- 第1遺構面整地A層

【SP103】

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (10YR6/4 にぶい黄橙 シルトブロック 20%、炭化物・瓦片等を少量含む)
2. 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂～シルト (炭化物・焼土・瓦片等を多量に含む) ②層

【SP104】

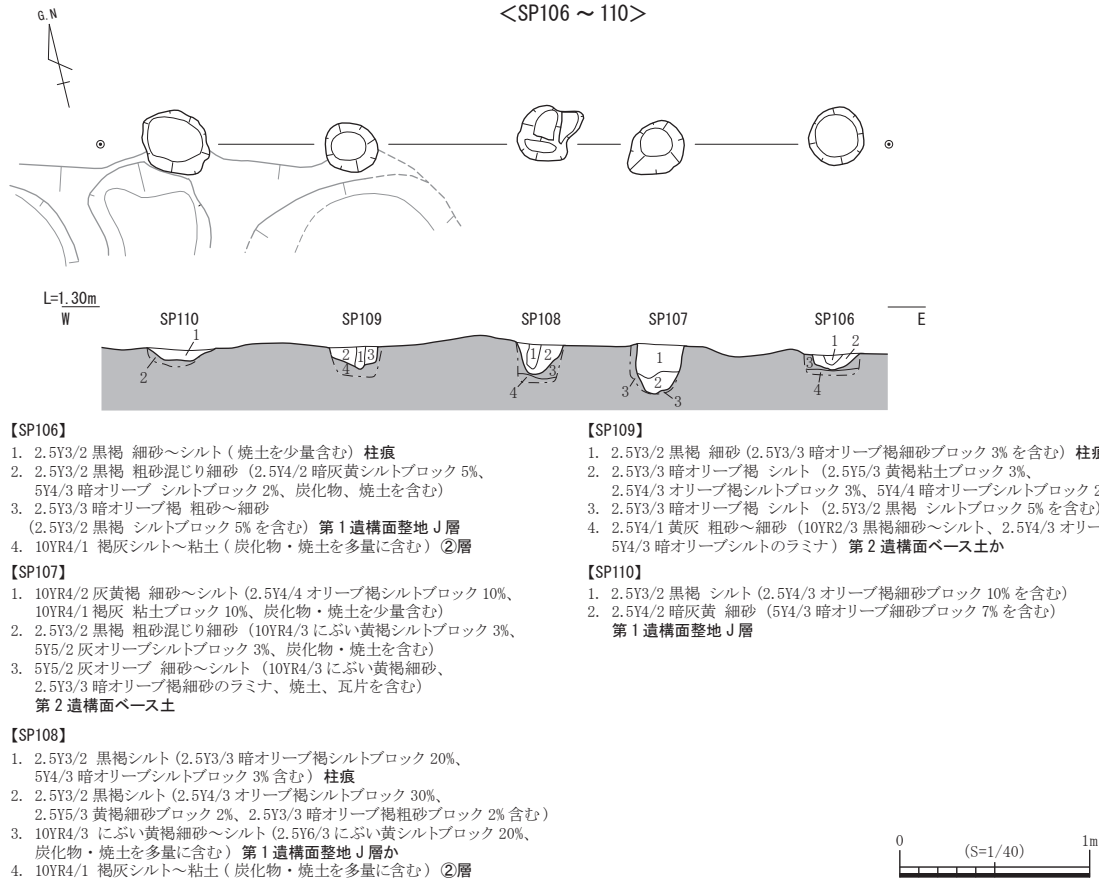
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト
2. 10YR3/2 黒褐 シルト (炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地A層

【SP105】

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (陶器・磁器等を含む)
 2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (焼土・炭化物を多量に含む)
- 第1遺構面整地A層

第14図 SP101～105 平面図・断面図

<SP106 ~ 110>



【SP106】

1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト (焼土を少量含む) 柱痕
2. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 5%、5Y4/3 暗オリーブ シルトブロック 2%、炭化物、焼土を含む)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗砂～細砂 (2.5Y3/2 黒褐 シルトブロック 5%を含む) 第1遺構面整地J層
4. 10YR4/1 褐灰シルト～粘土 (炭化物・焼土を多量に含む) ②層

【SP107】

1. 10YR4/2 灰黄褐 細砂～シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 10%、10YR4/1 褐灰 粘土ブロック 10%、炭化物・焼土を少量含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (10YR4/3 にぶい黄褐シルトブロック 3%、5Y5/2 灰オリーブシルトブロック 3%、炭化物・焼土を含む)
3. 5Y5/2 灰オリーブ 細砂～シルト (10YR4/3 にぶい黄褐細砂、2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂のラミナ、焼土、瓦片を含む) 第2遺構面ベース土

【SP108】

1. 2.5Y3/2 黒褐シルト (2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルトブロック 20%、5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 3%含む) 柱痕
2. 2.5Y3/2 黒褐シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 30%、2.5Y6/3 黄褐細砂ブロック 2%、2.5Y3/3 暗オリーブ褐粗砂ブロック 2%含む)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐細砂～シルト (2.5Y6/3 にぶい黄シルトブロック 20%、炭化物・焼土を多量に含む) 第1遺構面整地J層か
4. 10YR4/1 褐灰シルト～粘土 (炭化物・焼土を多量に含む) ②層

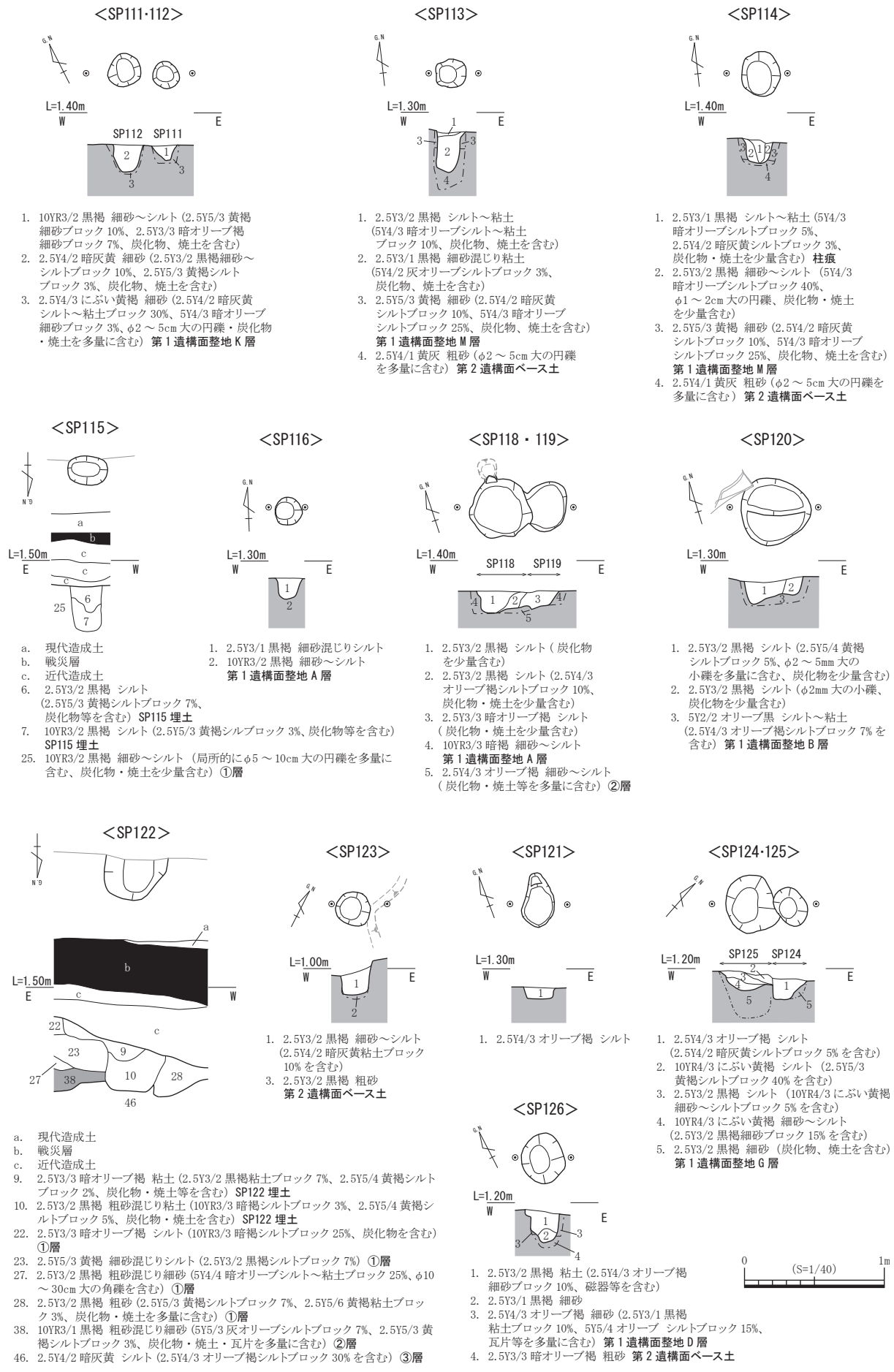
【SP109】

1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂ブロック 3%を含む) 柱痕
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐粘土ブロック 3%、2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 3%、5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 2%を含む)
3. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (2.5Y3/2 黒褐 シルトブロック 5%を含む)
4. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～細砂 (10YR2/3 黒褐細砂～シルト、2.5Y4/3 オリーブ褐粗砂、5Y4/3 暗オリーブシルトのラミナ) 第2遺構面ベース土か

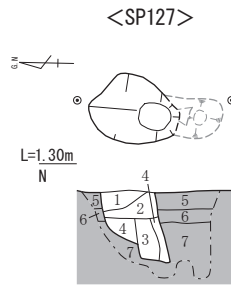
【SP110】

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐細砂ブロック 10%を含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 7%を含む) 第1遺構面整地J層

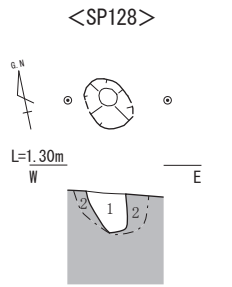
第15図 SP106～110 平面図・断面図



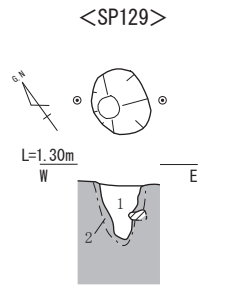
第 16 図 柱穴平面図・断面図 (1)



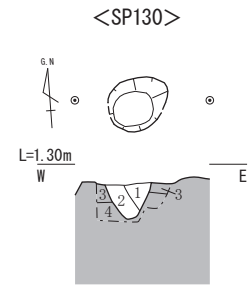
- 10YR2/1 黒 シルト～粘土 (10YR5/4 にぶい黄褐シルトブロック 7%、瓦片、磁器片等を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/2 暗灰黄細砂～シルトブロック 10%、φ2cm 大の小礫を少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 粘土 (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 7%を含む) 柱痕
- 10YR3/2 黒褐 細砂混じり粘土 (5Y4/2 灰オリーブ粘土ブロック 3%を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト～粘土 (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 10%を含む) 第1遺構面整地D層
- 10YR3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 7%、炭化物・焼土を少量含む) 第1遺構面整地D層
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 第2遺構面ベース土



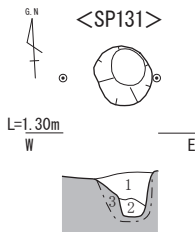
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 細砂～シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐 シルトブロック 15%、φ2～3cm 大の円礫、炭化物、焼土、瓦片を含む)
- 2.5Y4/4 オリーブ褐 細砂～シルト (φ3～10cm 大の円礫、炭化物・焼土を多量を含む) 第1遺構面整地I層



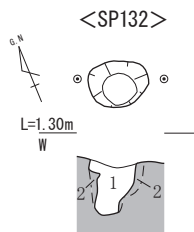
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (φ3～5cm 大の円礫少量、炭化物、焼土を含む)
- 10YR4/2 灰黄褐 細砂～シルト (φ5～15cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地I層



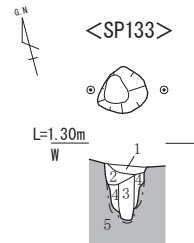
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y5/4 黄褐シルトブロック 2%を含む)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗砂混じりシルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 3%、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (2.5Y3/2 黒褐シルト～粘土ブロック 30%、2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 5%、φ2～10cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量を含む) 第1遺構面整地E層
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～シルト (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 30%を含む) 第2遺構面ベース土



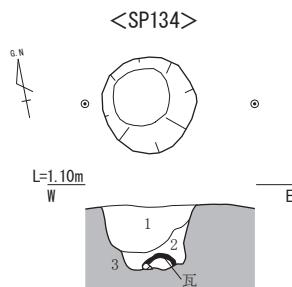
- 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐粘土ブロック 2%、2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 7%、炭化物を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じり粘土 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 5%、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (10YR3/1 黒褐粘土ブロック 10%、5Y5/3 灰オリーブ細砂ブロック 20%、炭化物・焼土を多量を含む) ②層



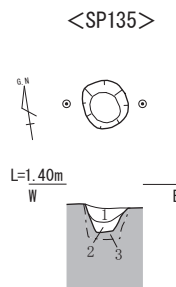
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 15%、φ2～3cm 大の円礫、炭化物を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (5Y6/2 灰オリーブシルトブロック 30%、炭化物・焼土を多量を含む) ②層



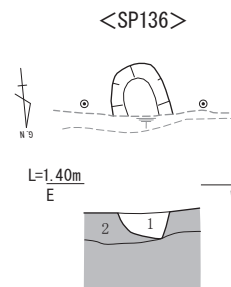
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルトブロック 30%、5Y5/3 灰オリーブシルトブロック 2%、炭化物、焼土を含む)
- 5Y2/2 オリーブ黒 粘土 (5Y4/4 暗オリーブ細砂～シルトブロック 5%、貝片を含む)
- 5Y2/2 オリーブ黒 粘土 (2.5Y5/3 黄褐細砂～シルトブロック 5%、炭化物を含む) 柱痕
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト～粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐細砂ブロック 10%、焼土を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/4 暗オリーブ細砂ブロック 15%、φ2～3cm 大の円礫を少量含む) 第1遺構面整地E層



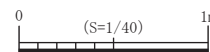
- 10YR3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/3 オリーブ褐 シルトブロック 30%、炭化物・焼土を多量を含む)
- 10YR3/2 黒褐 シルト (瓦片等を含む)
- 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂 (10YR3/3 暗褐粘土ブロック 3%、焼土を含む) 第1遺構面整地F層



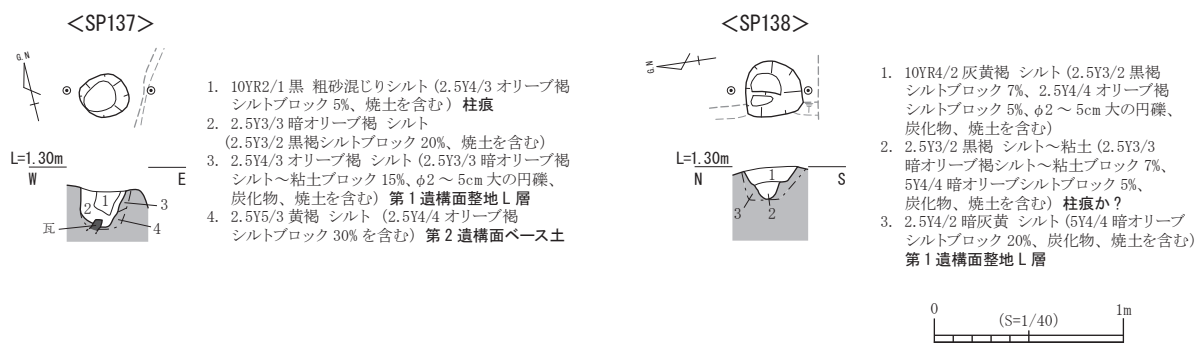
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト (2.5Y3/2 黒褐シルトブロック 30%、炭化物・焼土を少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (10YR4/3 にぶい黄褐シルト～粘土ブロック 3%、焼土を少量含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 5%、2.5Y3/2 黒褐シルトブロック 7%、2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 5%、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地M層



- 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂混じりシルト (10YR6/3 にぶい黄橙シルトブロック 5%、2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 20%、5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 5%、漆喰片を多量に含む)
- 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂～シルト (5Y3/2 灰オリーブ黒シルトブロック 3%、φ1～3cm 大の小礫、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地L層



第17図 柱穴平面図・断面図(2)



第 18 図 柱穴平面図・断面図 (3)

SP127 肥前系陶器皿又は鉢片や瀬戸・美濃系陶器片、備前系陶器片、土師質皿小片等が出土している。

SP128 薄手の肥前系磁器片のみ数点出土している。

SP129 からは肥前系陶器刷毛目碗片や土師質土器焙烙片等が出土している。

SP130 肥前系磁器蓋片、瀬戸・美濃系陶器片、備前系陶器片、土師質土器片が数点ずつ出土している。

SP133 備前系陶器片や土師質焙烙片が少量出土している。

SP134 肥前系陶器、土師質土器、軒丸瓦が出土している。肥前系陶器は高台形状が断面逆台形でやや高い形状を呈する資料である。土師質土器皿は白みがかかった橙色を呈する胎土を呈する。軒丸瓦は瓦当文に立体感がなく、巴文の尾は長く延び、珠文数も多い。全体的に古相を呈する。

SP138 肥前系磁器蓋片、器種不明の土師質土器片が少量出土している。

(まとめ)

以上、ピット出土遺物の所見を記載した。古相を示す遺物も混ざるものの、薄手の肥前系磁器や瀬戸・美濃系陶器の存在、土師質土器皿の形態から様相 5～7 以降の遺物群であると言える。整地土の形成時期が様相 7～8 であることから、古相を示す遺物は二次的な混入として捉えられる。

(3) 土坑 (第 19～21・26・27・31～34 図)

a. 概要

柱穴の可能性が低い長軸 50 cm 以上の規模を有する遺構、あるいは長軸 50 cm 未満の遺構においても土器が据え付けられている等、明らかに柱穴として認識しがたい遺構を土坑として報告する。

第 1 遺構面において計 54 基の土坑を確認した。近代以降の攪乱に著しく削平を受けている調査区中央北寄りを除き、ほぼ全域に分布している。

検出した土坑は大きく 4 種類に分類可能である。大形土器・陶器据え付け土坑、木桶据え付け土坑、廃棄土坑、その他である。土坑の埋土は極めて多様であり、ピットで検証したように埋土の色調・土質から単純に時期差(掘り込み面の差)を想定することは困難である。ただし、ベースとなる整地土や出土遺物から少なくとも SK103・105～110・119・129～134・139・140・149・150 は様相 8 に形成されたものであると言える。さらに、土器・陶器や木桶の据え付け用土坑の掘方埋土は前述の柱穴同様に掘方掘削—土器・陶器・木桶据え付け後、直ちに埋め戻されたと考えられ、土色・土質に見られる差異をもとに時期差を推測することが可能であると考えられることから、掘方埋土とベース土との比較から時期比定することはある程度可能であると考えられる。

以下、4 種類の土坑それぞれについて、個別に詳細を記載する。

b. 大形土器・陶器据え付け土坑 (第 19～21 図)

SK101～121 が該当する。ただし、SK109・115・119 では大形土器が破碎された状態で原位置を保たずに出土していることから、廃棄土坑である可能性もある。SK101～121 のうち、ベース土や他の遺構との重複状況から、少なくとも SK103・105～110・119 は様相 8 以降に形成されたと言える。

土器・陶器据え付け土坑の分布状況を見ると、数か所にまとまりを形成する状況が読み取れる。特に SK101・102、SK103～110、SK111～116・118 が顕著な事例として指摘できる。

(大形土器・陶器の種類)

ここで、土坑に据え付けられた大形土器・陶器の種類と構造等について概説する。大形土器・陶器は6種類に大別できる。

①類（第22図67、第24図83） 底部直径約40cmの土師質土器である。胴部は大きく外方向へと広がる。底部は胴部に比して薄く、また中央が最も高く周縁部に向かって低くなる形態を呈する。底部外面の縁部には粘土帯を貼り付けることで高台状の構造を呈し、底部下にはドーム状の空間が形成されている。底部外面、前述のドーム状の空間は頻繁に火を受けていたと考えられ、煤がおびただしく付着している。底部外面縁部の高台状の部分では、対向する位置を窓状に切り抜いている。空気の流れを円滑にし、火力を増す意図があると考えられる。胴部外面には6cm前後の間隔で幅3～4cm程度の粘土帯が貼り付けられている。装飾及び粘土帯継ぎ目からの水漏れを防止する意図があると考えられる。また、胴部下半を中心に局所的に煤が付着しており、底部から漏れた火を受けた結果であると考えられる。

内面はハケ調整後、ハケ目が丁寧にナデ消されている。内面では、底部から約5～6cm上位に粘土帯が貼り付けられ、段が形成される。当該段には計3箇所に直径1～1.5cmの円孔が均等に穿たれている。さらに、当該段から約4～5cm上位に計3個の瘤状突起が形成され、均等に配置されている。これらの段及び瘤状突起により、何らかの構造物を固定していたと考えられ、段一瘤状突起間の器壁が変色している。固定に際して、段に形成された円孔に紐等を結び付けた可能性も考えられる。ここでは、板状の構造物を想定したい。さらに、前述したように内面底部は縁部に向かって低くなる形態を呈するが、底部縁部の一か所に円孔が穿たれ、注口状に成形されている。排水口であると考えられる。底部中央を高くすることで、排水効率を高めていたと考えられる。

①類は風呂釜であると考えられる。

②類（第23図74、第25図98） 底部直径約40cmの土師質土器である。胴部は外傾気味に広がる。内外面ともにハケ調整を加え、後に内面にナデ調整を加える。特に内面底部及び底部からやや上位にかけては回転力を利用した非常に丁寧なナデ調整が加えられている。大形品であるため、底部と胴部を別作りした可能性が想定でき、継ぎ目を入念にナデ消す意図がうかがえる。

③類（第24図82） 底部直径約20～25cmの土師質土器である。胴部は直立気味に立ち上がる。調整

については、②類と類似している。

④類（第22図72、第23図75） 口縁部直径約50～60cmの土師質土器である。同様の形態で口縁部直径約30cm前後の資料もある。内面は直立気味に立ち上がるが、外面は口縁部付近では内面に比してやや外傾気味に立ち上がる。結果として口縁部から約6～7cm下方から口縁部にかけて器壁を急激に増し、口縁部には平坦面が形成されている。また、器厚を増し始める部分で外面が幅4～5cm程度の帯状又は段状に成形される場合がある。この場合、粘土帯貼り付け痕は見られない。なお、当該帯状又は段状の隆起部には、型を押し当てることでX文を施す場合や、ヘラ状の工具により連続した三角形文を施す場合が見られる（第22図72）。器厚を増す上部部6～7cm分については、擬口縁状に成形した甕本体上部の内側に粘土を貼り付けて口縁部を形作った可能性が断面観察の所見から指摘可能であり、上記帯状又は段状に成形された部分は、単なる装飾ではなく、本来、擬口縁の名残であった可能性も考えられる。この点、後述する第2遺構面出土土師質大甕の成形方法及び形態と類似しており、同一系譜上の遺物として捉えられ、口縁部付近の成形方法における形骸化が読み取れる。加えて、口縁部から6～7cm下位に瘤状の突起を複数個、指頭圧により貼り付けた資料も見られる（第23図75）。内外面ともにハケ調整後、ナデ調整が加えられ全体的に平滑化されている。

④類は形態的には井戸杵と類似する。また、前述した②類や③類の口縁部である可能性も考えられる。

⑤類（第23図73） 口縁部直径約30cmの大谷焼の甕である。

⑥類（第20図SK111） 口縁部直径約30cmの肥前系と考えられる陶器の甕である。

（大形土器・陶器据え付け土坑の観察所見）（第19～25図）

以下、大形土器や陶器を伴う土坑の観察所見を記載する。いずれも据え付けられた土器や陶器よりも規模が大きい土坑であり、平面形は円形状を呈する。壁は直立又は外傾気味に立ち上がる。また、底部はいずれも比較的平坦である。

SK101 土器①類の据え付け土坑である。掘方埋土はベース土である整地G層と類似しており、G層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土師質土器①類内部には極めてしまりの悪い暗灰黄系細砂～シルトが堆積し、多量の瓦片や陶磁器片等を含む。

掘方埋土出土遺物は少量であり、肥前系磁器碗や

土師質焙烙片等が出土している。一方、土器①類内部からは残存状況の良い遺物が多量に出土している。肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。特に肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器が主体となる。肥前系磁器は薄手の資料が主体となる。京・信楽系陶器では碗、瀬戸・美濃系陶器では水甕が出土している。備前系陶器では比較的卸目が密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの特徴から上記遺物群は様相7以降の比較的一括性のある遺物群であると考えられる。

SK102 土器①類の据え付け土坑である。掘方埋土はベース土である整地G層と類似しており、G層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土器①類内部の埋土は上下2層に分かれる。下位には極めてしまりの弱い黒褐色系細砂～シルトが堆積し、多量の瓦片や陶磁器片等を含む。上位にはやや遺物包含量が少ない暗オリーブ褐シルトが覆う。

掘方埋土からは土器④類が出土している。土器①類内部からは残存状況の良い遺物が多量に出土している。肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、土製品、鉄製品が出土している。特に肥前系磁器が主体を占め、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器がこれに次ぐ。肥前系陶器や備前系陶器は少量である。肥前系陶器では、植木鉢が見られ碗・皿は見られない。肥前系磁器は薄手の資料が主体となるとともに、器種が多様化している。蛇の目凹型高台を有する皿や小杯、見込中央に手描きで抽象文を描く碗等が見られる。京・信楽系陶器では碗が見られる。瀬戸・美濃系陶器では、大形の鉢や碗が見られる。これらの特徴から上記遺物群は様相7以降の比較的一括性のある遺物群であると考えられる。

SK103 土器①類の据え付け土坑である。土器①類内部がある程度埋没した段階で、土器①類の一部を壊して陶器⑤類の上下を反転させて据え付けている。土器①類と掘方との間に隙間は見られないが、一部掘方底部付近に沿って漆喰状のものが塗られている。土器①類内部の埋土は上下2層に分かれる。下位には黒褐色シルト、上位には直径5mm～1cm大の小礫を多量に含む暗褐色シルトが堆積している。いずれも極めてしまりが弱く、内部に多量の陶磁器片等を含む。陶器⑤類掘方埋土はしまりの弱い黒色系シルトである。陶器⑤類内部の埋土は粗砂を多量に含む極めてしまりの弱い黒色系シルトの単層である。

土器①類掘方埋土からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が出土しているが、少量であり、残存状況は不良である。備前系陶器では、口縁部屈曲が緩やかで比較的卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。陶器⑤類掘方埋土からも肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、軟質施釉陶器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器では、厚手の碗等がみられる。上記遺物群にはやや古相の遺物も含むため一括性に欠けるが、下限は様相7であると考えられる。整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考えられる。

SK104 土器①類の据え付け土坑である。掘方埋土はベース土である整地A層と類似しており、A層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土器①類内部の埋土は焼土や瓦片等を含むシルトであるがしまりは強い。

掘方埋土からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が少量出土しており、肥前系磁器が大多数を占める。いずれも残存状況は不良である。肥前系陶器では、刷毛目鉢が出土している。肥前系磁器ではやや古相を示す厚手で外面に粗雑な一重網目文を施した資料も含まれる。瀬戸・美濃系陶器では碗、備前系陶器では灯火具が見られる。土師質土器では白みがかかった褐色を呈する皿AⅡが出土している。肥前系磁器や土師質皿に古相を示す遺物が含まれ一括性に欠けるが、上記遺物群の下限は様相6～7であると考えられる。

SK105 土器③類の据え付け土坑である。底部付近のみが遺構面上面付近に露出するような状況で検出しており、掘方はわずかに3cm程度残存するのみである。掘方は削平され残存しない、あるいはもともと明確な掘方を伴わずに据え付けられた土器であった可能性も考えられる。整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考えられる。

SK106 土器②類の据え付け土坑である。SK154と重複関係にあり、SK154より後出する。土器②類内面には白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。掘方埋土は黒色系シルトである。土器②類内部の埋土は上下2層に分かれる。下位には黒褐色系極細砂～シルト、上位には暗灰黄系シルトが堆積する。いずれもしまりは極めて弱く、粗砂や動物骨、貝片等を多量に含む。土器②類内部からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が少量出土してい

る。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器では、蛇の目釉剥ぎの見られる皿が含まれる。瀬戸・美濃系陶器では碗が見られる。土師質土器では播鉢が見られる。上記遺物群には古相の遺物が含まれ一括性に欠ける。下限は様相6～7であると考え。整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考え。

SK107 土器③類の据え付け土坑である。掘方埋土は黒色系又は褐色系シルトである。底部外周付近に褐灰色粘土を貼り付けた状況が見られ、土器を固定する意図があると考え。土器③類内部の埋土は炭化物を多量に含む黒褐色系粘土である。一部、土器内部の埋土と同様の埋土が土器外側でも見られることから(2層)、土器外周には掘方埋土との間に一定の空間が確保されていた可能性が考えられる。

掘方埋土からは、肥前系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器が出土している。特に、肥前系磁器が大多数を占める。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器は薄手の資料が主体となり、見込内面に手描きで抽象文を描く碗等が見られる。土師質土器では皿A VIや隅丸方形に成形されたと考えられる大形製品(甕か)が見られる。土器③類内側埋土からは、肥前系陶器や土師質土器が少量出土しているが、いずれも残存状況は不良である。上記遺物群の下限は様相7であると考え、整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考え。

SK108 土器②類の据え付け土坑である。土器④類を含むSK109と重複関係にあり、SK109より後出土。土器②類内面には白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。掘方埋土は円礫や陶磁器を多量に含む黒褐色系シルト～粘土であり、ベース土である整地D層と類似する。D層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土器②類内部の埋土は暗褐色系粗砂であり、近代の磁器や動物骨を多量に含む。

掘方埋土からは、残存状況の良好な肥前系陶器・磁器、備前系陶器が出土している。特に肥前系陶器・磁器が多数を占めるが、全体としては少量である。肥前系陶器では、刷毛目碗が出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目釉剥ぎの見られる皿が出土している。土器②類内部の埋土からは近代以降の磁器皿が数点出土している。掘方出土遺物の下限は様相7～8、土器②類内部の埋土出土

遺物の下限は近代である。整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考えられる。

SK109 土器④類が含まれる土坑である。土器④類は原位置を保っていないことから、廃棄土坑である可能性も考えられる。SK108と重複する位置関係にあり、SK108に先行する。埋土は黒褐色系シルト～粘土である。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、備前系陶器、土師質土器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系陶器では、刷毛目を施した大鉢片が出土している。肥前系磁器は厚手の資料が見られる。備前系陶器では、精良な胎土を用いた灯火具等が出土している。上記遺物群の下限は様相6～7であると考えられるが、整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考えられる。

SK110 土器②類の据え付け土坑である。掘方埋土にはぶい黄褐色シルトブロックを含む黒褐色系シルト～粘土である。土器②類内側の埋土も掘方埋土と類似する。よって、掘方壁面と土器との間に一定の空間が確保されていた可能性がある。

掘方埋土からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、土製品が多量に出土しているが、大多数は土師質土器であり、陶磁器類は少数である。陶磁器類では肥前系磁器が主体となる。肥前系磁器は薄手の資料が主体であるが、厚手の資料も含む。土器②類内部からは、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器では、蛇の目凹形高台を有する皿が見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢が見られる。上記遺物群の下限は様相7～8であると考え、整地D層をベース土とすることから、様相8以降に形成された遺構であると考え。

SK111 陶器⑥類の据え付け土坑である。陶器⑥類の上下を反転させて据え付けている。掘方埋土は黒褐色系シルトである。陶器⑥類内部の埋土は底部付近に暗オリーブ色系シルトブロックを含む土壌が約5cm堆積し、上位の堆積ではラミナが見られることから、一定期間滞水状態にあったことが推測可能である。

掘方埋土からは肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質焙烙が多量に出土している。いずれも残存状況は良好である。陶器⑥類内部からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、土師質焙烙等が少量出土している。肥前系陶器では、蛇の目釉剥ぎの見られる大形の皿

や鉢が含まれる。上記の遺物群の下限は様相7であると考えられる。

SK112 土器②類の据え付け土坑である。土器②類内面には白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。掘方埋土は小礫や炭化物、暗灰黄色系シルトブロックを含む黒褐色系シルトであり、ベース土である整地J層と類似する。よって、J層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土器②類内部の埋土は炭化物や瓦片を多量に含む黒褐色系シルトの単層であり、しまりは弱い。埋土出土の陶磁器・土器は皆無である。

SK113 土器①類の据え付け土坑である。近代の建物基礎により大きく削平されている。遺構検出時には土器が残存していたが、降雨に伴う排水作業の過程で紛失したため、出土状況の記録を作成していない。断面図は遺構南端部付近の状況であり、掘方埋土のみの断面図となっている。埋土はベース土であるJ層と類似していることから、J層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。

埋土からは、瀬戸・美濃系陶器碗、土師質土器③類が出土している。出土遺物量は極めて少量であり、いずれも残存状況は不良である。

SK114 土器②類の据え付け土坑である。土器②類内面には白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。掘方埋土は小礫を多量に含む黒褐色系シルトである。土器②類内部の埋土は3層に分類可能である。最下層はオリブ褐色系細砂である。動物骨を多量に含む、しまりは極めて弱い。底部付近から完形に近い平瓦が1点出土している。中層は褐灰色系シルト～粘土である。極めて均質であり、鉄分が付着している。滞水下で形成された堆積層である可能性が考えられる。上層は灰オリブ褐色系シルトである。局所的に炭化物が含まれ、しまりは極めて弱い。

掘方埋土からは肥前系陶器・磁器、備前系陶器、土師質土器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系陶器では碗が、肥前系磁器では薄手の資料が見られる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や小形化した播鉢が見られる。上記遺物群の下限は様相6～7であると考えられる。

SK115 土器④類が含まれる土坑である。SK126と重複する位置関係にあり、SK126より後出する。土器④類は破碎された状態で出土したが、一部掘方輪郭に沿って残存する箇所がみられることから、本来土

器④類がSK115に据え付けられていた可能性が考えられる。掘方内は大部分が土器④類と円礫で充填されたような状況を呈する。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器(土器④類)が出土している。土師質土器を除くと、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器がほぼ同程度の割合を占め、京・信楽系陶器は少数である。肥前系陶器では、高台の高い刷毛目皿や大形鉢が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり外面に「寿」の文字を記した碗や紅皿が出土している。上記遺物群の下限は様相6～7であると考えられる。

SK116 土器①類の据え付け土坑である。掘方埋土は黄褐色シルトブロックや直径2～5cm大の小礫を含む点で、ベース土である整地E層と類似していることから、E層上面から掘削され、掘削土で埋め戻した可能性が考えられる。土器①類内部の埋土は細かく分層可能であり、短期間で埋没したと考えるよりはむしろ、完全埋没まで一定期間を要したと考える方が妥当であろう。

掘方埋土からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が多量に出土している。いずれも同程度の出土割合であるが、特に肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器において残存状況の良好な資料が見られる。他に軒丸瓦や鉄製品も出土している。肥前系陶器では、厚手の碗や刷毛目碗が見られる。肥前系磁器では、高台断面三角形形状を呈し、見込中央にコンニャク印判による菊花文を施したやや古相を示す遺物も含まれるが、主体となるのは薄手の資料である。備前系陶器では卸目が比較的密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が出土している。軒丸瓦の瓦当は立体的な文様を有する。また、巴文の尾は短小であり「J」形を呈する。上記遺物群は比較的時期的まとまりのある遺物群であると考えられ、新相を呈するが、典型的な端反碗が出土していない点等から所属時期の下限は様相7であると考えられる。土器①類内部の埋土からは肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が多量に出土している。特に肥前系磁器が主体となる。上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられる。

SK117 土器②類の据え付け土坑である。掘方埋土は黒褐色系シルト～粘土である。土器②類内部の埋土は黒褐色系細砂～シルトを呈し、しまりは弱い。また、瓦片や礫を多量に含む。埋土には植物のひげ根が残存しており、埋没後一定期間植物が生育していた可

能性がある。

掘方埋土からは肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、鉄釘が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、口縁部がやや外反気味の資料を含む。土師質土器では、羽釜や焙烙が見られる。上記遺物群のうち、やや新相を示す遺物が含まれるものの、典型的な端反碗が出土していないこと等から、所属時期の下限は様相7であると考えられる。

SK118 土器①類の据え付け土坑である。SK148やSE101と重複する位置関係にあり、SK148より後出し、SE101より先行する。土器①類は破損が著しく、掘方埋土と土器①類内部の埋土を分離することが困難であった。埋土は黒褐色シルトを呈する。

埋土からは、肥前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器が出土している。時期比定可能な遺物はほぼ完形の京・信楽系陶器碗1点のみであり、他は小片である。出土遺物量も少量である。上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられる。

SK119 SK150と重複する位置関係にあり、SK150より後出する。一部で掘方輪郭に沿って土器胴部が残存する状況が見られたことから、土器据え付け土坑として分類したが、残存状況が不良であり、種類の特定は困難である。土器は破損が著しく、掘方埋土と土器内部の埋土を分離することが困難であった。埋土は黒褐色系粗砂混じりシルトである。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。いずれも同程度の出土割合である。肥前系陶器では甕、肥前系磁器では皿が出土している。また、備前系陶器では精良な胎土を用いた灯火具が出土している。土師質土器では、薄手で精良な胎土を用いた皿が出土している。上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられるが、整地K層をベースとする遺構であるとともに、様相8のSK150より後出することから、様相8以降に形成された遺構であると考えられる。

SK120 土器③類の据え付け土坑である。底部付近のみが遺構面上面付近に露出するような状況で検出しており、掘方はわずかに3cm程度残存するのみである。掘方は削平され残存しない、あるいはもともと明確な掘方を伴わずに据え付けられた土器であっ

た可能性も考えられる。

わずかに残存する掘方埋土から、肥前系陶器刷毛目碗、肥前系磁器碗、土師質土器皿、銅製品が極めて少量出土している。いずれも残存状況は不良である。上記遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考えられる。

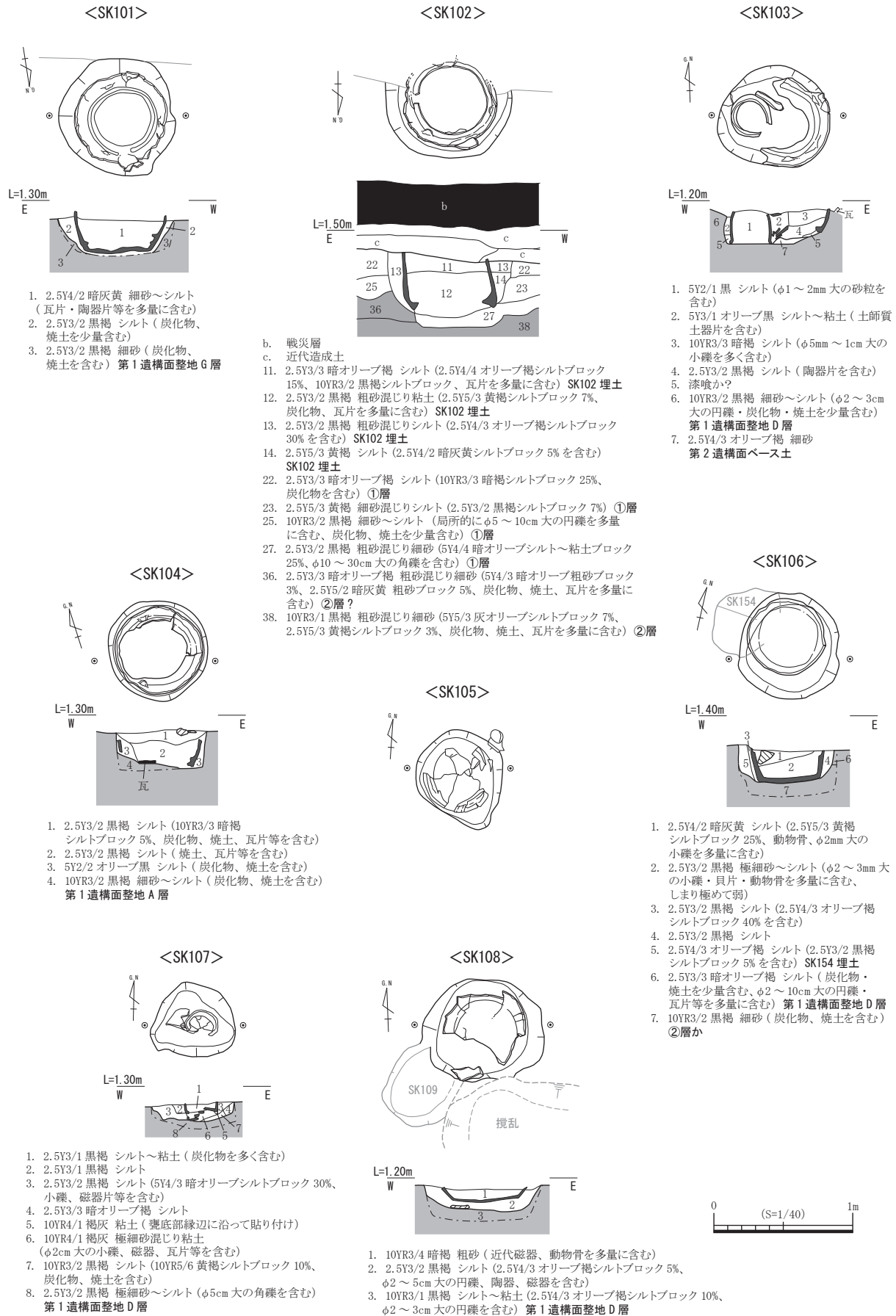
SK121 土器①類の据え付け遺構である土器②類内面には白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。掘方埋土は黒褐色系シルトである。土器②類内側には土器④類を含む甕体部片が破損して落ち込む状況を呈する。

掘方埋土からは、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器では薄手の資料が主体となる。土器②類内部の埋土からは土師質土器④類が出土しているが、前述のとおり土器④類の体部が内側へと崩れたような状況を呈することから、本来土器②類と同一個体であった可能性が考えられる。上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考えられる。

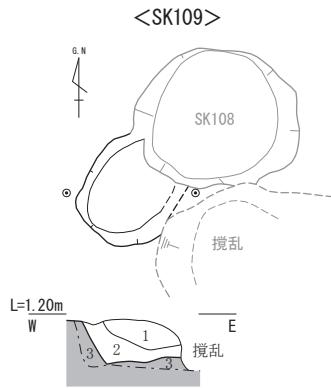
(まとめ)

以上、大形土器・陶器据え付け土坑の観察所見を記載した結果、以下の4点を指摘することが可能である。

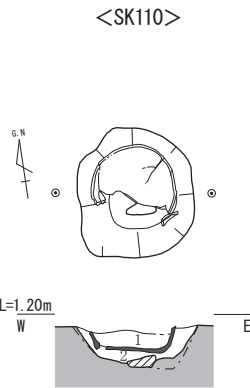
1点目は、大形土器・陶器据え付け土坑の形成時期についてである。第1遺構面を構成する整地土は様相7～8に形成されたものであることが判明していることから、当該整地土をベースとするSK101～121は少なくとも様相7以降に形成されたものであると言え、中でも整地D層・K層をベースとするSK103・105～110・119については、様相8以降に形成されたものであると判断できる。実際、SK101～121掘方出土遺物の所属時期の下限はいずれも様相6～7であり、上記の認識と合致する。さらに、掘方埋土とベース土との比較から検討を試みた結果、SK101・102・104・112・113・116については、それぞれの掘削面となるベース土(整地G層・A層・J層・E層)と類似した土で掘方を埋め戻していることから、様相7に形成されたものである可能性が高い。その他、SK111・114・117・118・121については、ベースとなる整地土と明確に異なる黒褐色の埋土で掘方が埋め戻されていることから、様相8以降に形成されたものである可能性が考えられる。SK115は掘方埋土と土器内部の埋土を区別困難であるが、出土遺物の年代観から様相7に形成されたものであるとしておく。また、SK120に



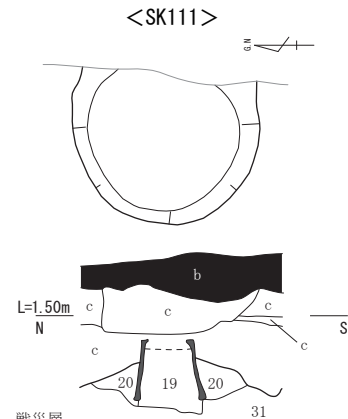
第19図 大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図(1)



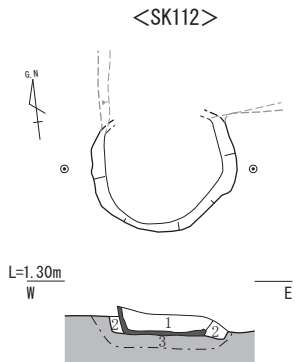
- 2.5Y3/2 黒褐 粘土 (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 30%、炭化物・焼土を少量含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 20%、大礫破片を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 30%、2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 10%、 $\phi 1 \sim 3$ cm 大の円礫を多量、炭化物・焼土を少量含む) 第1遺構面整地D層



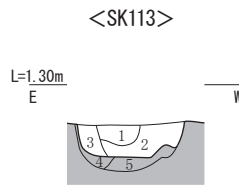
- 2.5Y3/1 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y6/4 にぶい黄シルトブロック 20%、炭化物を少量、動物骨を多量に含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y6/4 にぶい黄シルトブロック 7%を含む)
- 10YR3/1 黒褐 シルト～粘土 ($\phi 2 \sim 15$ cm 大の角礫多量、土師質土器を含む)



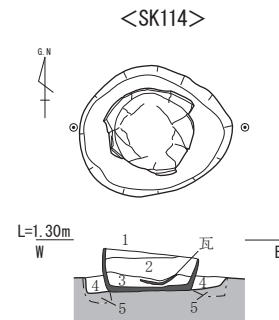
- 戦災層
- 近代造成土
- 2.5Y4/1 黄灰 シルト (2.5Y5/3 黄褐シルト、2.5Y2/1 黒シルト、2.5Y3/2 黒褐シルトのラミナ状、底部付近に5Y4/3 暗オリブシルトブロックを含む) SK111埋土
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y6/4 にぶい黄シルトブロック 3%、5Y4/4 暗オリブシルトブロック 10%、 $\phi 3 \sim 5$ cm 大の円礫を多量に含む) SK111埋土
- 5Y4/3 暗オリブ 粗砂混じりシルト (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 10%、5Y3/2 オリブ黒粘土ブロック 5%、2.5Y3/2 黒褐粗砂ブロック 5%、 $\phi 5 \sim 10$ cm 大の円礫を多量に含む) ①層



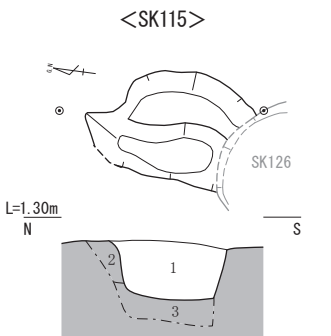
- 10YR3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 30%、炭化物・瓦片を多量に含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/4 暗オリブシルトブロック 1%、2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 5%、 $\phi 2 \sim 3$ cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 15%、10YR3/2 黒褐粘土ブロック 20%、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地J層



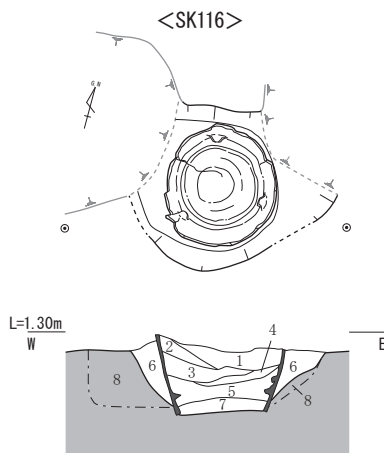
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (炭化物を多量に含む)
- 2.5Y3/3 暗オリブ褐 粗砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 3%を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂 (2.5Y3/2 黒褐細砂ブロック 30%、5Y5/2 灰オリブシルトブロック 5%、炭化物を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト (5Y5/2 灰オリブシルトブロック 3%、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地層
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (5Y4/3 暗オリブシルト、2.5Y5/4 黄褐シルトのラミナ) 第2遺構面整地層



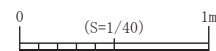
- 5Y4/2 灰オリブ シルト (2.5Y3/2 黒褐シルトブロック 25%を含む)
- 10YR6/1 褐灰 シルト～粘土 (鉄分沈着)
- 2.5Y4/4 オリブ褐 細砂 (2.5Y3/1 黒褐シルト～粘土ブロック 30%、動物骨片を多量に含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y6/4 オリブ黄細砂ブロック 7%、 $\phi 1 \sim 3$ cm 大の小礫を多量に含む)
- 10YR3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 15%、2.5Y5/6 黄褐シルトブロック 15%、炭化物、焼土、瓦片等を含む) 第1遺構面整地J層



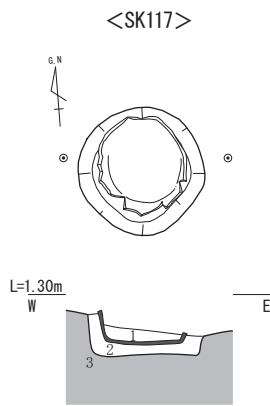
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 7%、 $\phi 5 \sim 10$ cm 大の円礫・礫片等を多量に含む)
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y5/4 黄褐粘土ブロック 15%、 $\phi 2 \sim 10$ cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む) 第1遺構面整地E層
- 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂～細砂 (5Y4/4 暗オリブ細砂～シルトブロック 30%、 $\phi 5 \sim 10$ cm 大の円礫を多量に含む) 第2遺構面ベース土



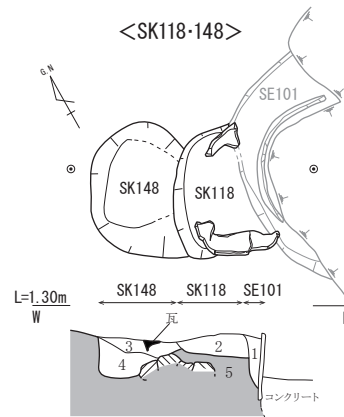
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 15%、炭化物、焼土、土師質土器、瓦片を含む)
- 10YR3/2 黒褐 粘土
- 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト (2.5Y3/2 黒褐シルト～粘土ブロック 40%を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト～粘土
- 2.5Y2/1 黒 シルト
- 10YR3/2 黒褐 シルト (10YR4/3 にぶい黄褐シルトブロック 10%、 $\phi 2 \sim 5$ cm 大の円礫を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (10YR6/6 明黄褐シルトブロック 7%、炭化物を含む)
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 15%、2.5Y3/2 黒褐シルトブロック 10%、 $\phi 2 \sim 5$ cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地E層



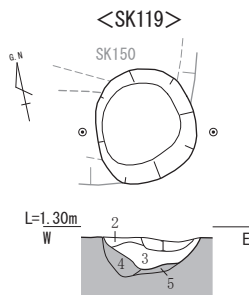
第20図 大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図(2)



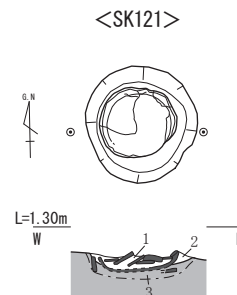
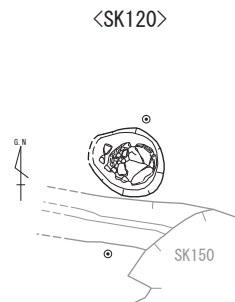
1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト
 2. 10YR3/2 黒褐 シルト～粘土 (5Y4/2 灰オリブシルトブロック 10%、炭化物、貝片を含む)
 3. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリブ細砂ブロック 25%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫・土師質土器片等を多量に含む)
- 第1遺構面整地C層



1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (10YR5/4 にぶい黄橙細砂ブロック 10%、 $\phi 5\text{cm}$ 大の円礫、炭化物、焼土を含む)
 2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/2 灰オリブシルトブロック 30%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫少量、炭化物、焼土を含む)
 3. 2.5Y3/1 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 10%、炭化物、焼土を含む)
 4. 10YR2/2 黒褐 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 20%、炭化物、焼土を多量に含む)
 5. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 10%、 $\phi 10 \sim 20\text{cm}$ 大の角礫を多量、炭化物・焼土を少量含む)
- 第1遺構面整地E層

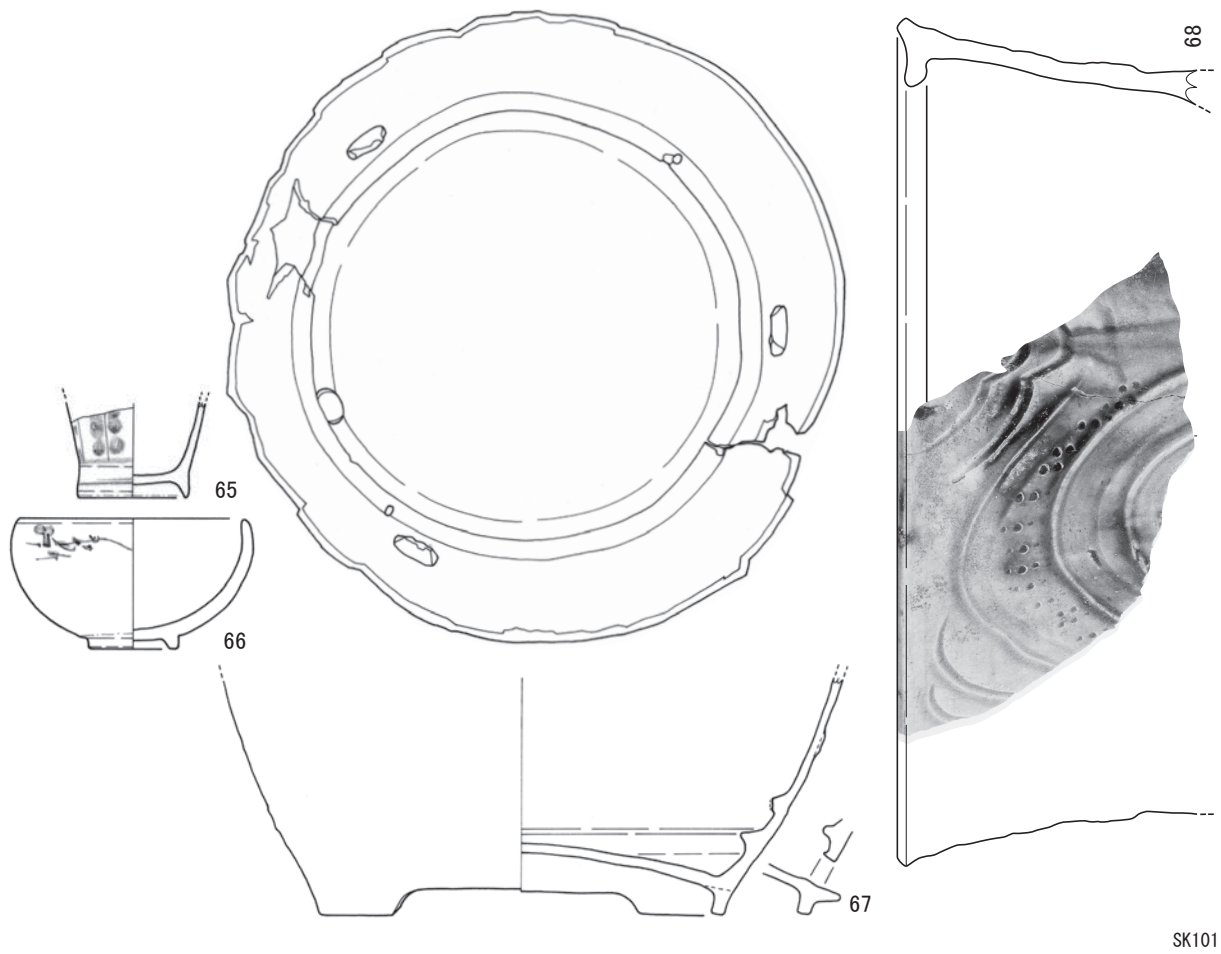


1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 10%、炭化物、焼土を含む)
2. 10YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 2% を含む)
3. 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 10%、2.5Y5/3 黄褐シルト～粘土ブロック 1% を含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 3%、炭化物を含む) SK150 埋土
5. 2.5Y4/3 オリブ褐 シルト～粘土 (2.Y3/2 黒褐シルトブロック 25%、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地K層

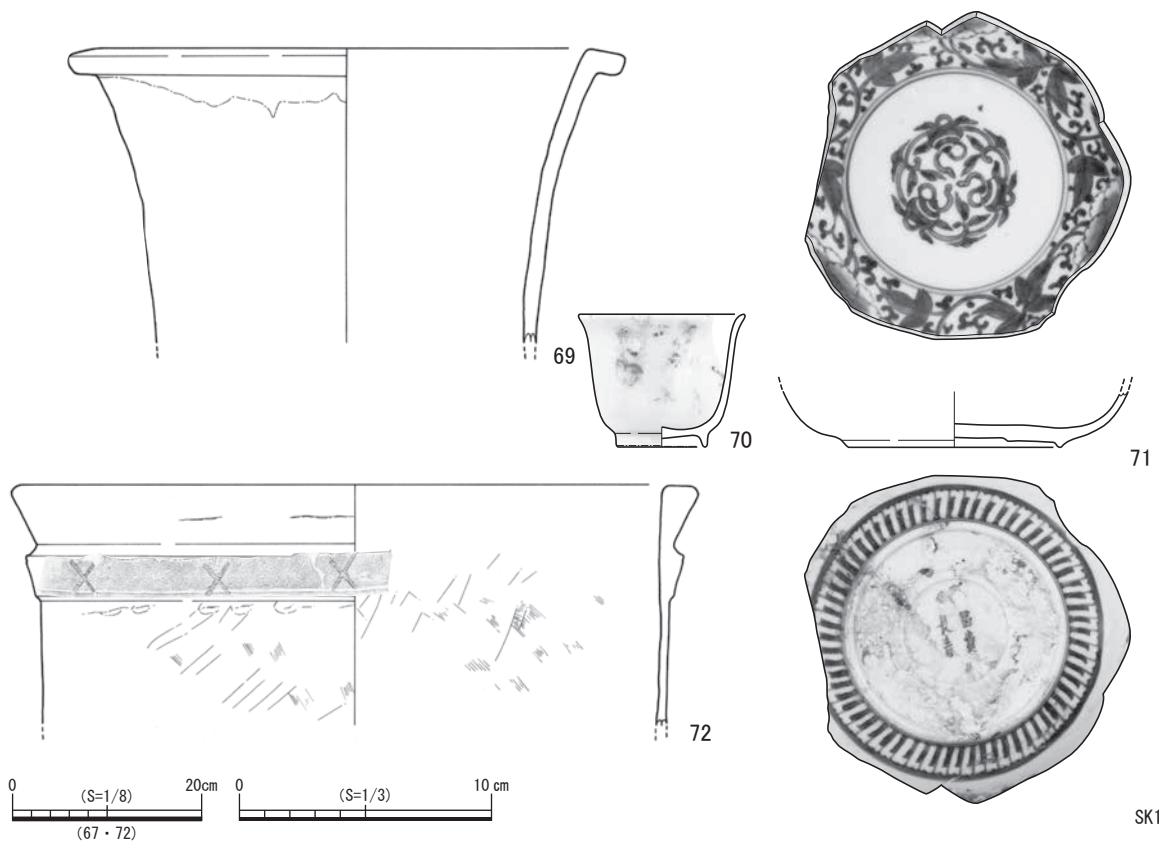


1. 10YR3/2 黒褐 シルト
2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 7%、炭化物を含む)
3. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (10YR6/4 にぶい黄橙シルトブロック 5%、炭化物、 $\phi 5\text{cm}$ 大の円礫を多く含む) 第1遺構面整地E層

第21図 大形土器・陶器据え付け土坑平面図・断面図(3)

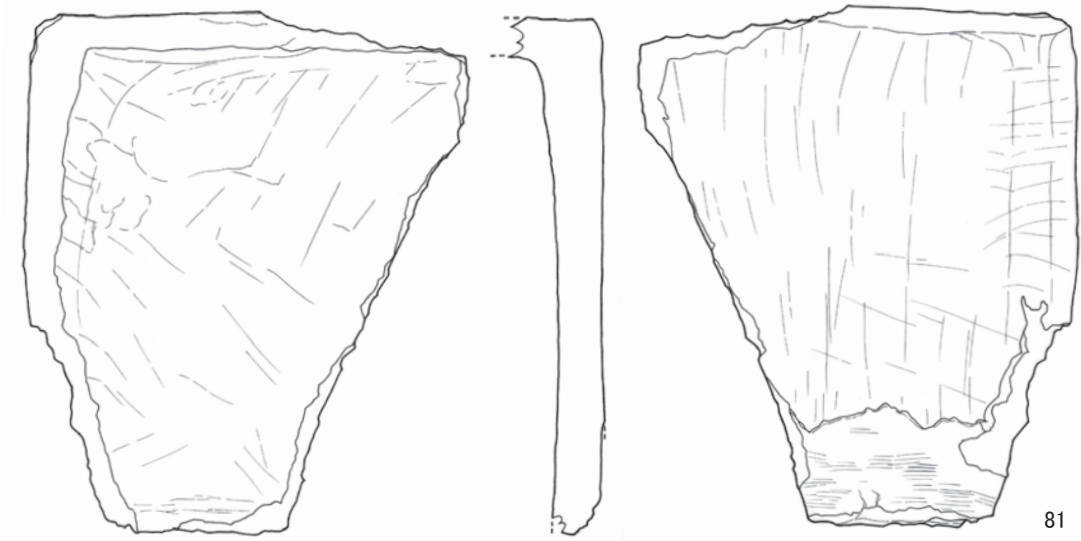
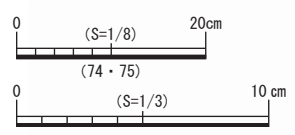
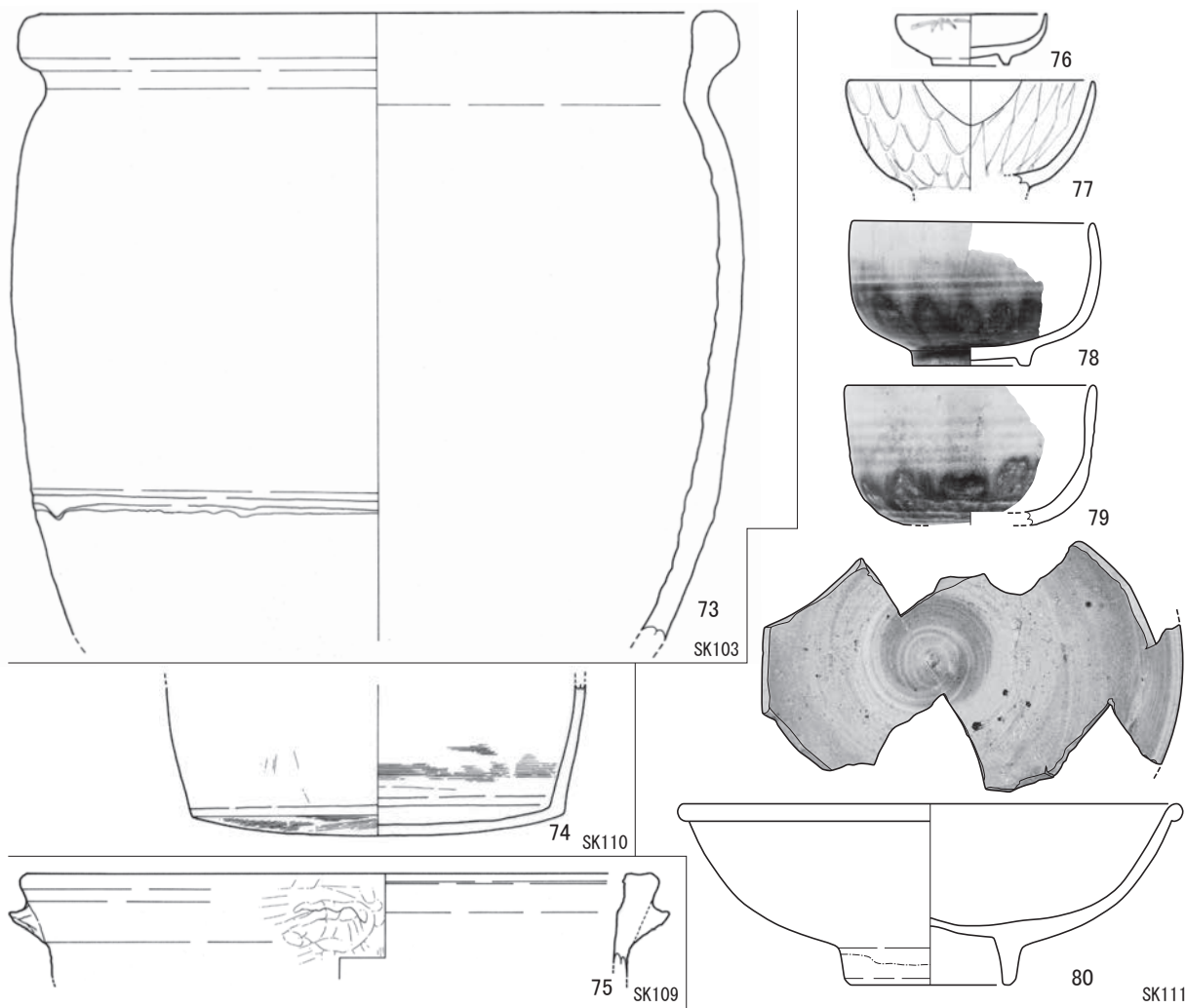


SK101



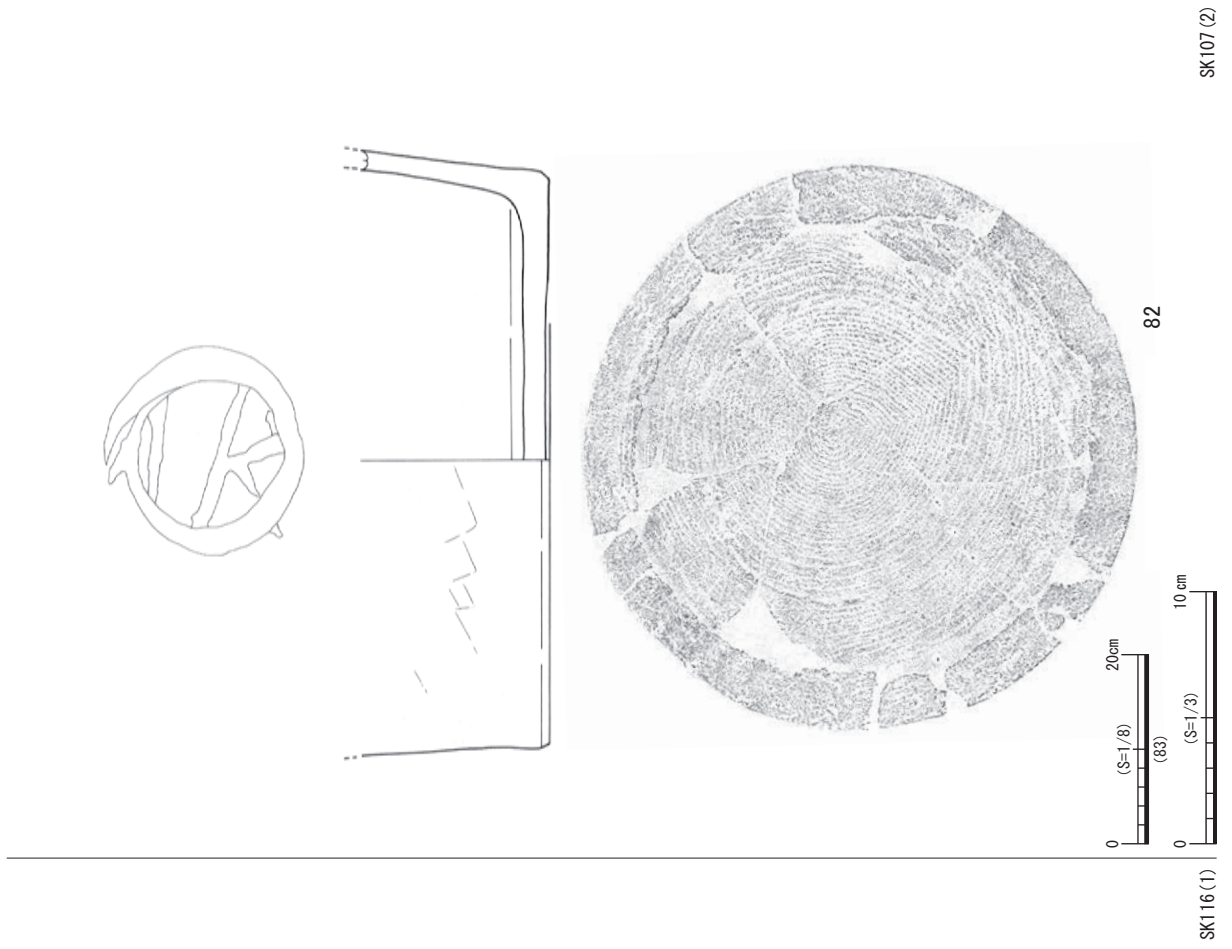
SK102

第 22 图 SK101・102 出土遺物



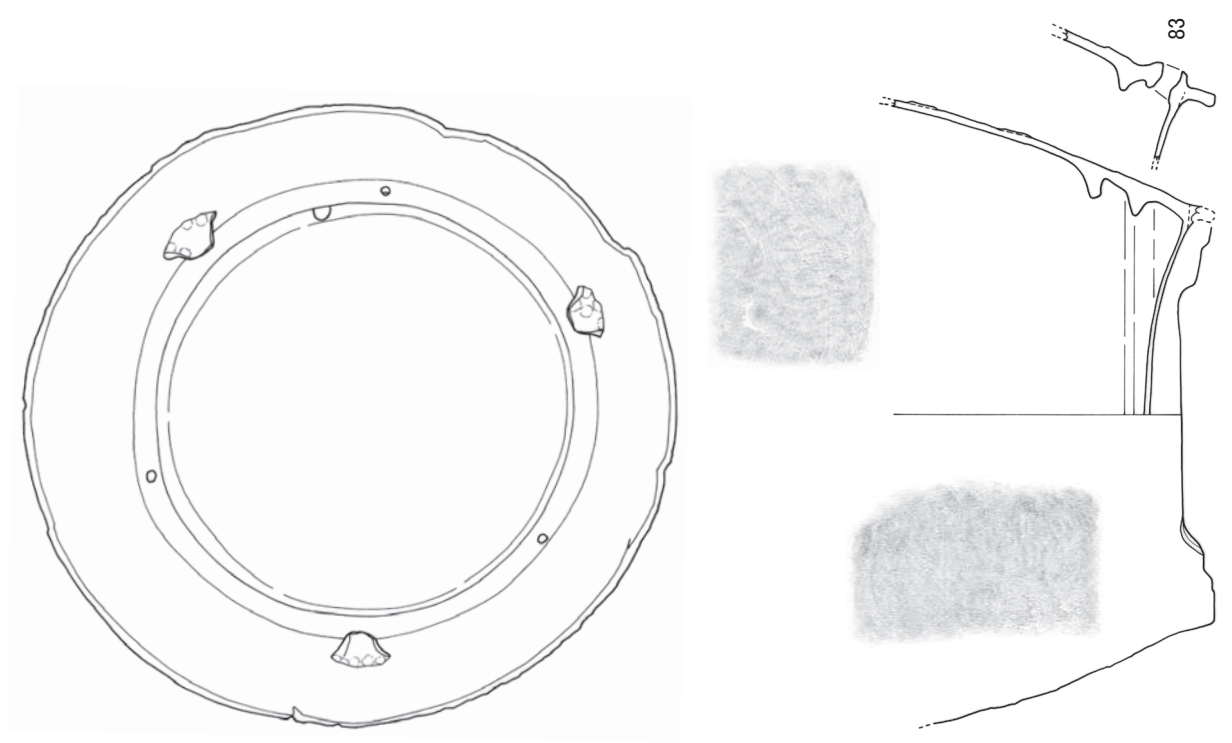
SK107(1)

第 23 図 SK103・109・110・111・107 (1) 出土遺物

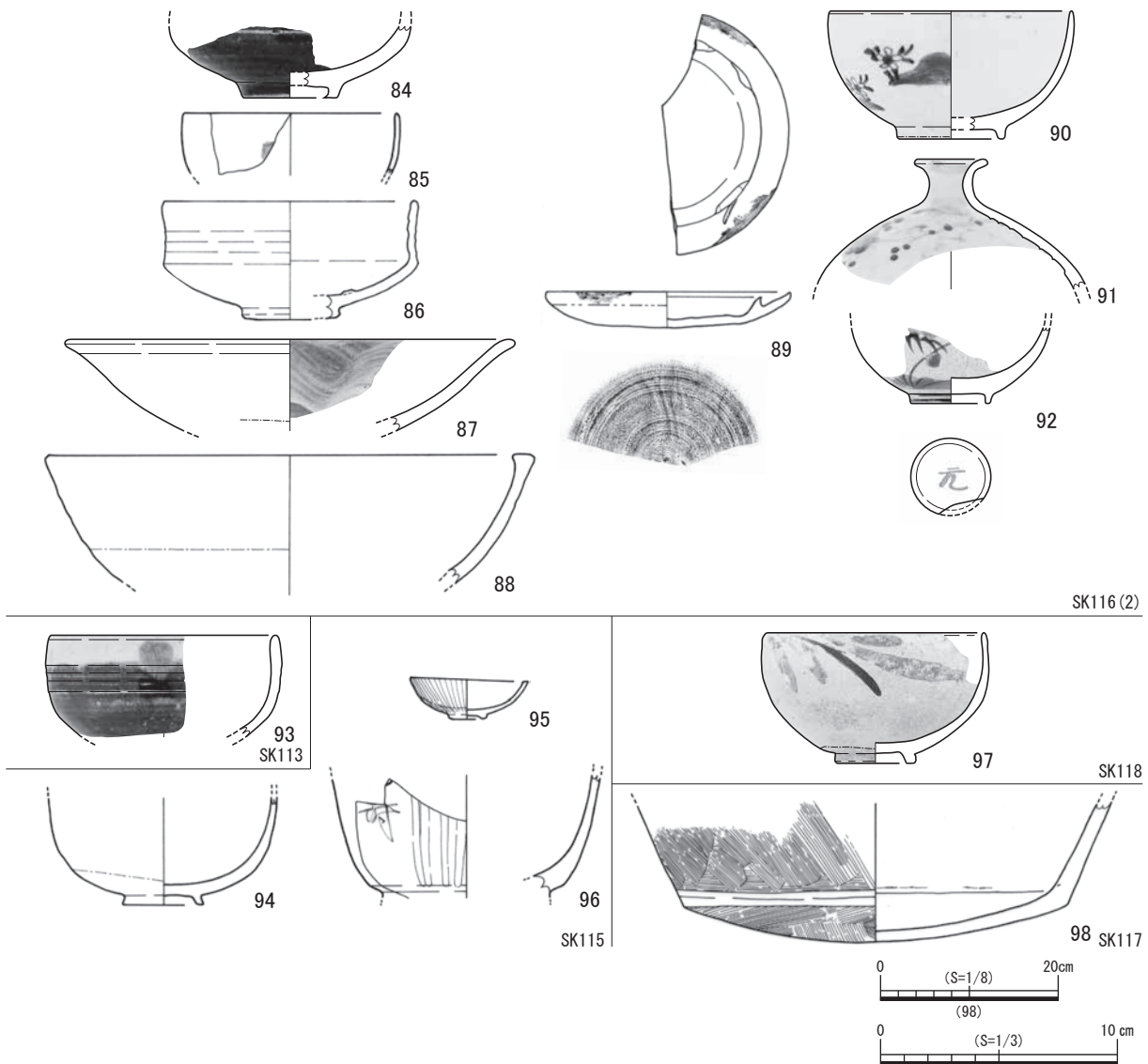


SK107(2)

SK116(1)



第 24 図 SK107(2)・116(1) 出土遺物



第 25 図 SK116(2)・113・115・117・118 出土遺物

については、掘方がほとんど残存せず、様相 8 の整地土・遺構を切り込む状況も見られないことから判断を保留する。

2 点目は、土器・陶器の据え付け方法についてである。SK107 では土器③類底部周縁部に沿って粘土が貼り付けられ、器体を安定させた状況を確認した。また、SK103 の土器①類では底部付近に漆喰状の固形物が付着する状況を確認した。よって、土器・陶器を安定させるための措置を施す場合があったことを指摘することができる。加えて、SK107・110 では土器と掘方壁面又は掘方埋土との間に一定の空間が確保されていた可能性を指摘した。土坑に据え付けた土器を完全に埋め戻さずに使用した場合があることを指摘できる。

また、SK105・120 については土器底部付近のみが残存し、明確な掘方を確認できない事例として報告

した。明確な掘方を有する土器・陶器に比して、破損率が著しく高いことから、極めて浅い掘方を掘削し、土器上部が大幅に露出した状態で使用した可能性も考えられる。

3 点目は、土器・陶器据え付け土坑の用途である。SK106・108・112・114・121 については土器内面に白化した固体が面的に付着していることから、便槽として利用されていた可能性が考えられる。いずれも土器②類の据え付け土坑である。その他の土器・陶器据え付け土坑については、検出状況及び出土遺物等からその用途を推測することは困難である。SK106・108・112・114・121 以外の土坑に据え付けられた土器②類からは白化した固体を確認していない。また、土器①類は前述のとおり風呂釜である可能性があるが、土坑に排水施設等が見られない点、土坑内に焼土・炭層が見られない点等から、本来の用途ではなく、

風呂釜を転用して利用したと考えられる。しかしながら、具体的な用途を特定することはできない。ただし、後述するようにこれらの土器内には水が張られていた可能性を指摘できる。

4点目は、土器・陶器据え付け土坑の埋没過程及び埋没後の状況についてである。SK101～103・106・108・112・114・117では土器・陶器の少なくとも底部付近については陶磁器類や瓦片、礫、動物骨等を多量に包含した極めてしまりの弱い土砂が比較的厚く堆積している。また、SK114では同様の土砂が底部付近に薄く堆積し、上部に鉄分が沈着した均質なシルト層が厚く覆う状況を呈する。SK111においてもラミナを呈する厚い堆積層が確認できる。よって、可能性の1つとして、これらの堆積は水で満たされた環境下で形成されたものであると考えることができる。比較的重い礫や遺物、動物骨等は最下層へ堆積し、上位にシルト層等が堆積する構造を想定することができる。ただし、人為的な埋戻しの可能性も否定できない。

続いて、埋没後の状況について、SK117では植物の根が残存する状況を確認したことから、植物が生育していた可能性が考えられる。よって、埋没後、一定期間放置されていた可能性が考えられる。

c. 木桶据え付け土坑

(木桶据え付け土坑の観察所見)

SK122～126が該当する。いずれも調査区中央東寄りに集中し、木桶が3基ずつ南北で平行するように並べられている。各木桶の中央付近を結ぶ主軸線の方位は、座標北から約77°西へ傾いている。いずれも掘方となる土坑内に木桶を据え付ける状況を呈する。以下、各遺構の観察所見を記載する。

SK122(第26・28・29図) SP109・110、SK123と重複する位置関係にあり最も先行する。

土坑掘方は長軸約3.1m、最大幅1.3m、現状深度0.6mの長楕円形を呈し、内部に3基の木桶(SK122-1～3)が据え付けられている。木桶は底部の残存状況が比較的良好であるが、側面は腐食が著しい。掘方底部では3基の木桶に対応するように3箇所の不整形円形又は長楕円形を呈する凹みが確認できる。これらの状況から、掘方掘削当初から木桶設置位置を意識して掘削作業がなされたと考えられる。土坑掘方埋土は、整地J層と類似するとともに、整地J層下位に存在する砂礫層や第2遺構面ベース土を巻き込む状況を呈する。よって、J層上面から掘削された土坑に

木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻したと考えられる。また、木桶下部にも埋戻し土が見られ、木桶を安定させるために掘方底部を予めある程度整地した可能性が考えられる。特にSK122-2・3で顕著に見られる。SK122-2に対応する凹みは長楕円形を呈し、円形を呈する木桶を安定して設置できないことから、当該凹みを完全に埋めるように整地されている。また、SK122-3に対応する凹みは西端と東端で約10cmの比高差が生じており、木桶を水平に据えるため、当該比高差をならすように凹み東端部を中心に埋め戻しがなされ整地されている。

木桶の規模はSK122-1・3が直径約1.0m、SK122-2が直径約0.9mである。木桶の本来の深さは上部が削平されているため不明であるが、最も側面の残りが良好なSK122-3の所見から、少なくとも50cmはあったと考えられる。SK122-1では比較的底部の木材の残存状況が良好であり、その観察所見を参考にすると、いずれも幅約20cmに加工された板材を組み合わせて木桶が作られていると考えられる。木桶底部の標高はSK122-1が標高約0.65m、SK122-2が標高約0.75m、SK122-3が標高約0.6mである。それぞれ若干の差があるが、特にSK122-2のみ極端に底部の標高が高い状況が看取できる。

木桶内の埋土について、SK122-1は最下層に遺物を含まない黄灰系細砂が薄く水平に堆積し、上部に礫や遺物、木桶の部材と考えられる木片を多量に含む埋土が2単位水平堆積している。最下層の細砂層は水の流入等により形成された堆積層であると考えられるが、上位2層は人為的な埋戻し土であると考えられる。なお、最下層の細砂層直上で銅銭が2点出土している。

SK122-2では、SK122-1で見られたような底部直上における細砂層の水平堆積は見られない。底部直上から検出面にかけて、遺物や礫等を多量に含む土砂が複数単位堆積し、最終埋没を遂げる。水平堆積ではなく、様々な方向から土砂が流入したような堆積状況を示す。以上のような状況から、これらはすべて人為的な埋め戻し土であると考えられる。

SK122-3についても、底部直上における細砂層の水平堆積は見られない。底部直上から検出面にかけて、礫や遺物を多量に含む土砂がほぼ水平に堆積している。特に最下層からは完形に復元可能な資料を含む土師質焙烙や羽釜が多量に出土しており、廃棄土坑状を呈する。

次に出土遺物について記載する。掘方埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶

器、備前系陶器、土師質土器、銅製品が出土している。特に、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となる。いずれも残存状況は不良であり、出土量も少量である。肥前系陶器では、溝縁皿等古相の遺物のみ出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。土師質土器では、火鉢や焙烙が出土している。上記遺物群には、古相の遺物も含まれるが、掘方掘削時の二次的混入であると考え。よって、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考え。

SK122-1からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦、銅銭、鉄製品が出土している。いずれも残存状況の良いものを含み、多量に出土している。肥前系陶器では、刷毛目碗や大形の鉢等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となるが、蛇の目凹形高台や端反碗は見られない。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。軒丸瓦は瓦当の文様が比較的立体的であるが、巴文の尾はやや長く、珠文は9個である。加えて、キラコの使用は見られない。これらの特徴から、上記遺物群は様相6～7に属するものであると考え。

SK122-2では、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅製品（針金か）、鉄釘が出土している。いずれも残存状況の良いものを含み、多量に出土している。特に、肥前系磁器、備前系陶器が主体となる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、見込中央に五花文を描く広東碗が見られる。瀬戸美濃系陶器では、仏飯具や鬢水入れが見られる等、器種の多様化が指摘できる。備前系陶器では、甕や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの特徴から、上記遺物群は様相7に属する遺物群であると考え。

SK122-3からは、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、人形土製品が出土している。当該遺構出土遺物の大部分を占めるものは破砕された土師質焙烙及び羽釜であり、完形に復元可能な資料も多い。羽釜は体部内外面ともに指押さえにより整形がなされ、その後内面については丁寧にハケ又はナデ調整が施される。鏝部より上部は粘土接合により形成しているが、当該粘土接合痕が特に外面において顕著に残存する。接合された粘土をなじませるために指オサエが施されたと考えられるが、指オサエにより歪になった上端部付近を上方から指で挟みこむように撫で、整形した痕跡が顕著に残存する。焙烙も羽釜と同様に指オサエにより体部の成形が行

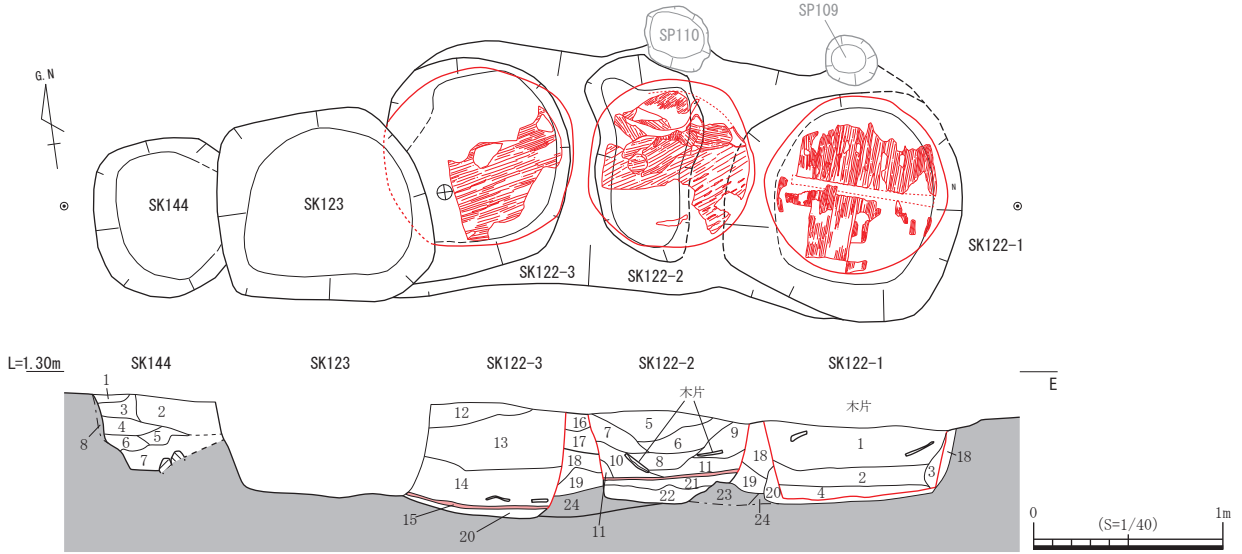
われる。指オサエの痕跡は一見規則性が無いように見えるが、横方向の帯状に巡る部分が見られることから、回転台等に載せ、少しずつ回転させながら（ずらしながら）指オサエを行った可能性が高い。指オサエによる体部の成形後、内面のみナデ、ハケ調整により平滑化されている。ハケ調整は細かなハケ目により水平方向に調整が加えられ、後にやや粗いハケ目で斜め方向に（ランダムに）調整が加えられる。陶磁器類では、肥前系磁器や瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が数点ずつ出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、碗、蓋、瓶等器種が多様化している。瀬戸・美濃系陶器は肥前系磁器に次ぐ割合を占め、残存状況の良い資料が含まれる。備前系陶器では、小形化した播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が出土している。これらの特徴から、上記遺物群は様相7に属する遺物群であると考え。

SK123（第27・29図） SK122・144と重複する位置関係にあり、最も後出する。

土坑掘方は、1辺1.0～1.1mの隅丸形状を呈する。掘削深度は最大0.5mである。掘方埋土は、ベースとなる整地E・I層と類似している。よって、E・I層上面から掘削された土坑に木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻したと考えられる。木桶の残存状況は極めて不良であり、検出面付近において木桶側面の木材を部分的に検出したにとどまる。底板は検出していない。第27図のうち、木桶内埋土に相当すると考えられる単位は1～3層である。特に、2層を中心に多量の礫や瓦片、炭化物、焼土が出土しており、想定される木桶底部から検出面まで人為的な埋戻し土で充填されていると考えられる。

出土遺物の大多数は木桶内埋土に相当すると考えられる1～3層から出土している。出土遺物量は多く、残存状況の良いものを含む。SK123からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。特に肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器がそれに次ぐ。肥前系陶器では、刷毛目碗や刷毛目皿が見られる。肥前系磁器では薄手の資料が主体となり、見込中央に五花文を施す皿や、同じく見込中央に抽象文を施す碗等が見られる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。土師質土器では焼塩壺が見られる。これらの特徴から、上記遺物群は様相7に属する遺物群であると考え。

<SK122-144>



— : 平・断面図において木桶の位置を表示している

【SK144】

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト～粘土 (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 3%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、焼土、瓦片を含む)
3. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 5% を含む)
4. 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y3/3 暗オリーブ褐粘土ブロック 2%、2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 3%、炭化物、焼土を含む)
5. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 5%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫少量、炭化物・焼土を多量に含む)
6. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗砂混じりシルト～粘土 (2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 3%、炭化物・焼土を多量に含む)
7. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘土 (5Y4/4 暗オリーブシルト～粘土ブロック 30%、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫少量、焼土を含む)
8. 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト (2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルトブロック 25%、2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 10%、炭化物・焼土を多量に含む) **第1遺構面整地I層**

【SK122】

(SK122-1 木桶内)

1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (2.5Y5/4 黄褐シルトブロック 5%、 $\phi 2 \sim 15\text{cm}$ 大の円礫多量、炭化物、木片、木材片を含む)
2. 10YR3/1 黒褐 細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 1%、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫、炭化物多量、陶器、土師質土器片を含む、底部より銅銭出土)
3. 2.5Y3/2 黒褐 シルト ($\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円・角礫、炭化物を少量含む)
4. 2.5Y4/1 黄灰 細砂 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 20%、炭化物を少量含む)
5. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (10YR4/3 に近い黄褐シルトブロック 5%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円・角礫を含む)

(SK122-2 木桶内)

6. 10YR3/3 暗褐 シルト (10YR3/2 黒褐シルトブロック 25%、炭化物少量、土師質土器片を多量に含む)
7. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂～細砂 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 25%、磁器片を含む)
8. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂～細砂 (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 10%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、木片木材片を含む)
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 1%、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫、木片、木材片を含む)
10. 2.5Y3/2 黒褐 細砂
11. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルトブロック 10%、 $\phi 15 \sim 20\text{cm}$ 大の角礫を少量含む)

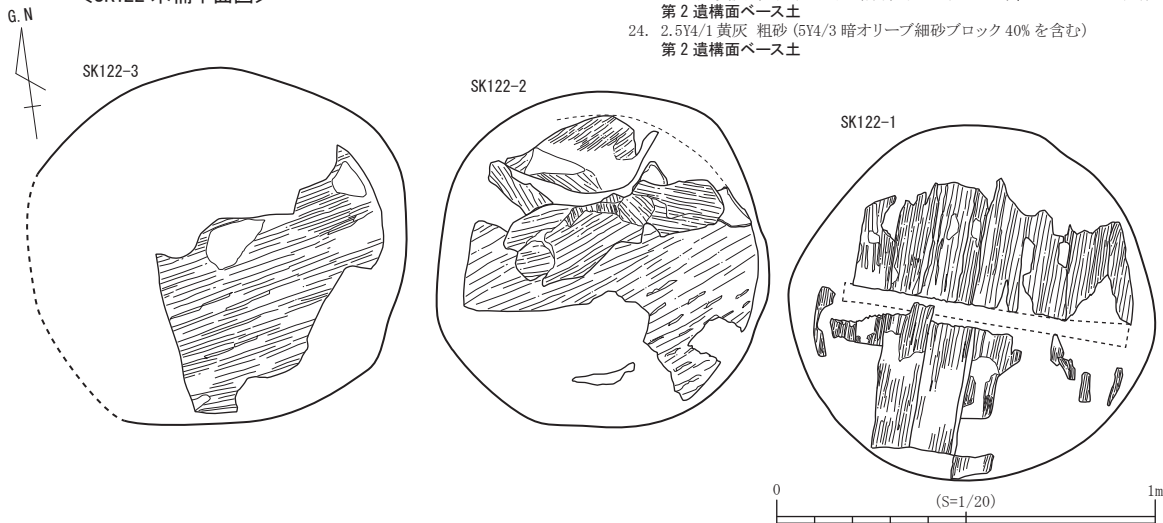
(SK122-3 木桶内)

12. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルト (炭化物・瓦片を少量含む)
13. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐粘土ブロック 3%、5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 3%、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫少量、炭化物、焼土を含む)
14. 2.5Y3/2 黒褐 細砂混じり粘土 ($\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、土師質土器を多量に含む)
15. 5Y5/1 灰 細砂

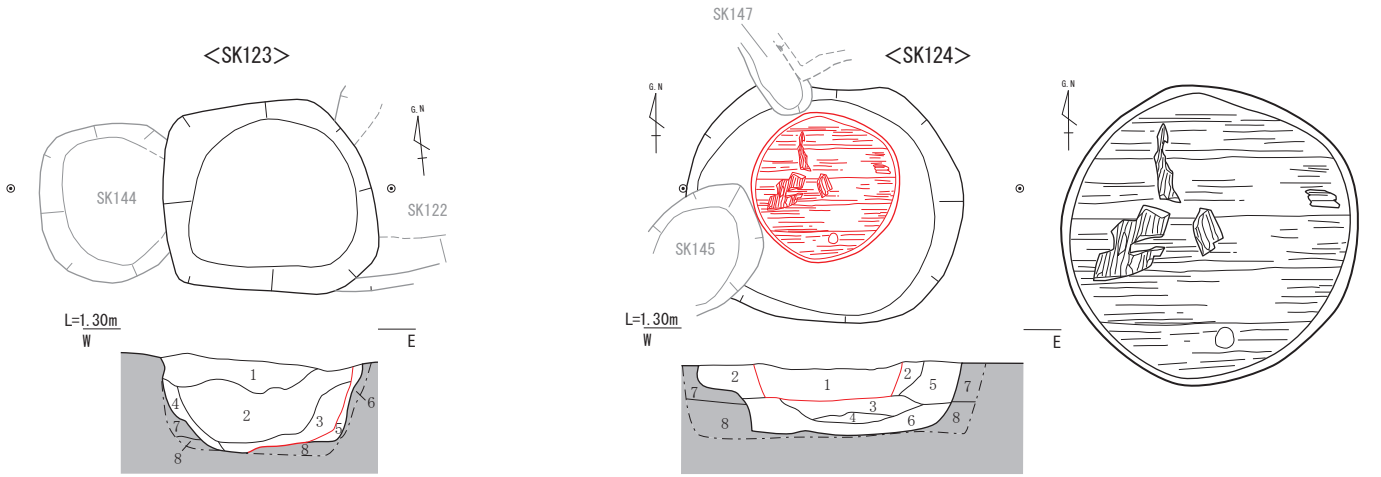
(SK122 掘方等)

16. 5Y5/3 灰オリーブ シルト ($\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫を少量含む)
17. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (5Y5/3 灰オリーブ細砂ブロック 30%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、焼土を含む)
18. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂～シルト (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 3%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫を含む)
19. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 25% を含む)
20. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (5Y4/4 暗オリーブ細砂ブロック 3%、5Y5/2 灰オリーブシルトブロック 3%、炭化物・ $\phi 1 \sim 2\text{cm}$ 大の木片を多量に含む)
21. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～シルト (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 20% を含む)
22. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (10YR3/4 暗褐細砂ブロック 10%、 $\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫を含む)
23. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂 (10YR3/4 暗褐粗砂ブロック 30%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫を含む) **第2遺構面ベース土**
24. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂 (5Y4/3 暗オリーブ細砂ブロック 40% を含む) **第2遺構面ベース土**

<SK122 木桶平面図>



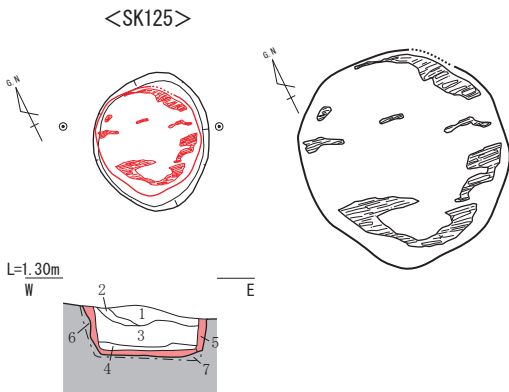
第26図 木桶据え付け土坑平面図・断面図(1)



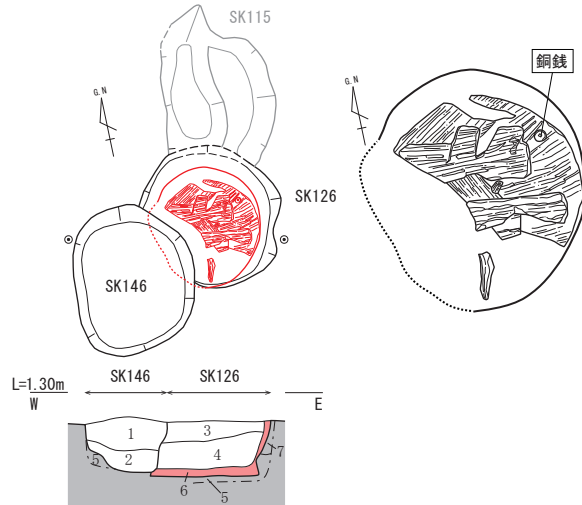
- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粗砂混じりシルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 5%、5Y5/3 灰オリーブ細砂ブロック 3%、炭化物、焼土等を含む)
- 10YR2/2 黒褐 シルト (5Y5/3 灰オリーブシルト～粘土ブロック 7%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫・炭化物・焼土・瓦片等を多量に含む) **木桶内埋土**
- 2.5Y5/4 黄褐 シルト (2.5Y3/2 黒褐細砂～シルトブロック 20% を含む) **木桶内埋土**
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト (2.5Y5/4 黄褐シルトブロック 5%、炭化物、焼土を含む) **掘方埋土**
- 10YR3/2 黒褐 細砂 **掘方埋土**
- 10YR3/3 暗褐 シルト **SK122 埋土**
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (10YR3/3 暗褐シルトブロック 10% を含む) **SK144 埋土**
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (5Y4/4 暗オリーブ 細砂～シルトブロック 30% を含む) **第2 遺構面ベース土**

- 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 10%、2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 7%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫、炭化物等を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 5%、炭化物、焼土、陶器片等を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～シルト (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 10%、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y3/3 暗オリーブ褐細砂ブロック 15% を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じりシルト (2.5Y4/3 オリーブ褐粘土ブロック 3%、5Y4/4 暗オリーブ粘土ブロック 3%、土師質土器片等を含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒 細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 3%、5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 15%、5Y5/2 灰オリーブシルトブロック 10%、炭化物を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 5%、炭化物、焼土を含む) **第1 遺構面整地 J 層**
- 5Y5/2 灰オリーブ 粗砂～細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルト、2.5Y3/1 黒褐細砂のラミナ) **第2 遺構面ベース土**

<SK126-146>

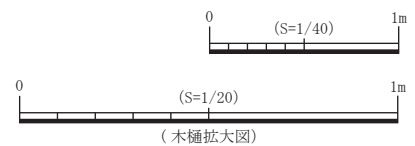


- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 15%、炭化物、瓦片、磁器片等を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 25% を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐粗砂混じりシルト (5Y5/4 オリーブ粘土ブロック 2%、炭化物、土師質土器片等を含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ シルト (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 40% を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (5Y4/4 暗オリーブ細砂ブロック 7%、2.5Y5/2 暗灰黄細砂ブロック 10%、 $\phi 3 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫、炭化物を含む) **木桶痛**
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y5/4 黄褐粘土ブロック 15%、 $\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、炭化物、焼土を含む) **第1 遺構面整地 E 層**
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (5Y4/4 暗オリーブ細砂～シルトブロック 30%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫を多量に含む) **第2 遺構面ベース土**

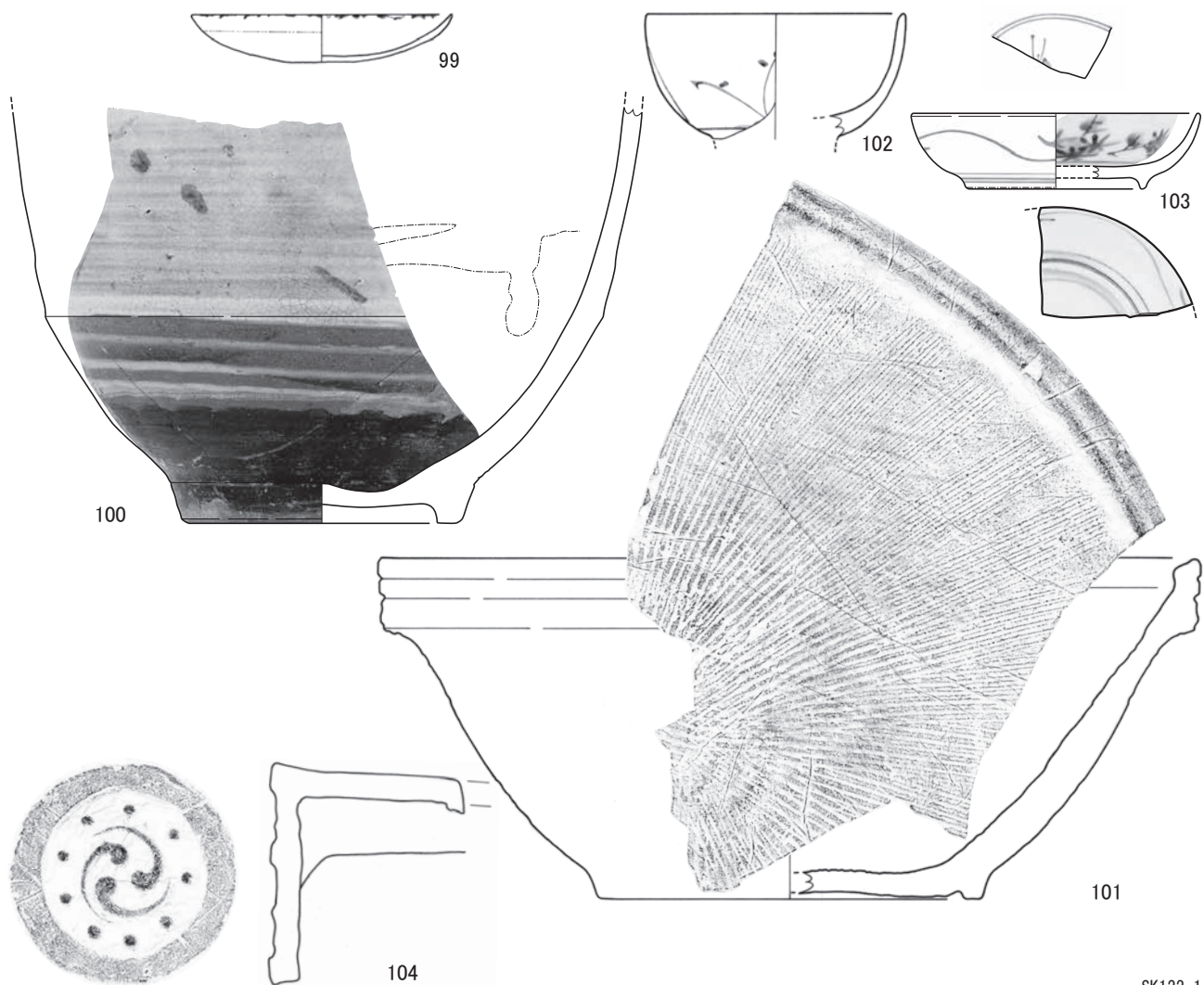


- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 3%、5Y5/4 オリーブシルトブロック 2%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫を含む)
- 10YR3/2 黒褐 シルト (10YR3/3 暗褐シルトブロック 7%、2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 7%、5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 15%、焼土を含む)
- 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 3%、炭化物を多量に含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (炭化物・瓦片・土師質土器片を少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (5Y4/4 暗オリーブ細砂～シルトブロック 30%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリーブ粗砂～シルトブロック 10% を含む) **木桶木材土壌化層**
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (2.5Y5/4 黄褐粘土ブロック 15%、 $\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、炭化物・焼土等を多量に含む) **第1 遺構面整地 E 層**

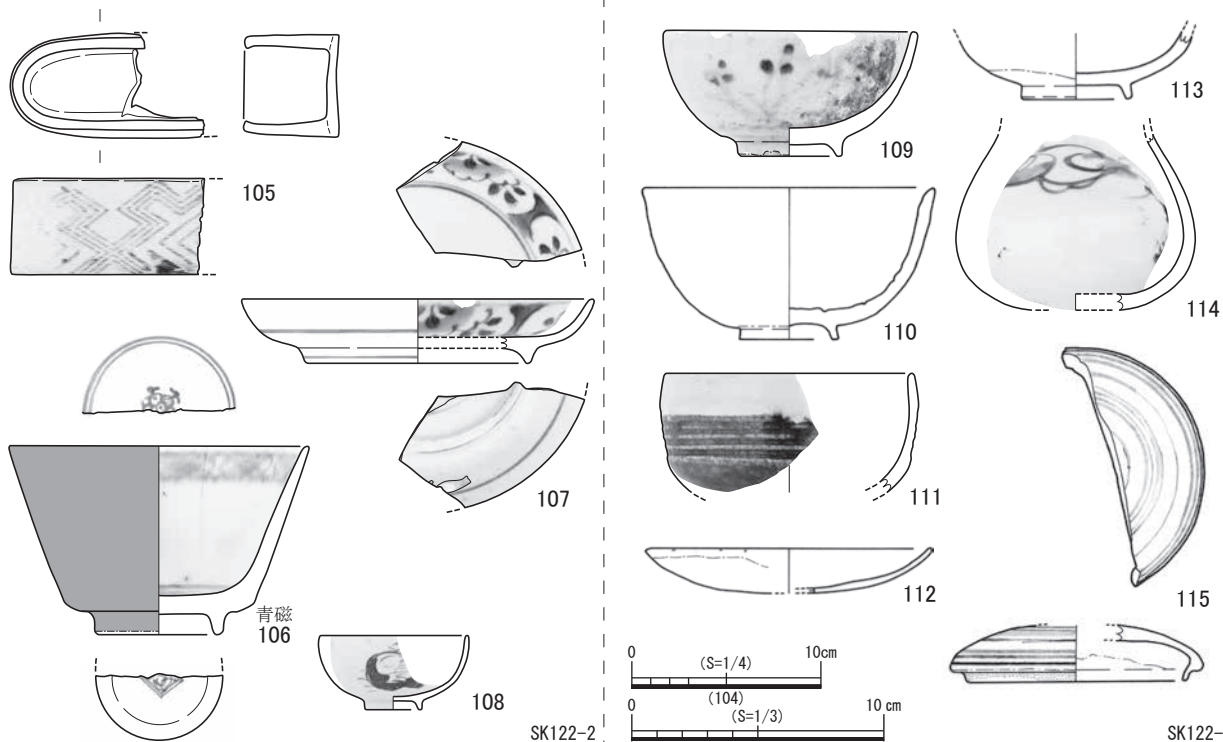
— : 平・断面図において木桶の位置を表示している



第 27 図 木桶据え付け土坑平面図・断面図 (2)



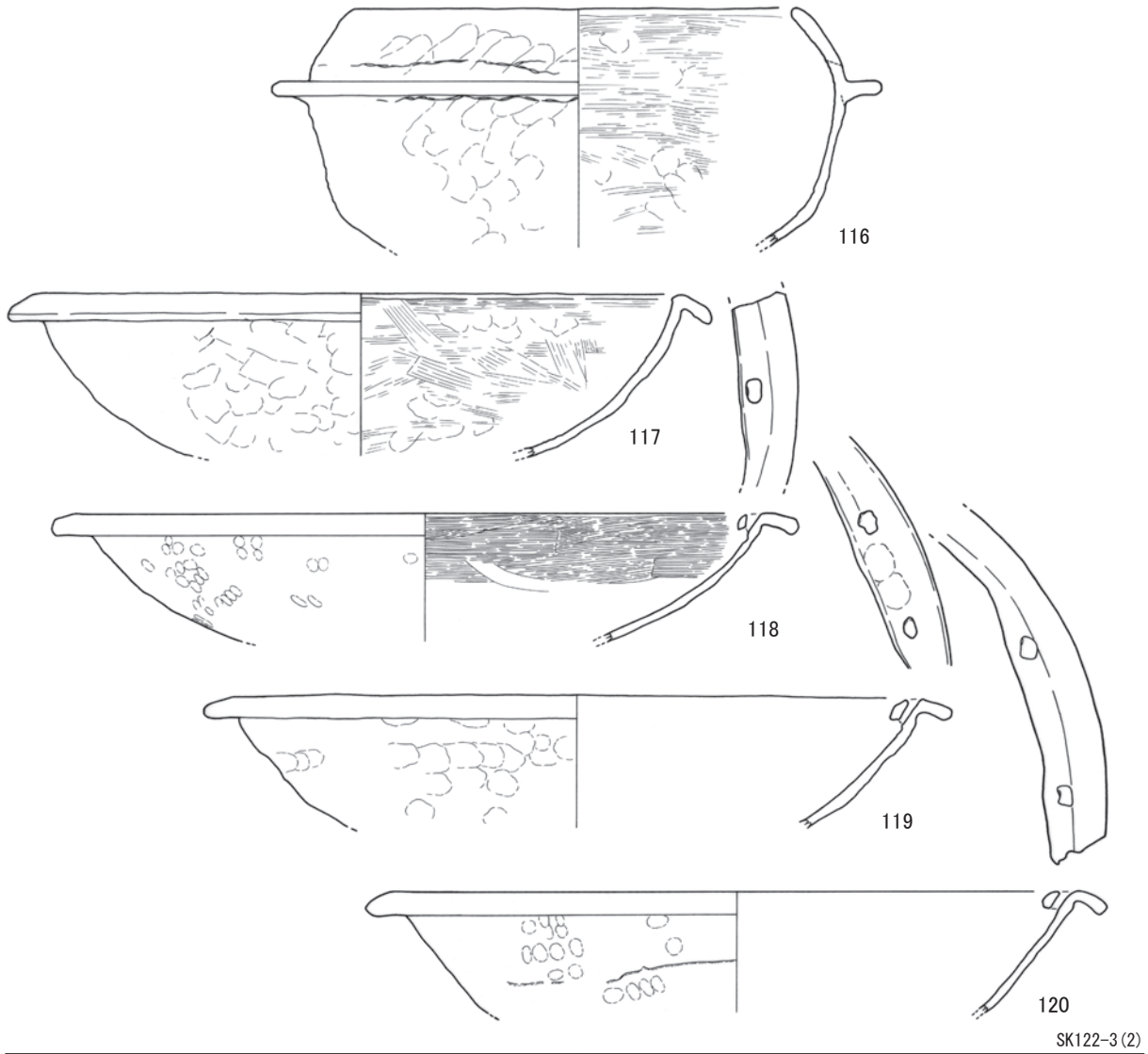
SK122-1



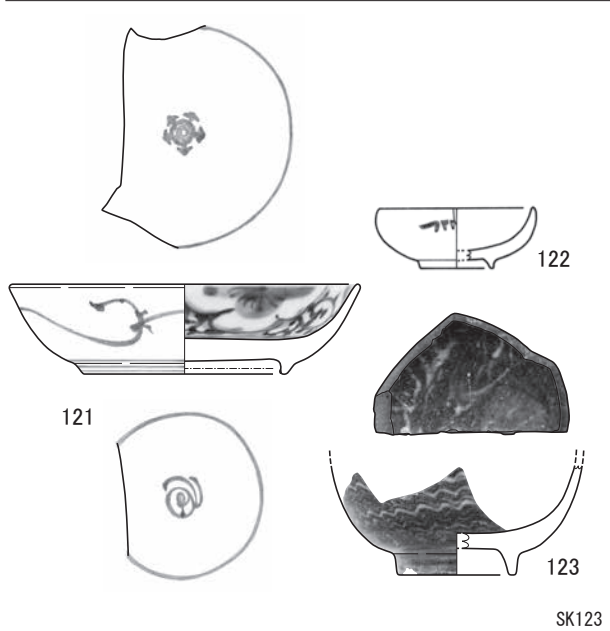
SK122-2

SK122-3(1)

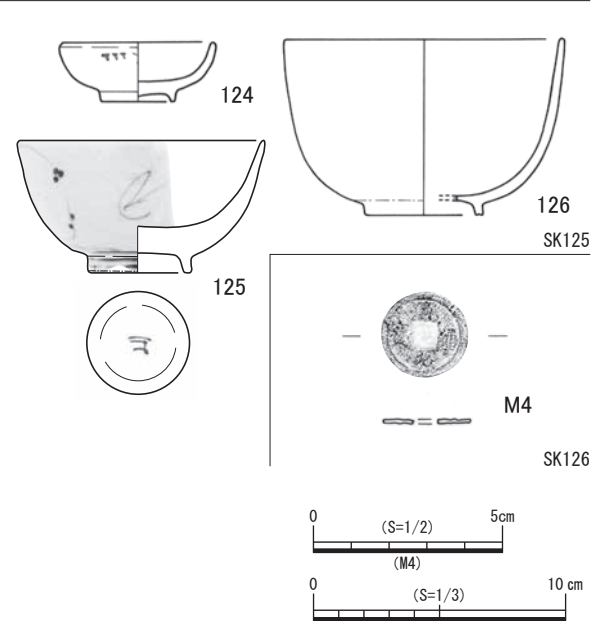
第 28 图 SK122 出土遺物



SK122-3(2)

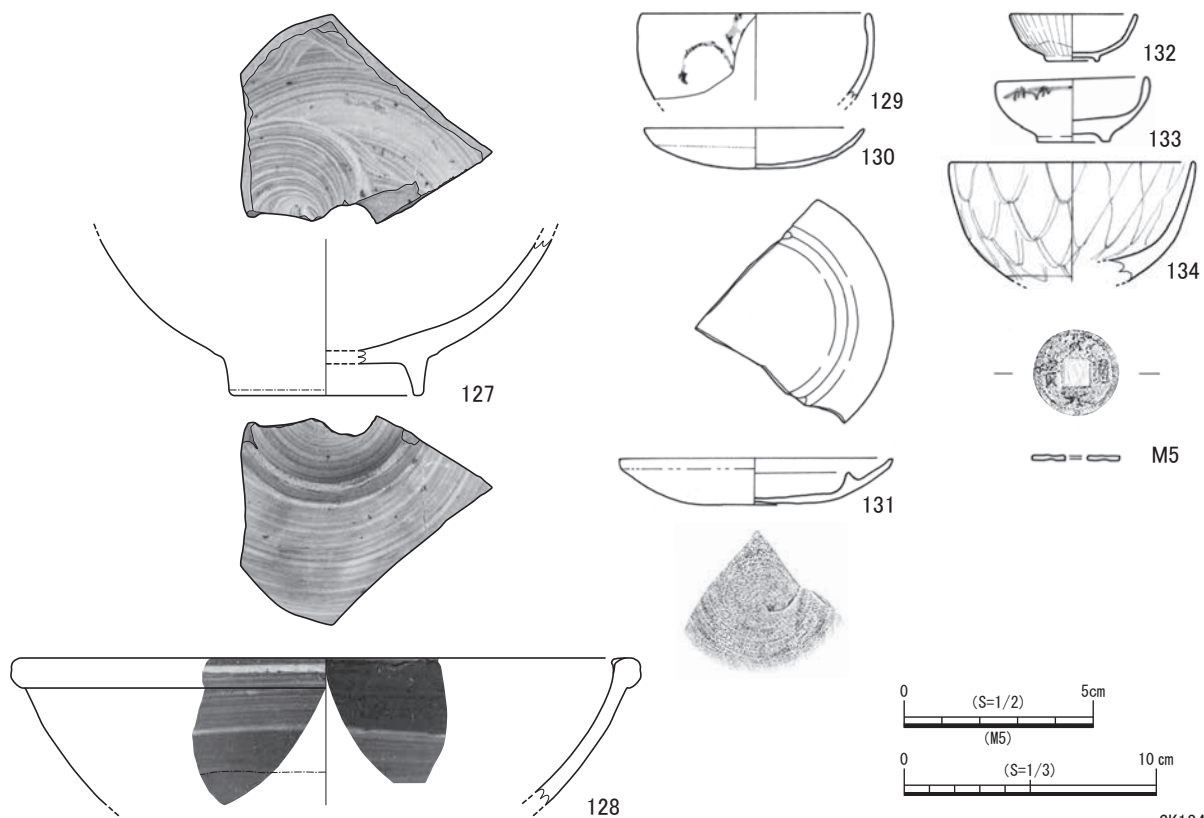


SK123



SK126

第 29 図 SK122-3(2)・SK123・125・126 出土遺物



第30図 SK124 出土遺物

SK124 (第27・30図) SK145・147と重複する位置関係にあり、最も先行する。

土坑掘方は直径約1.5mの円形状を呈する。掘削深度は現状で0.4mである。木桶よりも極端に規模の大きい掘方を有し、当該掘方の中央やや北寄りに木桶が据え付けられる。掘方埋土は、ベースとなる整地J層と類似するとともに、第2遺構面ベース土等を巻き込む状況を呈する。よって、J層上面から掘削された土坑に木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻したと考えられる。

木桶は直径約80cmの円形を呈する。残存深さは約18cmである。底板の残存状況が比較的良好であり、幅約15cmに加工された板材を組み合わせて木桶が作られていると考えられる。木桶底部の標高は約0.9mである。

木桶内部の埋土は礫や遺物を含む単一の埋土である。当該埋土は人為的な埋戻し土であると考えられる。

掘方埋土出土遺物は、肥前系陶器、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器である。いずれも残存状況は不良である。特に肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、他は少量である。肥前系陶器では、刷毛目碗や刷毛目鉢等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主

体となり、碗や皿に加え瓶が含まれる等、器種が多様化傾向にある。また、やや古相を示す内外面に網目文を施した碗も見られる。備前系陶器では、精良な胎土を用いた灯火具等が出土している。これらの状況から、上記遺物群は様相7に属する遺物群であると考えられる。

一方、木桶内部の埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅銭、鉄釘が出土している。残存状況の良いものも含まれる。肥前系陶器では、刷毛目碗や刷毛目皿が見られる。肥前系磁器では、内外面に網目文を施す碗や蛇の目釉剥ぎが見られ、見込中央に五花文を描く皿等が含まれる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの状況から、上記遺物群は様相7に属する遺物群であると考えられる。

SK125 (第27・29図) 土坑掘方は直径約0.7mの円形状を呈する。掘削深度は現状で約0.25mである。木桶の大きさと近い規模を有し、当該掘方のほぼ中央に木桶が据え付けられる。掘方埋土は、ベースとなる整地E・J層と類似することから、E・J層上面から掘削された土坑に木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻したと考えられる。

木桶は直径約55cmの円形を呈する。残存深さは約

20 cmである。木桶底部の標高は約 0.9m である。

木桶内部の埋土は、最下層に遺物等を含まない灰オリーブシルトが薄く水平堆積している。SK122-1 と同様、水の流入等により形成された堆積であると考ええる。当該シルト層上位には、遺物や炭化物等を多量に含む埋土が検出面まで堆積している。当該堆積層は人為的な埋戻し土であると考ええる。

掘方埋土出土遺物は少量であるが、備前系陶器、軟質施釉陶器が出土している。よって少なくとも所属時期の下限は様相 7 であると言える。一方、木桶内部の埋土からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅製品が出土している。このうち、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が主体となり、肥前系陶器は少数である。肥前系陶器では、刷毛目皿又は刷毛目碗と考えられる小片が出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体である一方、やや厚手・粗製の資料も含まれる。備前系陶器では、卸目が密な挿鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が出土している。これらの状況から、上記遺物群は様相 7 に属する遺物群であると考ええる。

SK126 (第 27・29 図) SK115・146 と重複する位置関係にあり、最も先行する。

土坑掘方は直径約 0.7m の円形状を呈する。掘削深度は現状で約 0.3m である。木桶の大きさと近い規模を有し、当該掘方のほぼ中央に木桶が据え付けられる。掘方埋土は、ベースとなる整地 E 層と類似することから、E 層上面から掘削された土坑に木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻したと考えられる。

木桶は直径約 60 cm の円形を呈する。残存深さは約 25 cm である。木桶底部の標高は約 0.9m である。木桶底部直上からは銅銭が 1 点出土している。

木桶内部の埋土は、2 層に分類可能であり、特に下層は礫や遺物、炭化物を含む埋土であることから、人為的な埋戻し土であると考えられる。

木桶内部埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅銭、鉄鎌が出土している。特に、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が主となり、肥前系陶器、京・信楽系陶器は少量である。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、器種も多様化傾向にある。備前系陶器では、精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの状況から、上記の遺物群は様相 7 の遺物群であると考ええる。

(まとめ)

以上、木桶据え付け土坑の観察所見を記載した。前述のとおり、SK122～126 は南北に平行して形成されている。各遺構出土遺物から想定される形成時期はいずれも様相 7 であり、SK122 と重複関係にある SK123 以外は同時並存した可能性も考えられる。また、SK122-1～3、SK124～126 それぞれについて、木桶中心を結ぶ主軸線は座標北から約 77° 西に傾いている。当該方位は、第 1 遺構面で確認した掘立柱建物跡の主軸方向とも合致することから、木桶設置に際して、当該地周辺の土地割りの影響を直接的又は間接的に受けている可能性が考えられる。

SK122-1～3 の 3 基の木桶と SK124～126 の 3 基の木桶を比較すると、まず平面的な規模の点で極端な差異を指摘できる。SK122-1～3 は概ね直径 0.9～1.0m であるのに対し、SK124～126 は直径 0.5～0.6m 程度と小規模である。これと関連して、木桶底部の標高は SK122-1～3 が 0.6～0.7m 程度であるのに対し、SK124～126 は約 0.9m と揃っている。SK122-1～3 の木桶と SK124～126 の木桶では、平面的な規模のみならず、深さにも差があったことが推測できる。つまり、SK122-1～3 では SK124～126 と比較して、平面積・深度ともに規模の大きな木桶を使用していたと言える。平面積・深度に見られる差は、木桶の容量に差があったことを示すことから、何らかの使い分けが行われていた可能性も考えられる。

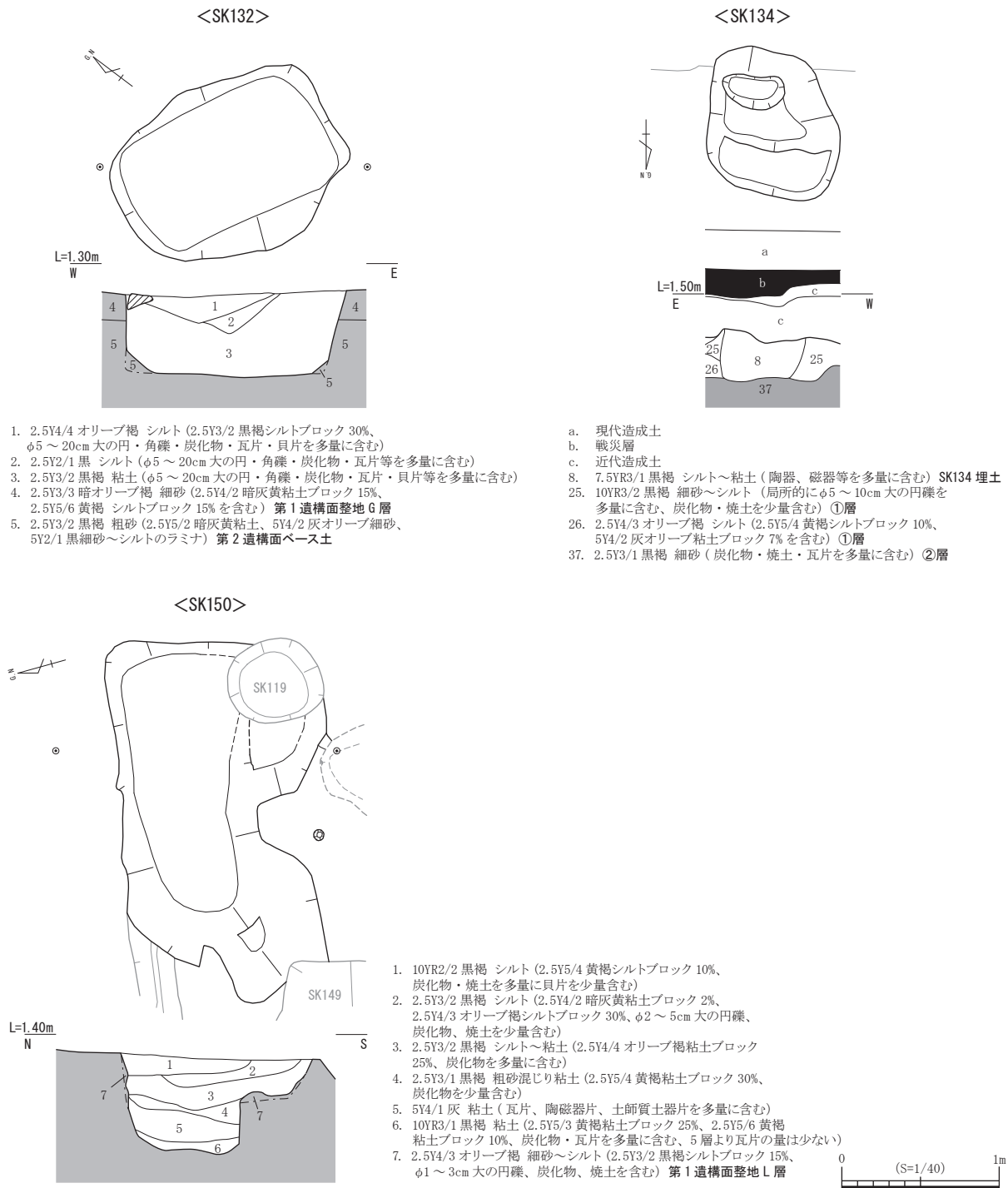
SK122～126 で確認した木桶の用途について、出土遺物や埋土等から推測することは困難である。SK122-1 や SK126 では木桶底部付近から銅銭が出土しており、木桶の用途と関連がある可能性もある。

SK122～126 の木桶内部は少なくとも下半は人為的な埋戻し土で短期間に埋め戻されたような状況を呈する。埋土には遺物の他、礫等も多量に含まれることから、単純に廃棄土坑として転用されたと理解することは適切ではない。むしろ、木桶の使用目的が終了した段階で、短期間で埋め戻す必要性が生じたことを重要視すべきであると考ええる。

d. 廃棄土坑

(廃棄土坑の観察所見)

ここでは、埋土に一括性のある極めて多量の遺物が含まれる土坑を廃棄土坑として、その観察所見を記載する。SK132・134・150 が該当する。SK132・134 は調査区南辺付近に集中しているが、SK150 は調査区北寄りに位置する。



第 31 図 廃棄土坑平面図・断面図

SK132 (第 31・35 図) 長軸約 1.0m、短軸約 1.4m の平面形が長方形を呈する土坑である。深度は現況で約 0.5m であり、底部断面は立ち上がりの急な逆台形状を呈する。土坑内は、直径 5 ～ 20 cm の円・角礫や炭化物、陶磁器、土師質土器、瓦片、貝片を多量に含むしまりの弱い黒褐色系シルト～粘土ではば上端まで満たされていることから、廃棄土坑であると判断した。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、

瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦、軒平瓦、人形土製品が出土している。出土遺物量は極めて多量であり、完形に復元可能なものを含む等、残存状況も極めて良好である。大多数は肥前系磁器であり、肥前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器がそれに次ぐ。軟質施釉陶器は少数である。肥前系陶器では、大形の鉢や甕とともに、厚手の皿や碗等、やや古相を示す遺物も混ざる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体

となる。碗、瓶、香炉等器種は多様化している。また、蛇の目凹形高台を有する皿や、広東碗、端反碗が多く見られる。京・信楽系陶器では、端反碗や灯火具が見られる。瀬戸・美濃系陶器では、端反碗が見られる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や灯火具等が見られる。土師質土器では、前述の土器②④や焜炉、皿AIX等が見られる。軒丸瓦、軒平瓦では、キラコの使用が認められる。上記のような状況から、上記遺物群は様相8の一括性のある遺物群であると考えられる。

SK134 (第31・36図) 長軸1.0m以上、短軸約0.8mの平面形が不定形な土坑である。深度は現況で約0.3mであり、底部断面はU字形状を呈する。土坑内は陶磁器や土師質土器、瓦等でほぼ上端部まで満たされており、隙間に黒褐色シルト～粘土が介在している。上記のような状況から、廃棄土坑であると判断した。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、大谷焼、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦が出土している。特に肥前系磁器が主体となり、肥前系陶器や軟質施釉陶器、土師質土器も比較的多く含まれる。出土遺物量は極めて多量であり、完形に復元可能なものを含む等、残存状況も極めて良好である。肥前系陶器では、刷毛目碗や陶胎染付碗等が出土している。肥前系磁器では、見込中央に手描きによる抽象文を施し、口縁端部が外反気味の碗や口銹を有する型打ち皿等が見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢等が見られる。土師質土器では、前述の土器①～④類や焜炉等が見られる。軒丸瓦の瓦当は立体的な文様を有し、巴文の尾は比較的長く伸び、珠文は10個以上見られる。上記の状況や典型的な端反碗が見られないことから、上記遺物群は様相7の一括性のある遺物群であると考えられる。

SK150 (第31・37・38図) SK119・149及び瓦溜まりと重複する位置関係にある。このうち、SK119・149より先行し、瓦溜まりより後出する。長軸約2.3m、短軸約1.2mの平面長形状を呈する土坑である。深度は現況で約0.6mであり、底部断面は立ち上がり極めて急な逆台形状を呈する。南東部、SK119と重複する部分が南方に約0.6m張り出し、一段高いテラス状の平坦面を形成している。また、土坑北西部から西に向かって、幅約0.3mの浅い溝が約0.6m伸びる。なお、当該溝の延長部を調査区西半部では確認していないことから、総延長1.0m内外で収まるものと考えられる。当該土坑の主軸は、座標北から約78°西へ傾いており、当該期の掘立柱建物跡等と同様の主

軸方向を呈する。よって、土坑形成に際して、当該期の土地割りの影響を直接的又は間接的に受けている可能性がある。

土坑内は下半部、前述の一段高いテラス状部分の底面レベル付近までは瓦片や陶磁器片、土師質土器片を多量に含む灰色系粘土で充填されていることから、廃棄土坑であると判断した。その後、炭化物や焼土等を含む黒褐色シルトにより、検出面まで埋没する。前述の廃棄土坑SK132・134は、土坑底部から検出面まで人為的に廃棄された遺物で充填されているが、SK150については人為的な遺物の集積は土坑下半部までにとどまる。集積する遺物の量に見合わない容量の土坑を廃棄土坑として利用していると言える。よって、本来遺物集積を目的として掘削された遺構ではなく、他の構造物を転用した可能性が考えられる。これは、主軸方向が当該期の周辺の土地割りの影響を少なからず受けている可能性があることとも関係すると考える。単なる廃棄土坑をあえて周辺の土地割に合わせて掘削する必要性はなく、建物等に付随する何らかの遺構を転用したと考える方が自然である。

埋土下半を中心に肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦、軒棧瓦、鉄製品が出土している。出土遺物量は極めて多量であり、完形に復元可能なものを含む等、残存状況も極めて良好である。陶磁器類では、特に肥前系磁器、備前系陶器が大多数を占め、残存状況が良い傾向が読み取れる。次いで、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器の割合が高い。肥前系陶器は極めて少量である。肥前系陶器では、刷毛目碗片等が少量見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、碗や皿に加え、瓶や仏飯具、蓋等器種の多様化傾向が読み取れる。見込中央に抽象文を施す皿や口縁端部が外反傾向にある碗とともに、厚手で粗製の資料も見られる。備前系陶器では、小形化した播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。土師質土器では、前述の土器①・④類や火鉢等が見られる。上記のような状況から、上記遺物群は様相7～8の比較的一括性のある遺物群であると考えられる。

(まとめ)

以上、廃棄土坑の観察所見を記載した。ここでは、当初から遺物の廃棄・集積を目的として土坑を掘削した可能性がある場合と、本来の役割を終えた構造物を遺物の廃棄・集積のために転用した可能性がある場合の2パターンの在り方を指摘可能である。

出土遺物は、いずれも様相 7～8 の比較的一括性のある遺物群であり、当該期に形成されたものであると言える。

e. その他の土坑

(その他の土坑の観察所見) (第 32～38 図)

ここでは、前述した以外の土坑について、出土遺物の観察所見を中心に記載する。また、特徴的な状況を呈する土坑の場合についてのみ、その所見を記載することとし、他の詳細は第 32～34 図を参照されたい。

SK127 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。特に、肥前系磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器が主体となる。残存状況の良好な資料を多く含む。肥前系陶器では、残存状況の良好な陶胎染付碗が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目凹形高台を有する皿や見込中央に抽象文を施す碗等が見られる。瀬戸・美濃系陶器では溝縁皿が見られ、やや古相を示す。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの状況から、上記遺物群は様相 7 に属するものであると考える。

SK128 肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。特に、備前系陶器が主体となり、他は 1 点ずつ小片が出土しているのみである。全体に遺物の残存状況は不良であり、出土量は少量である。肥前系陶器では、刷毛目を施した小片が見られる。肥前系磁器では、薄手の碗と考えられる小片が見られる。土師質土器では、焙烙や皿と考えられる小片が見られる。上記遺物群の所属時期の下限は様相 6 であると考ええる。

SK129 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。残存状況の良好な資料を含む。各種陶磁器類の出土割合は同程度ずつである。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、見込中央に五花文を施す碗や薄手の皿が見られる。土師質土器では、焙烙や皿が見られる。備前系陶器では、甕や徳利が見られる。これらの状況から上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考ええる。

SK130 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系磁器が主体となり、その他は少量含まれる。肥前系陶器では、

刷毛目鉢が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる一方で、厚手で高台断面が U 字形状を呈する資料も含まれる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考ええる。

SK131 オリーブ褐色シルト～粘土で埋没し、中央付近のみ炭層が堆積する土坑である。炭層 (1 層) とオリーブ褐色シルト～粘土層 (2 層) で分けて遺物を取り上げた。

炭層からは、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が出土している。残存状況は不良であり、出土量は極めて少量である。上記陶磁器類の出土割合は同程度である。肥前系磁器では、蛇の目凹形高台を有する皿や薄手の資料が見られる。これらの状況から炭層出土遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考ええる。

一方、オリーブ褐色シルト～粘土層からは、肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。残存状況は不良であり、出土量は極めて少量である。肥前系磁器では薄手の資料が主体となる。瀬戸・美濃系陶器では皿片が見られる。備前系陶器では精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの状況から当該層出土遺物の所属時期の下限は様相 7 であると考えられる。

SK133 第 2 遺構面の重機掘削の際に検出し、急遽記録を行った土坑である。埋土上層付近で多量の瓦が出土した。瓦以外では、残存状況の不良な肥前系陶器甕片 1 点、備前系播鉢片 1 点が出土したのみである。

SK135 京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良であり、出土遺物量は少量である。備前系陶器では精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では焙烙が見られる。いずれも残存状況は不良である。これらの状況から上記遺物群の所属時期の下限は様相 6～7 であると考ええる。

SK136 肥前系磁器小片及び土師質焙烙とみられる小片が数点、キセルが 1 点出土しているのみである。これらの状況から、少なくとも様相 5 以降の遺物群であると考えられる。

SK137 肥前系陶器鉢や精良な胎土を用いた備前系灯火具、瀬戸・美濃系陶器碗が 1 個体ずつ出土している。その他、土師質播鉢が出土している。いずれも残存状況は不良である。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相 6～7 であると考ええる。

SK138 調査区壁際で北端部付近のみを僅かに検出した遺構であり、瓦片を多量に含む。掘方内を瓦片

で充填していることから、廃棄土坑である可能性も考えられる。

SK139 器種不明の土師質土器片のみを含む。

SK140 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良である。陶磁器類では、肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が主体となり、肥前系陶器は少量含まれるのみである。肥前系陶器では、やや古相の胎土目を有する皿小片が出土しているが、二次的混入であると考えられる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、器種が多様化傾向にある。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では、鉢や焼塩壺が見られる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると考ええる。

SK141 肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。残存状況は不良であり、出土遺物量は少量である。肥前系陶器では、刷毛目碗が見られる。備前系陶器では、徳利等が出土している。土師質土器では、焙烙等が見られる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考ええる。

SK142 肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良であるが、出土遺物量は比較的多い。肥前系陶器では、砂目を有する皿や溝縁皿が見られる。また、瀬戸・美濃系陶器では花弁形の口縁をなす皿が見られる。これらは、様相3前後に属する遺物群である。一方、肥前系磁器では薄手の資料が主体であり、肥前系陶器の陶胎染付碗も見られる。備前系陶器では、精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では、焙烙等が出土している。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考ええる。

SK143 調査区中央東壁際で東半部を検出した土坑であるが、出土遺物は皆無である。

SK144 (平・断面図は第26図参照) SK123と重複関係にあり、SK123に先行する土坑である。木桶据え付け土坑であるSK122・123と近接し同様の規模を有する遺構であることから木桶の存在を想定したが、遺構検出時、掘削時ともに木桶の痕跡を確認することはできなかった。

埋土より肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存

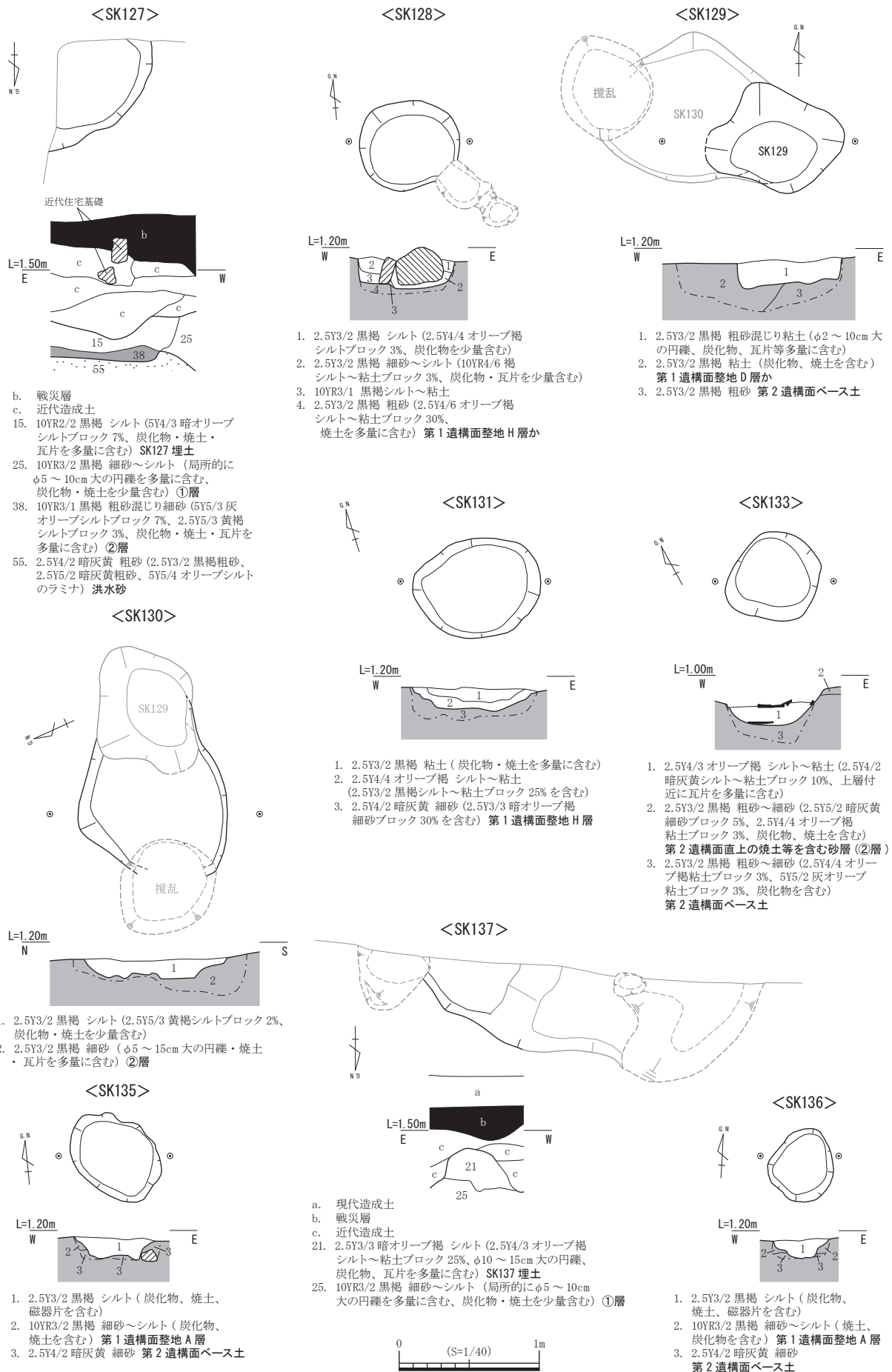
状況は不良であり、出土遺物量は少量である。肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、瀬戸・美濃系陶器は小片が1点のみ出土している。肥前系陶器では、蛇の目釉剥ぎの見られる皿が含まれる。肥前系磁器は薄手の資料が主体となり、器種が多様化傾向が読み取れる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考えられる。

SK145 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、鳥形土製品が出土している。いずれも残存状況は不良であり、出土遺物量は少量である。なお、各種陶磁器類は同程度ずつ出土している。肥前系磁器では高台断面U字形状を呈する碗が見られる。京・信楽系、瀬戸・美濃系陶器では、碗等の小片が見られる。土師質土器では、焙烙等が見られる。これらの状況から、上記出土遺物群の所属時期の下限は様相6～7であると考ええる。

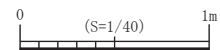
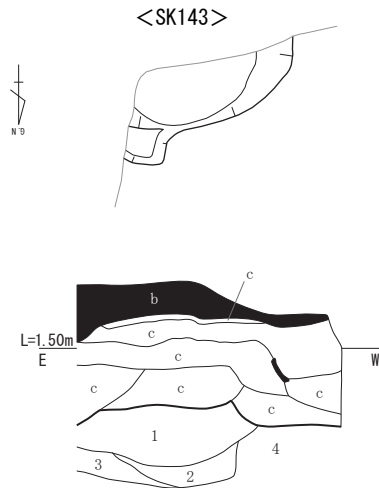
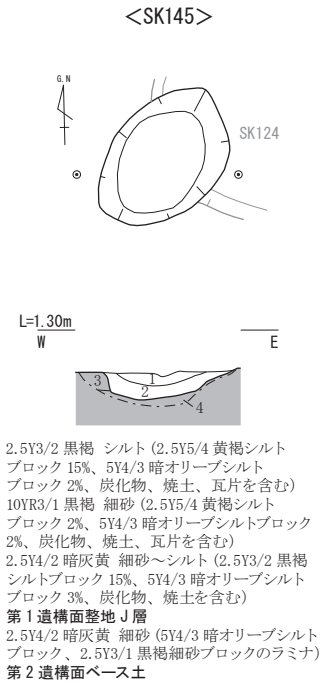
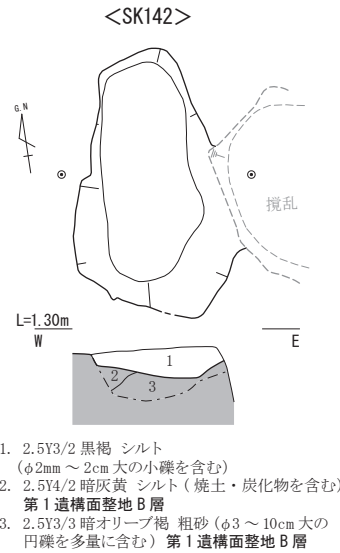
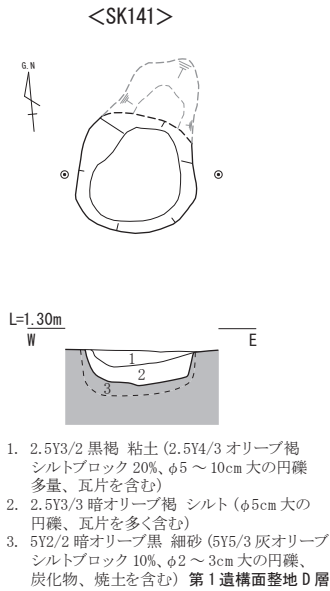
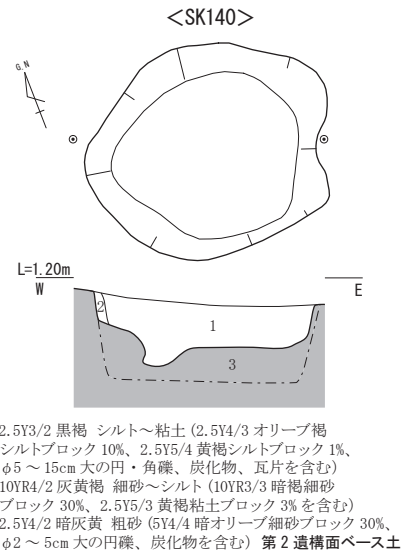
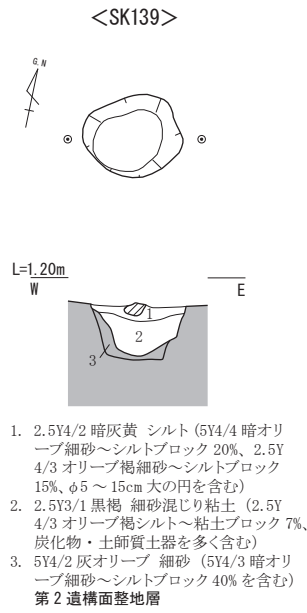
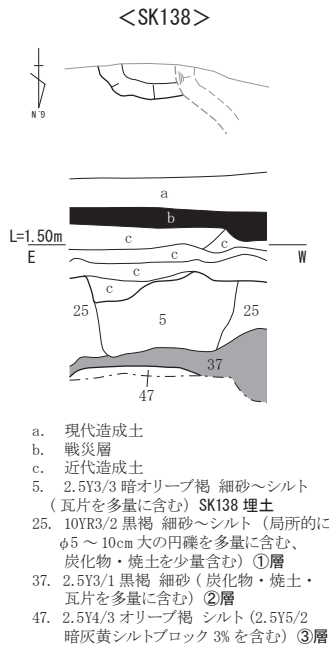
SK146 (平・断面図は第27図参照) 肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、銅銭、軒丸瓦が出土している。陶磁器類では、軟質施釉陶器以外は同程度の割合で含まれ、軟質施釉陶器は少量である。肥前系陶器では、蛇の目釉剥ぎの見られる皿をはじめとするやや古相の遺物が含まれる。肥前系磁器では、薄手の資料と厚手の資料が同程度見られる。備前系では、精良な胎土を用いた灯火具等が出土している。軒丸瓦は巴文の尾が比較的長く伸び、珠文数が多い資料が見られる。このように、様相3～4のやや古相を示す遺物も出土しているが、軟質施釉陶器が見られることを根拠に、下限は様相7であると考ええる。

SK147 調査区中央東寄りで確認した遺構である。平面形は、長軸0.9～1.0mの不整形な土坑から、長さ0.7m前後、幅0.2～0.3mの溝が南へ延びるような状況を呈する。なお、溝状の部分は東側が近代の攪乱により削平されている。土坑状部分と溝状部分の底部の標高を比較すると、土坑状部分の先端付近が最も高く、そこから溝状部分に向かって緩やかに下る状況を呈する。埋土は、黒褐色系シルト～粘土(断面a 2・3・4層・断面b 1・2層)でほぼ検出面付近まで埋没し、土坑状部分については、さらに上部に暗オリーブ色系シルト層(断面a 1層)が覆っている。最上層の暗オリーブ色系シルト層は、礫や土壌のブロックを多量に含むことから人為的な埋戻し土である可能性が考えられる。

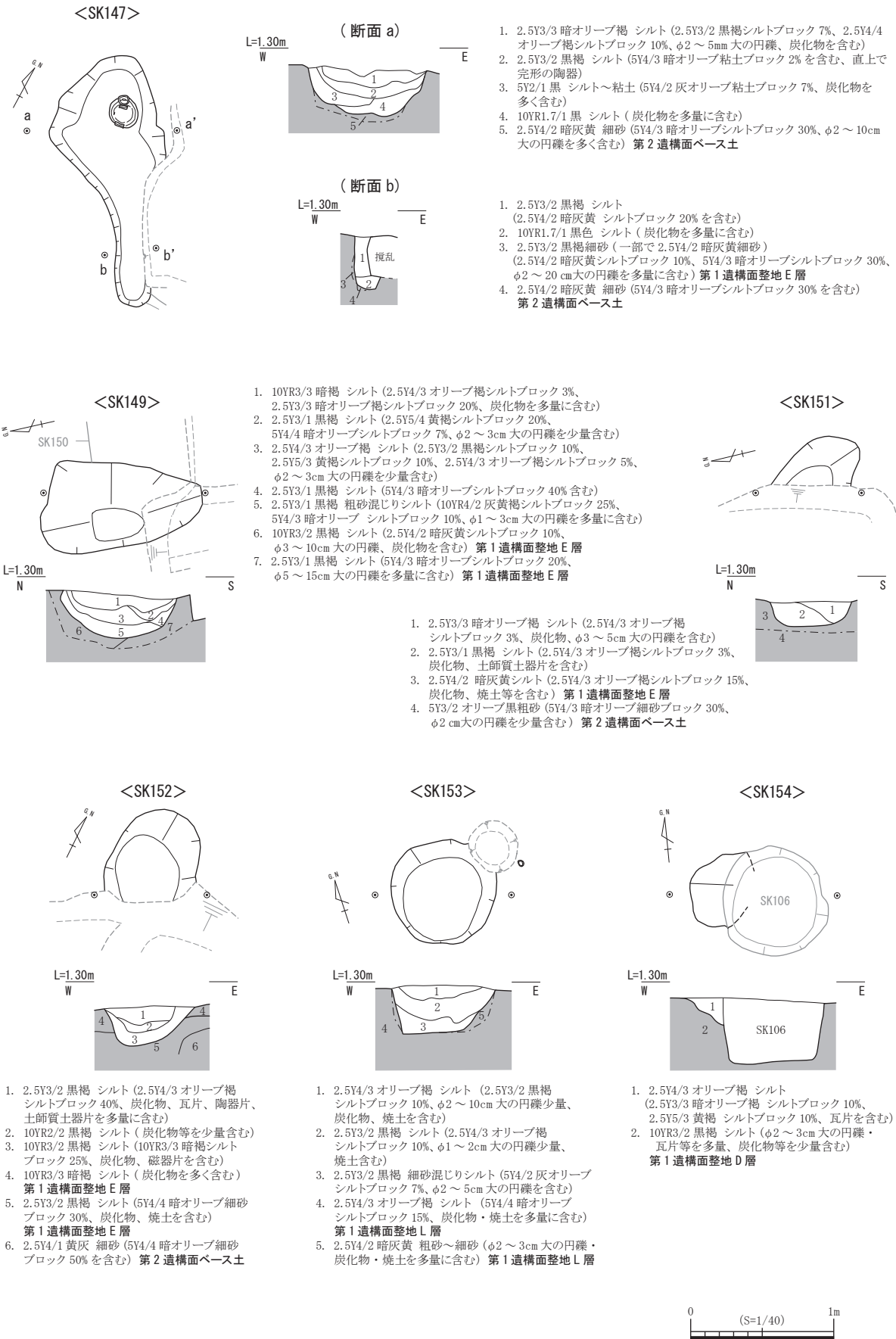
土坑状部分に堆積した黒褐色系シルト～粘土の上面において、ほぼ完形の京・信楽系陶器尿瓶(第37



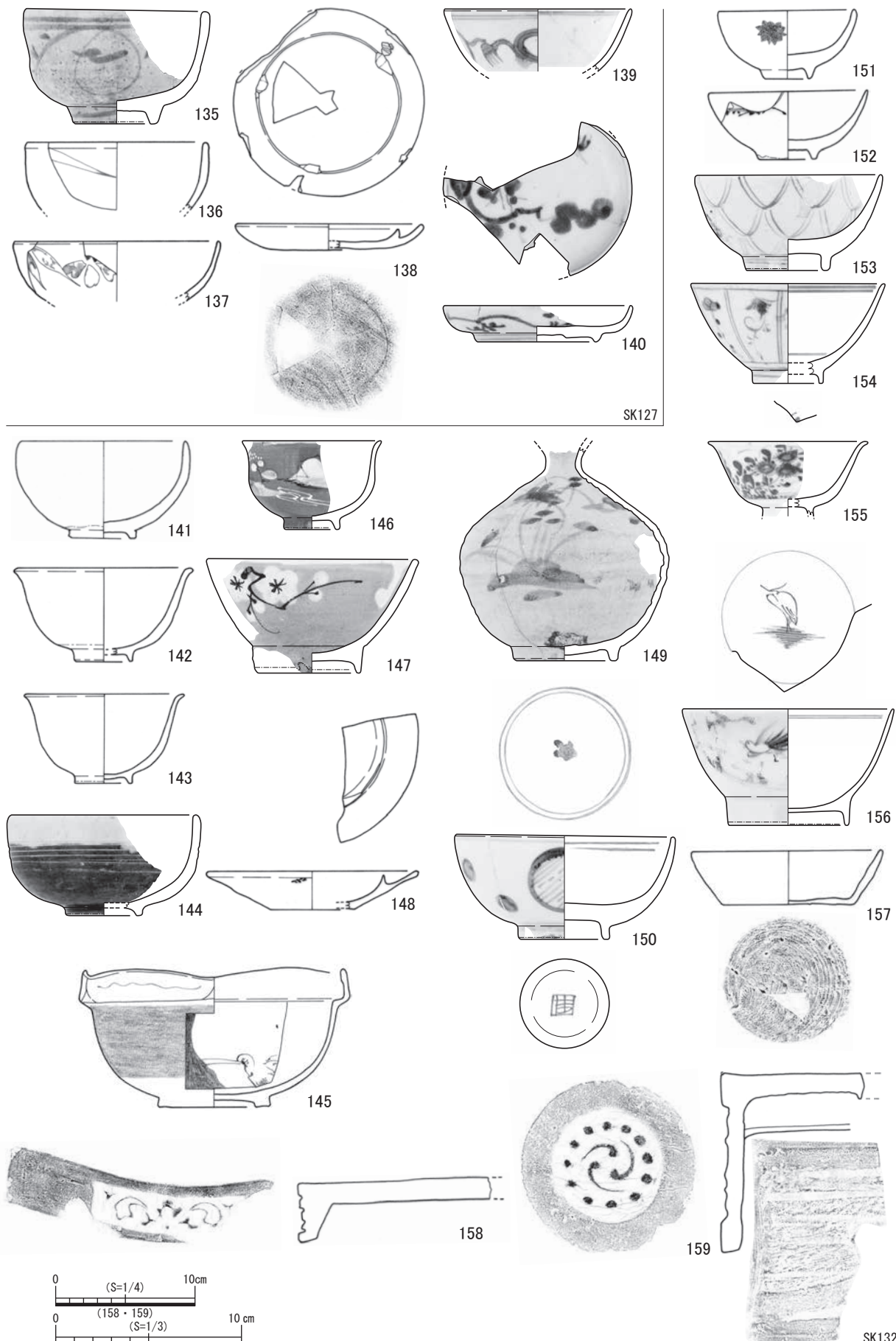
第32図 その他の土坑平面図・断面図(1)



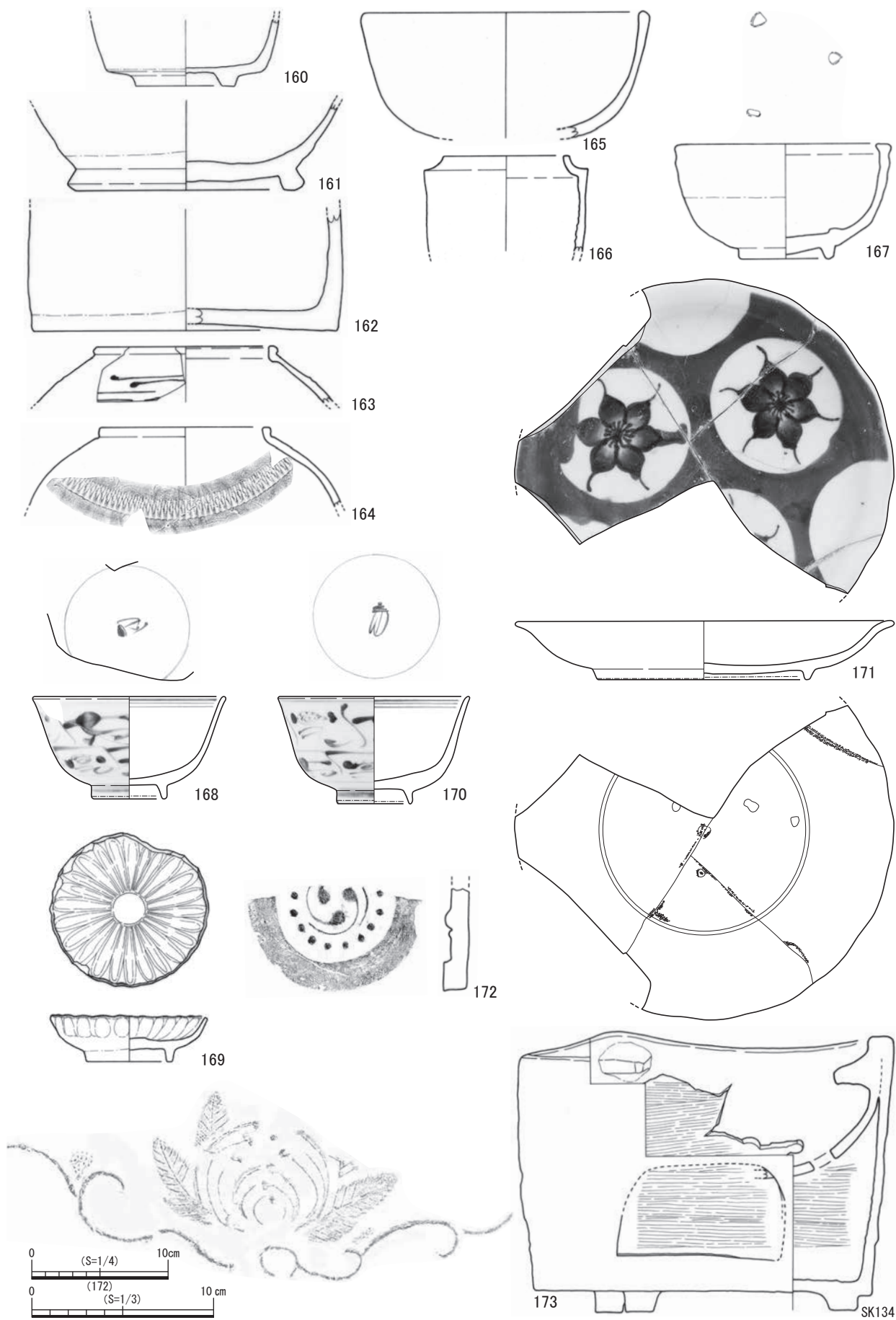
第33図 その他の土坑平面図・断面図(2)



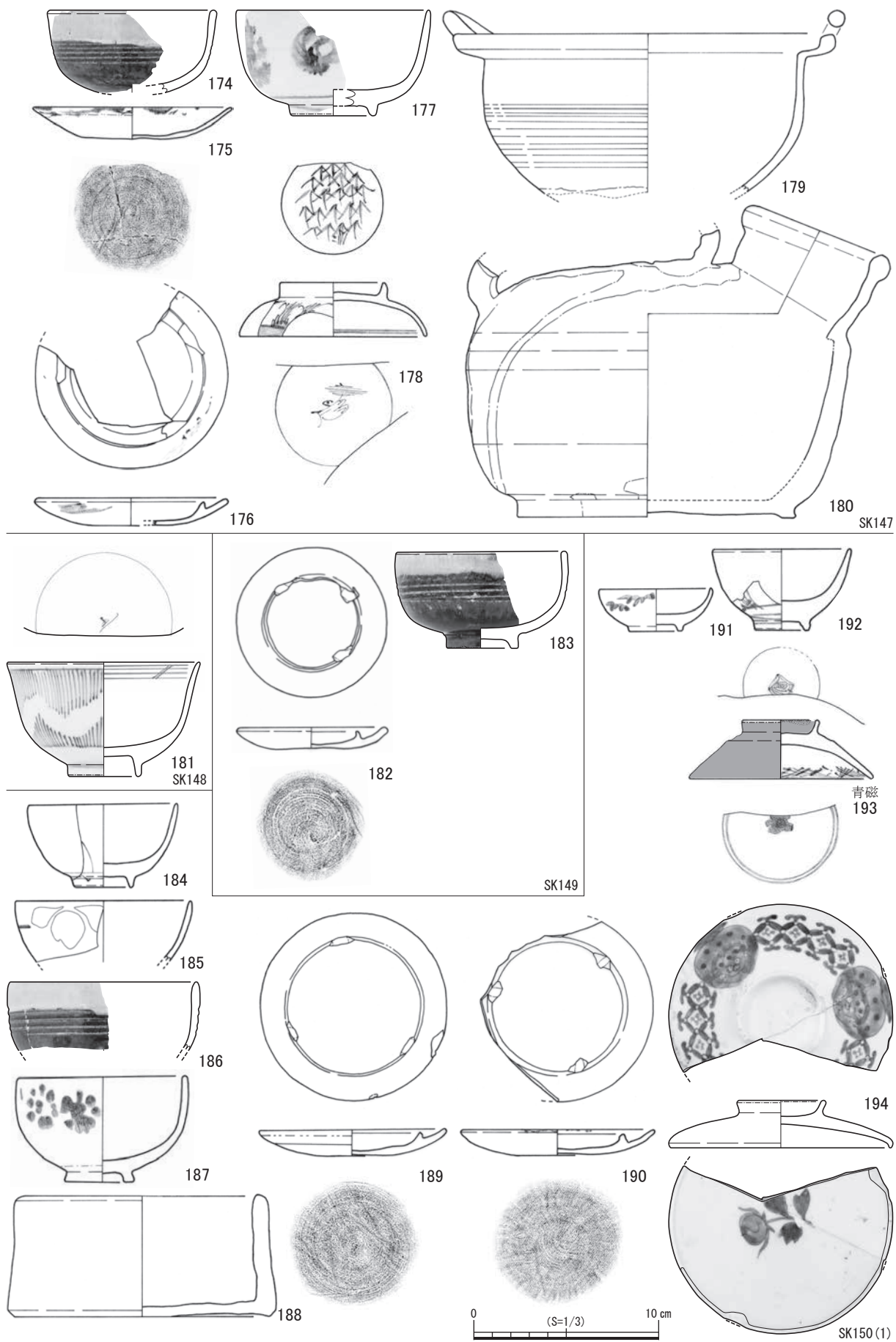
第 34 図 その他の土坑平面図・断面図 (3)



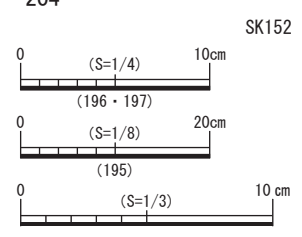
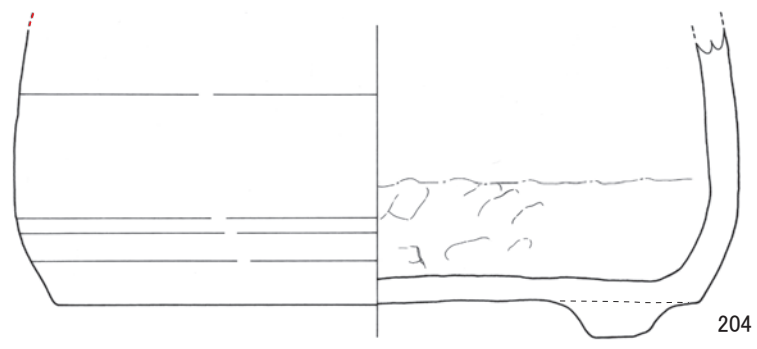
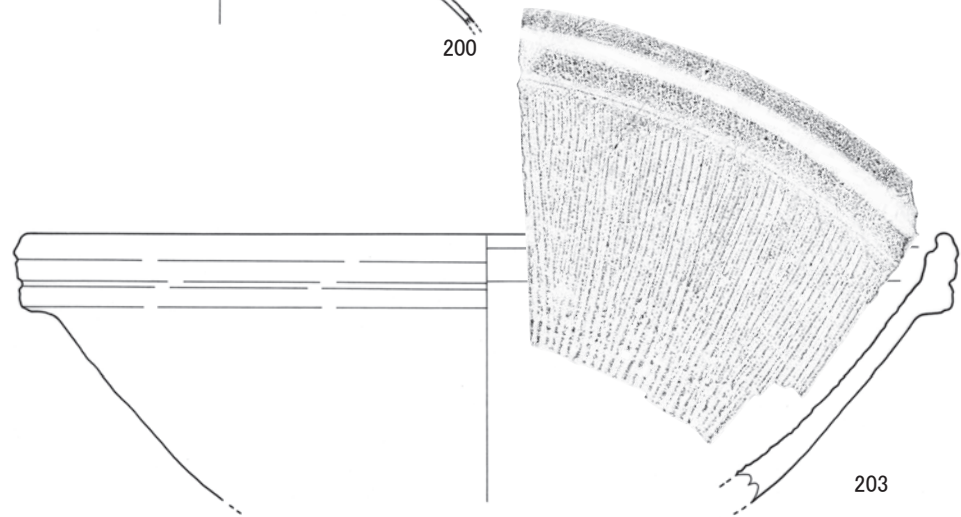
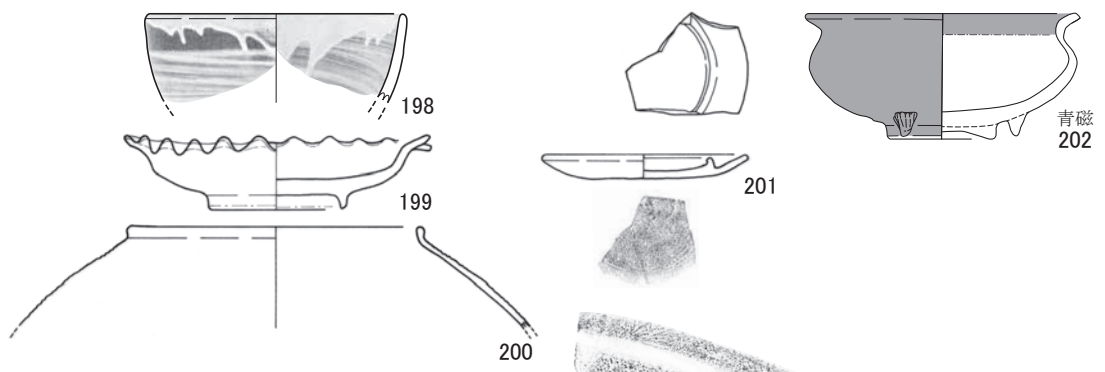
第 35 图 SK127・132 出土遺物



第 36 图 SK134 出土遺物



第 37 図 SK147・148・149・150 出土遺物



第 38 図 SK150 (2) ・ 152 出土遺物

図 180)が出土した。当該尿瓶が当初から SK147 に伴っていたものか、埋没過程で置かれたものかは不明である。最上層の暗オリーブ色系シルト層に完全に覆われることから、当該シルト層による埋め戻しに際して置かれた可能性も考えられる。

埋土より肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅銭、鉄製品が出土している。残存状況の良好な資料を含む、多量の遺物が出土した。陶磁器類では、肥前系陶器・磁器よりも京・信楽系陶器や瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器の方が主体となる。肥前系陶器では、刷毛目鉢が見られるのみである。肥前系磁器は薄手の資料が主体となり、見込中央に抽象文を施す碗、口縁端部が外反傾向にある碗が 1 点のみ見られる。大多数は口縁端部が外反しない資料である。京・信楽系陶器では尿瓶が、瀬戸・美濃系陶器では、見込中央に抽象文を施す資料が見られ、肥前系磁器の模倣である可能性が高い。備前系陶器では、挿鉢や灯火具、大形甕が見られる。これらの状況から、上記遺物群は様相 7 に属する遺物群であると考えられる。

SK148 肥前系陶器・磁器、備前系陶器、土師質土器が出土している。残存状況の良好な肥前系磁器 1 点を除き、他はすべて残存状況が不良である。出土遺物量は少量である。肥前系陶器では、刷毛目鉢又は皿片が見られる。肥前系磁器では、薄手の碗が見られ、口縁端部が外反傾向にある。また、見込中央に抽象文が施される。備前系陶器では、灯火具片が出土している。土師質土器では、焙烙が見られる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 であると考えられる。

SK149 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、銅製品が出土している。残存状況の良好な資料が多量に出土した。陶磁器類のうち、特に肥前系磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が主体となり、他は極めて少量である。肥前系磁器では高台断面 U 字形状を呈する厚手の碗とともに薄手の碗が見られる。口縁端部における外反傾向は見られない。備前系陶器では卸目の密な挿鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では、前述の土器②類や焙烙、羽釜等が出土している。加えて、堺・明石産の可能性が考えられる挿鉢も出土している。これらの状況から、上記遺物群は様相 7 に属する遺物群であると考えられる。

SK151 瀬戸・美濃系陶器、土師質土器、丸瓦が出土している。土師質土器では焙烙が多量に出土してい

る。瀬戸・美濃系陶器が出土していることを重視して、上記遺物群の所属時期の下限は様相 6 以降であると考えられる。

SK152 埋土は上層 (1・2 層) と下層 (3 層) に大別できる。上層及び下層から残存状況の良好な遺物が多量に出土している。上層からは、肥前系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器が出土している。肥前系陶器では、碗や刷毛目皿が見られる。京・信楽系陶器では、灯火具が見られる。備前系陶器では、卸目が密な挿鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。これらの状況から、上記の遺物群の所属時期の下限は様相 8 であると考えられる。一方、下層からは肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。肥前系陶器では、刷毛目碗片が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体であるとともに、脚台付きの香炉が見られる等器種の多様化傾向が見られる。土師質土器では、前述の土器④類や火鉢が見られる。これらの状況から、上記の遺物群は様相 7 に属するものであると考えられる。

SK153 肥前系磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、軟質施釉陶器が出土している。いずれも残存状況は極めて不良であり、出土量は少量である。軟質施釉陶器が出土していることから、上記遺物群の所属時期の下限は様相 7 以降であると考えられる。

SK154 瀬戸・美濃系陶器や土師質焙烙が出土しているが残存状況は極めて不良であり、出土量も少量である。瀬戸・美濃系陶器が出土していることから、上記遺物群の所属時期の下限は様相 6 以降であると考えられる。

(まとめ)

以上、その他の土坑観察所見を記載した。その他の土坑として扱った遺構については、平面形や規模 (平面積・深さ)、壁面立ち上がりの傾斜角度、断面形状、埋土に遺構ごとで差異が見られる。土坑の性格や形成過程についても不明な点が多い。第 1 遺構面は人為的な整地土で形成されていることから、整地土の局所的な差異や上位整地土の部分的な切り込みを遺構として扱っている可能性も否定できない。また、小規模なものについては、「土坑」と分類しながらも、柱抜き取り後の柱穴の名残である可能性等も指摘できる。

出土遺物の所属時期の下限は、いずれも様相 6 ~ 7 以降である。

(4) 石組み溝

a. 調査の経緯と方法

石組み溝は調査区西辺に沿って検出した。SD101 が該当する。平成 25 年度に実施した試掘調査の際、近代住宅基礎と同一面で検出した石組み溝（第 86 図参照）下位で当該溝とは幅の異なる石組み溝を確認した（SD101）。SD101 は近世に属する遺構である可能性が考えられたことから、本調査時に記録保存を図ることとした。

調査の方法について、上位で確認した石組み溝は太平洋戦争時の戦災層で最終埋没を遂げており、当該期までに廃絶したと言える。あわせて、近代住宅基礎と同一面で確認したことから近代に形成されたものである可能性が極めて高いと考えられた。しかしながら、試掘調査の際には当該石組み溝構築時期を明確に示す遺物を得ておらず形成時期を確定できていなかったこと、また試掘調査時に設定しえたトレンチ規模の制約から下位石組み溝との関係（間層が介在するか、下位石組み溝の石組みの上に上位石組み溝の石材が直接載せられているか等）を把握できていなかったことから、上位石組み溝を不用意に破壊することが、下位石組み溝の破壊につながる恐れが想定された。そこで、第 1 遺構面重機掘削の際、石組み溝部分については、人力掘削によって、確実に近代以降に形成されたとと言える部分を把握し、必要に応じて重機により掘削を行う方法をとった。なお、掘削に先立ち、上位石組み溝の石組み検出状況図を 1/50 で作成した（第 86 図）。

SD101 の掘削は人力により実施した。掘削にあたっては、計 2 箇所土層観察用ベルトを残し、土層堆積状況を記録した後に完掘した。完掘後の平面図作成にあたってはポール撮影による写真測量を行った。また、立面図及びエレベーション図の作成はレーザー測量により実施した。

SD101 調査終了後、第 2 遺構面重機掘削に先立ち、前述の土層観察用ベルト設定箇所において東側側壁の断割り調査を実施し、石組み構築方法の検討を試みた上で、ほぼすべての石材を除去した。一方、西側側壁外方では、他に 2 列の石組みを確認していたことから、一部の石材を除去し、状況の確認及び記録を行った。なお、SD101 西側側壁及びその外方に形成された 2 列の石組みについては、各石列の形成時期特定及び構造の把握を目的として順次石材を除去し、調査・記録を行うことが望ましいと考えたが、隣接する現有道路の崩落が危惧されたことから、石材の

除去範囲を限定した。よって、西側側壁外方で確認した 2 列の石組みについては、形成順序の前後関係や石材間出土遺物等の断片的な状況証拠を積み上げて、その形成時期特定を試み、あわせて部分的な観察所見からその構造の特徴を把握した。

b. 上位石組み溝の形成時期

上記の方法により掘削を行った結果、下位に位置する SD101 埋没後、上面が完全に埋め立てられ、その上で上位石組み溝が形成されたことが明確となった。また上位石組み溝を構成する石組み間や最下段石材下位からガラス片やレンガ片が出土したことから、上位石組み溝は近代以降に形成され、太平洋戦争終戦後に完全埋没を遂げた遺構であることが判明した。よって、上位石組み溝については断面観察に必要な部分を除いて、重機により除去した。

c. 下位石組み溝（SD101）の構造（第 39～42 図）

（主軸・規模・底部標高）

主軸は座標北から約 8° 東へ傾く。検出範囲は調査区西辺部の南端から北端にかけてであり、調査区北方及び南方へも延伸することがほぼ確実である。

幅は上端部で約 0.8m、下端部で約 0.7～0.8m の規模を有し、断面形状は凹形を呈する。ただし、一部で底部中央が窪む状況を呈する。底部標高は南端部から北端部までの間でばらつきがあるが、0.6m～0.8m の間で収まる。ただし、一概に南から北へと下る状況は読み取れない。前述のとおり部分的に窪む箇所があることから底部標高にばらつきがみられるが、本来少なくとも調査範囲内については、ほぼ一定であったと考えられる。よって、水の流下方向は不明であるが、調査地周辺の地形は南から北へと下る状況を呈することから、全体としては南から北へと通水していた可能性が高い。

（石組み使用石材）

使用石材は安山岩・花崗岩・砂岩であり、側壁本体では安山岩の使用頻度が高い。また、間詰めや裏込めの石材としては、安山岩や花崗岩の割り石及び砂岩が用いられるが、安山岩が大多数を占める。

（掘方及び石組み構築方法）

掘方については、断面 a において溝東側の状況のみ確認している。断面観察の所見では、整地 A～F 層を切り込む比較的緩やかな立ち上がりを呈する掘方を確認しており、全体としては逆台形に近い断面形状を呈していたと考えられる。

上記のような掘方内にほぼ垂直に立ち上がる石組みが形成される。逆台形状を呈すると考えられる掘方の底部、傾斜変換点付近に基底の石材が据えられる。石組みと掘方の間は土石混合の裏込め土で充填されている。裏込め土は黒褐色系を呈するが、内外2層に大別できる。内側、石組みに接する部分の裏込め土では、安山岩又は花崗岩の割り石を多量に含む黒褐色系粘土層が見られる。礫が主体となり、礫間に粘土層が介在するといった状況である。外側には礫を含まない黒褐色系細砂～シルト層が見られる。特に前者は石組み本体を補強する意図で充填された可能性が高く、2種の裏込め土の使い分けがなされていると考えられる。また、石組み溝検出面付近では、掘方上面付近を覆うように安山岩又は花崗岩の割り石が敷き詰められた状況を面的に確認しており、これも石組み本体を補強する意図で形成された裏込め石であると考えられる。なお、掘方埋土に用いられた土壌は、前述の整地B層と類似する。

(石組み構築方法の特徴)

石組み使用石材は前述のとおり安山岩、花崗岩、砂岩であり、裏込め・間詰め石材を含め安山岩が主体となる。

石組み使用石材は人為的な加工により形成された平坦面を内側に向けて設置されており、長軸20～80cm、短軸20～50cm程度の平坦面を有する石材が使用されている。石組み基底石の下部や石材間には節理に沿って割られた安山岩又は花崗岩が詰められており、それにより石材を安定させる状況が読み取れる。また、前述のとおり、割り石を多量に含む裏込め土により、背面からも補強が図られている。間詰め及び裏込め使用石材は長軸30cm以下のものであり、特に間詰めに利用される石材は長軸10cm以下のものが大多数である。節理に沿って薄く又は細かく割れ、細かな隙間に挟み込むのに適した形状の石材を得ることが可能な石材を選択的に利用して、間詰め及び裏込めに利用した状況がうかがえる。

次に、東側側壁・西側側壁それぞれの石組みについて、その特徴を整理する。

東側側壁では、石組みが1～3段分残存する。石組みは東西方向に目地が通るように構築されていることから、布積みであると言える。

東側側壁上端の標高は攪乱による削平を受けている中央付近を除き、概ね1.3～1.4mで水平に揃えられている。また、石組み接地面の標高は南端部付近と北端部付近で約0.8m、中央部付近で約0.5～0.7m

とばらつきがある。

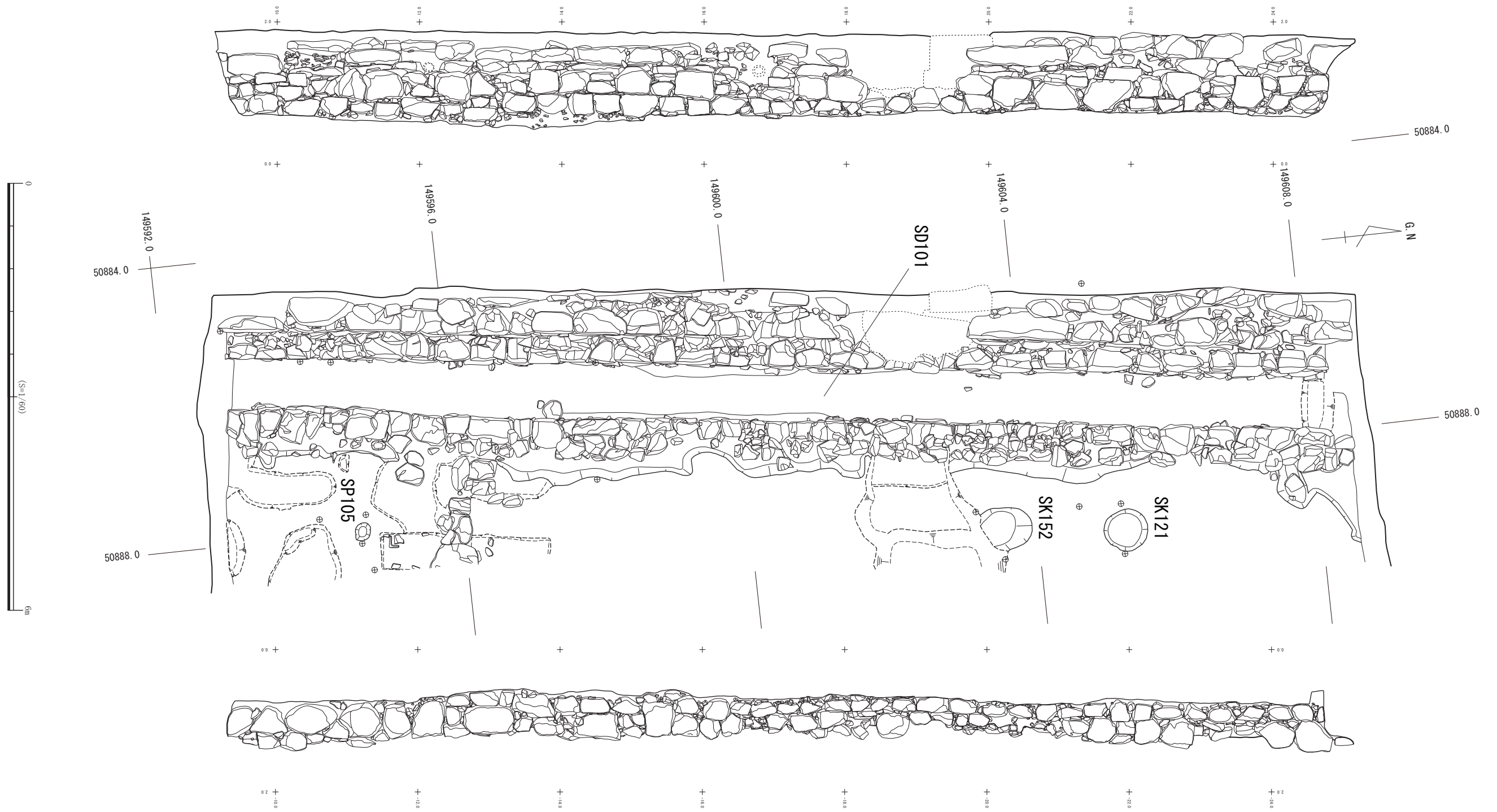
南端部から約3.0mまでは長軸50cm以上の平坦面を有する石材を基底とし、特に南端部約2.0m分については、上位に長軸30cm前後の平坦面を有する小振りな石材が据えられている。南端から約3.0m以北では長軸20～50cm程度の平坦面を有する石材を中心に2段積みされている。南端部約3.0m分の石材接地面と南端部から約3.0m以北の石組み1段目と2段目の継ぎ目において標高0.8～1.0mのラインで目地が通るように構築されている。また、前述のとおり石組み上端の標高は攪乱による削平を受けている中央付近を除き、標高1.3～1.4mのラインで水平に揃えられている。加えて、南端部約2.0m分では、標高約1.2mのラインでも目地が通る状況が読み取れる。

西側側壁では、石組みが1～3段分残存する。石組みは東西方向に目地が通るように構築されていることから、布積みであると言える。

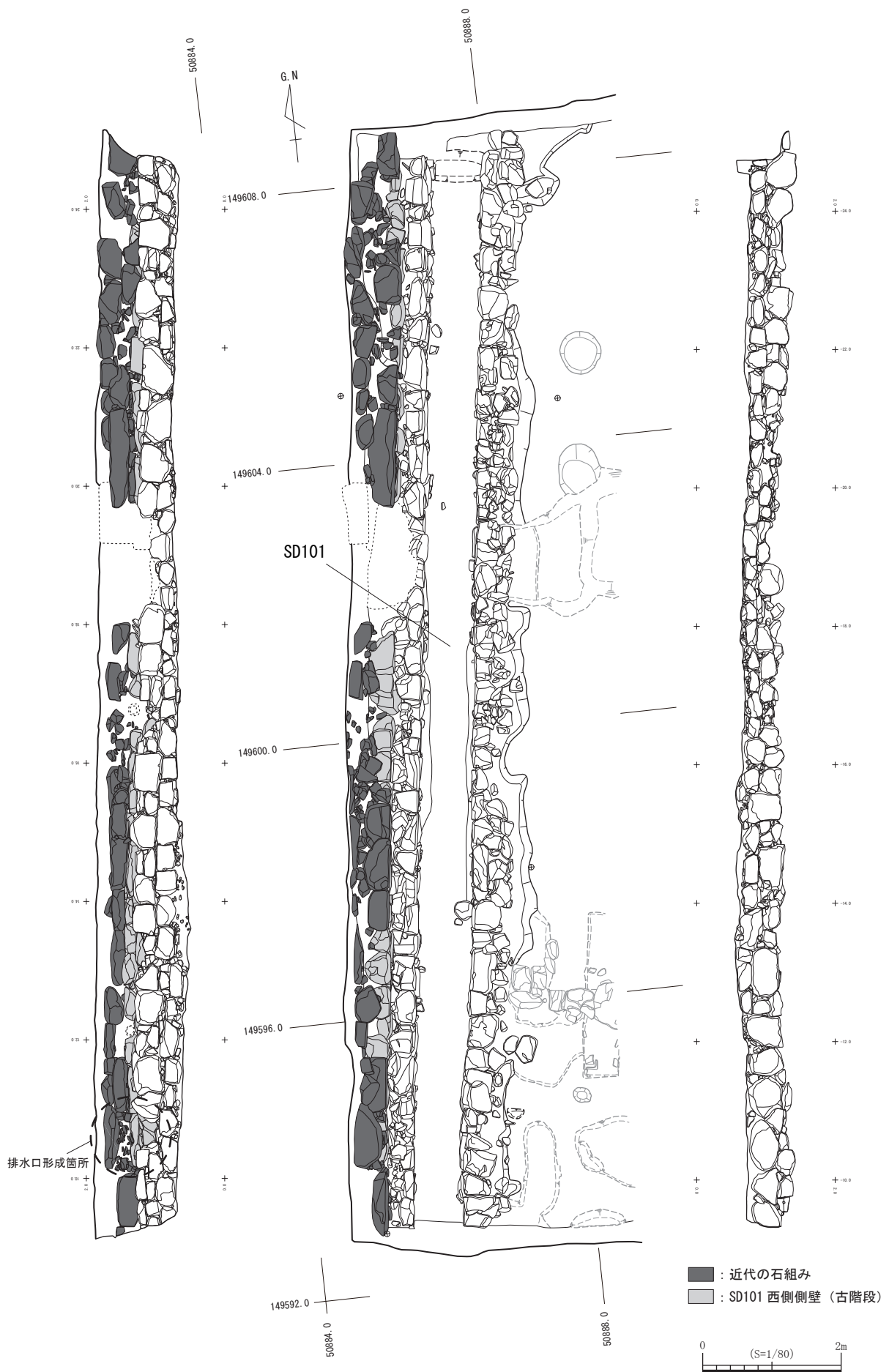
石組み上端の標高は攪乱による削平を受けている中央付近を除き、標高約1.3mのラインで水平に揃えられている。また、石組み接地面の標高は0.6～0.8mとばらつきがある。

南端から約1.3mまでは、長軸20～40cmの平坦面を有する石材が3段積みされている。南端部から約1.3m以北では長軸30～50cm程度の石材が2段積みされる状況が読み取れるが、南端から約11m以北では部分的に長軸60～70cm程度の平坦面を有する石材が1段のみ据えられる。加えて、南端部から約1.3m以北では、最下段の石材が北に行くにつれて徐々に小形化する傾向が読み取れる。全体として、石組み1段目と2段目の継ぎ目において標高約0.9mのラインで目地が通るように構築されている。また、前述のとおり石組み上端の標高は攪乱による削平を受けている中央付近を除き、標高約1.3mのラインで水平に揃えられている。加えて、南端部約1.3m分では、標高約1.1mでも目地が通る状況が読み取れる。

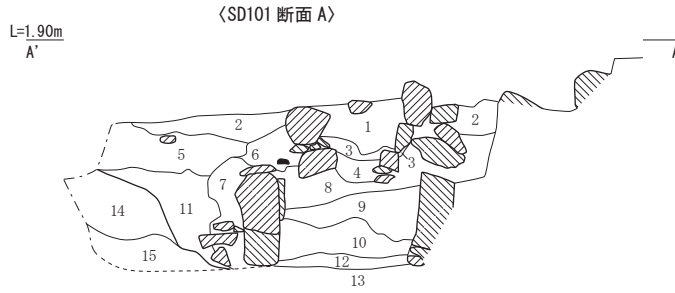
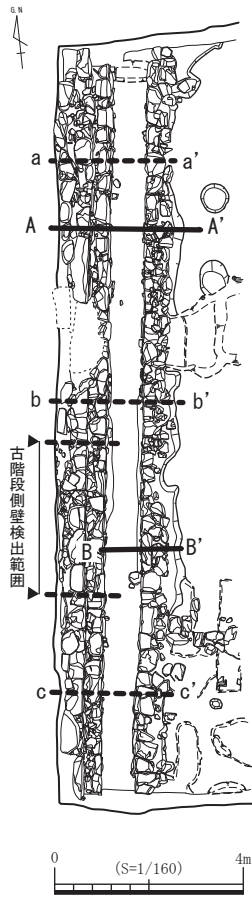
以上、石組み溝東側及び西側側壁の石組みについてその観察所見を記載した。ここで、改めてまとめると、両側ともに布積みで構築され、部分的なばらつきはあるものの傾向としては、標高0.9m前後及び1.3～1.4mのラインで目地が通るように構築されている。また、南端部付近では標高1.1～1.2mのラインで目地が通るように構築されている。このように、南から北へと緩やかに下る原地形に対し、水平な石材設置面を形成しようとする傾向がうかがえる。南端部付近でのみ確認した標高1.1～1.2mのラインに



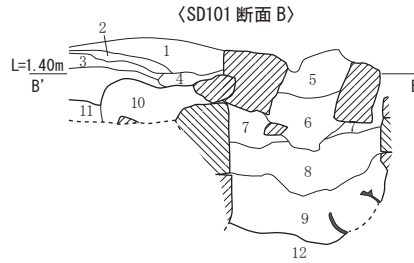
第39图 SD101 平面图·立面图 (1/60) (1)



第 40 図 SD101 平面図・立面図 (1 / 80) (2)

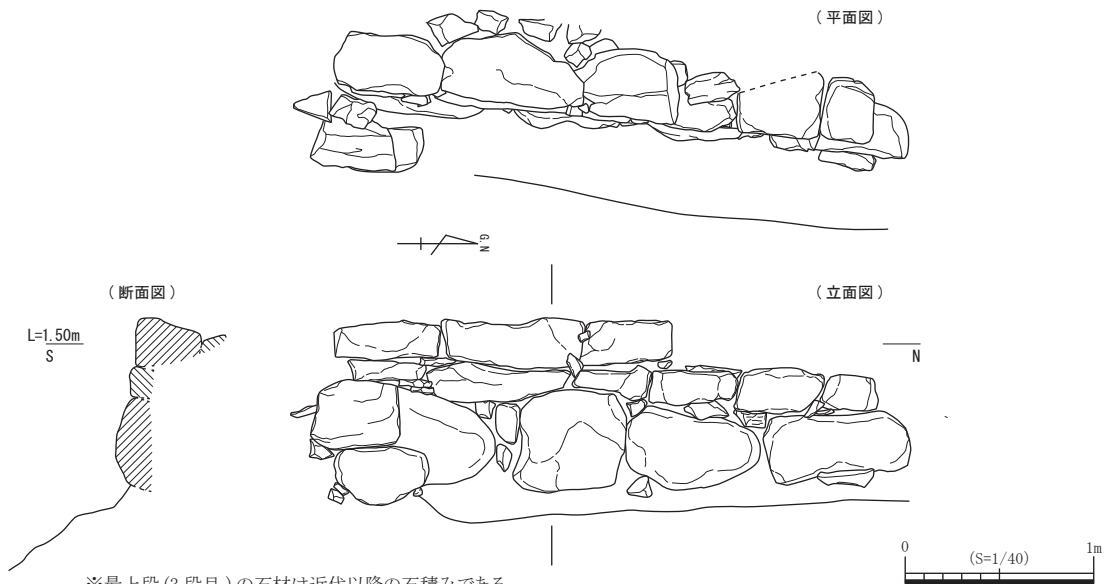


1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (焼土・炭化物・レンガ等を多量に含む) 近代石組溝埋土
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 5%、土師質土器、瓦片等を含む) 近代整地 c 層
3. 10YR2/1 黒 シルト (瓦片、小礫を含む) 近代石組溝埋土
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 細砂 (瓦片、ガラス片、小礫を含む) 近代石組溝埋土
5. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (瓦片、小礫、磁器片、貝片を含む) 近代整地 c 層
6. 2.5Y3/1 黒褐 シルト～粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 20%、瓦片を含む) 近代整地 c 層
7. 2.5Y3/2 黒褐 粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 15%、陶器片を含む) SD101 石組裏込め土
8. 5Y2/1 黒 粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 7%、砂粒を少量含む) SD101 I 層
9. 5Y2/1 黒 粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 7%、φ5cm 大の円礫・瓦・陶器・磁器・土師質土器等を多量に含む) SD101 II 層
10. 2.5Y3/1 黒褐 シルト～粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 2%、φ2～3cm 大の円礫、陶器片を含む) SD101 III 層
11. 2.5Y3/2 黒褐 細砂～シルト (5Y3/2 オリーブ黒シルトブロック 10%、炭化物、焼土を含む) SD101 石組裏込め土
12. 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂 (炭化物を多量に含む) SD101 IV 層
13. 5Y4/2 灰オリーブ 粗砂 石組下端石材接地面
14. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 30%、φ2～10cm 大の円礫多量、土師質土器等を含む) 第1遺構面整地 E 層
15. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/3 暗オリーブ粗砂ブロック 5%、φ2～5cm 大の円礫を多量に含む) 第2遺構面ベース土



1. 2.5Y5/4 黄褐 シルト (炭化物・瓦等含む) 近代整地 a 層
2. 2.5Y4/1 黄灰 シルト (炭化物を多量に含む) 戦災層 b 層
3. 10YR5/6 黄褐 シルト (φ2～5cm 大の角礫を少量含む) 近代整地 c 層
4. 2.5Y3/1 黒褐 シルト～粘土 (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 20%、炭化物、土師質土器片を含む) 近代整地 c 層
5. 5YR5/6 明赤褐 シルト (焼土・炭化物・瓦片等を多量に含む) 近代石組溝埋土、戦災層 b 層
6. 2.5Y3/1 黒褐 シルト (しまり極めて弱、炭化物・焼土を少量含む) 近代石組溝埋土
7. 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y5/3 黄褐極細砂ブロック 20% 含む) SD101 I 層
8. 5Y2/1 黒 粘土 (2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 7%、φ2～5cm 大の円礫、土師質土器片を含む) SD101 II 層
9. 5Y4/1 灰 粘土 (7.5YR3/2 黒褐シルトブロック 5%、2.5Y4/3 オリーブ褐シルトブロック 5%、瓦片、土師質土器等を含む) SD101 III 層
10. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/2 灰オリーブシルトブロック 10%、土師質土器等を含む) SD101 石組裏込め土
11. 10YR3/3 暗褐 シルト (φ2～5cm 大の円礫等を含む) 第1遺構面整地 A 層
12. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 第2遺構面ベース土

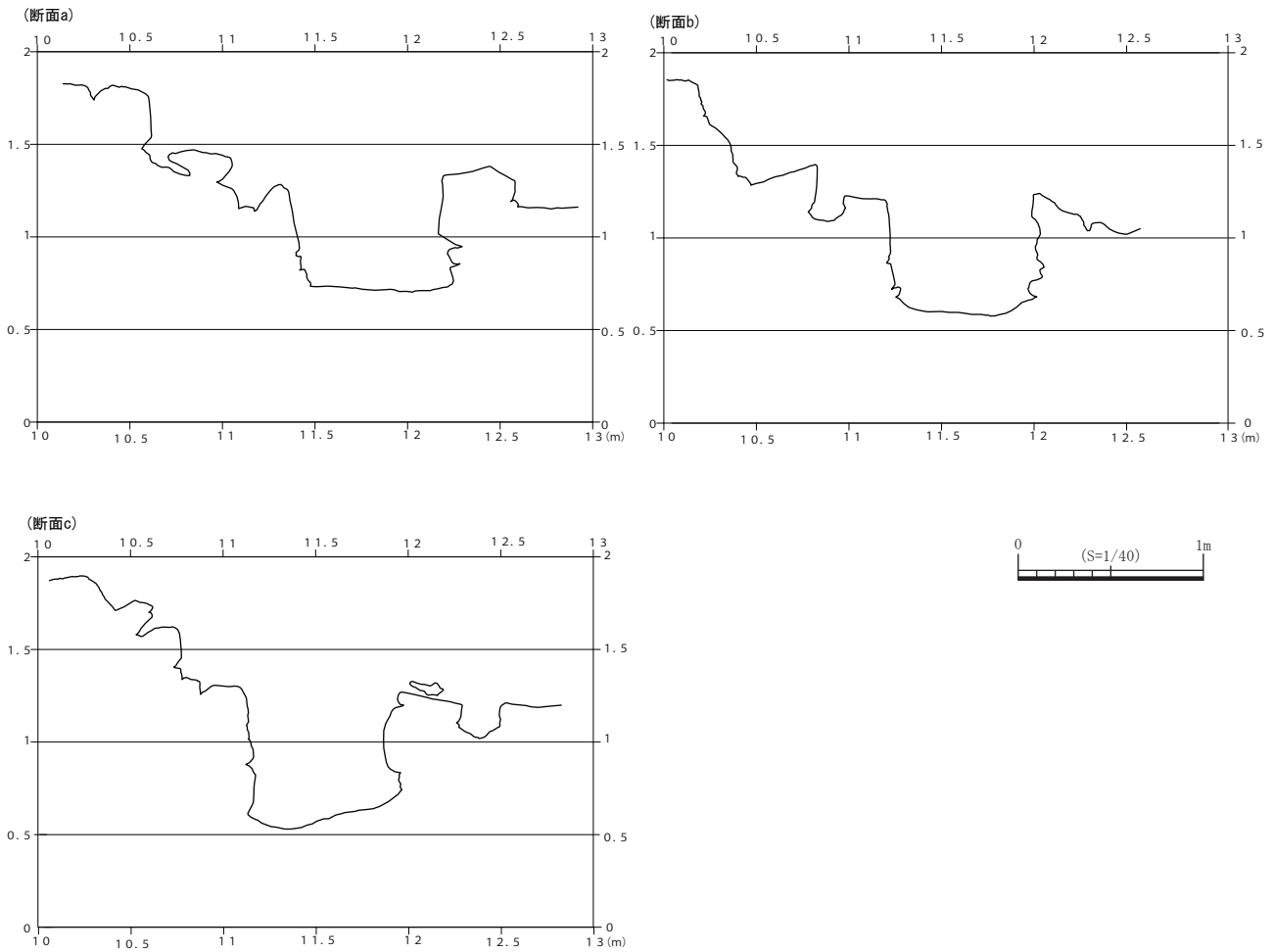
〈西側側壁古段階の石組み〉



※最上段(3段目)の石材は近代以降の石積みである。

第 41 図 SD101 断面図及び立面図

【SD101 エレベーション図】



第 42 図 SD101 エレベーション図

おける石材設置面の形成状況からは、原地形における標高の上昇に合わせて、適切な石材設置面の標高が設定された可能性を示唆する。石組み構築におけるこれらの状況からは、原地形の傾斜に対し、石組み上端部の標高をより水平に近い状態に保とうとする意図がうかがえ、本章第 1 節「基本層序」で詳説した、人為的な整地により①層上面がほぼ水平にされた状況とも関係すると考える。

なお、西側側壁南端部から約 1.0～1.5m の範囲について、2 段目石材が抜き取られ、当該部分に柱穴状の窪みが形成されていた（第 40 図参照）。当該部分の上位では、瓦や礫を詰め込むことで閉鎖された排水口が見られることから、当該柱穴状の窪みは排水の落下地点に形成された排水の痕跡であると考えられる。当該排水口は後述する古段階の SD101 西側側壁上位に形成されている点、柱穴上の窪みは後述する溝埋土 I 層の中で完結しており、下位に及ばないことから、近代以降に形成されたものである可能性が考えられる。

（西側側壁外方の石列について）

前述のとおり、西側側壁外方では、他の石組み列を 2 列分確認している（第 40 図）。ここでは、これらの石組みの形成時期について検討を加える。

まず、最も外側で確認した石組み（第 40 図黒塗り）は、長軸 0.5m～1.0m の花崗岩を横長に据えて構築されている。石組みの下位には近代の土管が設置され、部分的に石材下位からガラス片等が出土していることから、近代以降に形成されたものであると言える。一方、SD101 西側側壁と近代石組みの中間に位置する石組み（第 40 図灰塗り）については、調査区南端部から約 4.5m～7.5m の範囲で、西側側壁を除去して詳細を確認した（第 41 図参照）。その結果、3 段からなる花崗岩を主体とする石組みを確認した。最下段には長軸 60～90 cm、短軸 30～50 cm 程度の平坦面を東側に向けて石材が据えられ、上位に長軸 50～80 cm、短軸 20～30 cm 程度の平坦面を呈する横長の石材が、平坦面を東側に向けて積み上げられる。さらに最上位にも、2 段目同様の横長の石材が、やはり平坦面を

東側に向けて据えられる。1段目と2段目間の標高1.2～1.3m付近と2段目と3段目間の標高約1.4mのラインで目地が通る状況が見られる。さらに上端部は標高約1.6mで揃えられている。当該石組みは布積みにより構築されている点、標高を合わせるように目地が通っている点で前述のSD101東西側壁の構造と類似する。また、2段目上端部の標高は約1.4mであり、前述のSD101東西側壁上端部標高とほぼ一致する。さらに、2段目以下については、前述のSD101西側側壁が接するように構築されており、隙間を埋めるように西側側壁裏込め石が充填される。よって、当該石組み2段目以下については、SD101西側側壁に先行して構築されたと言える。よって、少なくとも下位2段分については、SD101に伴う石組みであり、西側側壁は新古2段階に分かれる可能性が考えられる。一方、3段目については、上端部標高が第1遺構面の標高に対して極端に高く、むしろ前述の近代に形成された石組みと標高が類似する点、また石材の規模・構造も近代に形成されたものと類似する点から、近代以降に形成されたものであると考えられる。

なお、古段階の西側側壁で使用された石材の種類や形態と東側側壁の使用石材は大きく異なり、むしろ西側側壁新段階の石組み使用石材と類似することから、東側石組みについても、造り替えがなされた可能性が推測できる。ただし、それを裏付ける根拠が皆無であることから、可能性として指摘するにとどめる。

(埋土の特徴)

本遺構の埋土は4層(I～IV層)に分類可能である。最下層では、黒色系粗砂層の薄い堆積を部分的に確認しており、流水に伴い形成された堆積層であると考えられる(IV層)。III層は小礫や陶磁器片、土師質土器片等を少量含む黒色系粘土層であり、滞水状況下における堆積状況を示すと考えられる。III層により溝底部から1/2程度の高さまで埋没する。II層は小礫や陶磁器、土師質土器、瓦等を多量に含む黒色系粘土であり、滞水状況下において、雑器類等が投棄されたような状況を呈する。II層により溝底部から2/3程度の高さまで埋没する。II・III層で確認した滞水状況下にあった可能性を示唆する堆積状況は、SD101底部の傾斜が極めて緩やかである点とも整合する現象である。最上層であるI層は、小礫や陶磁器、土師質土器、瓦等を多量に含む黒系のシルト～粘土層である。I層によりSD101は完全埋没を遂げており、一部SD101外方にまで広がりを見せることか

ら、I層は人為的な埋戻し土であると考えられる。なお、I層は近代に形成された上位石組み溝との間層となっている。

d. 出土遺物の概要(第43～46図)

出土遺物の大部分はI・II層に包含される遺物であり、残存状況の良好な資料も多量に含むことから、比較的一括性のある遺物群であると考えられる。一方、III層以下では出土遺物量が極端に減少し、破片が中心となる。以下、各層における出土遺物の概要を記載する。また、SD101東側側壁裏込め土からも遺物が少量出土していることから、当該遺物の所見についても合せて記載する。

(I層)

I層からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、大谷焼、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦・軒平瓦・棧瓦、鉄製品が出土している。出土遺物量は極めて多量であり、残存状況が良好な資料を多く含む。陶磁器類では、肥前系磁器が大多数を占め、次いで瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器の順に多く含まれる。肥前系陶器、大谷焼、軟質施釉陶器は少数である。

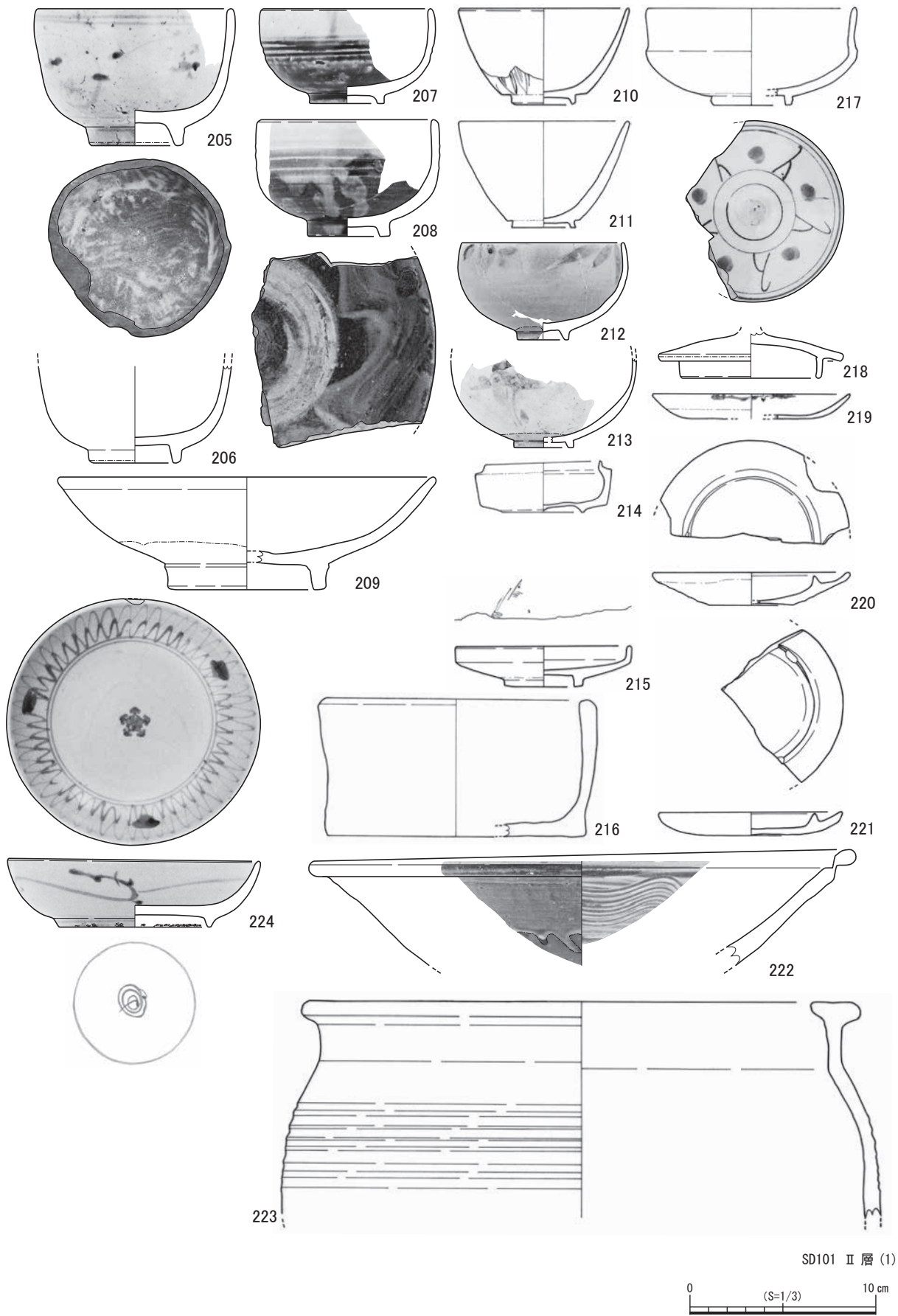
肥前系陶器では、大形鉢や皿のみ見られる。肥前系磁器では見込中央に井桁文を施すやや古相を示す遺物も見られる一方で、口銹を施した皿や小杯、広東碗や端反碗が見られる。土師質土器では、白みがかった褐色系の胎土を用いた皿(皿A VIか)や前述の大形土器③④類、焜炉等が見られる。

このような状況から、極端に古相を示す遺物を除くと、いずれも様相6～8に属すると考えられ、上記遺物群の所属時期の下限は様相8であると言える。

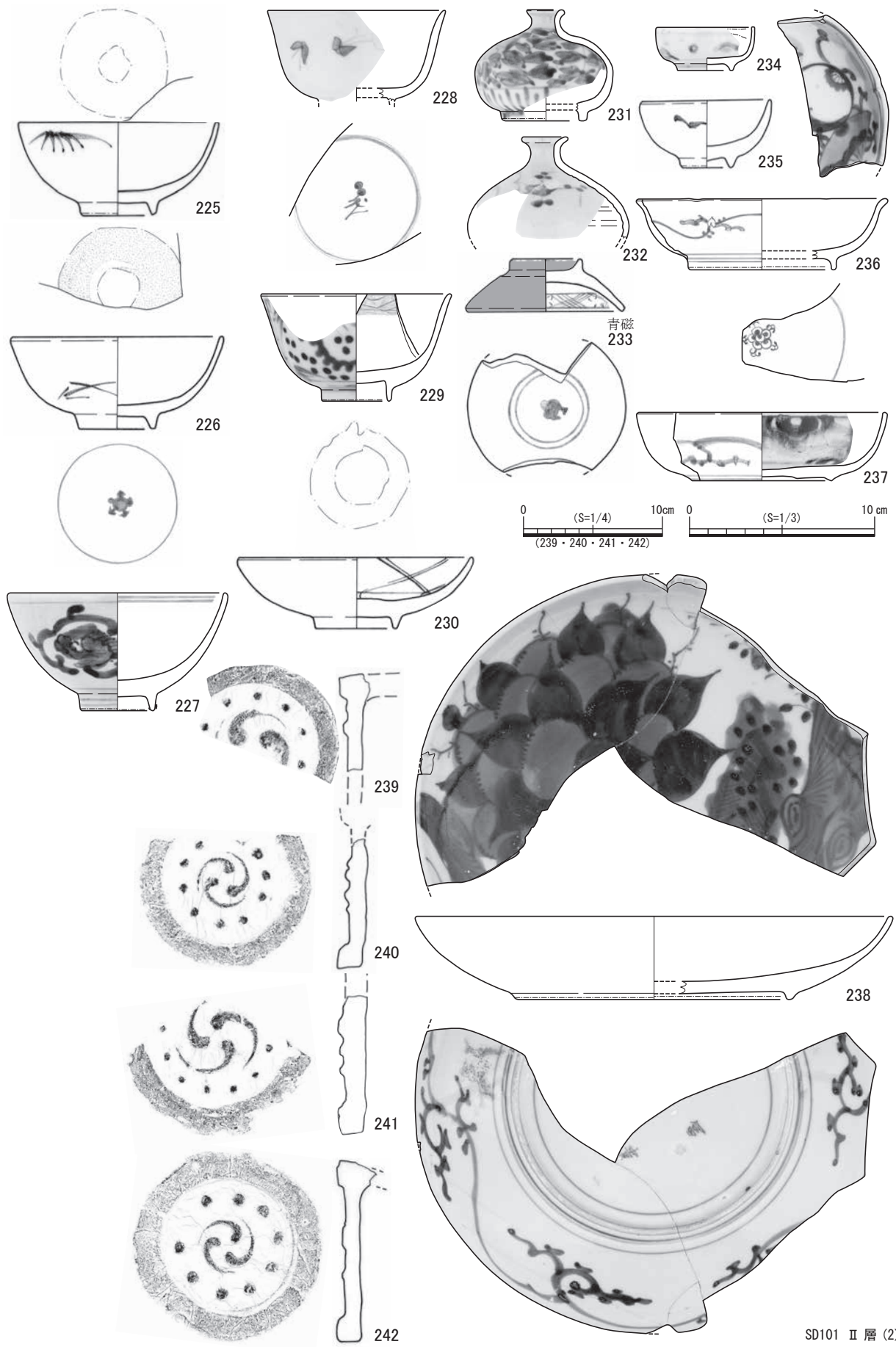
(II層)

II層からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、軒丸瓦・軒平瓦、銅製品、馬形土製品が出土している。出土遺物量は極めて多量であり、残存状況の良好な資料を多く含む。陶磁器類では、軟質施釉陶器のみ少量であり、他は同程度の割合で含まれる。

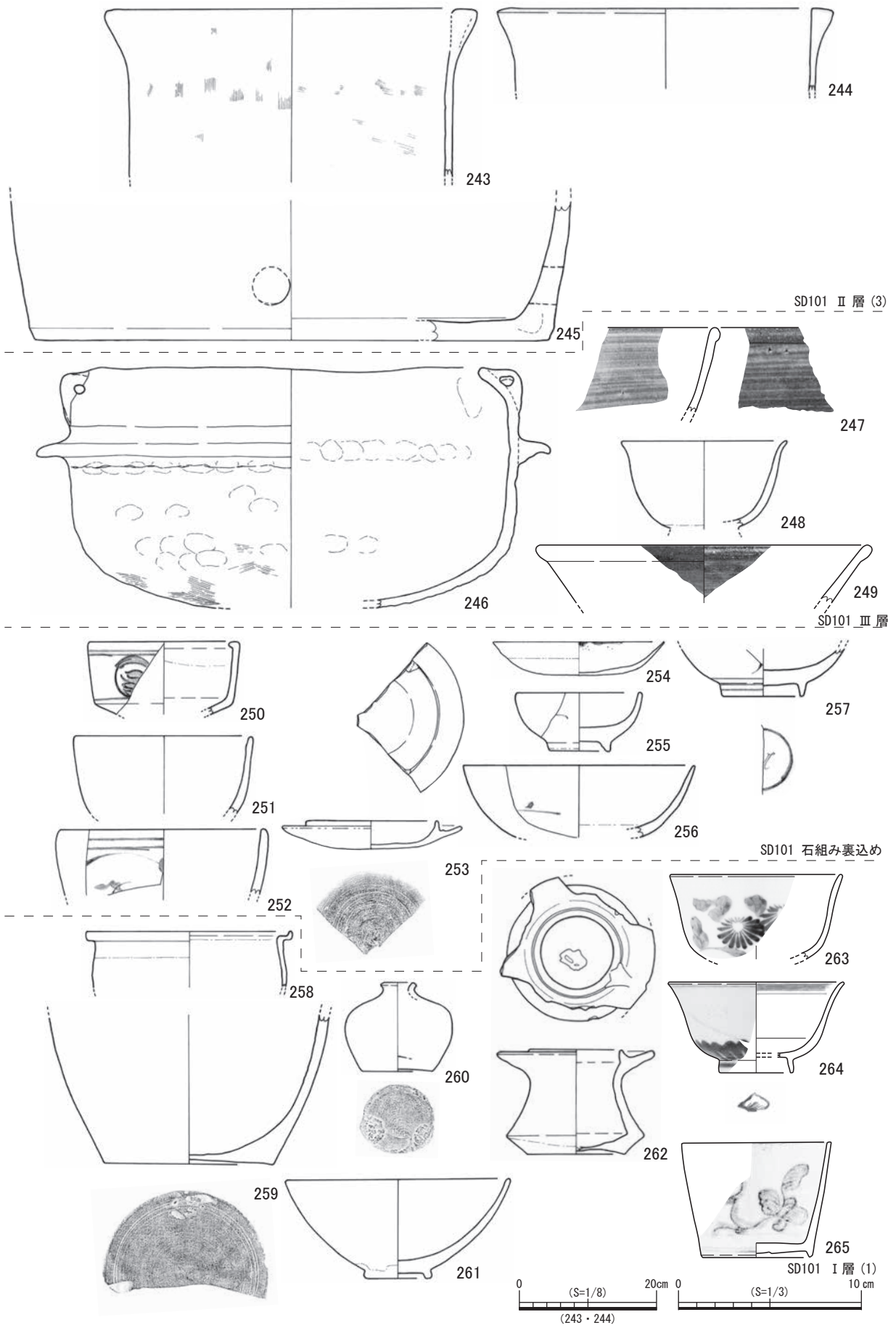
肥前系陶器では、胎土目を有する極端に古相を示す皿が見られる一方で、蛇の目釉剥ぎの見られる皿や刷毛目碗、陶胎染付碗等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。皿・碗のみならず瓶や蓋等も含まれ、器種の多様化傾向が読み取れる。皿では蛇の目凹形高台を有する資料が見られる。碗では見込中央にコンニャク印判を用いて施された菊花文を有する資料も見られるが、多くは手描きによる五花



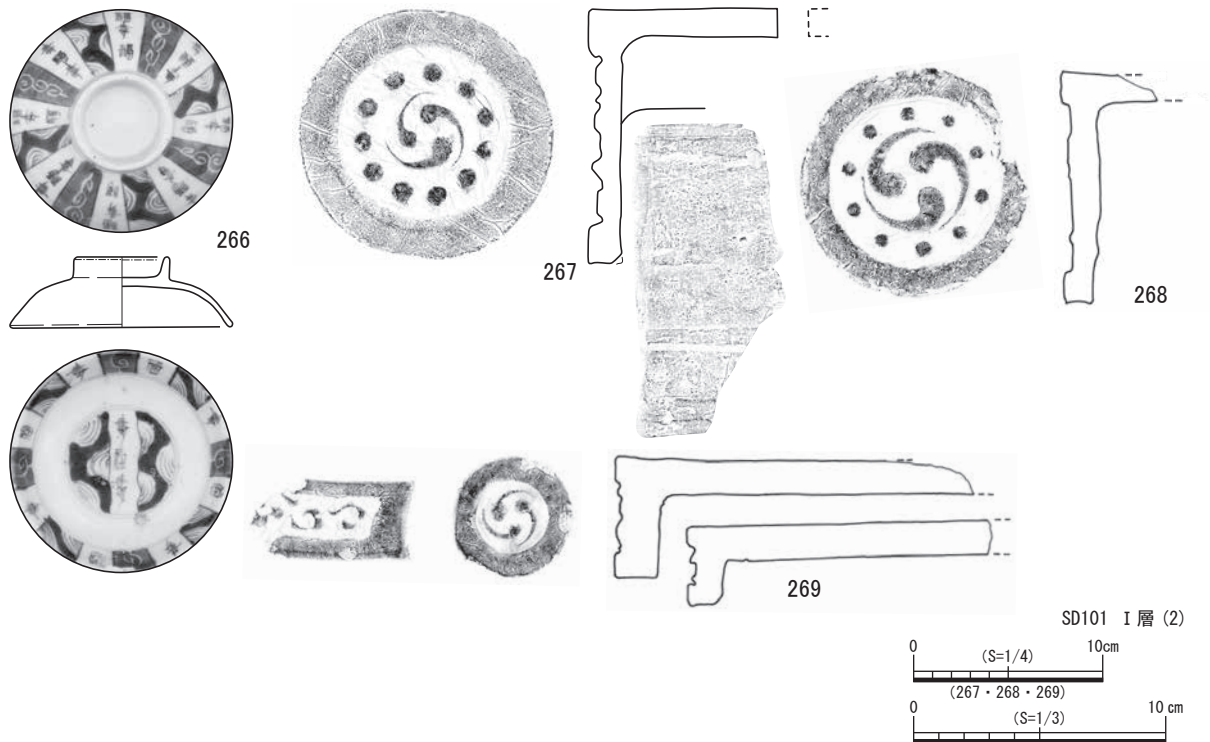
第43圖 SD101 II層(1)出土遺物



第 44 圖 SD101 II 層 (2) 出土遺物



第 45 図 SD101 II層(3)・III層・石組み裏込め・I層出土遺物



第46図 SD101 I層(2) 出土遺物

文や抽象文を施された資料である。また、広東碗が見られるが端反碗は皆無である。京・信楽系陶器では、碗が大多数を占める中、灯火具片が数点含まれる。備前系陶器では、口縁部の屈曲が鈍化した播鉢や口縁外面の凹線が極めて退化した播鉢、精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では、皿A VIと考えられる皿片や前述の大形土器③④が見られる。

このような状況から、極端に古相を示す遺物を除くと、いずれも様相6～7に属すると考えられ、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると言える。

(Ⅲ層)

Ⅲ層からは肥前系陶器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器、銅製品、燈籠形土製品が出土している。出土遺物量は極めて少量であり、残存状況も不良である。

肥前系陶器では、刷毛目碗が見られる。土師質土器では、褐色～橙色系の胎土を有する皿IXが見られる。

このような状況から、いずれも様相6～7に属すると考えられ、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると言える。

(Ⅳ層)

Ⅳ層からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器、銅製品が出土している。出土遺物量は少量であり、残存状況は不良である。陶磁器類では、軟質施釉陶

器のみ少量であり、他は同程度の割合で含まれる。

肥前系陶器では、胎土目を有する極端に古相を示す皿が見られる一方、刷毛目碗片が見られる。肥前系磁器は薄手の資料が主体となる。備前系陶器では、口縁部外面の凹線が極めて退化した播鉢が見られる。土師質土器では、褐色系の胎土を有する皿A VIII等が見られる。

このような状況から、いずれも様相6～7に属すると考えられ、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると言える。

(東側側壁裏込め土)

東側側壁裏込め土からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、軟質施釉陶器、土師質土器が出土している。陶磁器類では、肥前系陶器・磁器が主体となり、他は少量である。

肥前系陶器では、胎土目を有する皿等古相を示す遺物が見られる一方、大形鉢や大形皿、陶胎染付碗も見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、口縁部が端反り気味の碗、口銹を施した碗等が見られる。

このような状況から、極端に古相を示す遺物を除くと、いずれも様相6～7に属すると考えられ、上記遺物群の所属時期の下限は様相7であると言える。

e. まとめ

以上、SD101について遺構及び出土遺物の観察所見を列挙したが、ここで改めて簡潔にまとめる。

SD101は東側側壁裏込め土出土遺物や埋土最下層出土遺物の年代、及び様相7以降に実施された第1遺構面整地後に形成された事実から様相7に構築されたものであると考える。少なくとも西側側壁については新古2段階の側壁を確認しており、様相7段階での修築の状況がうかがえる。溝底部の南北標高差や溝内埋土の堆積状況から、常時一定量の流水があったとは考え難く、滞水状況に近い環境下にあったと考えられる。溝底部から2/3程度埋没した後、人為的に溝側壁上面まで完全に埋め立てられ、近代以降に再度幅の狭い石組み溝が形成されたと考えられる。

(5) 瓦溜まり

a. 構造（第47図）

調査区北端付近で確認した遺構である。調査区北端から南方へ4mの地点まで確認している。細かく破碎した平瓦や丸瓦を幅60cm前後、深さ約20cmの断面が緩やかなU字状を呈する溝内に敷き詰めて形成されている。瓦は北方から順次敷き詰められた状況を呈する。北端から約3mの地点で一旦東にずれ、再度南方へと延びる。残存状況が悪く主軸方向は特定し難い。瓦溜まりを構成する瓦が掘方主軸に対して直交するように据えられたと仮定すると、座標北から約11°前後東に傾く主軸方向を有すると言える。瓦溜まりの上面は水平ではなく、北端から1.5～3.0m地点を最高所として、それより北及び南方へ行くにつれて下る状況を呈する。掘方埋土はベース土である整地L層と極めて類似する。ここでは、掘削土による埋め戻しを行う必要性が低いため、風雨等に伴い、周辺の土壌が徐々に流入した結果であると考えられる。なお、北端部付近は近代以降の攪乱により、瓦が散乱している。また南端は様相7に形成された整地L層と様相8に形成された整地K層の境界付近で途切れることから、整地K層形成に際して、破壊されたと考えられる。また、上記の溝状の瓦溜まりの西方50cm程度の位置に、直径約40cmの円形を呈する同様の瓦溜まりが形成されている。両者の関係性は不明である。

b. 瓦溜まり形成時期（第48図）

前述のとおり、瓦溜まりの南端は、様相8における整地K層の形成により破壊される。よって、様相7に形成され様相8にはその機能を終え、廃絶していた可能性が高い。

瓦溜まり除去時の出土遺物としては、多量の瓦片と、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、大谷焼、鉄製品が挙げられる。瓦片以外の出土遺物は少量であり、各陶磁器が同程度の割合で出土している。肥前系陶器では、蛇の目釉剥ぎの見られる皿や刷毛目皿が含まれる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢等が出土している。大谷焼では、瓶の口縁部付近の破片が、瓦溜まりの上面から出土している。これらの状況から、陶磁器類の所属時期の下限は様相7であると考えられ、整地土との重複状況に基づく前述の認識と整合する。一方、瓦溜まりに使用された瓦は、キラコ未使用の資料のみである。軒丸瓦・軒平瓦ともに様相7前後の資料ではなく、様相1～4の比較的古相の瓦が使用されている点が特徴として挙げられる。

c. 瓦溜まりの機能

一見、建物周囲に形成された雨落ち溝に類似するが、検出範囲が狭いため、明確にしえない。また、周辺で当該瓦溜まりとセットとなるような様相7段階の建物跡は検出していない。よって、今回の調査所見からは機能を特定することができなかった。

(6) 石列

a. 位置と主軸方向（第6図）

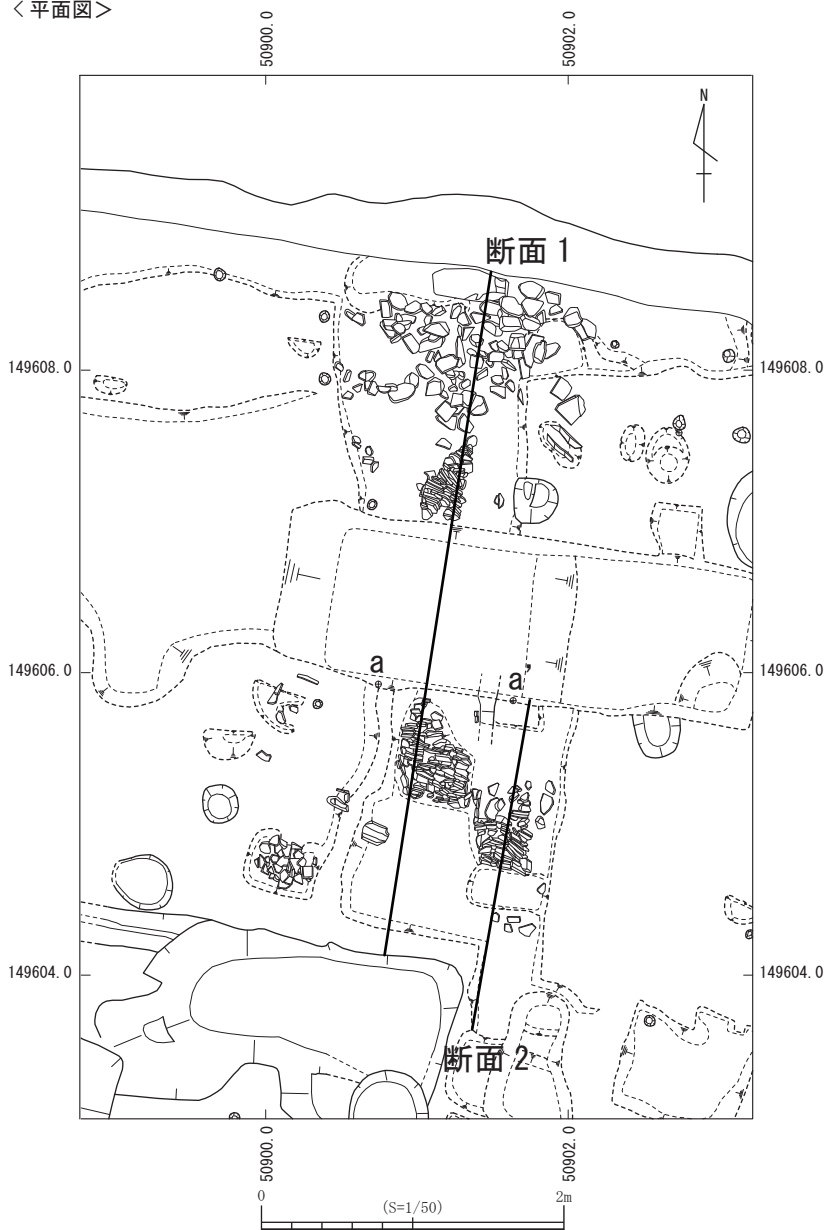
調査区南西部において検出した遺構である。石列の主軸は座標北から約82°西に傾き、西側に位置する石組溝SD101に直行する。

b. 構築方法（第49図）

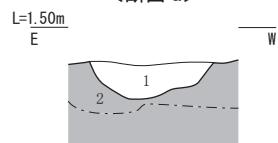
使用石材は安山岩塊石と砂岩円礫である。主たる構築材は、長軸0.9m～1.0m、最大幅0.5～0.7mの規模を有する安山岩塊石5石である。使用にあたり整形したような痕跡は見られず、節理に沿って割れた石材をそのまま使用したと考えられる。その一方で、できるだけ平坦な面を上面に向け、水平面を形成しようとした状況もうかがえる。ただし、調査時に各石材上面の標高の比較は行っていない。

西端部に位置する安山岩塊石は西側に位置するSD101との間に石材1石分、約1.2mの間隔をあけて設置されている。塊石は相互に一部接するように東西に並べられている。ただし、東から3石目と4石目の間には約1.0mの空間があり、さらに4石目と5石目の間にも約1.0mの空間がある。いずれも塊石1

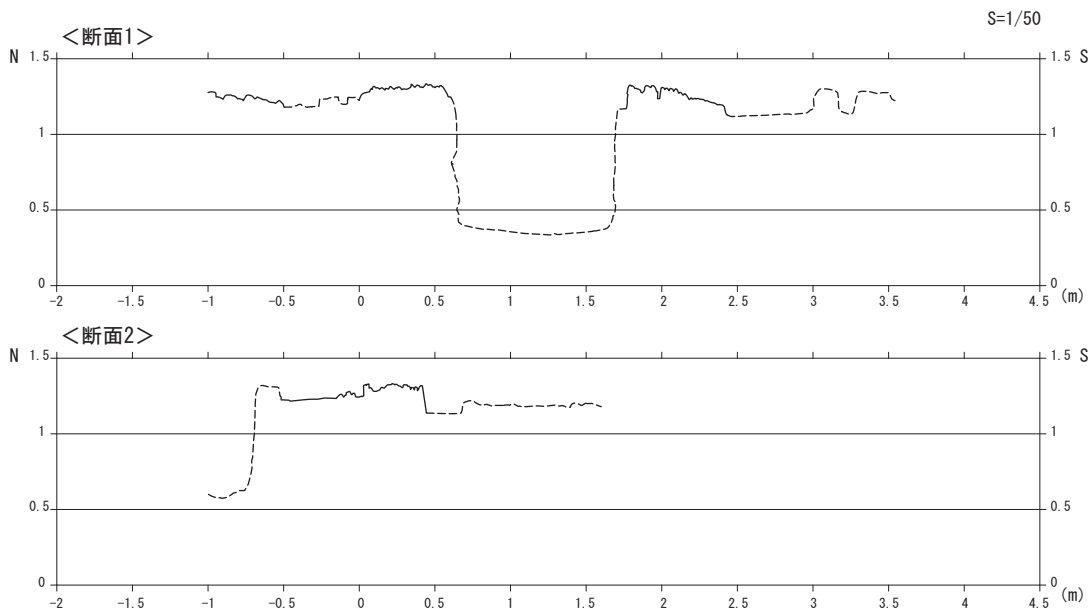
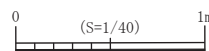
< 平面図 >



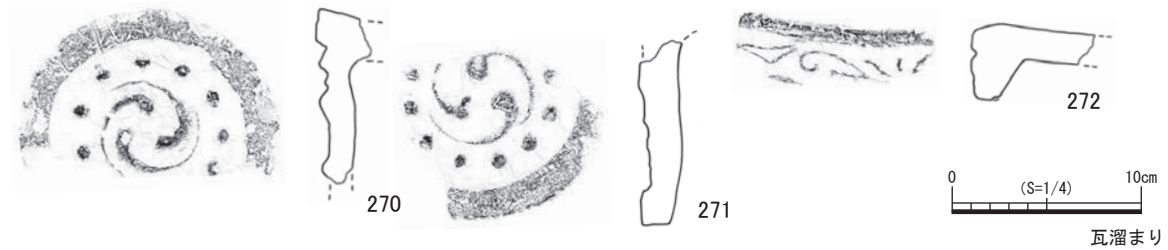
< 断面 a >



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂へシルト (2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 7%、5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 10%、瓦を多量に含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂 (10YR2/2 黒褐シルトへ粘土ブロック 3%、2.5Y4/2 暗灰黄シルトへ粘土ブロック 15%、炭化物、焼土を含む) 第1遺構面整地L層



第47図 瓦溜り 平面図・断面図 (1/50)



第 48 図 瓦溜まり出土遺物

石分である。この部分に関しては石材が後世に除去された可能性も考えられるが、当初から意図的に石材を設置しなかった可能性も考えられる。この点については、後述するように石材設置に際して掘方の掘削が行われなかったと考えられることから、抜き取り穴の有無を根拠に判断することができなかった。

前述のとおり、最西端の安山岩塊石と SD101 の間には約 1.2m の空間があり、当該空間には長軸 0.4～0.5m、幅 0.3m 程度の安山岩や砂岩円礫が散乱している。規則的な配置状況は見られず、上面レベルも揃っていない。隣接する SD101 東側側壁裏込め石と類似する石材であることから、後世の攪乱により SD101 から散乱した状態として認識することもできる。ただし、同様の石材の散乱状況は SD101 に沿って一様に見られる状況ではなく、石列と SD101 の間でのみ見られることから、本来、SD101 と石列をつなぐように、意図的に配置されていた可能性を想定することが妥当であると考える。

西から 1 石目の塊石と 2 石目の塊石の上部には長径 20～30 cm 程度の砂岩円礫が数個載せられている。また、他の塊石についても外周部付近に同様の円礫が散乱する状況が見られる。よって、これらの円礫は本来安山岩塊石と一体となって、石列を構成していた可能性が考えられる。

当初、安山岩塊石は石材据え付け用の掘方に設置されていると考え、掘方検出を目的に石材周辺の精査を行ったが、掘方を検出することはできなかった。そこで、安山岩塊石部分で断割り調査を行い、石材設置方法の検討を行った。その結果、安山岩塊石下部に直径 15～20 cm 大の円礫と第 2 遺構面ベース土である③層をブロック状に含むオリーブ黒色粘土 (10 層) や粘性の強い黒褐色シルト (9 層) が土台状に存在することが判明した。粘性の強い土壌の上に石材を据え付けることにより、石材を安定させたと考えられる。前述のとおり、安山岩塊石は加工されたような痕跡は見られず、節理に沿って剥ぎ取った状態の

まま使用されるが、一方で上面に水平な面を形成しようとする意図が設置状況からうかがえる。この目的を達するために、上記のような工夫がなされたと考えられる。また、上記粘質土及びシルトは第 1 遺構面整地土である整地 A 層及び B 層に覆われる。よって、少なくとも整地 A・B 層形成以前に安山岩塊石は設置されていたと言える。本章「(1) 整地土」で詳説したが、当該地における整地作業は南方から順次行った可能性が考えられることから、整地 A 及び B は作業工程初期段階の整地土であると言える。言い換えれば、安山岩塊石の設置は当該地における整地工事の冒頭で行われたと言えよう。

石列は本来、より東方まで伸びていた可能性が高いが、整地 D 層と A・B 層との境界付近を境に見られなくなる。また、上記整地土の境界付近に位置する西から 5 石目の石材は大きく破損している。よって、石列は様相 8 における整地 D 層形成に際して破壊されたと考えられることができる。

c. 石列形成時期

石列の土台となる粘質土及びシルトは第 1 遺構面下位の焼土層である②層上面に形成されている。また、様相 7 段階に形成されたと考えられる整地 A 層及び B 層の形成に先行して形成されたとと言える。よって、様相 7 段階に形成されたと考えられる。

次に、安山岩塊石下部の粘質土及びシルトからの出土遺物を検討し、上記の認識の裏付けとしたい。当該層からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況が不良であり、出土遺物量も少量である。陶磁器類に関しては、各種陶磁器が同程度ずつの割合で出土している。図化に堪え得る程度の残存状況を呈する遺物は存在しないが、蛇の目釉剥ぎの見える肥前系磁器皿や備前系陶器の灯明皿等が出土している。土師質土器では前述の土器②類が見られる。肥前系陶器・磁器、備前系陶器に京・

信楽系陶器や瀬戸・美濃系陶器が加わる点、断片的に確認しえた陶磁器類の特徴からこれらの遺物群は少なくとも様相6～7に属するものであると言え、前述の認識と合致する。加えて、前述のとおり、石列は調査区中央付近で様相8における整地D層形成に際して、以東の石列が破壊されている。この点も、上記の認識を傍証する。

d. 石列の機能

高松城下では、土地の境界に沿って溝をはじめとする境界構造物を設置する状況が見られることから、それらの在り方から、周辺地域の土地割りの状況を推測することができる。また、屋敷地内の建物や柵列等は、これら、境界構造物の主軸方向に合致させる傾向が見られ、土地割りの在り方と建物等各種構造物の主軸方向が密接に関係していることがわかる。

今回の調査地西辺に形成されたSD101は、周辺地域の土地割りによる規制を直接的に受けていると考えられるが、石列はSD101と直交するように形成されている。よって、ここでは建物跡や境界構造物としての用途が想定可能である。

建物跡であるとするならば、礎石列や地覆等が想定可能であるが、列状に1列検出したのみであり、他に同一建物を構成する礎石列や地覆は検出していないことから、建物跡である可能性は低いと考える。よって、石列は境界構造物の一部であった可能性が高い。後述する第2遺構面では石列直下から石列と同様の方位性を持った溝跡を確認している。溝による土地区画から構造物による土地区画へと変更した可能性

が考えられる。その場合、石列は柵列の基礎等であった可能性が考えられる。ただし、安山岩塊石上面で柱を据え付けた痕跡等は確認できなかった。

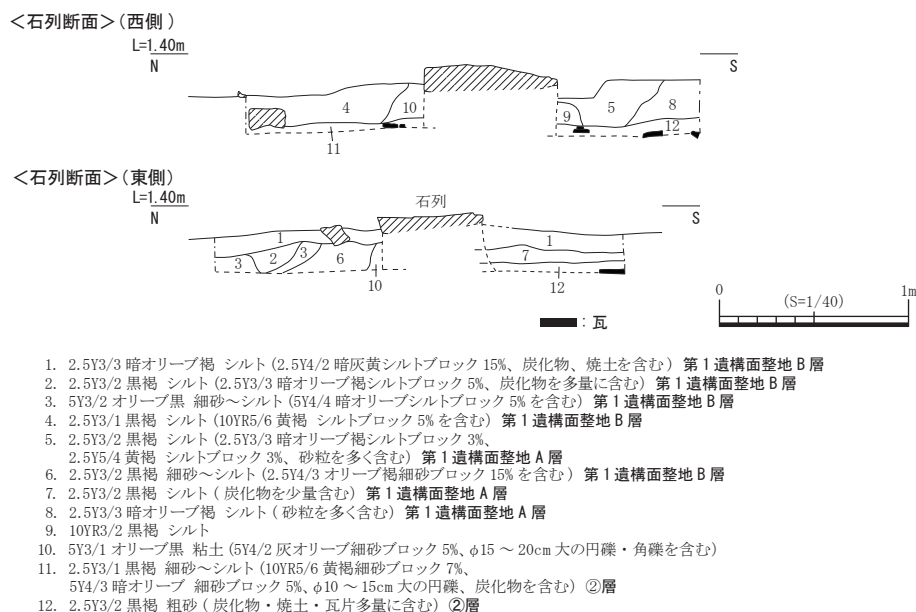
(7) 井戸

a. 調査の経緯と方法

第2遺構面重機掘削時に、調査区中央東寄りのコンクリート基礎を除去した段階で確認した遺構である。SE101が該当する。SE101はSK118と重複する位置関係にあり、SK118より後出する。よって、第1遺構面に伴う遺構であると言える。下位では木製井戸枠を伴う井戸を確認し(SE201)、第2遺構面に伴う遺構である可能性もあると考えたが、SE201埋没後、SK118が形成され、偶然的にSE101がSE201上位に形成されたとは考え難く、現実的ではないことから、同一遺構として報告する。

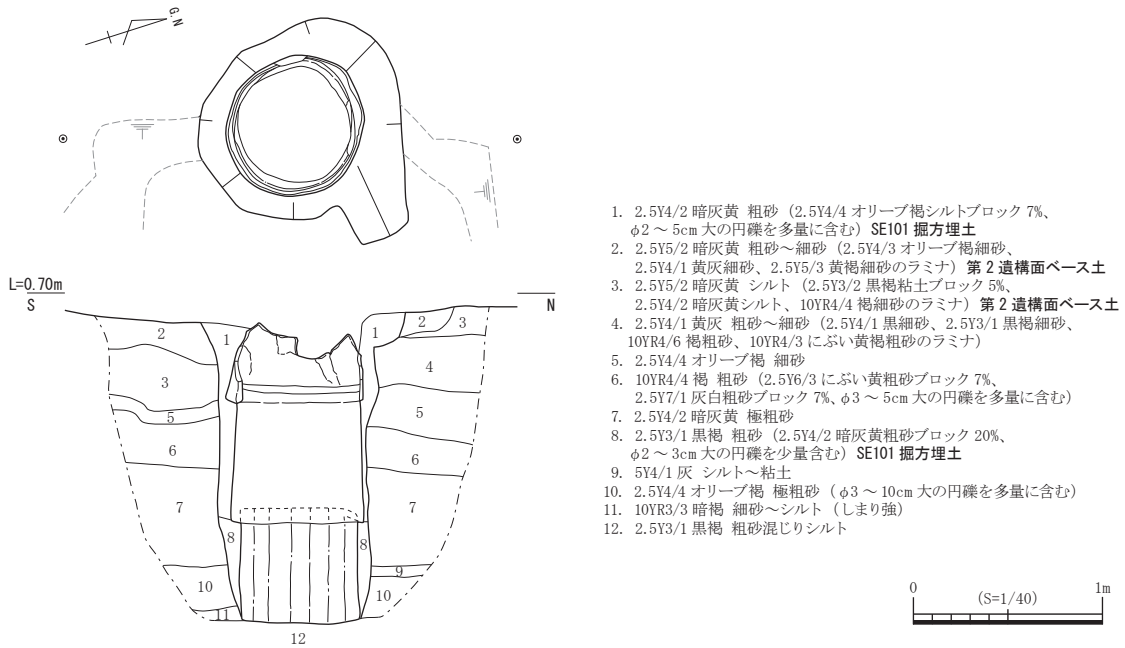
実際の調査は第2遺構面の遺構掘削時に行った。第2遺構面ベース土は砂質を呈し、極めて不安定な土質であったことから、近代の攪乱による削平が著しい井戸東半を重機で大幅に掘削し、井戸断面観察及び記録のための作業用スペースを設け調査した。なお、重機による掘削に先立ち、掘方上端等の平面的な情報の記録を行った。

なお、第1遺構面では、調査地中央付近の深さ1mを超える大規模な攪乱中から、近代以降の製品とともに井戸枠と考えられる木材や木製下駄、その他木製品が多量に出土している。本来、第1遺構面に伴う井戸跡が近代以降に破壊された可能性が考えられる。攪乱として扱ったため、詳細な記録は作成して

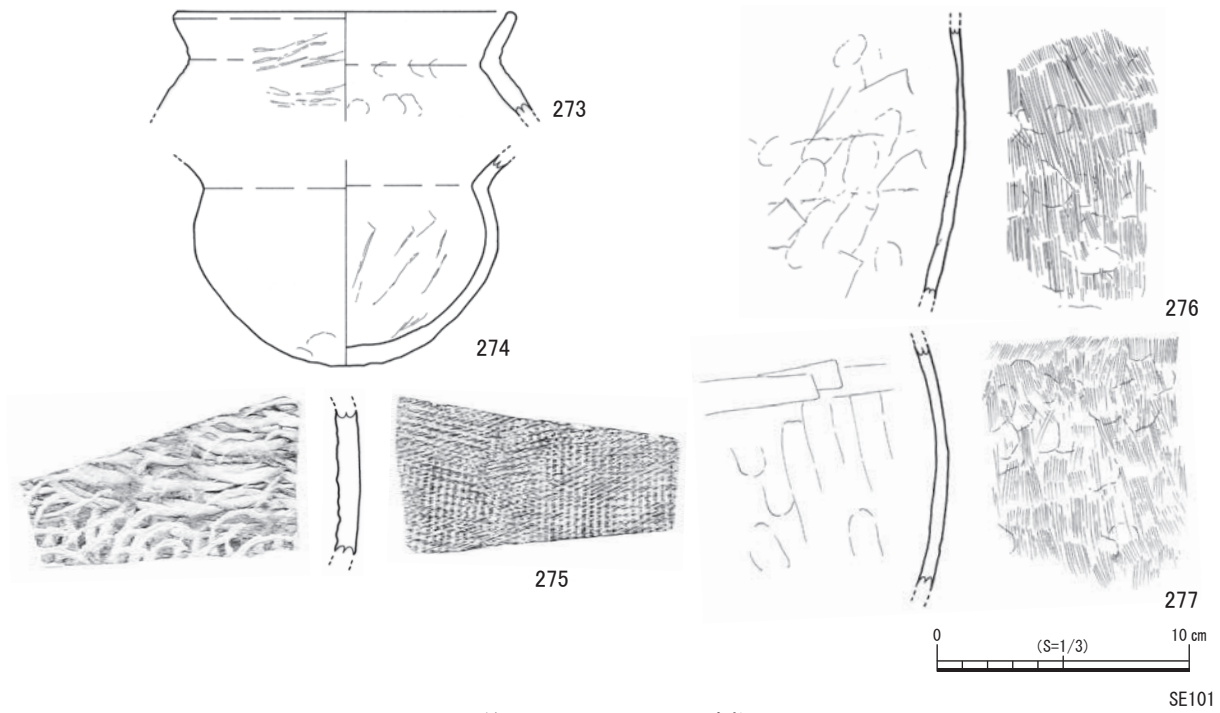


第49図 石列断面図

<SE101 (SE201)>



第50図 SE101 平面図・断面図



第51図 SE101 出土遺物

いないが、可能性として報告する。

b. 井戸の構造（第50図）

掘方掘削後、井戸枠を据え井戸枠と掘方の隙間を人為的に埋め戻すことで井戸を構築している。そのため、掘方埋土の土色・土質はベース土以下の堆積層と類似する。

掘方は検出面で直径約1.1m、底部で直径約0.6mの規模を有する平面不整形円形状を呈する。掘方底部の標高は-1.1mである。掘方埋土は小礫を多量に含む砂質を呈し③層以下の自然堆積層と類似することから、井戸枠据え付け後、掘削土を用いて埋め戻しを行ったと考えられる。

井戸枠について、下位で木製の井戸枠を1段、上位で陶器製の井戸枠を2段確認した。当初木製の井戸枠を設置していたが、後に上半部については陶器製井戸枠に取り換えられたと考えられる。木製井戸枠は直径約60cm、高さ約60cmを有する。幅約10cm、長さ約60cmに加工された板材を組み合わせ、竹紐で固定することで形作られている。一方、陶器製井戸枠は上端部直径約65cm、下端部直径約70cmと、下方に向かいやや広がる形態を呈する。高さは約70cmである。上端部付近にヘラ等の工具を用いて施されたと考えられるX字状の文様帯が見られる。

c. 出土遺物（第51図）

井戸枠内側からは様相7～近代の遺物が出土し、多量の焼土で最終埋没を遂げていることから、井戸の廃絶は太平洋戦争前後であると言える。

一方、掘方埋土からは弥生土器、土師質土器、須恵器が出土している。273は弥生土器甕口縁部である。外面から叩き締められた痕跡が残り、口縁部がく字状に強く屈曲する形態から、下川津IV～V式（弥生時代後期後葉）に属する遺物であると言える。275は須恵器片である。外面には平行叩き痕が残存するが、一部二次調整によりナデ消されている。内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。調整痕のみからの推測であるが、TK43～209並行期の甕胴部片である可能性が考えられる。

274は土師器小型丸底壺であると考えられる。外面底部付近には指頭圧痕が残存するが、全体に丁寧なナデ調整が加えられている。内面には底部付近から頸部にかけて一単位として施された板ナデの痕跡が顕著に残存する。頸部付近については、頸部を整形する際に施された指ナデにより板ナデ痕が消失して

いる。

276及び277は薄手で、器種不明の土師質土器である。276は指オサエによる成形後、外面には細かく丁寧な縦方向のハケ調整が施されている。また、二次的に加熱されたことにより外面が黒く変色している。内面には指ナデ又は板ナデが施される。以上の特徴から、276は様相4以前の深手の焙烙片である可能性が高い。類似した特徴を有する277についても同様に様相4以前の深手の焙烙である可能性が高いと言える。

2 第2遺構面（第52図）

第2遺構面は③層上面に対応する。以下、遺構の種類ごとに観察所見を記載する。第1遺構面と同様に、攪乱をはじめとする上位面からの掘り込みを先行して完掘し、その後調査区南端部壁際の遺構から順次掘削を開始した。以下では、攪乱であることが明白であると判断したものを除き、すべて遺構として扱う。

(1) ピット

a. 概要（第53・54図）

第1遺構面同様、ここでは便宜的に直径50cm以下の遺構をピットとして報告する。

第2遺構面において計18基のピットを確認した。調査区東半部及び南西端部付近に分布する。規模は直径20～50cmで、特に20～30cm程度に集中する。また深度は10～20cmであり、10cm程度のピットと、20cm程度のピットが同程度存在する。

埋土は3種類に分類可能である。遺構ベース土と色調・土質の類似する埋土（砂質土）、遺構ベース土とは異なるシルト～粘土系の埋土、炭化物・焼土を多量に含む砂質の埋土である。砂質土を埋土とするピットは、柱据え付け時の掘方埋め戻しに際して、又は柱撤去後の埋戻しに際して掘削土や遺構周辺の土を利用した、あるいは風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込んだ結果であると考えられる（SP204～209・211・213～217）。シルト～粘土の埋土は、第1遺構面を構成する整地土と類似する。よって、シルト～粘土を埋土とするピットは第1遺構面整地直前まで埋没せずに残存した遺構である可能性が高い（SP202・203・218）。埋土に多量に含まれる炭化物や焼土は第2遺構面上面に堆積する②層に由来すると考えられる。この場合も、第2遺構面放棄直前まで埋没せずに残存したピットであると考えられる（SP201・210・212）。

柱痕を有するピットはSP208・212・213・215の4基のみである。これらは柱除去に際して、根本付近から切除され、土中の柱材が痕跡的に残存した結果として捉えられる。柱穴を再掘削し、柱材を抜き取ろうとした痕跡を明確に有するピットは第2遺構面では皆無である。

b. 掘立柱建物の復元

上記のピットのうち、分布状況及び埋土の特徴に基づき、少なくとも2棟の掘立柱建物を復元することができる。と考える。

SP201～203 調査区中央東端部で確認した掘立柱

建物跡であると考えられ、調査区東外方へと広がる可能性がある。同様の規模・埋土を呈する点、後述するSP204～208で構成される掘立柱建物跡と主軸方向が合致する点から掘立柱建物跡であると判断した。SP202とSP203は近接することから、建物の修築が想定可能である。東西棟か南北棟かは判断できない。また、確認しえた柱列は1列分のみであり、建物の広がり不明である。主軸は座標北から約8°東へ傾く。柱間間隔は約2.2mである。柵列である可能性もある。

SP204～208 調査区北東端部付近で確認した掘立柱建物跡であると考えられる。SP205とSP206、SP207とSP208は近接することから、建物の修築が想定可能である。柱列は1列分確認しており、建物の広がり不明である。柵列である可能性もある。主軸は座標北から約8°東へ傾く。柱間間隔は約1.0mである。

c. 出土遺物

ピット出土遺物は極めて少量であり、残存状況が不良な資料のみであることから実測図を掲載していないが、遺物が出土した遺構についてのみ、その観察所見を記載する。

SP206 器種不明の土師質土器片が1点のみ出土している。

SP211 備前系陶器大甕片1点のみ出土している。

SP213 土師質土器と瓦片が少量出土している。いずれも残存状況は不良である。土師質土器では、褐色の胎土を呈する皿AⅢや焙烙が見られる。土師質皿の形態から少なくとも様相3以降に属する遺物群であると考えられる。

SP218 肥前系磁器碗の破片が1点のみ出土している。高台断面U字形状を呈し、厚手・粗製の碗である。よって、少なくとも様相5以降に属するものであると考える。

（まとめ）

以上、ピット出土遺物の所見を記載した。出土遺物が少量であり傾向を把握し難いが、少なくとも様相6以降の遺物は見られないと言える。

(2) 土坑（第55・57～60図）

a. 概要

第1遺構面同様、ここでは長軸50cm以上の規模を有する遺構を土坑として報告する。

第2遺構面において計33基の土坑を確認した。調

査区ほぼ全域に分布している。検出した土坑は大きく3種類に分類可能である。大形土器据え付け土坑、廃棄土坑、その他である。

土坑の埋土は第2遺構面ピットと同様の観点から、2種類に大別できる。遺構ベース土と色調・土質の類似する埋土（砂質土、砂粒や礫の混ざるシルト）、遺構ベース土とは異なるシルト～粘土系の埋土である。砂質土を埋土とする土坑は、人為的な埋戻しに際して遺構周辺の土を利用した、あるいは風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込んだ結果であると考えられる（SK201・203・204・206～208・210～212・214・216・218～220・222～226・228・230～231）。ただし、SK207は砂質土を埋土とするが、周辺ベース土と色調が極端に異なる。調査区北東部を除く全域に分布する。シルト～粘土の埋土は、第1遺構面を構成する整地土と類似する。よって、シルト～粘土を埋土とする土坑は第1遺構面整地直前まで埋没せずに残存した遺構である可能性が高い（SK202・205・209・213・215・217・221・227・229・232）。調査区北西端付近や南辺付近、SD203付近に局所的に分布する。なお、シルト～粘土層を埋土とする遺構の中には、掘方が極めて浅く、壁が比較的緩やかに立ち上がる土坑が見られるが、これらは、上位整地層の局所的な入り込みである可能性も考えられる。また、砂質土を埋土とする遺構についても、上層にシルト～粘土、炭化物・焼土が薄く堆積する場合が見られる（SK208・212・214・220）。これらは、第2遺構面放棄時に、未だ完全埋没しない状態で残存していた可能性が考えられる。埋土に多量に含まれる炭化物や焼土は第2遺構面上面に堆積する②層に由来すると考えられる。

以下、3種類の土坑それぞれについて、個別に詳細を記載する。

b. 大形土器据え付け土坑

（構造・埋土）（第55図）

SK201が該当する。SK212・213と重複する位置関係にあり、少なくともSK212に先行する。SK213との前後関係は確認していないが、後述するようにSK201がSK213より先行すると考えられる。

掘方は、長軸約1.9mの極めて歪な平面形を呈する。現状での深さは約0.6mである。後述する大形土器は、掘方のほぼ中央に設置される。掘方底部は大形土器据え付け箇所が最も深い形状を呈する。また、底部からの湧水が激しい。

掘方埋土は、黄色系細砂や粗砂であり、ベース土

である③層以下の堆積層と類似する。よって、③層上面から掘削され、大形土器据え付け後、掘削土を用いて人為的に埋め戻したと考えられる。大形土器内部の堆積層も③層以下の堆積層と類似するが、掘方埋土とは異なり、焼土や礫、木片等を多量に含む。また、極めてしまりが悪い。よって、大形土器内部は人為的に粗く埋め戻された可能性が高い。

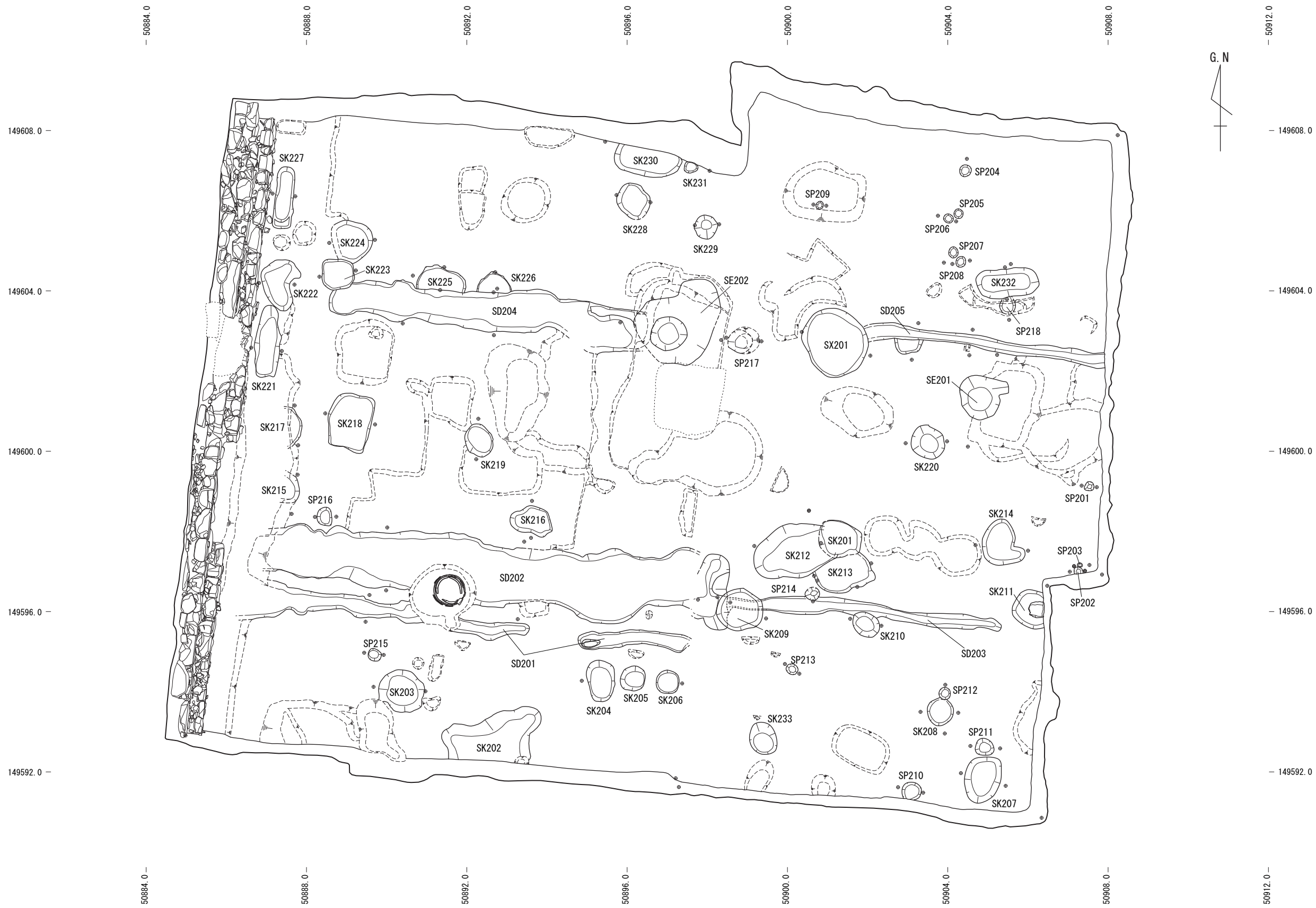
前述のとおり、SK201は後出するSK212に西側を破壊されている。SK212は長軸2.0m以上、短軸約1.4mの規模を有する長楕円形を呈し、深さは約0.3mで壁は緩やかなスロープ状に壁が立ち上がる。SK212の掘削意図は不明であるが、埋土にSK201に据え付けられた大形土器の破片が多量に含まれることから、SK201廃絶に際して、形成された遺構である可能性も考えられる。なお、SK201との前後関係を調査時に確認できていないが、後述するようにSK213についても埋土の特徴からSK201より後出する可能性が指摘でき、SK212と同様にSK201廃絶に際して形成された遺構である可能性が高い。

（大形土器の概要）（第56図）

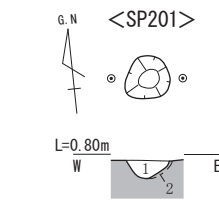
高さ約87cm、口縁部径約62cm、底部径約40cmの規模を有する甕である。丸みを帯びる底部から外反気味に体部が直線状に立ち上がり、底部から約68cmの高さで体部径が最大となる。

底部は丸みを帯びるが、外面の下端から約5cm上位で屈曲点が形成される。また、外面屈曲点のやや上位では、粘土のたわみや接合痕が確認できる。内面でも当該高さに対応する部分で粘土接合痕が確認できる。当該部分では、内外面ともにハケ調整やナデ調整により当該粘土接合痕を消そうとする傾向がみられる。これらの状況から、胴部と底部を別作りし、成形途上で接合したと考えられる。

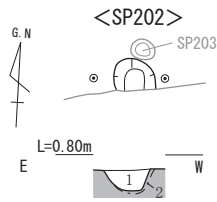
体部最大径付近から上位では、体部は内傾気味に立ち上がり、頸部でく字状に屈曲して口縁部へと至る。前述のとおり、体部と底部は成形途上で接合されたと考えられることから、少なくとも底部接合段階では、器体が上下反転していたと考えられる。この時、口頸部に相当する箇所には、器体の自重がかかり、歪みが生じる可能性があることから、この段階では口頸部は形成されていなかったと考えられる。つまり、口頸部以上についても底部接合後に別作りで接合されたと考えられる。頸部と口縁部との間にはわずかな段が形成されているが、当該段は口頸部の接合に際して、体部上端を擬口縁状に成形した痕跡、ある



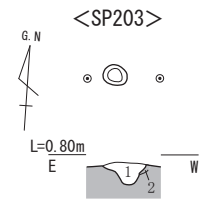
第 52 図 第 2 遺構面遺構配置図 (1 / 100)



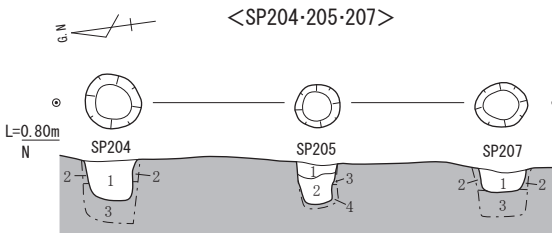
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり粘土 (2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 7%、2.5Y5/6 黄褐 シルトブロック 3%、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (2.5Y4/1 黄灰 粗砂ブロック 5%、5Y5/3 灰オリブ シルトブロック 10%、φ2～5cm 大の円礫を多量に含む) 第2 遺構面ベース土



- 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y5/4 オリブ細砂ブロック 15% を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～シルト (2.5Y4/6 オリブ褐細砂～シルトブロック 15% を含む) 第2 遺構面ベース土



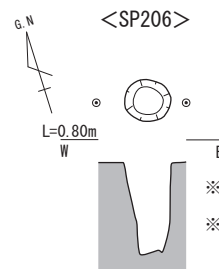
- 10YR3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 5%、10YR5/6 黄褐 粘土ブロック 1%、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y5/6 黄褐細砂ブロック 15%、2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～シルトブロック 5% を含む) 第2 遺構面ベース土



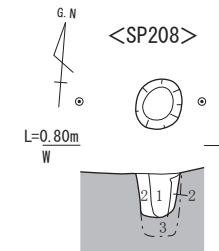
- 【SP204】**
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (2.5Y5/3 黄褐粘土ブロック 3%、2.5Y4/3 暗オリブ細砂～シルトブロック 3%、φ2～3cm 大の円礫を含む)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 40%、2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 20%、炭化物を多量に含む) 第2 遺構面ベース土
 - 2.5Y4/1 黄灰 粗砂 (2.5Y4/3 オリブ褐粗砂ブロック 30% を含む)

- 【SP205】**
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 (2.5Y4/3 オリブ褐粗砂ブロック 20% を含む)
 - 2.5Y4/3 オリブ褐 粗砂 (2.5Y3/2 黒褐粘土ブロック 3%、2.5Y3/2 黒褐 粗砂ブロック 5%、φ2～3cm 大の円礫を含む)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 40%、2.5Y4/3 オリブ褐 シルトブロック 20%、炭化物を多量に含む) 第2 遺構面ベース土
 - 2.5Y3/3 暗オリブ褐 粗砂 (φ2～3cm 大の円礫を多量に含む)

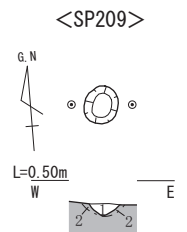
- 【SP207】**
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト (2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 3%、5Y4/3 暗オリブシルトブロック 5% を含む)
 - 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 40%、2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 20%、炭化物を多量に含む) 第2 遺構面ベース土
 - 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (φ2～5cm 大の円礫を多量に含む)



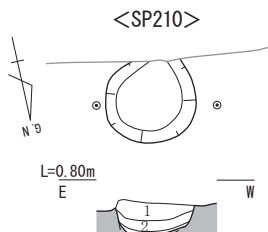
※実際の掘方はエレベーション図より浅い (SP204・205・207・208 と同じくらい)
※柱痕は見られないが、埋土の色・土質は SP204・205・207・208 に似る



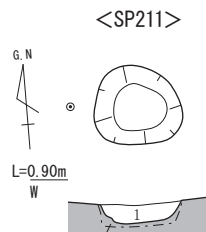
- 10YR3/1 黒褐 細砂混じり粘土 柱痕
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 5% を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/4 オリブ褐シルトブロック 40%、2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 20%、炭化物を多量に含む) 第2 遺構面ベース土



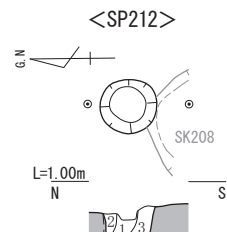
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂
- 2.5Y6/2 灰黄 シルト 第2 遺構面ベース土



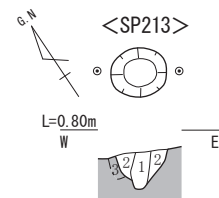
- 10YR3/1 黒褐 粘土 (焼土塊を多量に含む)
- 10YR3/1 黒褐 粘土 (5Y5/2 灰オリブ粘土ブロック 7%、炭化物を少量含む)
- 5Y3/2 オリブ黒 細砂混じり粘土 (炭化物を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/4 暗オリブ細砂ブロック 20% を含む) 第2 遺構面ベース土



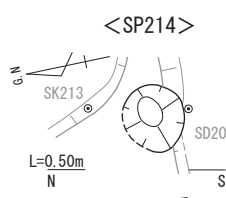
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/4 暗オリブシルトブロック 7%、φ1～3cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む)
- 2.5Y4/3 オリブ褐 粗砂 (φ2～3cm 大の円礫を多量に含む) 第2 遺構面ベース土



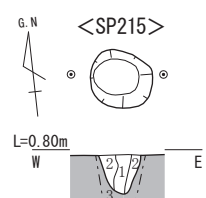
- 2.5Y3/1 黒褐 粗砂混じり粘土 (焼土を少量含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 7%、焼土を含む)
- 10YR3/2 黒褐 粗砂～細砂 (5Y4/2 灰オリブ粘土ブロック 5%、炭化物・焼土を多量に含む)
- 5Y4/2 灰オリブ 細砂 (5Y4/3 暗オリブシルトブロック 25% を含む) 第2 遺構面ベース土



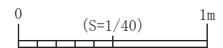
- 2.5Y3/1 黒褐 細砂混じり粘土 柱痕
- 2.5Y3/3 暗オリブ褐 粗砂混じり細砂 (2.5Y4/1 黄灰粗砂ブロック 7%、2.5Y4/3 オリブ褐細砂～シルトブロック 3% を含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 (5Y5/6 オリブ細砂～シルトブロック 3%、炭化物・焼土を多量に含む) 第2 遺構面ベース土



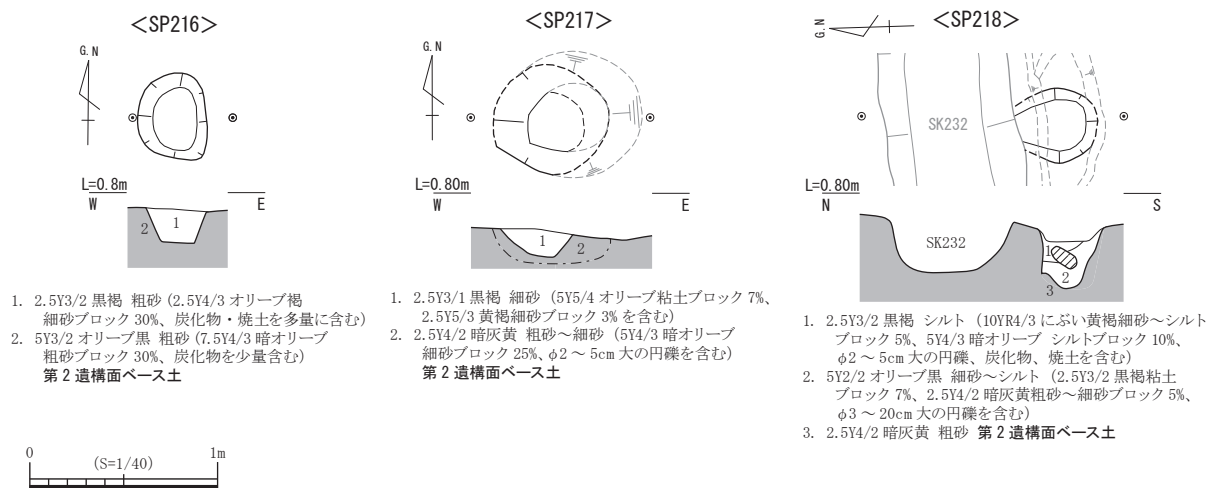
- 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (5Y4/3 暗オリブ粗砂ブロック 10%、φ2～5cm 大の円礫を多量に含む)



- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y3/1 黒褐細砂ブロック 10% を含む) 柱痕
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂 (2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 5% を含む)
- 2.5Y5/3 黄褐 粗砂 第2 遺構面ベース土



第 53 図 柱穴平面図・断面図 (1)



第 54 図 柱穴平面図・断面図 (2)

いは体部と口頸部の接合部の強度を増すために貼り付けられた粘土帯の痕跡である可能性も考えられる。

続いて、調整痕についての所見を記載する。外面はハケ調整後板ナデが施される。体部最大径以上では、ハケ目が完全に消滅しているが、体部最大径より下方では痕跡的に残存する。板ナデは、体部最大径以上では横方向が主体となる一方、体部最大径より下方では、縦方向が主体となる。よって、少なくとも板ナデについては、口頸部接合後、器体の上下が正常位になった段階で施されたと考えられる。一方、内面は全体的にハケ調整が施される点で外面と共通するが、その後のナデ調整を欠く。底部から 10cm 程上位までは横方向のハケ調整が主体となる。底部から 10cm 程度の地点から体部最大径付近までは様々な方向のハケ調整が入り混じるが、下方では縦方向、上方ほど横方向が主体となる傾向が読み取れる。体部最大径より上位では横方向が主体となり、口縁端部付近まで施される。なお、外面中位付近には墨描きによる文様が見られる。

以上、改めて SK201 に伴う大形甕の製作手順の試案を示す。まず、胴部をある程度の高さ（底部付近の屈曲部から口頸部付近までの高さ）まで成形した後、別作りの底部を接合する。この際、天地が逆転した状態で作業が行われたと考えられる。その後、天地を正常位に反転し、別作りの口頸部を接合する。その後、内外面にハケ調整やナデ調整を施し、仕上げたと考えられる。上記の製作手順は、第 1 遺構面で見られた土器②類～④類にも引き継がれたと考えられ、同一系譜の資料として捉えられる。特に土器④類では、口縁部下に段状あるいは帯状に隆起した部分が見ら

れ、しばしば X 文等の装飾が施されている。これらは、SK201 で見られた大形甕の口縁部下方の段が痕跡的に残存した状態として捉えられる。

(出土遺物) (第 56 図)

掘方埋土と甕内側埋土に分けて遺物を取り上げた。いずれも出土遺物は少量であり、残存状況も不良である。出土遺物は、肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器であり、肥前系陶器が主体となる。また、比較的残存状況が良いものも肥前系陶器である。

掘方埋土からは、高台断面逆台形状を呈し白化粧土をかけられた肥前系陶器大皿や内面に横方向のハケ調整を施した厚手の土師質鍋又は焙烙等が出土している。甕内部の埋土からは、高台高の低い肥前系陶器皿や備前系陶器の瓶等が出土している。これらの状況から、上記遺物群は様相 2～3 に属するものであると考える。

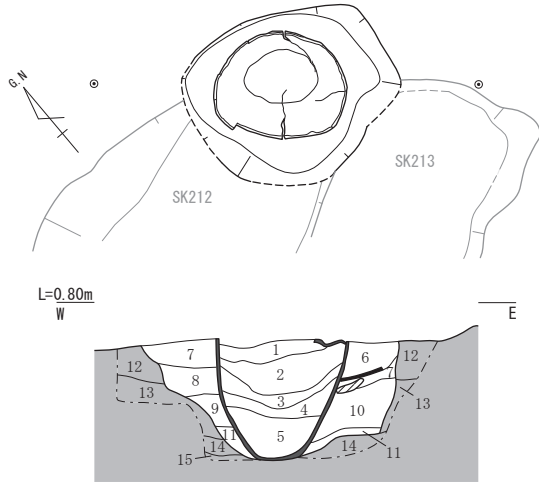
c. 廃棄土坑

(廃棄土坑の観察所見)

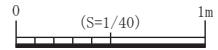
ここでは、埋土に一括性のある極めて多量の遺物が出土した土坑を廃棄土坑として、その観察所見を記載する。SK202・232 が該当する。

SK202 (第 57・61 図) 調査区南壁際で確認した土坑である。長軸約 2.5m の規模を有し、平面形は不定形である。調査区南方へと延びる。深度は現況で最大約 0.4m である。底部は凹凸が多く、壁面の立ち上がりは極めて緩やかである。土坑内は、直径 5～20cm 大の円礫・角礫や焼土、陶磁器片等を極めて多量に含む黒褐色粘土の単層で充填されていることから、

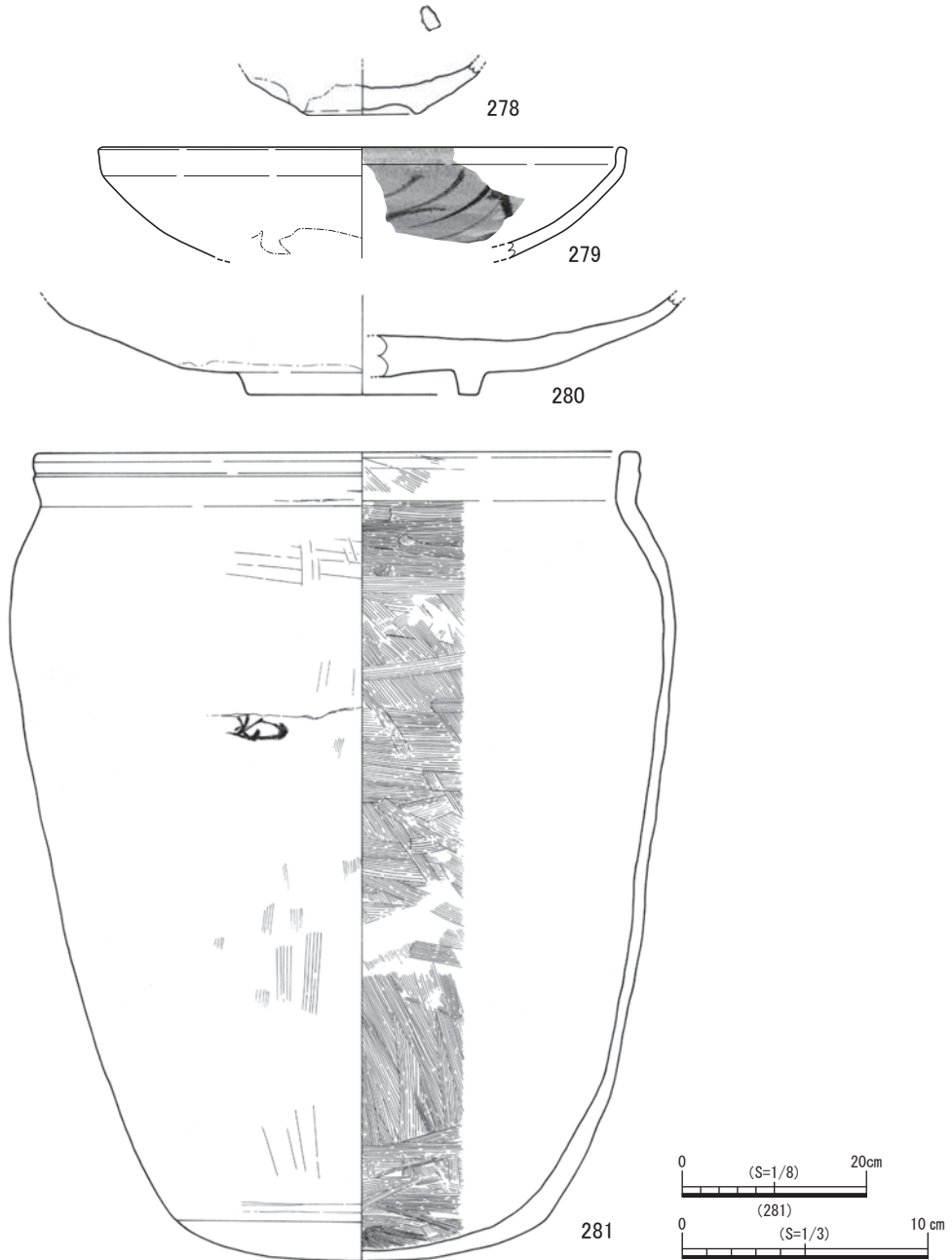
<SK201>



1. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (5Y4/3 暗オリブ細砂～シルトブロック 10%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (5Y5/4 オリブシルトブロック 7%、 $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫、木片を含む)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂～細砂 (木片を含む)
4. 2.5Y4/4 オリブ褐 細砂
5. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (2.5Y3/1 黒褐粘土ブロック 15%、2.5Y4/3 オリブ褐粗砂ブロック 10%、炭化物・木片を多量に含む)
6. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y4/3 オリブ褐シルトブロック 10%、 $\phi 2 \sim 3\text{cm}$ 大の円礫を少量含む)
7. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂 (2.5Y4/4 オリブ褐シルト、5Y4/4 暗オリブシルト、10YR4/3 にふい黄褐粗砂のラミナ)
8. 10YR4/2 灰黄褐 細砂 (5Y4/4 暗オリブシルトブロック 30%、2.5Y4/2 暗灰黄粗砂～細砂ブロック 5%を含む)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (10YR4/6 褐細砂ブロック 7%、木片を含む)
10. 2.5Y5/3 黄褐 細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄細砂ブロック 30%を含む)
11. 2.5Y4/1 黄灰 細砂
12. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/4 暗オリブ細砂ブロック 10%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫を多量に含む) **第2遺構面ベース土**
13. 2.5Y5/3 黄褐 細砂 (2.5Y4/1 黄灰細砂ブロック 40%を含む)
14. 10YR3/4 暗褐 粗砂
15. 5Y3/1 オリブ黒 粘土



第55図 大形土器据え付け土坑平面図・断面図



第56図 SK201 出土遺物

SK201

廃棄土坑であると判断した。

埋土からは肥前系陶器・磁器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦、軒平瓦が出土している。出土遺物の主体となるのは肥前系陶器であり、残存状況も出土遺物の中では比較的良好である。肥前系陶器では、胎土目又は砂目を有する皿や溝縁皿、碗が出土している。備前系陶器では、丸みを帯びた体部及び大きく肥厚した口縁部を有する甕、卸目の粗な小形の挿鉢が見られる。軒平瓦や軒丸瓦は様相2～3の特徴を示す。瓦当に珠文のみ施された軒平瓦も見られ、中世に属する可能性が高い。このように、本遺構からは残存状況の良好な比較的古相の遺物がまとまって出土している。上記遺物群の所属時期の下限は様相2～3であると考えられる。

一方で、肥前系陶器刷毛目碗や高台断面U字形状又は三角形状を呈する薄手の肥前系磁器、土師質焙烙や皿A VIも出土している。前述の古相の遺物に比して残存状況は不良である。これらの遺物群は、様相5前後に属するものであると考える。よって、本遺構は様相5前後に形成された廃棄土坑であると考

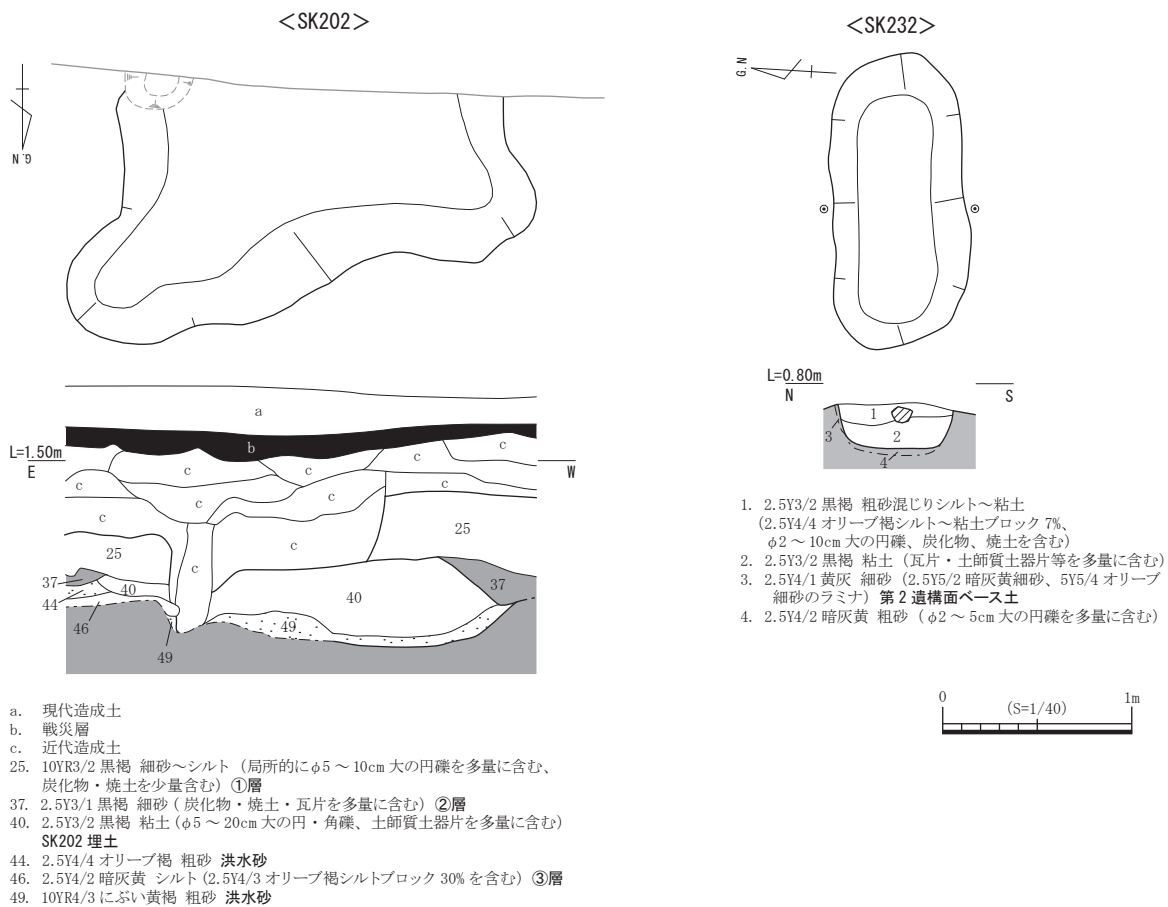
えられ、伝世的に使用された日用雑器を中心に廃棄したと考えられる。

SK232 (第57図) 調査区北東部で確認した土坑である。SP218と重複する位置関係にあり、SP218より後出する。長軸約1.6m、短軸約0.7mの平面長楕円形状を呈する土坑である。深度は現況で約0.2mであり、底部断面は逆台形状を呈する。土坑下半は瓦片や土師質土器片等を多量に含む黒褐色系粘土で埋没し、上半部に遺物の少ない黒褐色系シルト～粘土層が堆積する。

埋土出土遺物は多量であるが、残存状況が不良なものが多い。肥前系磁器角皿や備前系陶器、土師質土器、軒棧瓦等が見られる。このような状況から、上記遺物群の所属時期は少なくとも様相5以降であると考えられる。

(まとめ)

以上、廃棄土坑の観察所見を記載した。第2遺構面では、第1遺構面で指摘したような他の構造物を廃棄土坑として転用した可能性が高い事例は見られ



第57図 廃棄土坑平面図・断面図

ない。SK202では第2遺構面で検出した他の遺構形成時期よりも古相の遺物が主体となるが、出土遺物の下限は様相5前後である。また、SK232からも少なくとも様相5以降の遺物が出土しており、両遺構ともに様相5前後に形成されたものであると考えられる。

d. その他の土坑

(その他の土坑の観察所見) (第58～64図)

ここでは、前述した以外の土坑について、出土遺物の観察所見を中心に記載する。また、特徴的な状況を呈する土坑の場合についてのみ、その所見を記載することとし、他の詳細は第58～60図を参照されたい。

SK203 備前系陶器甕片数点と器種不明の土師質土器片が出土しているのみである。遺物の残存状況は不良であり、出土量は少量である。

SK204～206 東西に並列する土坑群である。SK204のみやや南北に長い形態を呈するが、SK205・206は直径約0.6m程の平面円形状を呈する。SK204の短軸長も約0.6mである。3基の断面形状はいずれも逆台形状を呈し、底部レベルもほぼ揃っている。しかしながら、埋土には明確な差異が見られる。SK204・206は砂質を呈する埋土であるが、SK205はシルトで埋没する。また、SK205のみ多量の炭化物を含む。用途や埋没時期、埋没過程がSK204・206とSK205では異なる可能性が高い。

SK204からは、肥前系磁器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦が出土している。残存状況は不良であり、出土遺物量も少量である。軒丸瓦は珠文数が多く古相を呈する。軒丸瓦の瓦当文の特徴から、少なくとも様相2以降に属する遺物群であると考えられる。

SK205からは、肥前系青磁瓶1点及び焙烙片が数点出土しているのみである。残存状況はいずれも不良である。肥前系青磁の瓶が見られることから、上記遺物群の所属時期の下限は少なくとも様相5以降であると考えられる。

SK206からは、肥前系陶器皿片1点と薄手の肥前系磁器片1点、鉄製品が出土しているのみである。これらは少なくとも様相5以降に属する遺物群であると考えられる。

SK207 肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。比較的残存状況は良好であり、出土遺物量も多量である。この中で、肥前系磁器及び備前系陶器が大多数を占める。肥前系磁器では、高台断面逆台形状を呈する低い高

台の皿、外面に一重網目文を施した薄手の碗が見られる。瀬戸・美濃系陶器では、高台断面U字状を呈し、比較的高い高台を有する碗が見られる。土師質土器では皿が見られ、暗い褐色系や白みがかかった褐色系の胎土を呈する皿A V・VIが見られる。このような状況から、上記遺物群は様相5～6の遺物群であると考えられる。

SK208 直径10～30cm大の円礫を含む埋土で検出面付近まで埋没しており、人為的に埋め戻された土坑であると考えられる。出土遺物は皆無である。

SK209 SD202・203と重複する位置関係にあり、最も後出する。埋土に②層に由来すると考えられる炭化物・焼土を多量に含む。出土遺物は皆無である。

SK210 下位の第3遺構面調査時に検出した遺構である。第2遺構面をベースとするSD203より後出することから、第2遺構面の遺構として取り扱った。出土遺物は皆無である。

SK211 調査区東壁際で検出した遺構であり、調査区外へと延びる。直径約1.0mの円形状を呈する土坑であると考えられる。現況の深さは、約25cmであり、土坑底部は平坦な面を呈する。土坑のほぼ中央に南北約0.4m、東西0.4m以上の規模を有する砂岩が据えられている。当該石材は平坦面を上位に向けている。礎石に類似するが、調査区内で同様の石材を据え付けた遺構は皆無であることから、遺構の性格は不明である。

埋土からは肥前系陶器、土師質土器が出土している。出土遺物量は少量であるが、それぞれ残存状況は良好である。肥前系陶器は、胎土目を有する皿である。土師質土器では、ほぼ完形に復元可能な皿が2点、土鍋片が出土している。土師質皿の一方は褐色系の胎土を呈し、他方は白みがかかった褐色系の胎土を呈する。形態的特徴からそれぞれ、皿A IIと皿A Vであると考えられる。これらの状況から、上記遺物群の所属時期は様相3～4であると考えられる。

SK212 SK201の部分で詳説したように、大形土器据え付け土坑であるSK201より後出し、SK201を破壊する土坑である。埋土より、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦が出土している。残存状況の良好な資料を含み、出土遺物量は多量である。陶磁器類のうち主体となるものは、肥前系陶器であり、備前系陶器がこれに次ぐ。肥前系磁器や瀬戸・美濃系陶器は少数派である。肥前系陶器では、胎土目を有する皿や高台断面逆台形状を呈する低い高台を有する碗、京焼風陶器が出土している。

肥前系磁器は碗が、瀬戸・美濃系陶器では角鉢が見られる。備前系陶器では、挿鉢や甕、徳利が見られる。土師質土器皿は白みがかかった褐色の胎土を呈する資料や橙色の胎土を呈する資料が見られる。また、土師質大甕や挿鉢も見られる。土師質大甕は前述のとおり、重複するSK201に設置された大甕と同一個体である。軒丸瓦は珠文数が多く、巴文の尾が極めて長い様相1～2の特徴を有するものである。上記遺物群の所属時期の下限は肥前系の京焼風陶器や瀬戸・美濃系陶器の存在から様相5であると考えられる。

SK213 SK201の部分で詳説したように、SK201・212と重複する位置関係にあり、少なくともSK212に先行する。SK201との前後関係を確認できていないが、埋土は②層に由来すると考えられる焼土や炭化物を含むシルトであり、第2遺構面廃絶時まで埋没せずに残存した遺構であると考えられることから、SK201より後出する可能性があり、SK212同様SK201の廃絶に際して形成された土坑である可能性が高い。

埋土より、肥前系陶器・磁器、備前系陶器の破片が1点ずつ出土している。肥前系磁器は薄手を呈し、高台断面U字状を呈する。よって、上記遺物群の所属時期は少なくとも様相5以降であると考えられる。

SK214 暗灰黄細砂で検出面付近まで埋没した後、最上層に直径5～15cm大の角礫を多量に含む粘土層が堆積する。少なくとも最上層は人為的に埋められた堆積層であると考えられる。埋土からは器種不明の土師質土器片数点と備前系甕片数点が出土しているのみである。いずれも残存状況は不良である。

SK215 第1遺構面SD101の掘方東肩部で検出した遺構であり、SD101掘方掘削に際して破壊されている。出土遺物は皆無である。

SK216 残存状況の不良な肥前系陶器碗と軒丸瓦が1点ずつ出土している。肥前系陶器碗は高台断面逆台形状を呈し、やや高い高台を有する。軒丸瓦は瓦当の巴文の尾が比較的長く、12個程度の珠文を有する。これらの特徴から、上記遺物群は様相4～5に属するものであると考えられる。

SK217 第1遺構面SD101の掘方東肩部で検出した遺構であり、SD101掘方掘削に際して破壊されている。出土遺物は皆無である。

SK218 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器が出土している。全体に出土遺物量は少量であるが、土坑中央付近のやや掘りくぼめられた箇所において完形の遺物(第63図317)が出土した。当該遺物は肥前系陶器であり、口縁部が反り返り気味

で、断面逆台形状の高台を有する碗である。その他、刷毛目碗も出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。備前系陶器では、大甕片が出土している。肥前系陶器の完形の遺物は様相3～4の特徴を示すが、肥前系陶器刷毛目碗や薄手の肥前系磁器、京・信楽系陶器の存在から、上記遺物群の所属時期の下限は様相5であると考えられる。

SK219 掘方上半が細砂層で埋没することから、第1遺構面整地以前にすでに埋没していた遺構であると「a. 概要」で位置付けたが、細砂層下位に炭化物を多量に含む堆積層が見られる。当該炭化物層が本遺構の性格を示唆する可能性も考えられるが、一方で下層の炭化物層が②層に由来する堆積層であり、上層の細砂層が②層上下に見られる洪水砂である可能性も考えられ、その場合、本遺構は第2遺構面廃絶時には未だ埋没を遂げていなかったと言える。上記いずれにあたるか、判断し難いが、所見として指摘しておく。出土遺物は皆無である。

SK220 埋土に直径2～20cm大の円礫を極めて多量に含む土坑であり、人為的に埋められた可能性が考えられる。出土遺物は皆無である。

SK221・227 第1遺構面SD101下位で確認した遺構である。SK221はSD101東側側壁下位に掘方がおよぶことから、SD101に伴うものではなく、第2遺構面に属する遺構であると判断した。一方、SK227はSD101側壁との重複状況が見られなかったが、規模・埋土・構造・主軸方向の点で共通するSK221と同様に第2遺構面に属する遺構であると判断した。

SK221は、長軸約1.8m、最大幅約0.6mの規模を有する隅丸長方形の平面形を呈する。主軸方向は座標北から約7°東へ傾いており、第1遺構面SD101や石列、第2遺構面で復元した掘立柱建物跡、後述するSD201～205の主軸方向と共通している。極めて明確な掘り込みを有し、断面形状はU字状を呈する。深度は現状で最大約0.4mを呈する。SK227は、長軸約1.6m、幅約0.5mの規模を有する隅丸長方形の平面形を呈する。主軸方向は座標北から約7°東へ傾いており、SK221と共通する。極めて明確な掘り込みを有し、断面形状はU字形状を呈する。深度は現状で最大約0.4mを呈する。

いずれも埋土は底部から検出面まで黒色系シルト～粘土で充填されており、第1遺構面整地時に完全埋没した可能性が考えられる。

SK221・227の性格は不明であるが、互いに規模・構造・主軸方向・埋土が類似しており、かつ南北に

主軸を揃えて形成されていることから、同時並存した可能性が考えられる。第4章でも触れるが、これらの遺構は布掘りの柱穴であった可能性も考えられる。ただし、SK221の底部の標高が約0.3mであるのに対し、SK227は標高約0.5mと20cm程度の差が生じている。また、柱材等の痕跡も見られず疑問が残る。

SK221埋土からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、菊丸瓦が多量に出土している。残存状況が良好な資料を多く含む。出土遺物中、大多数を占めるものは肥前系磁器であり、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器がそれに次ぐ。肥前系陶器や備前系陶器は少数である。肥前系陶器では、蛇の目凹形高台の見られる刷毛目皿や碗、瓶等が含まれる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、広東碗や蓋等、器種の多様化傾向が指摘できる。また、文様としては見込中央に五花文や抽象文を描く資料が見られる。一方で、蛇の目釉剥ぎの見られる皿や厚手の碗等、やや古相を示す資料も含まれる。備前系陶器では、卸目が比較的密な播鉢等が見られる。このような状況から、出土遺物の大半は様相7に属するものであると考えられる。このことは、SK221が第1遺構面整地に際して埋没したとの埋土観察に基づく認識と整合する。

一方、SK227埋土からの出土遺物量は極めて少量であり、残存状況も不良である。瀬戸・美濃系陶器片と備前系陶器片が1点ずつ出土しているのみである。よって、これらの遺物群の所属時期の下限は少なくとも様相6以降であると考えられ、SK221同様、第1遺構面整地時に埋没したとの埋土観察に基づく認識と整合する。

SK222 SK221・227の間に位置する遺構であり、SK221の北端部と接する。極めて明確な掘り込みを有する点でSK221・227と共通するが、平面形や埋土、主軸方向の点で差異が指摘できる。

埋土からは、肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも極めて残存状況が悪く、出土遺物量は少量である。

SK223 器種不明の土師質土器片が数点出土しているのみである。

SK224 肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、備前系陶器、土師質土器が多量に出土している。残存状況が良好な資料を多く含む。陶磁器類では、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が主体となり、京・信楽系陶器は少量である。肥前系陶器では、蛇の目釉剥ぎの見られる皿、刷毛目碗が含まれる一方で、やや古

相を示す胎土目を有する皿が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる一方で、見込中央に五花文を施した、高台断面U字形の厚手の碗も見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢が見られる。これらの状況から、上記の遺物群は様相5の遺物群であると考えられる。

SK225 SD204と重複する位置関係にあり、SD204に先行する。極めて浅い落ち込み状を呈する。出土遺物は皆無である。

SK226 SK225と近接する。SK225同様SD204に先行し、浅い落ち込み状を呈する。出土遺物は皆無である。

SK228 直径2～15cm大の円礫・角礫を多量に含むことから、人為的に埋め戻された遺構である可能性が高い。

埋土からは、肥前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況が悪く、出土遺物量は少量である。肥前系陶器では、砂目を有する溝縁皿や高台断面逆台形状を呈する低い高台を有する皿又は碗が見られる。土師質土器では、焙烙片が見られる。このような状況から、上記の遺物群は様相4～5に属する遺物群であると考えられる。

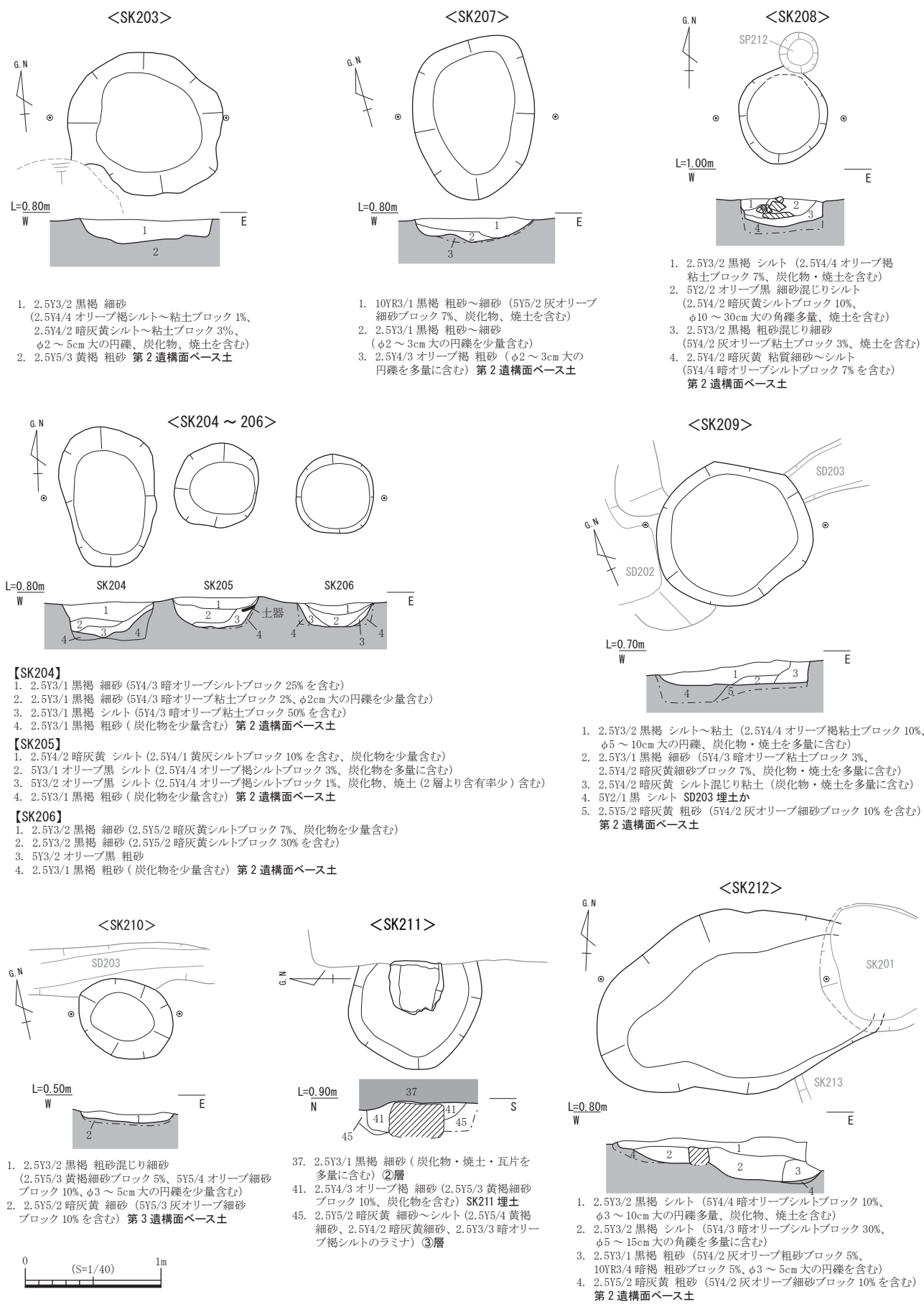
SK229 残存状況の極めて不良な備前系陶器甕片が1点出土しているのみである。

SK230 肥前系陶器・磁器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良であり、出土遺物量は少量である。肥前系陶器では、高台断面逆台形状を呈する皿や溝縁皿が見られる。肥前系磁器では厚手の資料が主体となる。土師質土器では、皿が比較的少量に見られ、白みがかった褐色、あるいは暗い褐色系の胎土を呈する(皿AⅢ・Ⅴ・Ⅵ)。煤が付着し、灯火具として利用されたと考えられる資料も含まれる。その他、土師質焙烙が出土している。このような状況から、上記遺物群の所属時期は様相4～5であると考えられる。

SK231 検出面では直径30cm程度のピット状を呈するが、北壁面での観察所見から、本来直径60cm程度の規模を有し、SK230東肩部を削平する遺構であることが判明したことから、土坑として報告する。出土遺物は皆無である。

SK233 断面記録を作成する前に完掘してしまったため、断面の情報が欠けているが、写真測量により作成した平面図及び調査時の記憶から、可能な限り概要を記載する。

直径約0.6～0.8mの円形の平面形を呈する土坑である。深さは現状で20～30cmである。埋土は砂質



1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂
(2.5Y4/4 オリーブ褐シルト～粘土ブロック 1%、
2.5Y4/2 暗灰黄シルト～粘土ブロック 3%、
φ2～5cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む)
2. 2.5Y5/3 黄褐 粗砂 第2遺構面ベース土

1. 10YR3/1 黒褐 粗砂～細砂 (5Y5/2 灰オリーブ
細砂ブロック 7%、炭化物、焼土を含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂～細砂
(φ2～3cm 大の円礫を少量含む)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂 (φ2～3cm 大の
円礫を多量に含む) 第2遺構面ベース土

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐
粘土ブロック 7%、炭化物・焼土を含む)
2. 5Y2/2 オリーブ黒 細砂混じりシルト
(2.5Y4/2 暗灰黄シルトブロック 10%、
φ10～30cm 大の角礫多量、焼土を含む)
3. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂
(5Y4/2 灰オリーブ粘土ブロック 3%、焼土を含む)
4. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘質細砂～シルト
(5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 7% を含む)
第2遺構面ベース土

- 【SK204】
1. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 25% を含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリーブ粘土ブロック 2%、φ2cm 大の円礫を少量含む)
3. 2.5Y3/1 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリーブ粘土ブロック 50% を含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (炭化物を少量含む) 第2遺構面ベース土

- 【SK205】
1. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (2.5Y4/1 黄灰シルトブロック 10% を含む、炭化物を少量含む)
2. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 3%、炭化物を多量に含む)
3. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 1%、炭化物、焼土 (2層より含有率少) 含む)
4. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (炭化物を少量含む) 第2遺構面ベース土

- 【SK206】
1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 7%、炭化物を少量含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 30% を含む)
3. 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂
4. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (炭化物を少量含む) 第2遺構面ベース土

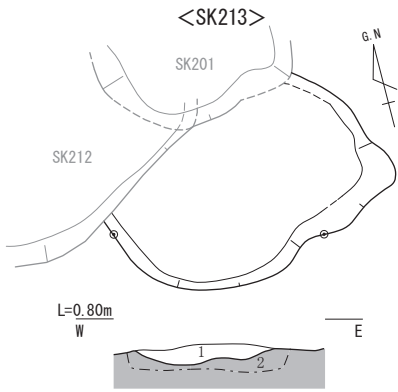
1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト～粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐粘土ブロック 10%、
φ5～10cm 大の円礫、炭化物・焼土を多量に含む)
2. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (5Y4/3 暗オリーブ粘土ブロック 3%、
2.5Y4/2 暗灰黄細砂ブロック 7%、炭化物・焼土を多量に含む)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり粘土 (炭化物・焼土を多量に含む)
4. 5Y2/1 黒 シルト SD203 埋土か
5. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/2 灰オリーブ細砂ブロック 10% を含む)
第2遺構面ベース土

1. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂
(2.5Y5/3 黄褐細砂ブロック 5%、5Y5/4 オリーブ細砂
ブロック 10%、φ3～5cm 大の円礫を少量含む)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂 (5Y5/3 灰オリーブ細砂
ブロック 10% を含む) 第3遺構面ベース土

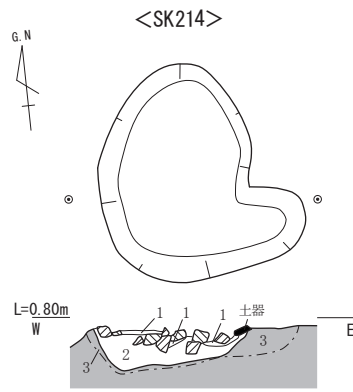
37. 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (炭化物・焼土・瓦片を
多量に含む) ②層
41. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂 (2.5Y5/3 黄褐細砂
ブロック 10%、炭化物を含む) SK211 埋土
45. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～シルト (2.5Y5/4 黄褐
細砂、2.5Y4/2 暗灰黄細砂、2.5Y3/3 暗オリーブ
褐シルトのラミナ) ③層

1. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 10%、
φ3～10cm 大の円礫多量、炭化物、焼土を含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 30%、
φ5～15cm 大の角礫を多量に含む)
3. 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (5Y4/2 灰オリーブ粗砂ブロック 5%、
10YR3/4 暗褐 粗砂ブロック 5%、φ3～5cm 大の円礫を含む)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/2 灰オリーブ細砂ブロック 10% を含む)
第2遺構面ベース土

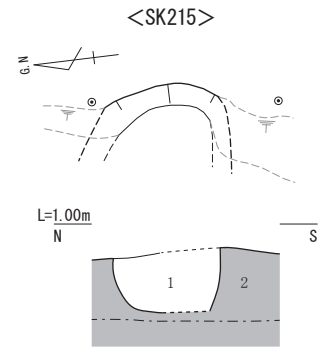
第 58 図 その他の土坑平面図・断面図 (1)



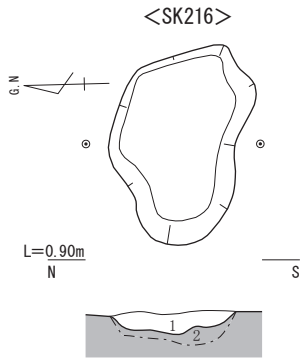
- 10YR4/2 灰黄褐 シルト (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 7%、炭化物・焼土を多量に含む)
- 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂 (5Y4/2 灰オリーブ粗砂ブロック 10%を含む) 第2遺構面ベース土



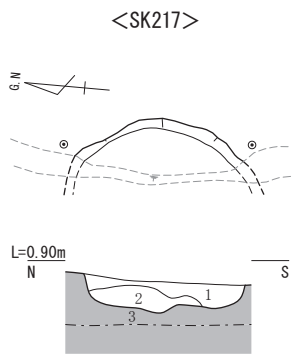
- 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (φ5~15cm 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y5/6 黄褐細砂ブロック 3%、5Y4/4 暗オリーブ粗砂ブロック 15%を含む)
- 2.5Y5/4 黄褐 シルト (2.5Y4/3 オリーブ褐粗砂ブロック 5%、5Y5/4 オリーブ粗砂ブロック 30%、10YR4/2 灰黄褐シルトブロック 7%を含む) 第2遺構面ベース土



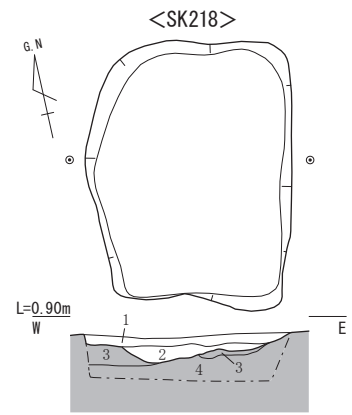
- 2.5Y3/1 黒褐 細砂混じり粘土 (2.5Y4/4 オリーブ褐シルトブロック 5%を含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂 (7.5Y4/3 暗オリーブ粗砂ブロック 30%、炭化物を含む) 第2遺構面ベース土



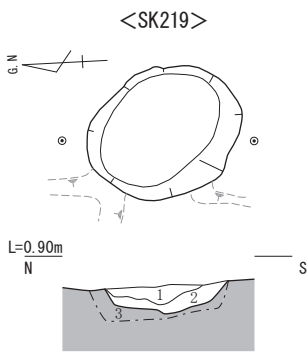
- 2.5Y3/1 黒褐 細砂 (2.5Y4/3 暗オリーブ褐細砂ブロック 10%を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (炭化物を少量含む) 第2遺構面ベース土



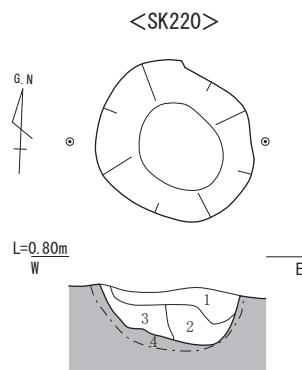
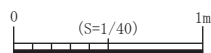
- 2.5Y3/1 黒褐 シルト (7.5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 20%、φ5~10cm 大の円礫、炭化物を含む)
- 5Y3/1 オリーブ黒 シルト (φ5cm 大の円礫を含む)
- 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂 (7.5Y4/3 暗オリーブ粗砂ブロック 30%、炭化物を含む) 第2遺構面ベース土



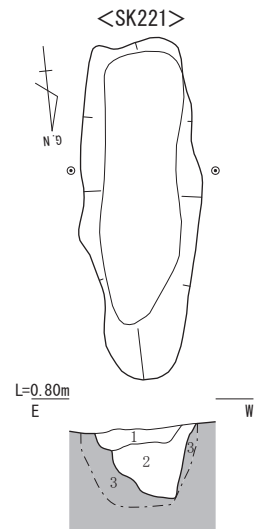
- 2.5Y3/2 黒褐 シルト (φ2~5cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/2 灰オリーブ粗砂ブロック 40%を含む)
- 5Y4/2 灰オリーブ シルト~粘土 第2遺構面ベース土
- 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 第2遺構面ベース土



- 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/4 暗オリーブ粗砂ブロック 15%、φ2cm 大の円礫を多量に含む)
- 10YR1.7/1 黒 シルト (炭化物を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 第2遺構面ベース土

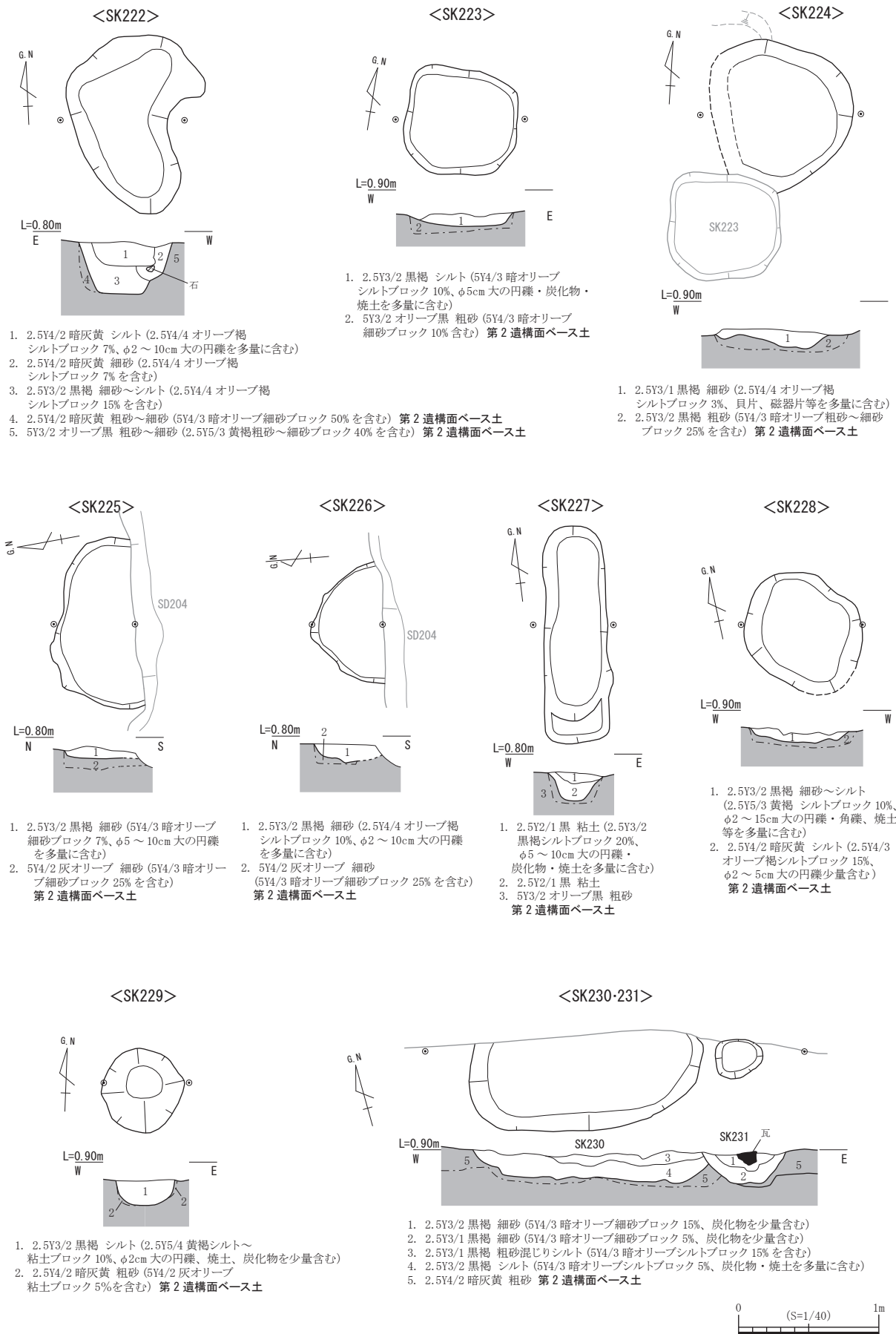


- 5Y2/1 黒 粘土 (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 15%、2.5Y4/2 暗灰黄シルト~粘土ブロック 10%、φ5~15cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y5/6 黄褐シルトブロック 5%、5Y4/4 暗オリーブ粗砂ブロック 7%、2.5Y3/1 黒褐粗砂ブロック 10%、φ2~20cm 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y5/4 オリーブシルトブロック 30%、φ2~10cm 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂~細砂 (5Y5/4 オリーブシルト、2.5Y4/6 オリーブ褐粗砂、2.5Y6/2 灰黄粗砂、2.5Y3/1 黒褐粗砂のラミナ) 第2遺構面ベース土

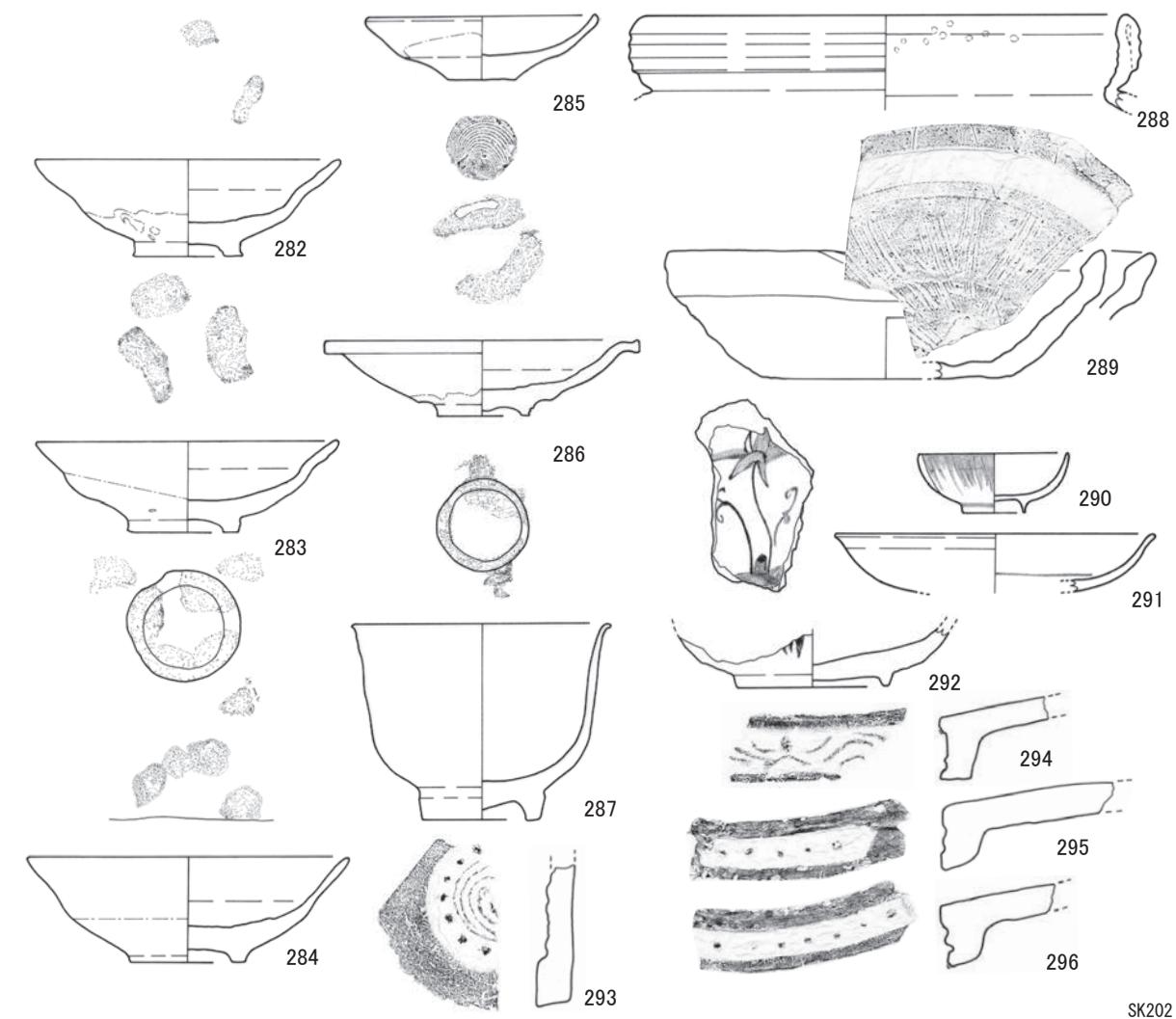


- 2.5Y3/1 黒褐 シルト~粘土 (10YR3/1 黒褐粗砂~シルトブロック 7%、φ2cm 大の円礫、炭化物を含む)
- 2.5Y2/1 黒色 粘土 (φ2~5cm 大の円礫を含む)
- 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 第2遺構面ベース土

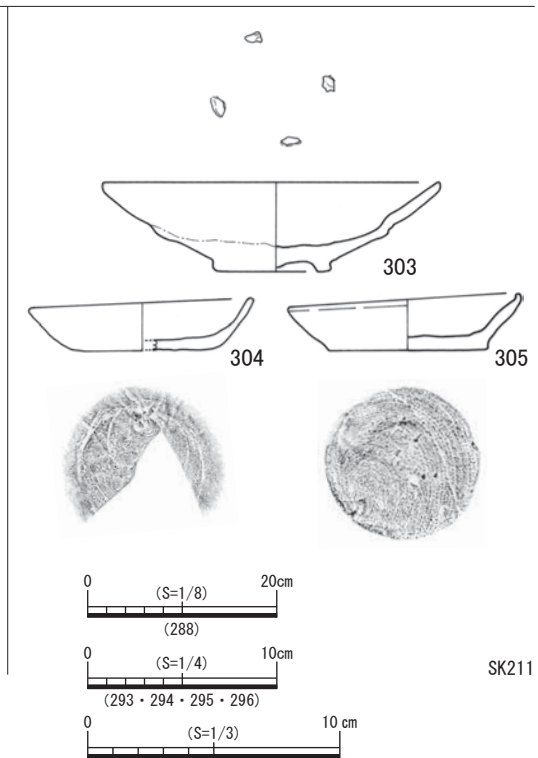
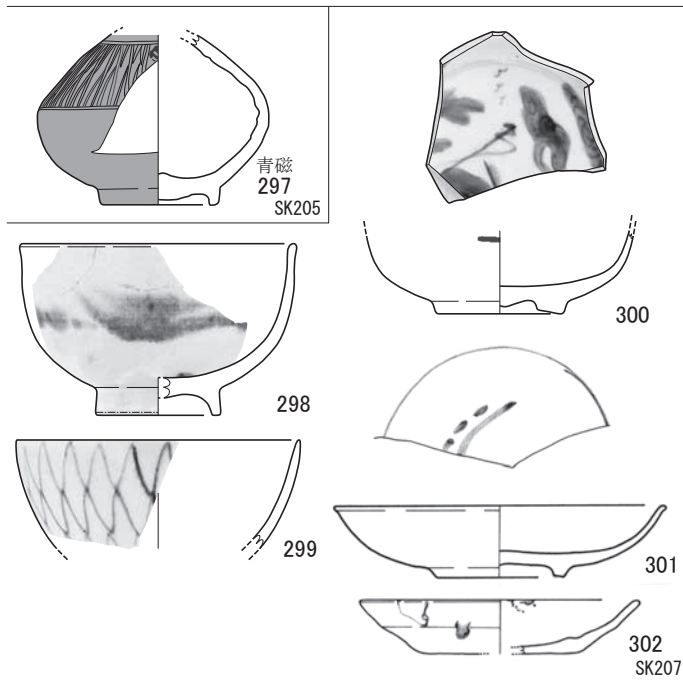
第 59 図 その他の土坑平面図・断面図 (2)



第 60 図 その他の土坑平面図・断面図 (3)

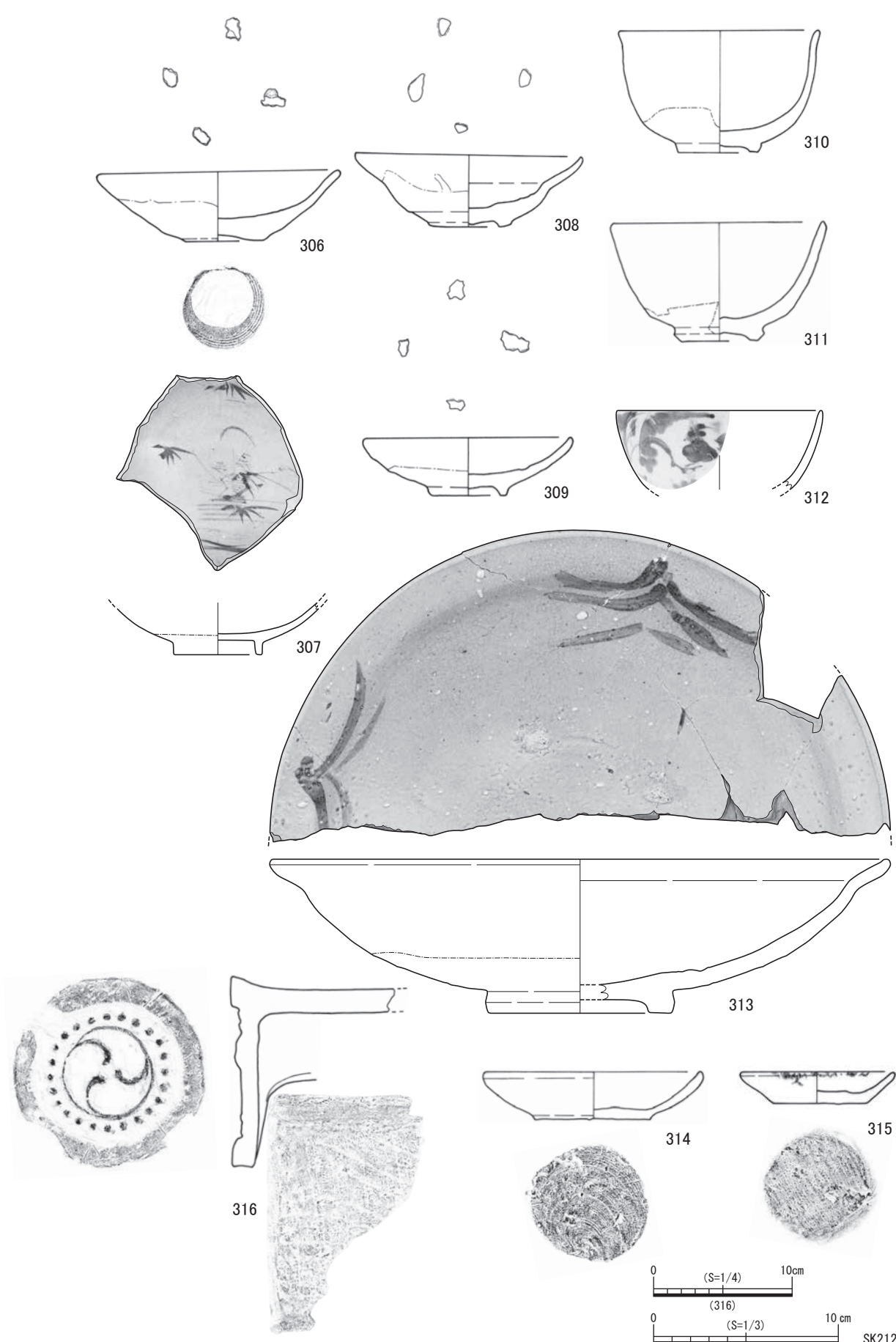


SK202

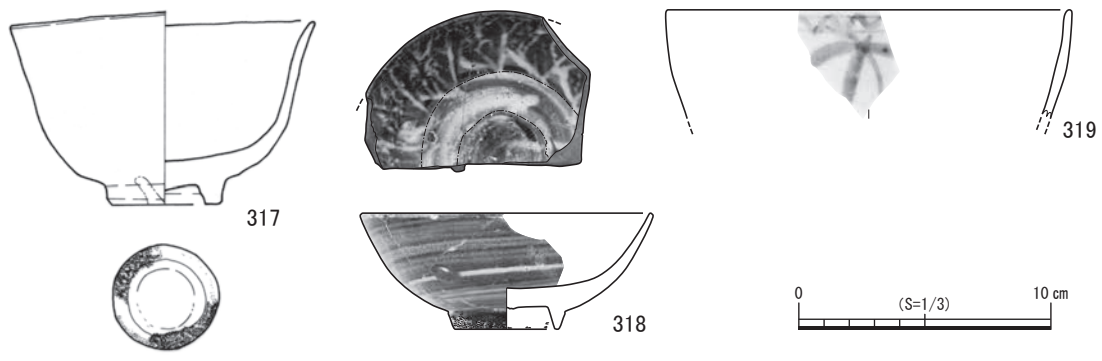


SK211

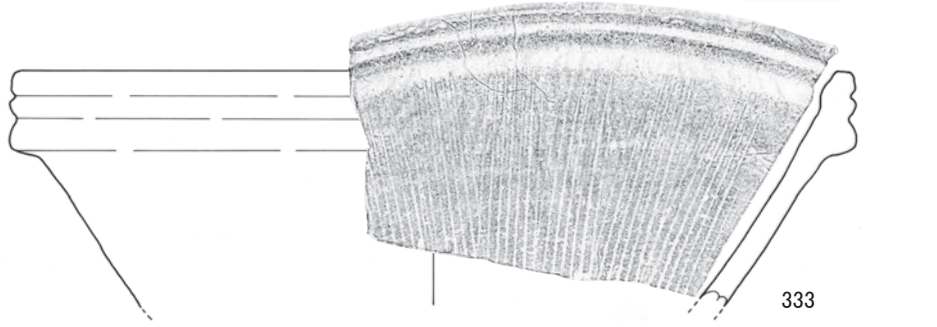
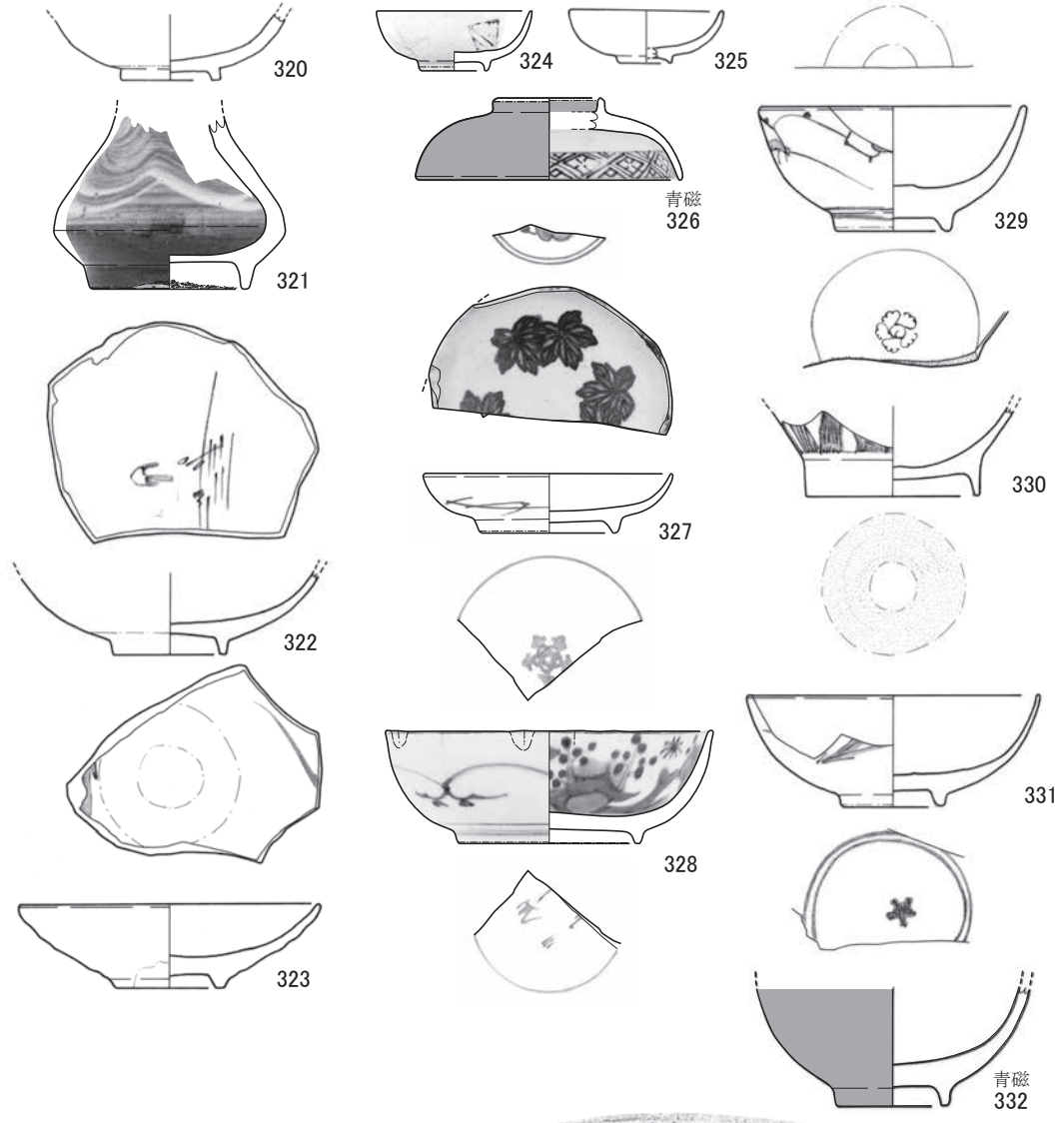
第 61 図 SK202・205・207・211 出土遺物



第 62 图 SK212 出土遺物

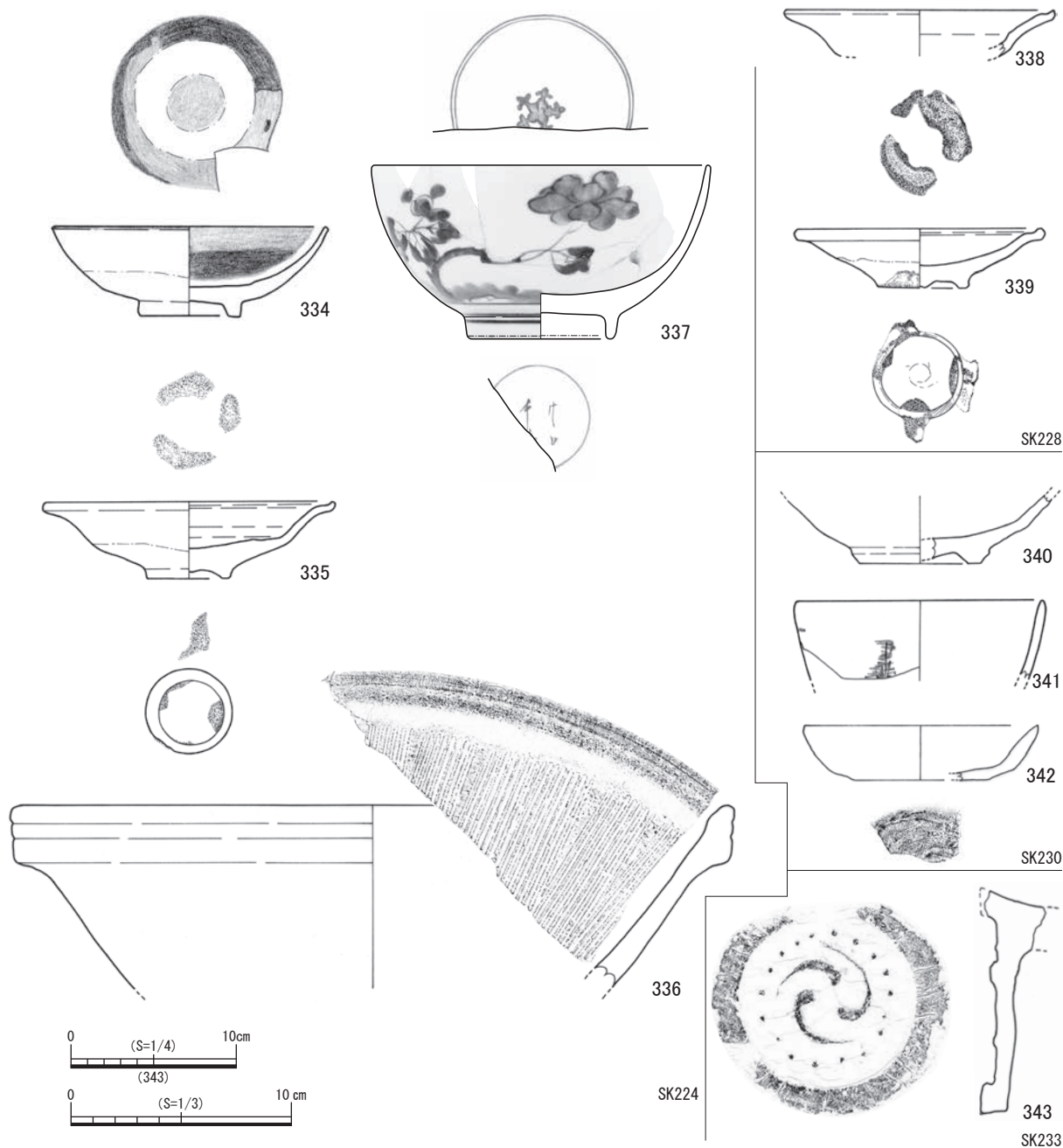


SK218



SK221

第 63 図 SK218・221 出土遺物



第 64 図 SK224・228・230・233 出土遺物

を呈し、直径 30 cm 程度の礫が多量に包含されていた。珠文数が多く、巴文の尾がやや長く延びる軒丸瓦が 1 点のみ出土している。

(まとめ)

以上、その他の土坑観察所見を記載した。第 1 遺構面で確認したその他の土坑と同様、平面形や規模(平面積・深さ)、壁面立ち上がりの傾斜角度、断面形状、埋土に遺構ごとで差異が見られ、土坑の性格や形成過程についても不明な点が多い。

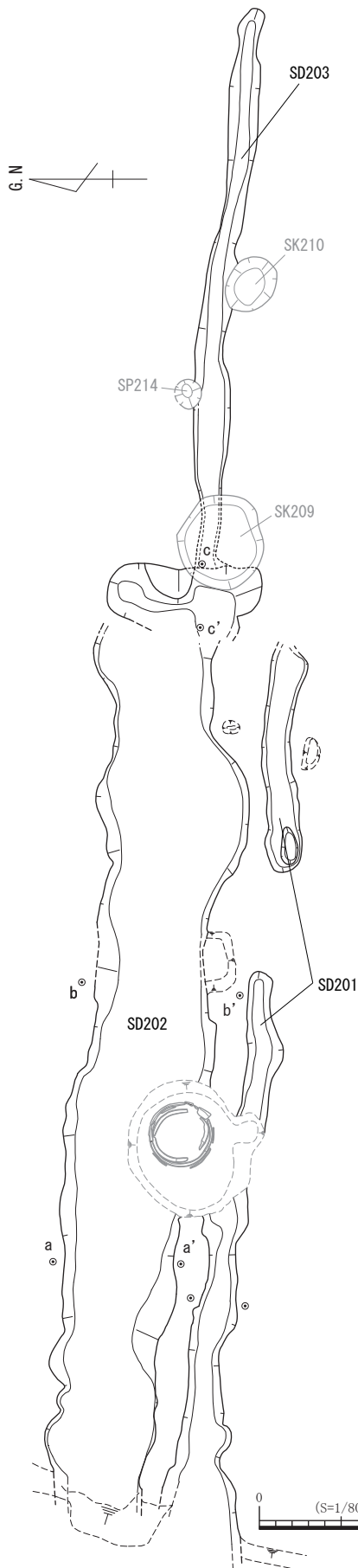
出土遺物の下限は、第 1 遺構面整地に際して埋め

戻されたと考えられるシルト～粘土の埋土を有する遺構を除き、いずれも様相 4～5 以前に収まる。

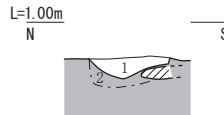
(3) 溝

第 2 遺構面では、5 条の溝跡を確認した。SD201～205 が該当する。以下、各遺構について概要を記述する。

SD201 (第 65 図) 調査区西半部南端付近で確認した溝状遺構である。第 1 遺構面の石列直下で確認した。主軸は座標北から約 84° 西へ傾く。西端は第 1 遺構面の SD101 形成に際して削平を受けており、調査区

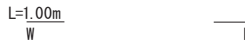


<SD201>



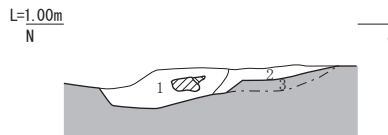
1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (2.5Y5/3 黄褐シルトブロック 50%、炭化物を少量含む)
2. 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂 (7.5Y4/3 暗オリーブ粗砂ブロック 30%、 $\phi 10 \sim 15\text{cm}$ 大の円礫を多量、炭化物を少量に含む) 第2遺構面ベース土

<SD202 東端部付近断面 c>



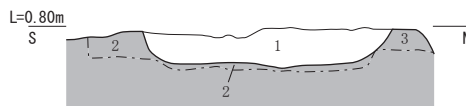
1. 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (2.5Y4/4 オリーブ黒シルトブロック 7%、木片を含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰 細砂
3. 10YR4/6 褐 粗砂 第3遺構面ベース土

<SD202 断面 a>



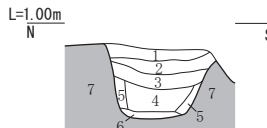
1. 2.5Y2/1 黒 細砂～シルト ($\phi 10 \sim 15\text{cm}$ 大の円礫多量、炭化物、焼土を含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 シルト (5Y4/3 暗オリーブ粘土ブロック 30%を含む)
3. 5Y3/2 オリーブ黒 粗砂 (7.5Y4/3 暗オリーブ粗砂ブロック 30%、 $\phi 10 \sim 15\text{cm}$ 大の円礫を多量、炭化物を少量に含む) 第2遺構面ベース土

<SD202 断面 b>

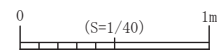


1. 2.5Y3/2 黒褐 細砂 (5Y4/2 灰オリーブ細砂ブロック 10%、 $\phi 2 \sim 10\text{cm}$ 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)
2. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 ($\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫を多量に含む) 第2遺構面ベース土
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 30%、 $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む) 第2遺構面ベース土

<SD203 調査区東壁断面>



1. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細砂 (2.5Y5/3 黄褐細砂ブロック 5%を含む)
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐 粗砂
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (5Y5/3 灰オリーブシルトブロック 3%、炭化物、焼土を含む)
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂
5. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂
6. 2.5Y5/3 黄褐 細砂
7. 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～シルト (2.5Y5/4 黄褐細砂、2.5Y4/2 暗灰黄細砂、2.5Y3/3 暗オリーブ褐シルトのラミナ) 第2遺構面ベース土



第 65 図 SD201 ～ 203 平面図・断面図

西方へと延伸するか否かは不明である。また、調査区東半部では検出していない。本遺構は残存状況が悪いことから、地形的に高い調査区東方では削平されたと考えられる。本遺構の西端から約7.3mの地点で幅約1.2m分途切れるが、これも遺構の残存状況の悪さに起因すると考えられる。

幅は0.4～0.5mであるが、西端から2.0m付近から西方に徐々に幅員を増し、西端では幅約1.0mとなる。西端部付近は地形的に低いことから、比較的残存状況が良好であると考えられ、本来、本遺構は幅1.0m程度の規模を有していた可能性が考えられる。

断面形状は浅い皿形を呈する。底部標高は東端部付近で約0.65m、西端部付近で約0.59mであり、原地形に沿って東から西に向かって緩やかに下る状況を呈する。よって、東方から西方へと通水していたと考えられる。

埋土はベース土である③層に類似した砂質を呈し、流水や滞水に伴う堆積作用で埋没した状況とは異なる。一定期間、流水・滞水が無い状態で、風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込み埋没したと考えられる。

埋土からは、肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。いずれも残存状況は不良であり、出土遺物量は少量である。肥前系陶器では、高台断面逆台形状を呈する碗が見られる。土師質皿の胎土は白みがかかった褐色を呈し、形態から皿A Iに属すると考えられる。これらの状況から、明確な時期比定を行うことは困難であるが、瀬戸・美濃系陶器が含まれる点から、上記遺物群の所属時期の下限は様相6以降であると考えられる。

SD202・203（第65・68図） SD202はSD201北側で確認した溝状遺構である。主軸は座標北から約86°西へ傾く。西端は第1遺構面のSD101形成に際して削平を受けており、調査区西方へと延伸するか否かは不明である。東端部は調査区中央付近に位置する。幅は1.4～1.8m程であるが、西端部付近では徐々に幅員を減じ西端部で約1.1mとなる。

断面形状は浅い皿形を呈する。底部標高は東端部付近で約0.50m、西端部付近で約0.56mであり、原地形の傾斜に逆行して西から東に向かって緩やかに下る状況を呈する。よって、西方から東方へと通水していたと考えられる。

埋土はベース土である③層とはやや異なり、シルト質を呈する。炭化物や焼土、直径2～10cm程度の円礫を多量に含む埋土であり、流水・滞水に伴う堆積作用で埋没した状況とは異なる。第1遺構面整地

土（A層）に類似する層相を呈することから、第1遺構面整地に際して、整地土により人為的に埋められた可能性が考えられる。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦が多量に出土している。陶磁器類では、肥前系陶器・磁器、備前系陶器の割合が高く、その他は少量である。残存状況が良いものを含む。肥前系陶器では、胎土目を有する皿や高台断面逆台形状を呈する皿・碗、蛇の目釉剥ぎの見られる皿等、様相5・6までの古相を示す遺物が出土している一方、刷毛目鉢等新相を示す遺物も出土している。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。高台断面三角形形状を呈する、口径に対し高台径がやや大きい様相5前後の皿が出土している。また、外面一重網目文を有する碗や、やや厚手の皿・碗も含まれる。備前系陶器では、卸目が比較的密な播鉢等が見られる。土師質土器では、皿A III・VIや焙烙等が見られる。このように、本遺構出土遺物には様相5前後のやや古相の遺物を含む一方で、新相の遺物も含まれる。これらの遺物に見られる時期差は、機能時の遺物と埋め戻し土包含遺物の差として捉えられる可能性が高い。

SD203はSD202の東延長上で確認した溝状遺構である。第2遺構面調査時には検出できておらず、第3遺構面調査時に検出した。東壁断面における観察所見から、第2遺構面上面から掘り込まれた遺構であると考えられたため、第2遺構面の遺構として取り扱う。主軸は座標北から約86°西へ傾く。調査区東壁に断面がかかっていることから、調査区東方へと延伸することがほぼ確実である。幅は0.3～0.4m程である。

断面形状は深いU字形を呈する。底部標高は東端部付近で約0.5m、西端部付近で約0.2mであり、原地形に沿って東から西に向かって比較的急角度で下る状況を呈する。よって、東方から西方へと通水していたと考えられる。

埋土はオリーブ褐色や黄褐色、暗灰黄色系細砂とオリーブ褐色系粗砂が交互に堆積する状況を呈する。特に、下半については、細砂層堆積後、浚渫が行われ、粗砂が堆積した状況を読み取ることができる。細砂層は、SD203ベース土である第7層と類似していることから、一定期間、流水・滞水が無い状態で、風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込み堆積したと考えられる。一方、粗砂層は短期的な流水作用（洪水砂か）により堆積した可能性が考えられ、自然埋没又は流水作用による埋没-浚渫-再機能が繰り返され、深度

を次第に浅くしながら、存続し続けたと考えられる。

SD203 埋土からは肥前系陶器、土師質土器が極めて少量出土している。いずれも残存状況は不良である。肥前系陶器では、白化粧土による装飾が見られる浅手の皿が見られ、土師質土器では厚手の羽釜が見られる。これらは少なくとも様相4以降の遺物群であると考えられる。

さて、SD202 と SD203 の接点に位置する部分では、調査区東半部調査時に木片を包含する黒色粘土を埋土とする土坑状の遺構を確認しており、当初、別遺構として調査した (SD202 断面 c 部分)。しかし、調査後の整理作業段階で、当該土坑以東では SD202 の延伸部分を確認しておらず、代わって、当該土坑以東では SD202 よりも幅員の狭い SD203 が見られることから、SD202 東端部付近に形成された構造物である可能性があり、そのように仮定すると、SD202・203・土坑状の構造物は一連の遺構であると考えられることもできる。当該部分の底部標高は約 0.1m であることから、SD202 は東端部付近で急激に落ち込む状況を呈すると言える。土坑状の構造物からは木片が出土しており、当該木片が土坑状の構造物に伴う木柵等の部材である可能性も考えられるが、明確な証拠に欠ける。また、土坑状の構造物の埋土は粘質土であることから、水が集まり、一定期間滞水状態にあった箇所である可能性が高い。実際、SD202・203 いずれの溝底

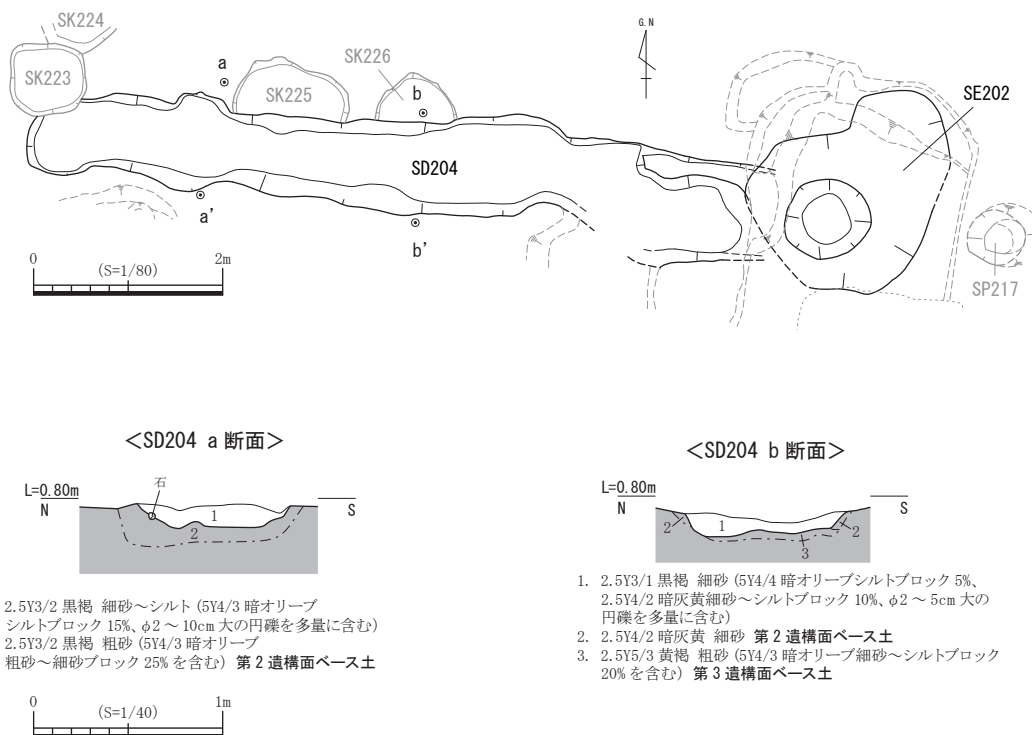
部よりも底部の標高が低く、両溝はそれぞれ、土坑状の構造物に向かって傾斜していることから、両溝から水が集められた可能性も考えられる。

SD202・203 境界付近が調査区西半と東半の境に位置し、十分な検証が行えていない。今後、類例を検討していく必要があると考える。

SD204 (第 66・68 図) 調査区西半部北端付近で確認した遺構である。主軸は座標北から約 84° 西へ傾く。西端は第 1 遺構面の SD101 付近で途切れており、調査区西方へと延伸するか否かは不明である。東端部は調査区中央付近に位置する。幅は 0.8～1.1m 程であるが、西端部に向けて徐々に幅員を減じ西端部で約 0.7m となる。

断面形状は浅い皿形を呈する。底部標高は東端部付近で約 0.56m、西端部付近で約 0.6m であり、原地形の傾斜に逆行して西から東に向かって緩やかに下る状況を呈する。よって、西方から東方へと通水していたと考えられる。そのように仮定したとき、西端部付近で溝が途切れる状況は、溝底が高い西端部付近が後世の削平により消滅したと理解することもできる。

埋土はベース土である③層とはやや異なり、シルト質を呈する。また、炭化物や焼土、直径 2～10cm 程度の円礫を多量に含む埋土であり、流水・滞水に伴う堆積作用で埋没した状況とは異なる。第 1 遺構面



第 66 図 SD204 平面図・断面図

整地土(E層)に類似する層相を呈することから、第1遺構面整地に際して、整地土により人為的に埋められた可能性が考えられる。

東端部には、SE202が存在し、一見、SE202に削平されたような状況を呈する。しかしながら、SE202東方からは延伸部分を確認していないことから、SD204とSE202は一連の遺構である可能性も否定できない。その場合、井戸であるSE202に向かって導水していたと考えられ、後述するSD205とSX201の関係と類似する。積極的根拠に欠けるが、可能性として指摘しておく。

埋土からは、肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。比較的残存状況の良いものを含む。陶磁器類では、特に、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器が主体となり、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が数点ずつ含まれる。肥前系陶器では、瓶や大形皿又は鉢片が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具が見られる。土師質土器では、焙烙が見られる。このような状況から、上記遺物群の所属時期は少なくとも様相6以降であると考えられ、埋土の特徴から本遺構が様相7の整地に伴い人為的に埋め立てられたとする認識と整合する。

SD205(第67・69図) 調査区東半部北端付近で確認した遺構である。主軸は座標北から約84°西へ傾く。ただし、西端付近では、やや主軸が南へ振る。西端は後述するSX201まで延びるが、SX201以西には延びない。また、調査区東壁に断面がかかっていることから、調査区東方へと延伸することがほぼ確実である。幅は0.3m前後であるが、SX201との接点付近である西端部では約0.6mとなる。

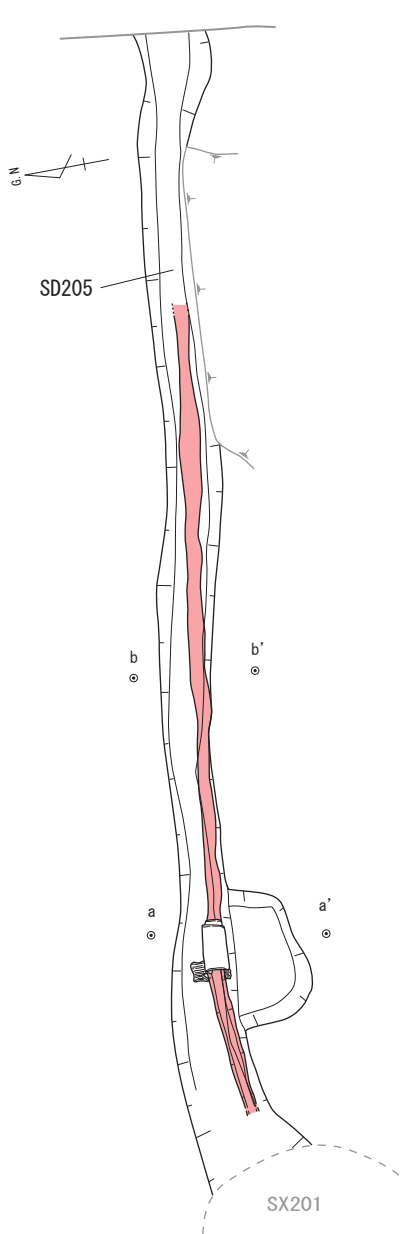
断面形状は急な立ち上がりを有する断面U字形状を呈する。底部標高は東端部付近で約0.35m、西端部付近で約0.2mであり、原地形に沿って東から西に向かって緩やかに下る状況を呈する。よって、東方から西方へと通水していたと考えられる。

本遺構底部では木樋痕であると考えられる粘土層を筋状に確認しており(第67図赤塗り)、西端部付近では木材が残存していた。わずかに残存していた木材及び木樋痕である粘土層の断面観察から、直径約10cmの木樋が設置されていたと考えられる。なお、断面観察の所見から、木樋設置箇所がやや深く掘り窪められたような状況を読み取ることができる。木樋痕の検出状況は直線的ではなく、部分的にやや蛇

行するような状況を呈するが、本来は直線状の木樋が設置されていたと考えられる。また、後述する接続部以西では、主軸がやや南へ振れる。木樋は必ずしも溝掘方中央付近に設置されたとは言えず、部分的に溝掘方南壁際に接するように設置される。これは、木樋が直線状を呈する反面、掘方は緩やかに湾曲する状況を呈していたからであると考えられる。木樋は東から西へ直線的に延び、後述する接続部付近でやや南へと角度を振り、再び直線的に延びる。一方、掘方は、緩やかに南へと湾曲する状況を呈していたと考えられる。

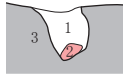
木樋は、溝掘方底部で確認した。少なくとも接続部付近では、溝底部と木樋との間に粘土層が見られる。また、木樋上位には直径3～10cm大の小礫や炭化物、焼土を多量に含む黒褐色系シルト層が検出面まで堆積している。木樋上位の堆積層は、流水・滞水に伴う堆積作用で埋没した状況とは異なることから、人為的な埋戻し土であると考えられる。よって、木樋を溝底部へ据え付けた後、人為的に埋め戻したと考えられ、暗渠に類似した構造を呈していたと考えられる。さらに付け加えると、少なくとも木樋接続部付近等では木樋下部で褐灰色粘土層を確認しており、木樋を安定させるために、あるいは水漏れ防止のために粘土で木樋を包み込んでいた可能性が考えられる。その場合、前述の木樋痕であるとした筋状の粘土層が、木樋安定 水漏れ防止用の粘土層に対応する可能性も考えられる。

木樋接続部では、完形の丸瓦が1点出土し(第69図362)、木樋を覆うように据え付けられていた。また、瓦と木樋の間には粘土層が見られた。前述のとおり、木樋下部でも粘土層が見られた。丸瓦の西端付近では断面凹形に加工された木材が溝掘方底部に据え付けられ、当該木材の凹部に木樋が据え付けられた状況を呈する。また、上記凹形の木材下部でも粘土層を確認した。よって、接続部では、溝底部に粘土や凹形に加工した木材を置き、上位に木樋を据えることで安定・固定させ、さらに上位を粘土で覆い、粘土と木樋を密着させて完全に固定するために上位から丸瓦を押し当てたと考えられる。木樋接合部における木樋相互のずれを防ぎ、水漏れを防止するための措置であると考えられる。また、当該接続部以西では、木樋の主軸がやや南へ傾くことから、当該接続部は木樋の方向を変えるために設けられたと言え、さらに踏み込むならば、導水目的地点に向けて、意図的に木樋の方向を変えたと言える。



<SD205 断面 b>

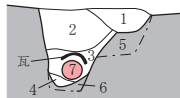
L=0.80m
N S



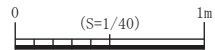
1. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト
(5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 5%、
2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 25%、
φ3～10cm 大の円礫・炭化物・焼土を多量に含む)
2. 2.5Y2/1 黒 粘土 木樋痕
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (10YR3/1 黒褐粗砂混じり細砂、
2.5Y5/2 暗灰黄粗砂混じり細砂、5Y4/3 暗オリーブ 細砂、
2.5Y4/6 オリーブ褐粗砂のラミナ)
第 2 遺構面ベース土

<SD205 断面 a>

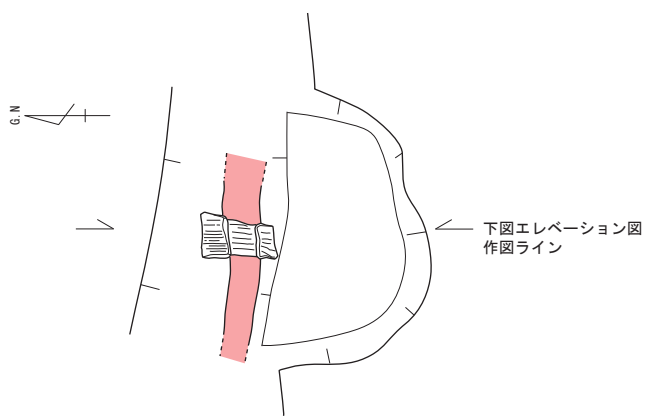
L=0.80m
N S



1. 10YR3/1 黒褐 粗砂混じりシルト (10YR5/4 にぶい黄褐シルトへ粘土ブロック 3%、
2.5Y5/2 暗灰黄シルトブロック 10%、5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 5%、
φ3～5cm 大の円礫、炭化物、焼土を含む)
2. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じりシルト (5Y4/4 暗オリーブシルトブロック 5%、
2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 25%、φ3～10cm 大の円礫、
炭化物・焼土を多量に含む)
3. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄粘土ブロック 5%、
10YR5/6 黄褐粘土ブロック 3%、5Y4/3 暗オリーブシルトブロック 3% を含む)
4. 10YR4/1 褐灰 粘土
5. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (10YR3/1 黒褐粗砂混じり細砂、
2.5Y5/2 暗灰黄粗砂混じり細砂、5Y4/3 暗オリーブ細砂、2.5Y4/6 オリーブ褐粗砂
のラミナ) 第 2 遺構面ベース土
6. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂 (鉄分沈着、φ2～3cm 大の円礫を多量に含む)
7. 2.5Y3/1 黒褐 粘土 (上面 (瓦との隙間) を褐色粘土が覆う) 木樋痕

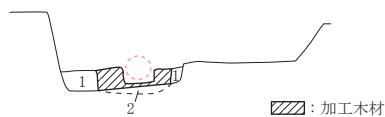


<接合部拡大平面 (瓦除去後)>

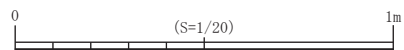


<木樋接合部木材設置状況断面>

L=1.00m

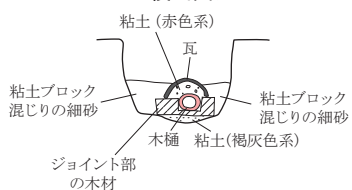


1. 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂 (2.5Y5/2 暗灰黄 粘土ブロック 5%、
10YR5/6 黄褐 粘土ブロック 3%、5Y4/3 暗オリーブ シルトブロック 3% を含む)
2. 10YR4/1 褐灰 粘土

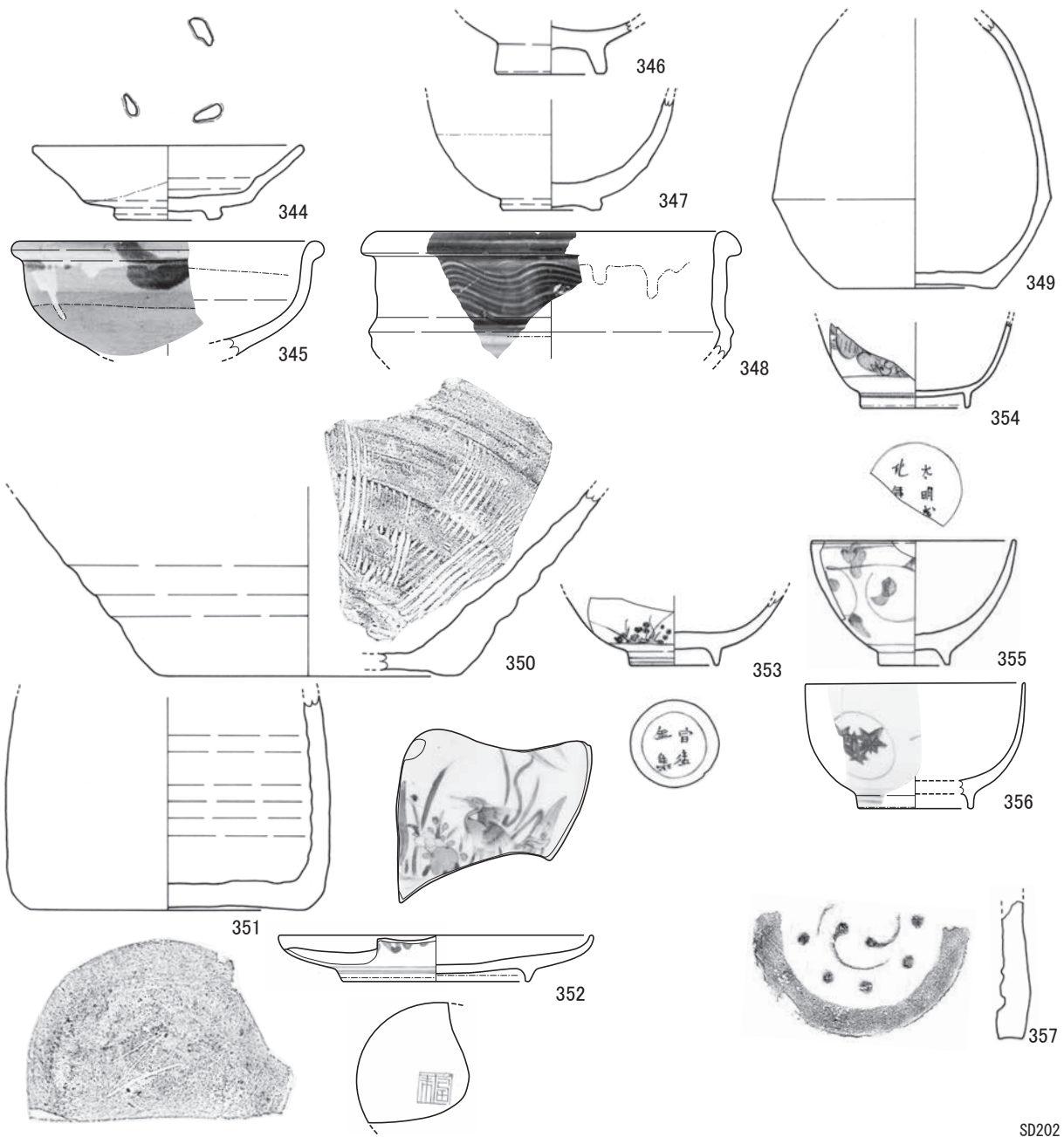


(木樋接合部拡大図)

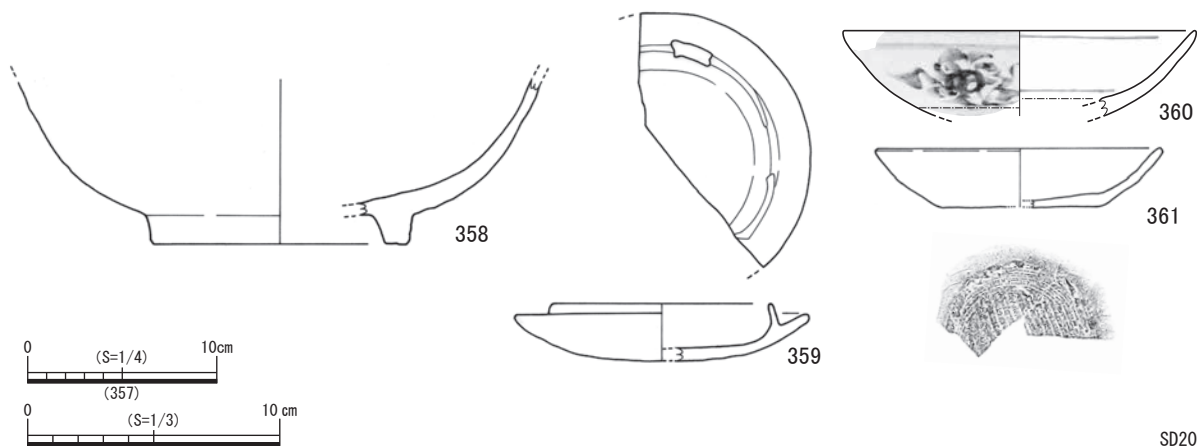
<模式図>



第 67 図 SD205 平面図・断面図

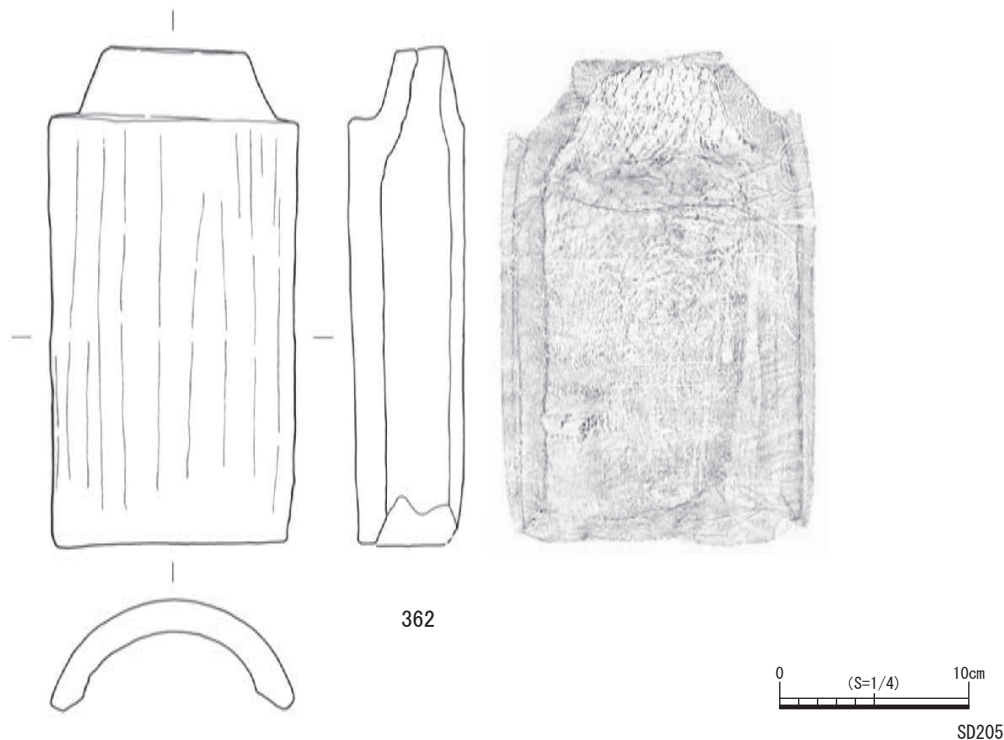


SD202



SD204

第 68 图 SD202・204 出土遺物



第 69 図 SD205 出土遺物

本遺構西端部には、SX201 が存在し、一見、SX201 に削平されたような状況を呈する。しかしながら、SX201 西方からは SD205 の延伸部分を確認していない点、SD205 に伴う木樋が接続部を境に SX201 に向けて主軸を変換した可能性が指摘できる点、後述するように SX201 で枡状の木製品を確認しており、上記木樋が枡状の木製品に接合していた可能性も考えられる点から、SD205 と SX201 は一連の遺構である可能性も否定できない。その場合、SX201 に向かって導水していたと考えられ、前述の SD204 と SE202 の関係と類似する。積極的根拠に欠けるが、可能性として指摘しておく。

埋土からは、肥前系磁器、土師質土器が出土しているが、出土遺物量は極めて少量である。また、残存状況も極めて不良である。肥前系磁器は薄手の小片である。土師質土器は、焼塩壺である可能性が高い。肥前系磁器の特徴から、少なくとも様相 5 以降の遺物群であると考えられる。

(4) 井戸

a. 調査の経緯と方法

第 2 遺構面調査時に、調査区中央北寄りの近代に形成された攪乱の下位で確認した遺構である。SE202 が該当する。なお、SE201 は第 1 遺構面の SE101 と同一遺構である可能性が極めて高いことから、第 1 遺

構面の遺構として報告した。SE101 の報告を参照されたい。

SE202 掘方を第 1 遺構面では確認していないことから、第 2 遺構面に伴う遺構であると判断した。調査は第 2 遺構面の遺構掘削時に行った。第 2 遺構面ベース土は砂質を呈し、極めて不安定な土質であったことから、近代の攪乱による削平が著しい井戸南半を重機で大幅に掘削し、井戸断面観察及び記録のための作業用スペースを設け調査した。なお、重機による掘削に先立ち、掘方上端等の平面的な情報の記録を行った。

b. 井戸の構造 (第 70 図)

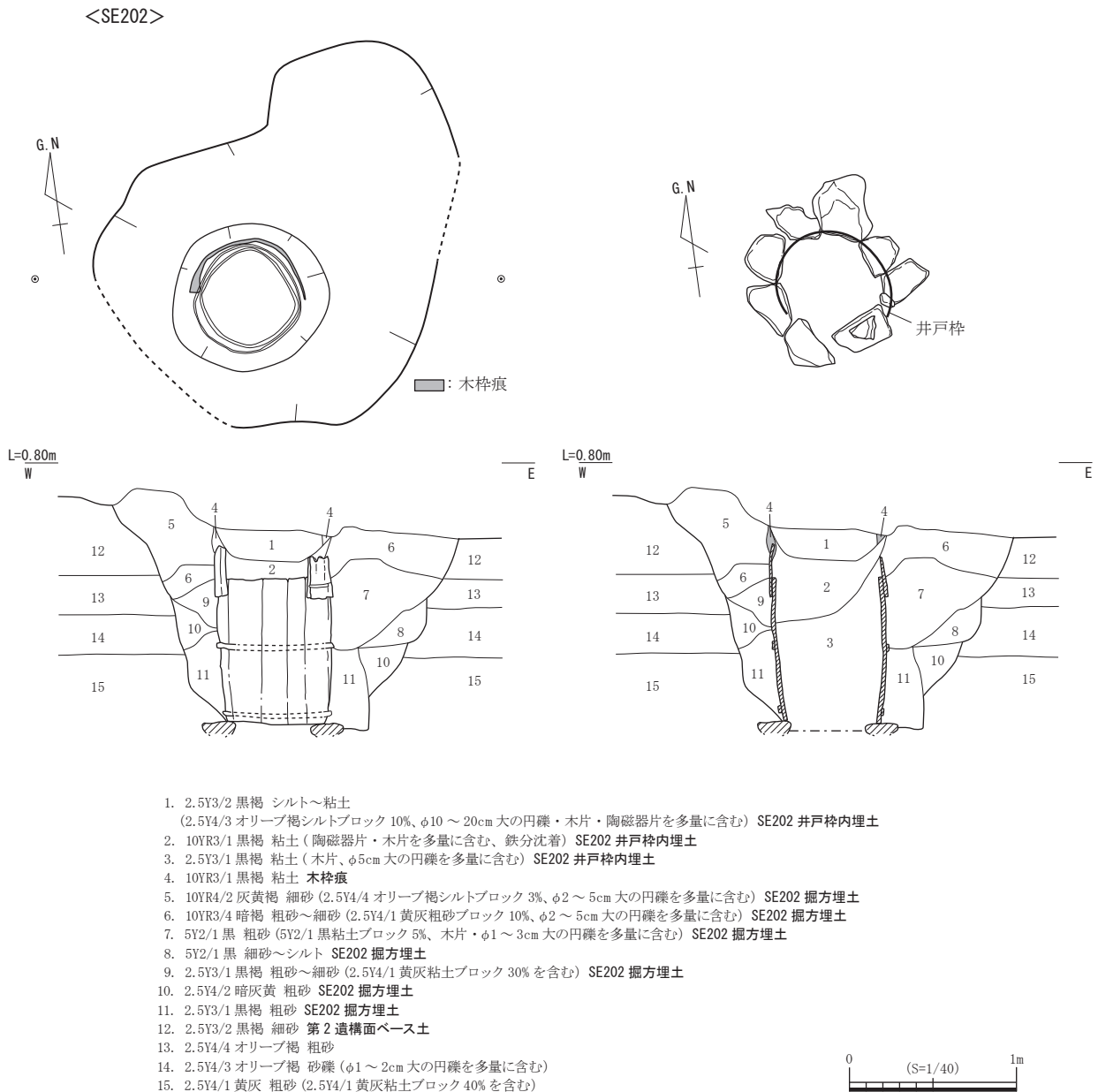
掘方掘削後、井戸枠を据え井戸枠と掘方の隙間を人為的に埋め戻すことで井戸を構築している。そのため、掘方埋土の土色・土質はベース土以下の堆積層と類似する。

掘方は検出面で長軸約 2.5m、短軸約 1.9m の極めて歪な形状を呈する。近代以降の攪乱を受けた影響であると考えられ、本来は不整円形に近い形状を呈していたと考えられる。掘方底部では直径約 1.0m の規模を有する。掘方底部の標高は -0.8m である。掘方埋土は小礫を多量に含む砂質を呈し③層以下の自然堆積層と類似することから、井戸枠据え付け後、掘削土を用いて埋め戻しを行ったと考えられる。

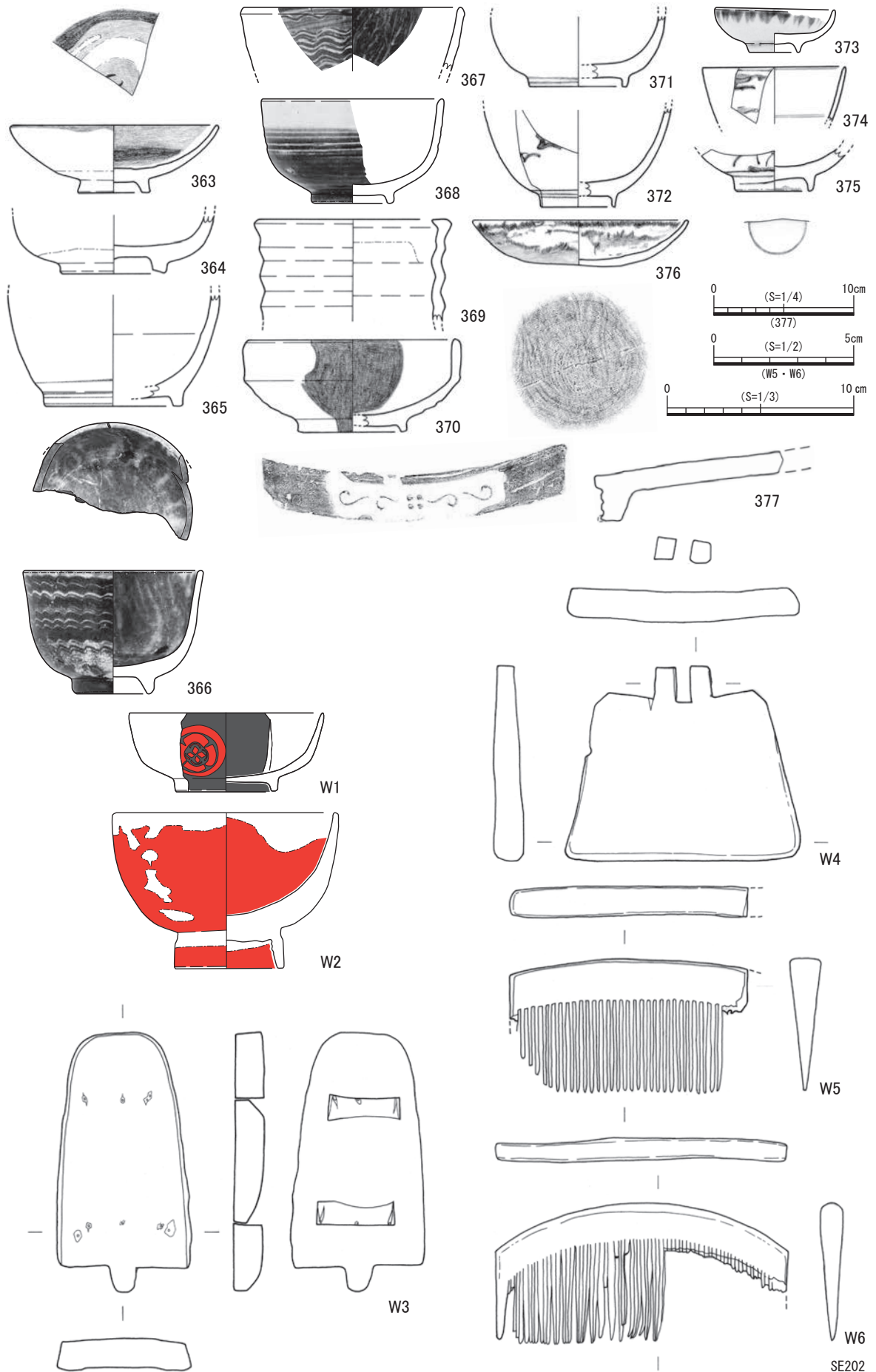
井戸枠について、木製の井戸枠を2段確認した。下位の木製井戸枠は完形である。上端部直径約65cm、高さ約90cmの規模を有する。中央付近でやや広がり直径約70cmとなり、底部付近では狭まり直径約60cmとなる。幅10～15cm、長さ約90cmに加工された板材を組み合わせ、竹紐で少なくとも2箇所固定することで形作られている。竹紐は中位及び下端付近で確認したが、上端部付近にも設置されていた可能性が考えられる。一方、上位の木製井戸枠は下端付近の20～30cm程度が残存しているのみであり、上半は破壊されている。使用木材の大きさは下位の木製井戸枠と同様であり、また下端付近には部分的に竹紐が残存することから、下位の木製井戸枠と同規模・同形状の井戸枠が設置されていたと考えられる。

下位井戸枠底部では砂岩及び安山岩を計8個円形状に並べた状況を確認した。いずれも平坦面を上面に向けて並べられており、上面の標高は-0.77～-0.80とほぼ水平に揃えられている。石列は1段のみであり、下位に続く状況は見られないことから、井戸枠の沈み込み防止のために設置されたものと考えられる。

井戸枠内埋土は大きく3層に分類可能である。いずれも直径5～20cm程度の円礫や陶磁器・土師質土器、木製品、器種不明木片等を多量に含む粘土層であり、人為的な埋戻しに伴う堆積層であると考えられる。後述するように、井戸枠内埋土出土遺物は様相6以降の遺物を中心とすることから、第1遺構面整地に際して、埋戻された可能性が考えられる。



第70図 SE202 平・断面図



第 71 图 SE202 出土遺物

c. 出土遺物 (第71図)

井戸枠内側からは肥前系陶器・磁器、京・信楽系陶器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒平瓦、木製品、漆器が多量に出土している。残存状況が良好な資料を多く含む。陶磁器類では、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が大多数を占め、次いで瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器の順に多く含まれる。肥前系陶器では、刷毛目碗や蛇の目釉剥ぎの見られる皿等が含まれる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となる。備前系陶器では、卸目の密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。軒平瓦は中央に四目文を有する資料が見られる。土師質土器では、前述の土器④類や皿A IVと考えられる皿片等が出土している。漆器碗は2個体分出土しており、一方は内外面ともに赤漆、他方は内外面ともに黒漆を塗布し、外面に家紋が施されている。木製品は曲げ物や櫛、下駄・栓形の木製品(写真図版27-28参照)が出土しており、特に曲げ物では側面に「あら 五月廿五日」の墨書きが見られる(写真図版27-28・29参照)。

上記の中で、軒平瓦や土師質皿等においてやや古相(様相4前後)を示す遺物が見られるが、出土遺物の下限は様相7前後であると考えられる。よって、様相7前後に最終埋没を遂げたと考えられる。これらの遺物に見られる時期差は、井戸使用時から埋め戻し時までの時間幅として理解することも可能であろう。

一方、掘方埋土からの出土遺物は極めて少量であり、残存状況も不良である。肥前系陶器刷毛目碗片や薄手の肥前系磁器片、京・信楽系陶器片、備前系陶器片等が数点ずつ出土している。上記の遺物群は様相5前後に属する遺物群である可能性が高い。井戸断割り時の混入である可能性もある。

(5) 性格不明遺構

a. 構造 (第72図)

特徴的な構造を呈するものの、性格が不明な遺構について記載する。SX201が性格不明遺構にあたる。SX201は調査区北寄り、SD205西端部に位置する。検出面での平面規模・平面形は、長軸約1.7m、短軸約1.5mの規模を有する、不整な円形状を呈する。底部は直径約0.8m程度の円形状を呈し、平坦な面を形成している。掘方深度は約1.1m、標高は約-0.5mである。

底部では、木材が腐食し、粘土層として痕跡的に残存する状況を確認した。粘土層は高さ約20cmで、円弧状に残存する。極めて部分的な状況からの復元で

あるが、直径は50～60cm程度であったと考えられる。また、部分的に竹紐が残存する。よって、直径50～60cmの枠状の木材を竹紐で結束する構造を推測することが可能である。このような規模・構造を呈する木製構造物としては、井戸枠を想定することが可能であり、本遺構が井戸であったと考えることもできる(以降、「井戸枠状木製構造物」と記載する)。井戸枠状木製構造物は掘方中央ではなく、やや西寄りに設置されている。

井戸枠状木製構造物の内側底部では、1辺約10cm、高さ約25cmの四角柱を呈する枡状の木製品が出土している(以降、「枡状木製品」と記載する)。長辺約25cm、短辺約10cmの板状に加工された木材を各面1枚ずつ、計4枚組み合わせ形成されている。上部及び下部に板は無く、筒状を呈していたと考えられるが、検出当時は同様の大きさを有し、やや薄い木板を上部で検出した。意図的に載せられたものか否かは不明である。ただし、枡状木製品内部には空洞が形成されており、後述する粘土層の流入が抑えられたような状況を呈することから、少なくとも粘土層堆積時には既に上位に板材が存在したと言える。

b. 埋土

埋土は4層に大別できる。上位1～3層は直径10cm前後の礫や木片、木根等を多量に含む粗砂混じり粘土層である。ベース土以下の堆積層は礫を含む粗砂層であり、特にベース土である第72図5層は直径5～15cm大の円礫を多量に含むことから、上記埋土はベース土以下の堆積層をブロック状に含んでいると言える。よって、人為的な埋戻し土であると考えられ、残存したと考えられる井戸枠状の構造物は埋め戻しに際して破壊されたと考えられる。さらに踏み込むならば、1～3層と掘方との間に井戸枠状構造物据え付け時の埋戻し土が確認できないことから、井戸枠状木製構造物据え付け時の埋め戻し土及び井戸枠状木製構造物を取り除き、再度埋め戻したと考えられる。一方、最下層の4層は極めて粘性の強い粘土層であり、前述の井戸枠状木製構造物の内側を中心に堆積している。人為的な埋戻し土と見るよりは、滞水下で形成された堆積層である可能性が考えられ、井戸内部の堆積状況と類似する。なお、断面図には反映されていないが、井戸枠状木製構造物の外側では掘方埋土とみられる小礫や砂粒を含む堆積層を確認している。

c. 出土遺物 (第73図)

遺物は、埋土上層(1~3層)、埋土下層(4層)、掘方埋土に分けて取り上げを行った。いずれも出土遺物量は少量であり、残存状況は不良である。

埋土上層からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器が出土している。いずれも同程度ずつ出土している。肥前系陶器では、白化粧土が施された刷毛目皿が含まれる。肥前系磁器は、薄手の資料が主体となり、口錆が見られる資料も含まれる。瀬戸・美濃系陶器では、断面U字形状を呈する高台の高い資料が1点見られる。備前系陶器では、卸目が密な播鉢や精良な胎土を用いた灯火具等が見られる。これらの状況から、上記遺物群は様相7前後に属する遺物群であると考えられる。

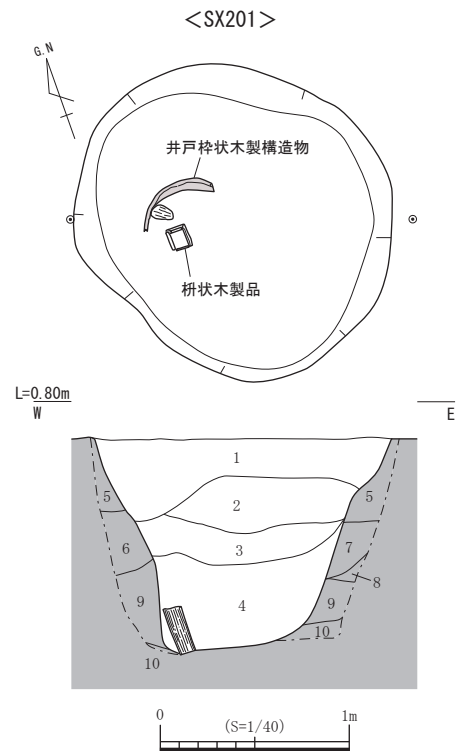
埋土下層、井戸枠内側からは、陶磁器・土師質土器等は出土していないが、漆器碗が1個体分出土している。内外面ともに黒漆を塗布する。

井戸枠状木製構造物の掘方埋土からは、肥前系磁器や備前系陶器、土師質土器が出土している。肥前系磁器は薄手の資料である。備前系陶器では播鉢や徳利が見られる。土師質土器では、焙烙と考えられる薄手の破片が見られる。以上のような状況から、これらの遺物群は少なくとも様相5以降に属するものであると考えられる。

d. まとめ

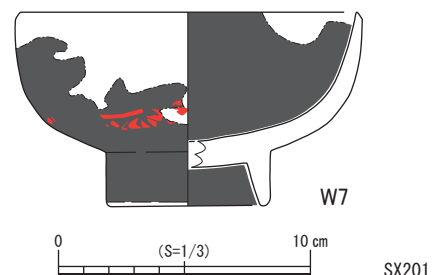
以上、改めてSX201についてまとめる。SX201は遅くとも様相5段階には形成されていたと考えられる。掘方内には井戸枠状木製構造物や枡状木製品が設置されていたと考えられ、外側を小礫や砂粒を含む土壌で埋め戻している。その後、様相7前後における第1面整地に際して、SX201下端部より上位は破壊され、人為的に埋め戻されたと考えられる。

本遺構の機能は不明である。しかしながら、前述のSD205は本遺構に接続するような状況を呈することから、SD205と一体の遺構である可能性も考えられる。その場合、本遺構で出土した枡状木製品とSD205で検出した木樋が接続していた可能性も考えられる。ただし、具体的な状況証拠に欠けることから、可能性として指摘するにとどめておく。しいて用途を推測するならば、SD205を通して導水された水を一時的に溜める、水溜状の遺構であった可能性を想定することができる。



1. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂混じり細砂 (2.5Y4/3 オリーブ褐粘土ブロック 5%、2.5Y5/3 黄褐粘土ブロック 10%、10YR3/4 暗褐粗砂ブロック 10%、φ3 ~ 15cm 大の円礫を多量に含む)
2. 2.5Y4/1 黄灰 粗砂混じり粘土 (10YR4/1 褐灰粘土ブロック 5%、2.5Y4/3 オリーブ褐粘土ブロック 3%、10YR4/3 にぶい黄褐粗砂ブロック 10%、φ2 ~ 15cm 大の円礫・木片・木根を多量に含む、鉄分沈着)
3. 5Y4/1 灰 粗砂混じり粘土 (5Y3/2 オリーブ黒細砂ブロック 20%、5Y4/2 灰 オリーブ粘土ブロック 5%、φ2 ~ 5cm 大の円礫を多量に含む、鉄分沈着)
4. 5Y4/1 灰 粘土 (7.5Y3/2 オリーブ黒粘土ブロック 5%、φ10 ~ 15cm 大の円礫を少量含む)
5. 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂~細砂 (10YR4/3 にぶい黄褐粗砂ブロック 5%、5Y4/4 暗オリーブ粗砂ブロック 3%、5Y5/3 灰オリーブシルトブロック 7%、2.5Y4/2 暗灰黄粘土ブロック 7%、φ5 ~ 15cm 大の円礫を多量に含む)
- 第2遺構面ベース土
6. 5Y4/1 灰 粗砂 (5Y5/1 灰粘土ブロック 5%、5Y2/1 黒細砂ブロック 5%を含む)
7. 2.5Y3/1 黒褐 細砂混じり粘土 (5Y6/1 灰粘土ブロック 3%、φ2 ~ 3cm 大の円礫を少量含む)
8. 2.5Y5/4 黄褐 粗砂
9. 7.5Y2/1 黒 粗砂混じり粘土 (7.5Y5/1 灰粘土ブロック 20%を含む)
10. 5Y4/1 灰 粗砂

第72図 SX201平面図・断面図



第73図 SX201出土遺物

(6) 第2遺構面(③層)上面及び焼土層(②層)出土遺物の概要(第74図)

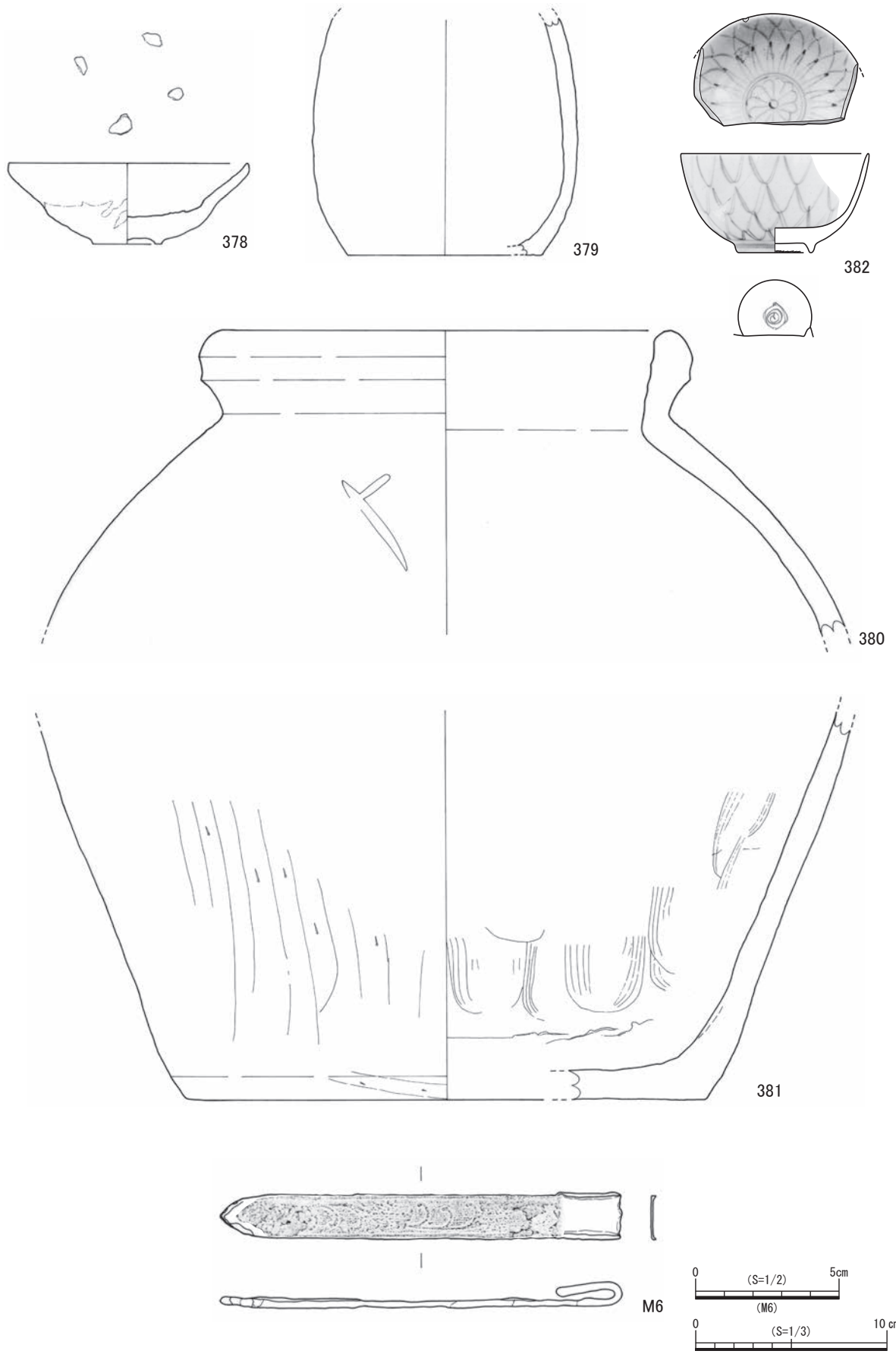
第2遺構面上面では、面的に焼土層を確認しており、少なくとも、調査区全域に本来堆積していたものと考えられる。また、近隣部における調査においても同様に①層相当層と③層相当層の間で焼土層を確認できる場合がある。よって、当該焼土層の形成時期を特定し、第2遺構面から第1遺構面への変遷過程・変遷要因を考察する際の参考資料としたい。

ここでは、第2遺構面(③層)上面で面的に確認した焼土層(②層)の形成時期を特定する際の参考とするため、②層中に包含された遺物、及び③層上面で出土した遺物について、観察所見の概要を記載する。

②層中からは、肥前系陶器・磁器、備前系陶器が少量出土している。肥前系陶器では、胎土目を有する皿が見られる。一方で、肥前系磁器では内面一重網目文、外面二重網目文を施し、見込中央に菊花文を施した碗が見られることから、出土遺物の所属時期の下限は様相4～5であると考ええる。

一方、③層上面からは肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、輸入磁器、土師質土器、銅製品が出土している。比較的多くの遺物が出土しており、残存状況の良い資料も含む。主体となるのは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、輸入磁器であり、備前系陶器は比較的少量である。肥前系陶器では、胎土目を有する皿等が見られる。肥前系磁器では、薄手の資料が主体となり、蛇の目釉剥ぎの見られる皿が含まれる。また、口径に対し高台径の小さい皿が含まれる一方で、口径に対し高台径が大きく、高台断面三角形又はU字形状を呈する皿も含まれる。瀬戸・美濃系陶器では皿や碗が見られる。備前系陶器では灯火具や甕が見られる。土師質土器では、白みがかつた褐色の胎土を有する皿AⅡや皿AⅥ、焙烙が見られる。上記遺物群には、やや古相を示す遺物も含まれるが、所属時期の下限は様相5であると考ええる。

以上、②層中に包含される遺物及び③層上面で出土した遺物の観察所見の概要を記載した。いずれも、出土遺物の所属時期の下限は様相5であることから、少なくとも②層は様相5以降に形成されたものであると考えられる。②層上位に形成された①層は様相7以降の整地土であることから、②層は様相5～6の間で形成されたと考えられる。



第 74 図 ③層直上・②層（焼土層）出土遺物

③層直上・②層（焼土層）

3 第3遺構面（第75図）

第3遺構面は④層上面に対応する。前述のとおり、第2遺構面調査後に実施した南壁際における断割り調査によって、SK301を確認したことから、急遽調査区東半部全域の調査を実施した。なお、西半部の調査時には第3遺構面の存在を把握していなかったため、第3遺構面の調査を行っていない。以下、遺構の種類ごとに観察所見を記載する。

(1) ピット

a. 概要（第76図）

第1・2遺構面同様、ここでは便宜的に直径50cm以下の遺構をピットとして報告する。

第3遺構面において計13基のピットを確認した。規模は直径12～40cmで、特に20～30cm程度に集中する。また深度は8～22cmであり、10～15cm程度のものが大多数である。

埋土は2種類に分類可能である。遺構ベース土と色調・土質の類似する灰系又は黒褐色系細砂～シルト系の埋土、直径2～3cm大の小礫を多量に含む粗砂系の埋土である。前者は、柱据え付け時の掘方埋め戻しに際して、又は柱撤去後の埋戻しに際して掘削土や遺構周辺の土を利用した、あるいは風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込んだ結果であると考え（SP301～311）。後者は、第3遺構面のベース土とは異なり、むしろ第3遺構面上位で部分的に確認した洪水砂と類似することから、柱穴の残骸等、第3遺構面上面の部分的な窪みに洪水砂が堆積した結果として捉えることも可能である（SP312）。なお、SP313は断面観察を行わずに完掘したことから、埋土の状況が不明である。

柱痕を有するピットはSP301～305の5基のみである。第3遺構面は水分量が豊富であったことから、いずれも柱材が腐食した状態で残存していた。これらは柱除去に際して、根本付近から切除され、土中の柱材が痕跡的に残存した結果として捉えられる。柱穴を再掘削し、柱材を抜き取ろうとした痕跡を明確に有するピットは第3遺構面では皆無である。

b. 掘立柱建物の復元

上記のピットのうち、分布状況及び埋土の特徴、規模に基づき、少なくとも2単位の組み合わせを復元することができる。と考える。

SP301～307 調査区東半部中央やや南寄りで確認した柱穴群である。SP301～303、SP304とSP305、

SP306とSP307は近接することから、建物の修築が想定可能である。柱列は1列分確認しており、建物の広がりには不明である。柵列である可能性もある。主軸は座標北から約80°西へ傾く。同時並存したと考えられる柱相互の柱間間隔は1.5m前後である。

SP310・311 調査区東半部中央やや北寄りで確認した柱穴群である。前述のSP301～307や後述するSD301と同様の主軸方向を呈することから、掘立柱建物跡である可能性が高いと判断した。柱列は1列分確認しており、建物の広がりには不明である。柵列である可能性もある。主軸は座標北から約78°西へ傾く。柱間間隔は約1.5mである。

なお、この他SP308・309も埋土・規模が類似しており約1.5m間隔で並列する状況から掘立柱建物跡又は柵列を構成する可能性が考えられるものの、主軸は座標北から約72°西へ傾いており、前述のSP301～307やSP310・311、後述するSD301の主軸方向と大きく異なる。

c. 出土遺物（第83図）

遺物が出土したピットはSP306のみである。SP306からは、残存状況の不良な遺物が極めて少量出土している。出土遺物は肥前系陶器皿及び器種不明の小片であり、皿は胎土目を有し、高台が低く、白化粧土による装飾が施されている。出土遺物は少量であるが、少なくとも上記遺物群は様相3以前の遺物群であると考えられる。

他のピットについては、遺物が皆無であるが、埋土の特徴がSP306と類似することから、様相3以前に属するものであると考える。SP313については、埋土観察を行っていないが、後述する中世に属すると考えられる溝状遺構より後出することから、同様に様相3以前に属する可能性が考えられる。

(2) 土坑

a. 概要（第77・80図）

第1・2遺構面同様、ここでは長軸50cm以上の規模を有する遺構を土坑として報告する。

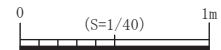
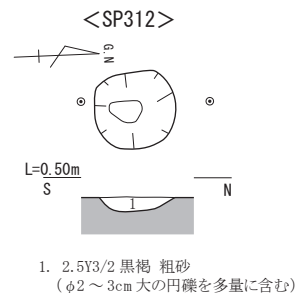
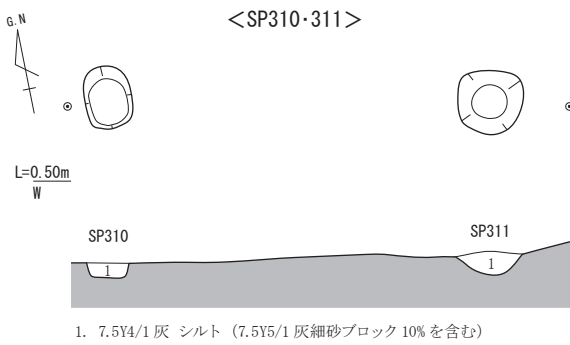
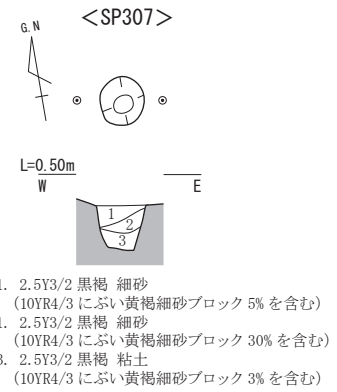
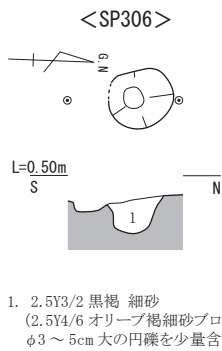
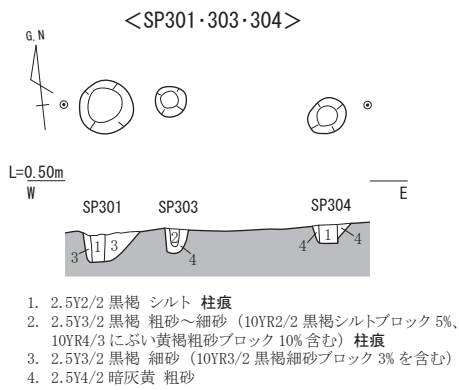
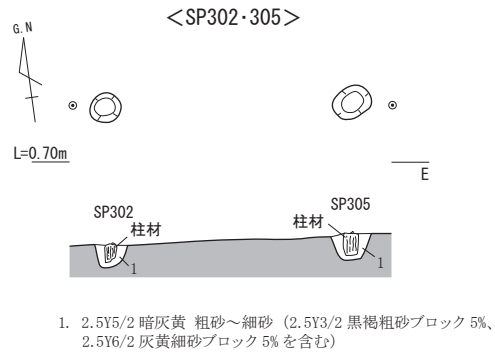
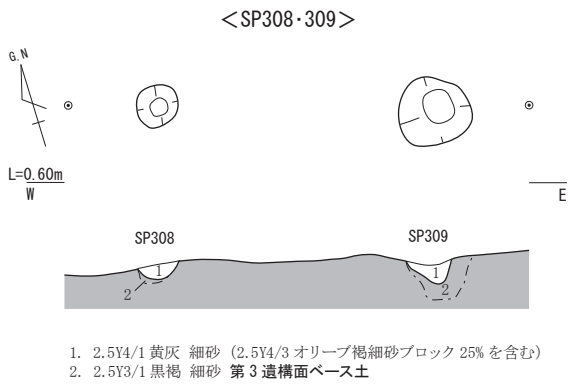
第3遺構面において計10基の土坑を確認した。調査区東半部のほぼ全域に分布している。検出した土坑は大きく3種類に分類可能である。水溜状土坑、木桶据え付け土坑、その他である。

以下、3種類の土坑それぞれについて、個別に詳細を記載する。

b. 水溜状土坑



第 75 図 第 3 遺構面遺構配置図 (1 / 100)



第 76 図 柱穴平面図・断面図

(構造・埋土) (第77図)

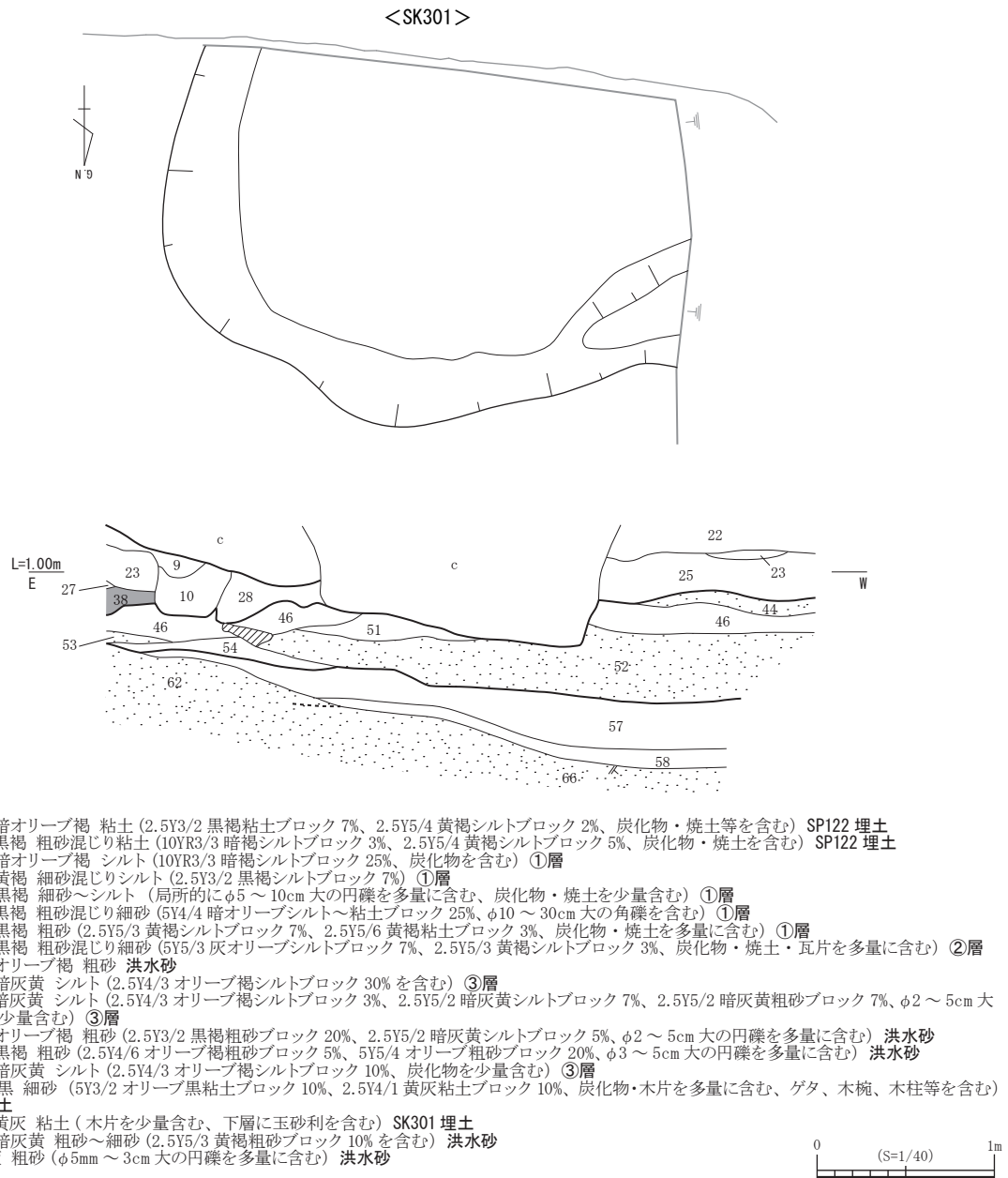
SK301 が該当する。調査区東半部南西隅部で確認した。調査区南方及び調査区西半にも広がる。ただし、前述のとおり、調査区西半部については第3遺構面の調査を行えていないことから、詳細な情報は不明である。

掘方は歪な平面形を呈する。東西3.0m以上、南北2.0m以上の規模を有する。現状での深さは、約0.4mである。掘方の壁は極めて緩やかに傾斜することから、断面形状は浅い皿状を呈すると考えられる。また、底部からの湧水が激しい。

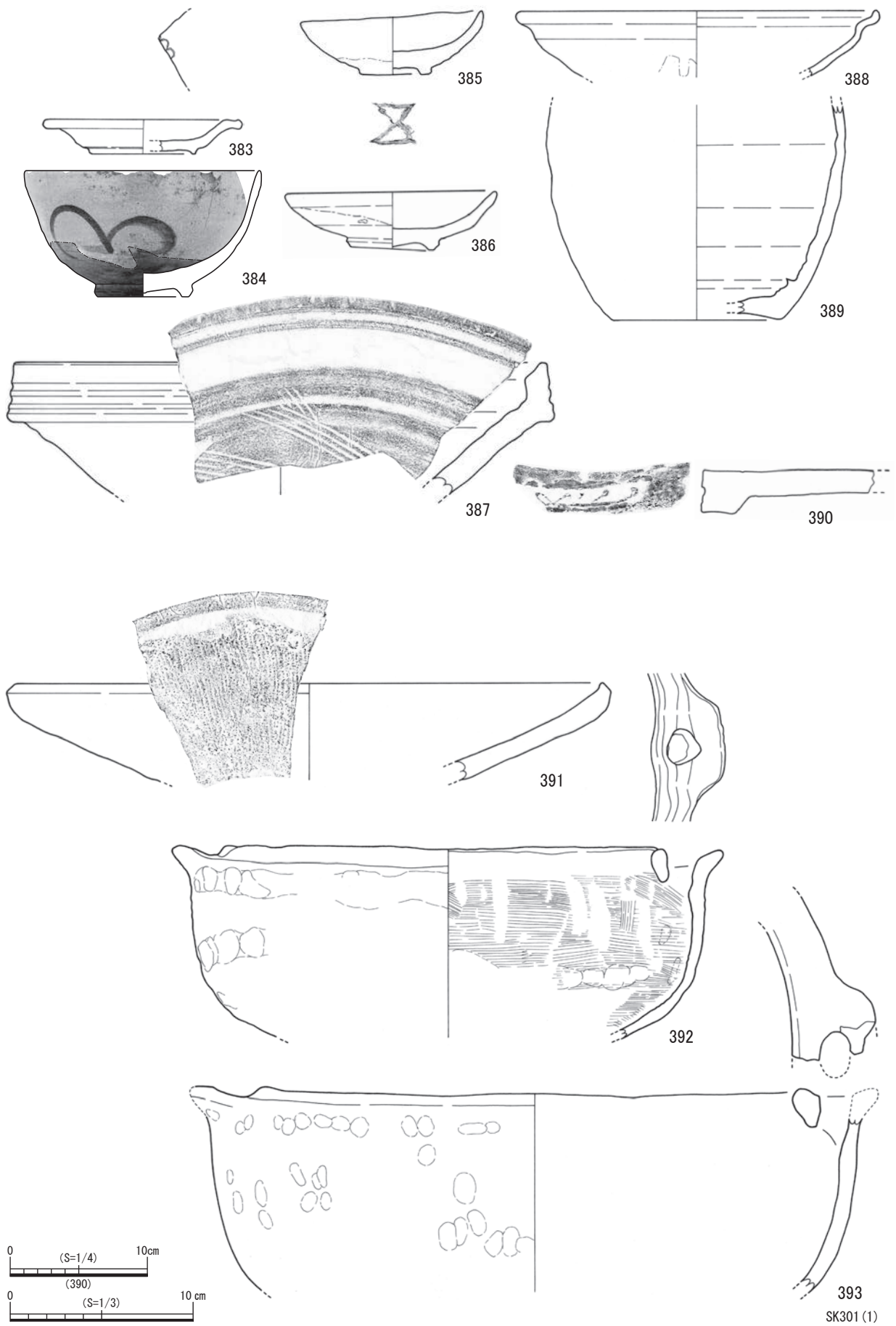
掘方埋土は、上下2層に分類可能である。底部付近には薄く黄灰色粘土が堆積しており、木片等が少

量含まれる。また、黄灰色粘土下位、底部直上では、部分的に直径3～5cm大の円礫を多量に確認しているが、分布状況は散漫であり、全面に敷き詰められたような状況とは異なる。ベース層に含まれる小礫が露出したものと考えられる。黄灰色粘土は、層相から滞水下で形成された堆積層であると考えられる。

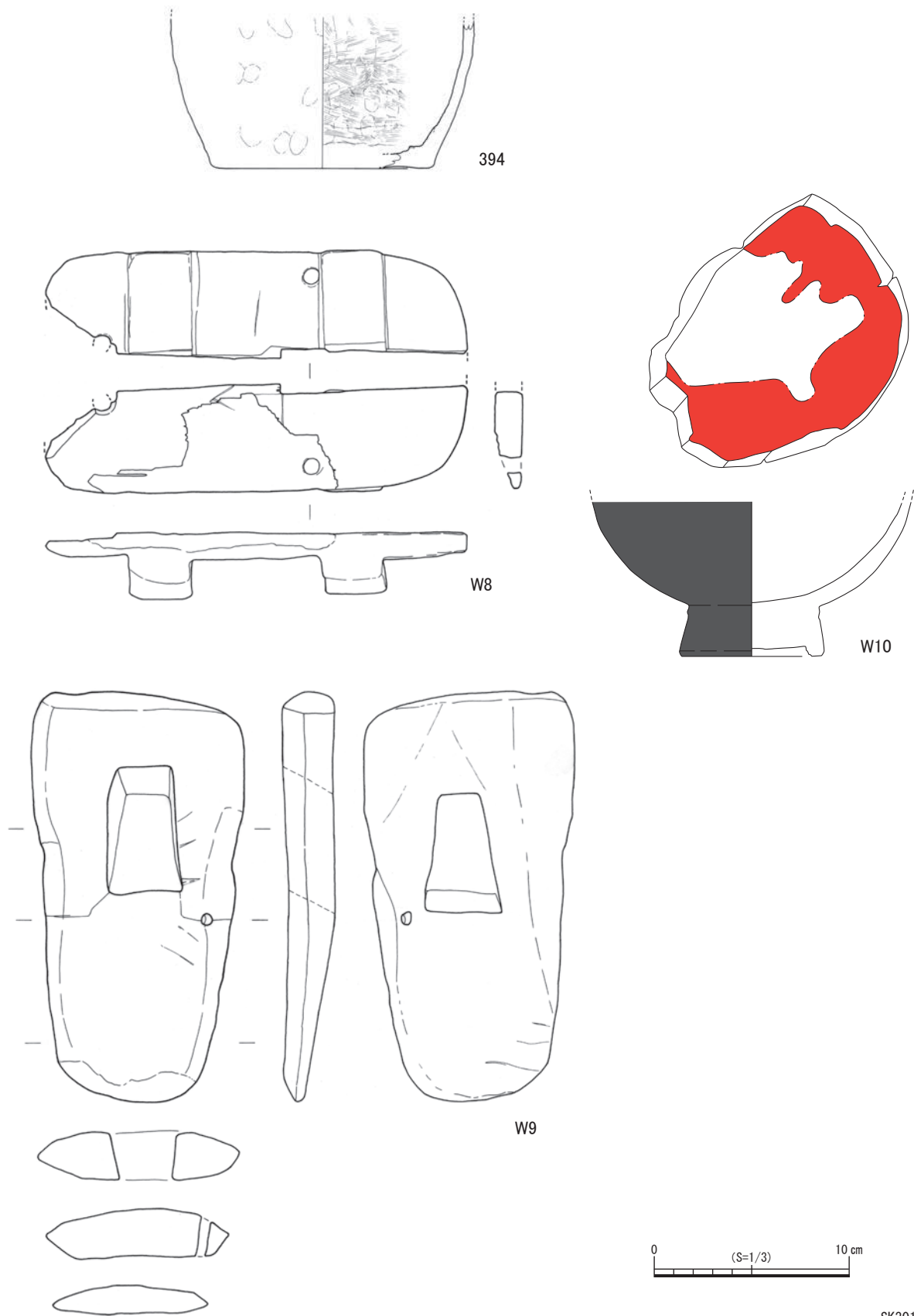
黄灰色粘土上位には黒色細砂が検出面まで厚く堆積している。黒色細砂には粘土ブロックが多量に含まれ、粘性が強い。また、炭化物や土師質土器・陶磁器類、木片、木製品、漆器等が多量に含まれている。黒色細砂層は、層相及び包含物の量から人為的な埋戻し土である可能性が考えられる。一定の粘性を有することから、滞水状態のまま埋め戻しを行った可



第77図 SK301 平面図・断面図



第 78 図 SK301(1) 出土遺物



SK301 (2)

第 79 図 SK301 (2) 出土遺物

能性が考えられる。

以上のような埋土観察の所見から、SK301には一定量の水が溜められていた可能性が考えられる。

(出土遺物) (第78・79図)

埋土からは、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器、軒丸瓦・軒平瓦、鉄製品、木製品、漆器が出土している。出土遺物量は極めて多量であり、残存状況が良好な資料も多く含まれる。肥前系陶器、備前系陶器、土師質土器の占める割合が高く、肥前系磁器や瀬戸・美濃系陶器は少量である。

肥前系陶器では、溝縁皿や高台断面逆台形状を呈する高台高のやや高い碗等が見られる。肥前系磁器では、高台断面逆台形状を呈する厚手の皿片が1点のみ見られる。瀬戸・美濃系陶器では溝縁皿等が見られる。備前系陶器では、卸目が粗な播鉢や徳利等が見られる。土師質土器では把手付鍋や暗い褐色系の胎土を用いた皿(皿A Vか)等が見られる。木製品では下駄や組み合わせ式の鋤が見られる。漆器は碗であり、外面は赤漆を塗布した後、黒漆を塗布している。一方、内面は赤漆のみを塗布している。これらの状況から、上記遺物群は様相2～3の遺物群であると考えられる。

c. 木桶据え付け土坑

(木桶据え付け土坑の観察所見) (第80図)

SK310が該当する。調査区東半部中央やや北寄りでは確認した遺構である。平面形はやや歪な円形を呈する。検出面での規模は長軸約0.8m、短軸約0.7mである。掘方底部には木桶が1点据え付けられている。木桶上半部は削平されており、底部付近のみ残存している。木桶は直径約35cmの底部から外反気味に立ち上がる形状を呈する。部分的な観察所見であるが、少なくとも底面は長方形に加工された板材を組み合わせて形成されていると考えられる。

木桶内埋土は3層に分類可能である。最下層には鉄分を多く含む褐色系シルトが堆積する。当該堆積層は第3遺構面ベース土と類似することから、周囲から風雨により流れ込んだと考えられる。なお、底部直上には直径1～3cm大の小礫が多量に堆積している。中層には鉄分を多く含む暗灰黄色砂質土が堆積する。最上層には暗灰黄色又は黒色シルト～粘土が堆積している。中層以上の堆積層は第3遺構面ベース土とは色調が極端に異なる。よって、人為的な埋戻し土である可能性が考えられる。

最下層及び中層に鉄分を含む堆積層が見られることから、滞水状態にあったことが想定できる。また、

上層のシルト～粘土層は滞水状態のまま埋め戻しを行った可能性を示唆する。木桶底部直上で確認した小礫は、滞水状況下で最下層に沈殿した小礫層であると考えられる。上記のような木桶内の埋土観察の所見から、SK310木桶内には一定量の水が溜められていた可能性が考えられる。

木桶外側において、木桶設置後の埋戻し土(掘方埋土)の確認を断面観察によって試みたが、確認することはできなかった。しかし実際は、木桶よりもやや大きめの掘方が掘られた可能性が高いことから、第3遺構面ベース土を掘削し、木桶を据え付けた後、掘削土を用いて埋め戻しを行ったことが、ベース土と掘方埋土の判別を困難にしている要因であると考えられる。

(出土遺物)

埋土出土遺物は土師質焙烙片1点のみである。薄手化しており、外面の刷毛目は密である。

d. その他の土坑

(その他の土坑の観察所見) (第80・83図)

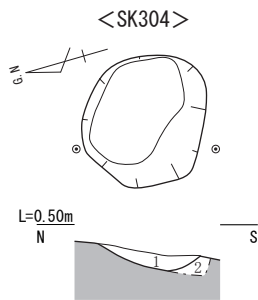
ここでは、前述した以外の土坑について、出土遺物の観察所見を中心に記載する。

その他の土坑に該当する遺構はSK302～309である。埋土は3種類に分類可能である。遺構ベース土と色調・土質の類似する褐色又は黒褐色系粗砂～細砂の埋土、しまりの弱い黄色系粗砂、黒色系粘質土である。ベース土と類似する埋土を有する土坑は、埋戻しに際して掘削土や遺構周辺の土を利用した、あるいは風雨等の影響で周辺の土砂が流れ込んだ結果であると考えられる(SK302～306)。しまりの弱い黄色系粗砂は第3遺構面上面で部分的に確認した洪水砂と類似することから、当該埋土を有する土坑は洪水砂により最終埋没を遂げたと考えられる(SK307～309)。黒色系粘質土を埋土とする土坑は、人為的な埋戻し又は滞水下での堆積が想定可能である(SK307)。

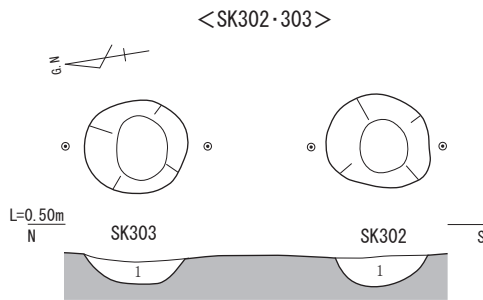
以下では、出土遺物の観察所見を中心に記載する。また、特徴的な状況を呈する土坑の場合についてのみ、その所見を記載することとし、他の詳細は第80図を参照されたい。

SK302～306 ベース土と類似した埋土で埋没する土坑である。出土遺物は皆無である。

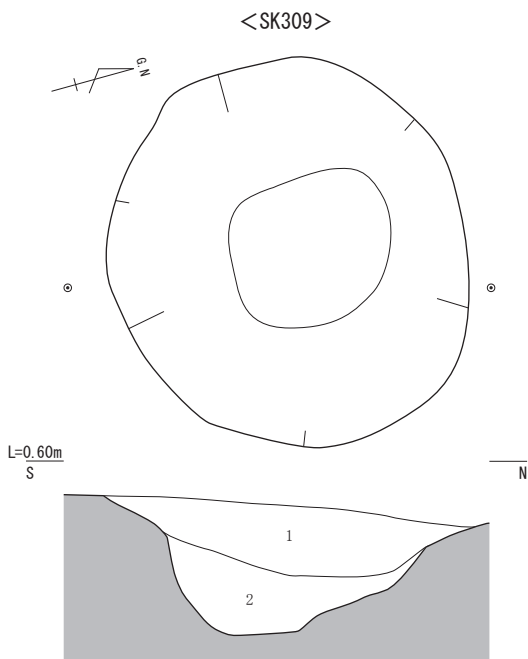
SK307 最下層に黒色系粘質土が堆積し、上位を黄褐色粗砂が覆う。上位の黄褐色粗砂はSK308・309で見られるような洪水砂と類似することから、SK307も洪水砂により最終埋没を遂げた可能性が考えられる。



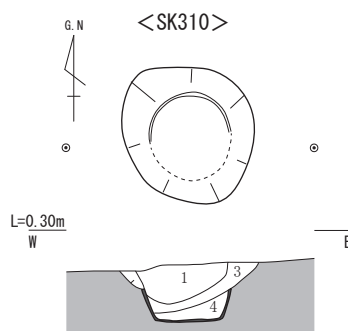
- 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (φ2~5cm 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 第3遺構面ベース土



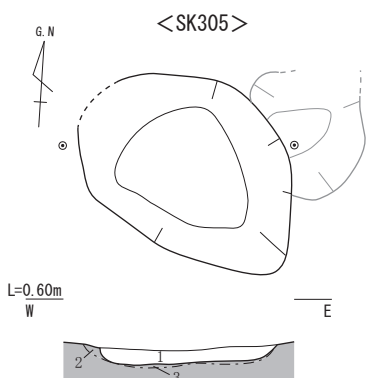
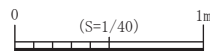
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂 (2.5Y3/1 黒褐 砂混じり粘土ブロック5%、2.5Y5/4 黄褐粗砂ブロック10%、φ3~5cm 大の円礫を多量に含む)



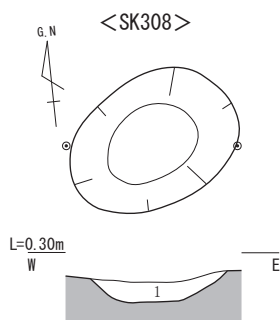
- 2.5Y8/3 淡黄 細砂 (しまり極めて弱い)
- 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂~細砂 (2.5Y4/2 暗灰黄細砂混じり粘土ブロック30%、φ3~10cm 大の円礫を少量含む)



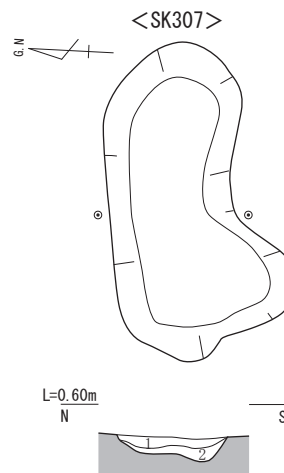
- 7.5Y2/1 黒 細砂混じり粘土 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐粗砂ブロック3%を含む)
- 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト~粘土
- 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂~細砂 (鉄分沈着)
- 7.5YR4/3 褐 シルト (鉄分多く沈着、φ1~3cm 大の小礫が底部付近に堆積)



- 2.5Y4/3 オリーブ褐 粗砂 (2.5Y4/1 黄灰粗砂ブロック10%、φ2~3cm 大の円礫を多量に含む)
- 2.5Y3/1 黒褐 粗砂 (2.5Y3/3 暗オリーブ褐粗砂ブロック10%、φ2~5cm 大の円礫を多量に含む) 第3遺構面ベース土
- 2.5Y2/1 黒 粗砂混じり粘土 第3遺構面ベース土



- 2.5Y5/3 黄褐 粗砂



- 2.5Y5/3 黄褐 粗砂
- 2.5Y2/1 黒 粗砂混じり粘土 (2.5Y5/3 黄褐粘土ブロック3%、炭化物、木片を含む)

第80図 木桶据え付け土坑及びその他の土坑平面図・断面図

埋土より肥前系陶器、土師質土器、軒丸瓦、鉄製品が出土している。出土遺物量は少量であり、残存状況は不良である。肥前系陶器では、灰釉を施した皿片が見られる。土師質土器では、皿AⅡである可能性の高い皿小片が見られる。軒丸瓦は瓦当の珠文数が20個程度あると考えられる。巴文の尾は長い、圏線状には延びない。上記遺物群は様相2～3に属する遺物群である可能性が高い。

SK308 洪水砂で埋没する土坑である。出土遺物は皆無である。

SK309 直径約1.9～2.0mの規模を有する平面円形状の土坑である。深度は現状で約0.7mを有する。断面形状は上端部から約0.2m下で傾斜が変化し、急となる。当該傾斜変換点以下はベース土と類似した埋土で埋没するが、傾斜変換点以上は洪水砂で厚く覆われる。

埋土より褐色系の胎土を呈する土師質皿片(AⅡ)が1点のみ出土していることから、様相3前後に形成された土坑である可能性が高い。

(まとめ)

以上、その他の土坑観察所見を記載した。第1・2遺構面のその他の土坑と同様、平面形や規模(平面積・深さ)、壁面立ち上がりの傾斜角度、断面形状、埋土に遺構ごとで差異が見られ、土坑の性格や形成過程についても不明な点が多い。

出土遺物は少量であるが、断片的な遺物の出土状況と埋土の類似性から、遺構形成時期の下限は様相3以前であると考えられる。

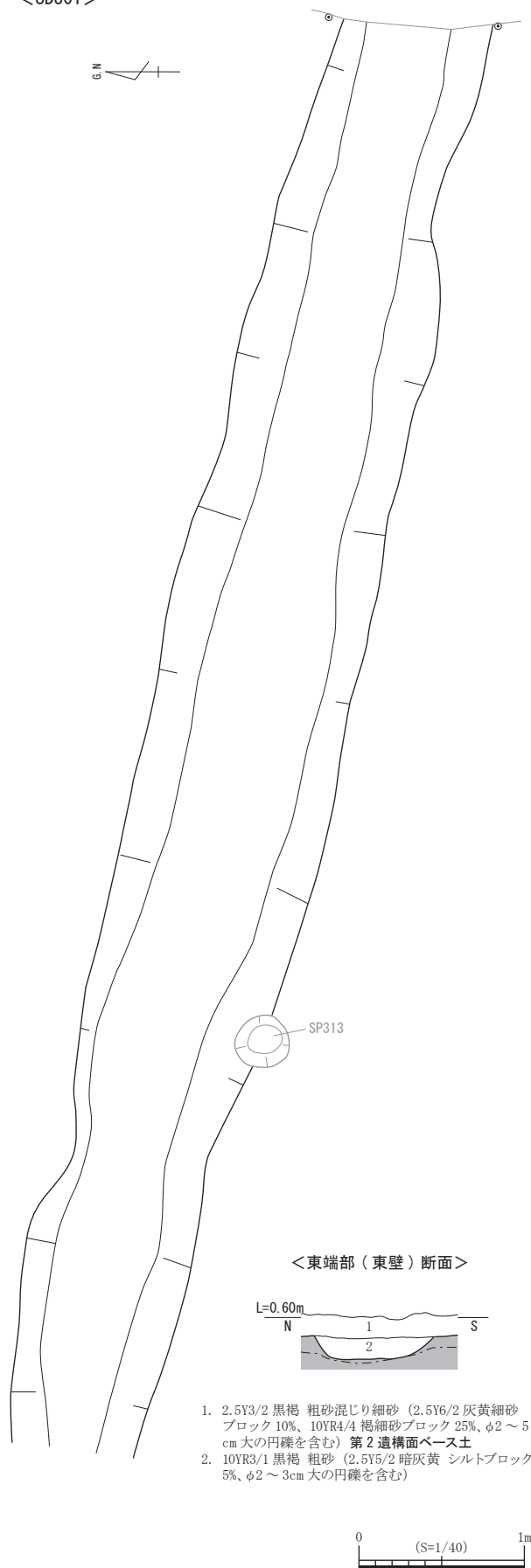
(3) 溝 (第81・83図)

第3遺構面では、1条の溝跡を確認した。SD301が該当する。東壁断面における観察所見から、掘削面は第3遺構面であることが確実であったことから、第3遺構面に属する遺構であると判断した。

SD301は調査区東半部北端付近で確認した溝状遺構である。主軸は座標北から約76°西へ傾く。前述のとおり、調査区西半部は第3遺構面の調査を行っていないが、調査区西半部にも延伸することがほぼ確実である。また、調査区東壁に断面がかかっていることから、調査区東方へと延伸することもほぼ確実である。幅は0.8～1.2mである

断面形状は浅い皿形を呈する。底部標高は東端部付近で約0.1m、西端部付近で約0mであり、原地形に沿って東から西に向かって緩やかに下る状況を呈す

<SD301>



1. 2.5Y3/2 黒褐 粗砂混じり細砂 (2.5Y6/2 灰黄細砂ブロック10%、10YR4/4 褐細砂ブロック25%、φ2～5cm大の円礫を含む) 第2遺構面ベース土
2. 10YR3/1 黒褐 粗砂 (2.5Y5/2 暗灰黄 シルトブロック5%、φ2～3cm大の円礫を含む)

第81図 SD301平面図・断面図

る。よって、東方から西方へと通水していたと考えられる。

埋土は黒褐色粗砂混じり細砂であり、SD301 周辺ベース土の色調とは異なる。よって、上記埋土は流水に伴う堆積層である可能性も考えられる。

埋土からの出土遺物量は極めて少量であり、残存状況も不良である。本遺構埋土からは土師質足釜鏝部や脚部数点、須恵器壺1点、その他器種不明の土師質土器片数点が出土している。また、肥前系磁器小片が1点のみ出土している。肥前系磁器片は小片1点のみ出土しており、二次的混入である可能性も考えられる。出土遺物量が少量であり積極的根拠に欠けるが、ここでは、土師質土器や須恵器が主体となる点を重視して、中世に属する遺構であると考えたい。

出土遺物のうち土師質足釜は口縁部が鏝部より長く、口縁端部に面を形成しない。また、鏝基部の肥厚化が進んでいないことから、佐藤氏による分類の足釜BⅢ類に分類可能であり、佐藤編年Ⅱ-2～Ⅱ-3に属する資料であると考えられる。よって、本遺構は少なくとも14世紀中葉～15世紀前葉以降に形成された遺構であると考えられる。

(4) 井戸

a. 調査の経緯と方法

第3遺構面調査時に、調査区東半部中央及び北端部付近で確認した遺構である。SE301・302が該当する。両者ともに、掘方を第2遺構面では確認していないことから、第3遺構面に伴う遺構であると判断した。調査は第3遺構面の遺構掘削時に行った。SE301は人力で井戸枠内及び井戸の掘方を半裁し断面観察を行った。一方、SE302では調査時間短縮のため、南半部を重機により断割り、井戸断面観察及び記録のための作業用スペースを設け調査した。なお、両者ともに、掘削に先立ち、掘方上端等の平面的な情報の記録を行った。

b. SE301 観察所見

(井戸の構造) (第82図)

掘方掘削後、井戸枠を据え井戸枠と掘方の隙間を人為的に埋め戻すことで井戸を構築している。そのため、掘方埋土の土色・土質はベース土以下の堆積層と類似する。

掘方は検出面で長軸約1.5m、短軸約1.3mの不整な円形を呈する。掘方底部では直径約0.7mの規模を有する。掘方底部の標高は約-0.8mである。掘方埋土

は小礫を多量に含む砂質を呈し④層以下の自然堆積層と類似することから、井戸枠据え付け後、掘削土を用いて埋め戻しを行ったと考えられる。

井戸枠について、木製の井戸枠を2段確認した。下位の木製井戸枠は完形である。上端部直径約60cm、高さ約70cmの規模を有する。中央付近でやや広がり直径約65cmとなり、底部付近では狭まり再び直径約60cmとなる。幅10～15cm、長さ約70cmに加工された板材を組み合わせ、竹紐で少なくとも2箇所固定することで形作られている。竹紐は井戸枠中程やや上位及びやや下位で確認した。一方、上位の木製井戸枠は下半部40～50cm程度が残存しているのみであり、上半は破壊されている。使用木材の大きさは下位の木製井戸枠と同様であり、また下端付近には竹紐が残存することから、下位の木製井戸枠と同規模・同形状の井戸枠が設置されていたと考えられる。

井戸枠内埋土は複数に分けられるが、大きく下半と上半の2層に分類可能である。下半は黄灰色粗砂混じり粘土の単層で埋没する。よって、滞水状況における自然堆積層であると考えられる。一方、上半は土色及び土質の異なる複数の埋土に分類可能である。小礫や井戸枠使用木材と考えられる木片を多量に含むことから、人為的な埋戻し土である可能性も考えられる。後述するように、井戸枠内埋土出土遺物は様相2～3の遺物を中心とすることから、第2遺構面形成前に人為的に埋め戻されたと考えられる。

(出土遺物) (第83図)

井戸枠内側からは肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、備前系陶器、土師質土器が出土している。出土遺物量は少量であり、残存状況は不良である。このうち、備前系陶器が主体となり、肥前系陶器、瀬戸・美濃系陶器、土師質土器がそれに次ぐ。肥前系陶器では、白化粧土を施した溝縁皿等が見られる。瀬戸・美濃系陶器では、天目形の資料が見られる。備前系陶器では、口縁部の肥厚度合いが弱い甕や播鉢が見られる。土師質土器では、皿片等が見られ、白みがかつた色調や暗い褐色系を呈する胎土を用いている。上記遺物群は、様相2～3に属する遺物群であると考えられる。

一方、掘方埋土からは肥前系陶器皿や肥前系磁器、備前系陶器、土師質土器焙烙が出土している。出土遺物量は少量であり、残存状況は不良である。

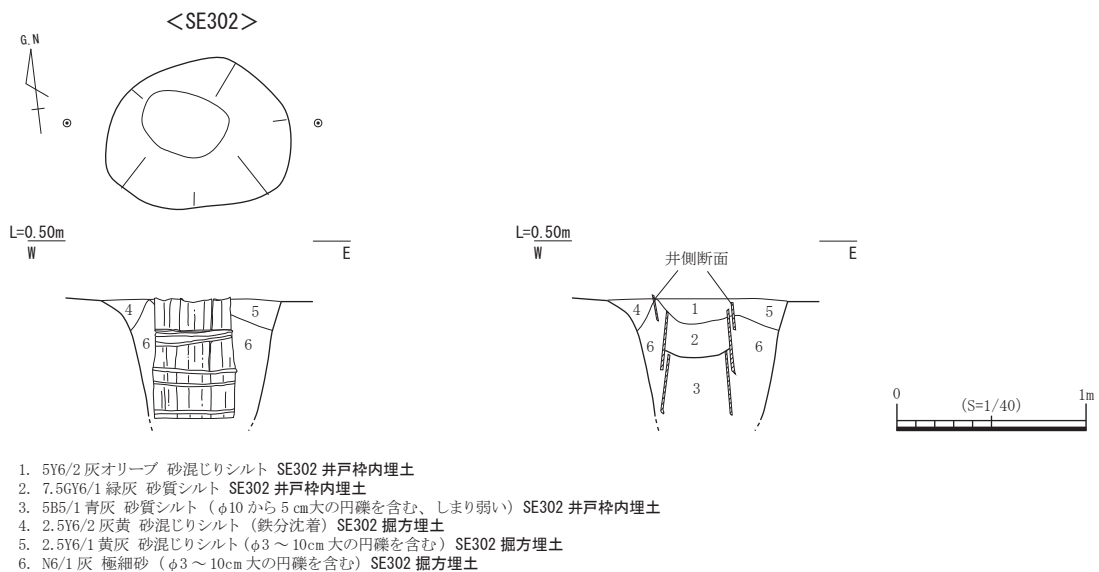
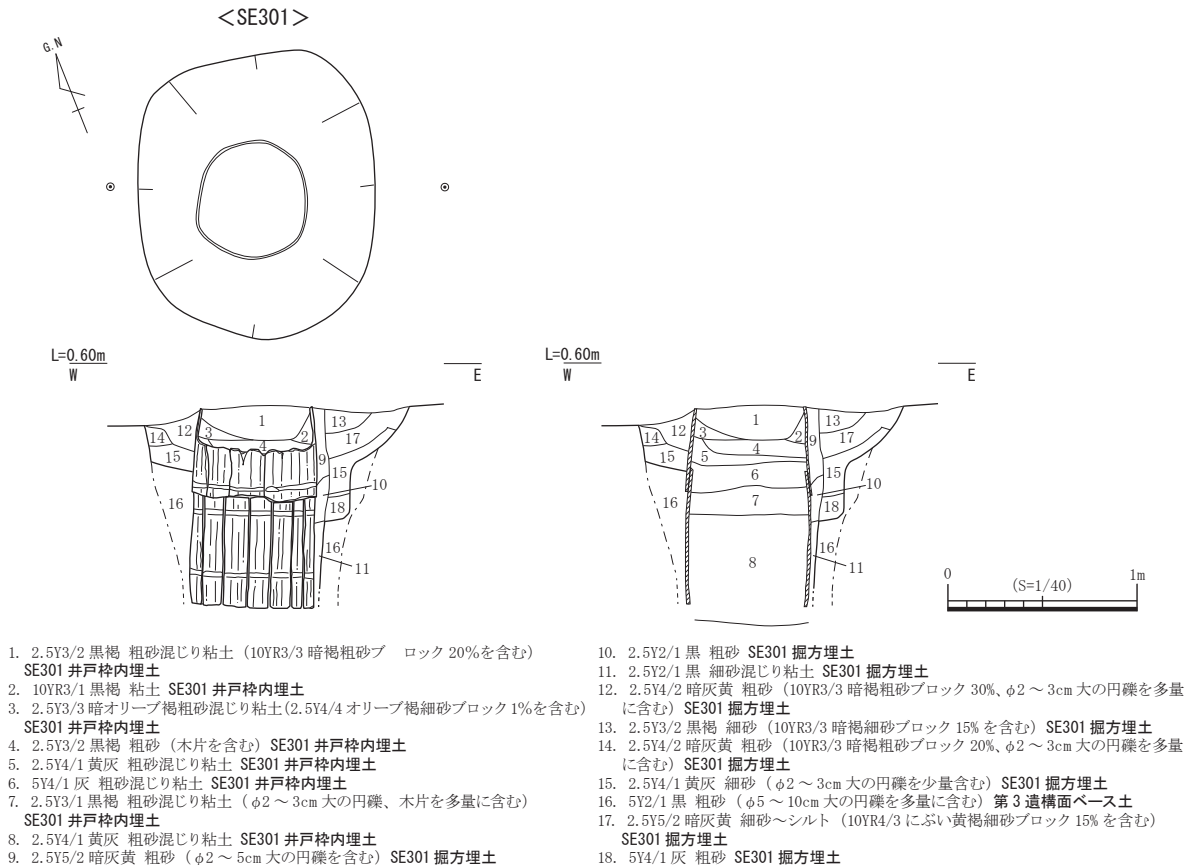
c. SE302 観察所見

(井戸の構造) (第82図)

掘方掘削後、井戸枠を据え井戸枠と掘方の隙間を人為的に埋め戻すことで井戸を構築している。そのため、掘方埋土の土質はベース土以下の堆積層と類似する。ただし、埋土の色調はベース土と異なり、灰系を呈する。水分量の多い還元的な環境下で掘方埋土がグライ化したと考えられる。

掘方は検出面で長軸約 1.0m、短軸約 0.8m の不整な

円形を呈する。掘方底部では直径約 0.5m の規模を有する。掘方底部の標高は約 -0.5m である。後述するように、使用される井戸枠は本遺跡で確認した井戸の中で最も小規模であり、それと対応して掘方の規模も小規模である。掘方埋土は小礫を多量に含む粗砂混じりシルトを呈し④層以下の自然堆積層と類似することから、井戸枠据え付け後、掘削土を用いて



第 82 図 SE301・302 平面図・断面図

埋め戻しを行ったと考えられる。前述のとおり、掘方埋土はグライ化した状況を呈することから、周囲の水分が多く、還元的な環境下にあったと考えられる。

井戸枠について、木製の井戸枠を3段確認した。特に下位2段分の残存状況は比較的良好であり、水分量が多い還元的な環境下で掘方埋土がグライ化したとの認識と整合する現象であると考えられる。また、本遺跡で確認した井戸枠の内、最も小規模な井戸枠を用いている。

最下位の木製井戸枠は完形である。上端部直径は約30cmであり、下位に向かってハ字状に広がり、下端部直径は約40cmとなる。高さは約30cmである。幅10cm未満、長さ約35cmに加工された板材を組み合わせ、竹紐で少なくとも3箇所固定することで形作られている。竹紐は井戸枠上端付近、中位付近、下端

付近で確認した。1本の竹紐で結束する状況とは異なり、複数の竹紐を束ね、撚りをかけて使用している状況が読み取れる。

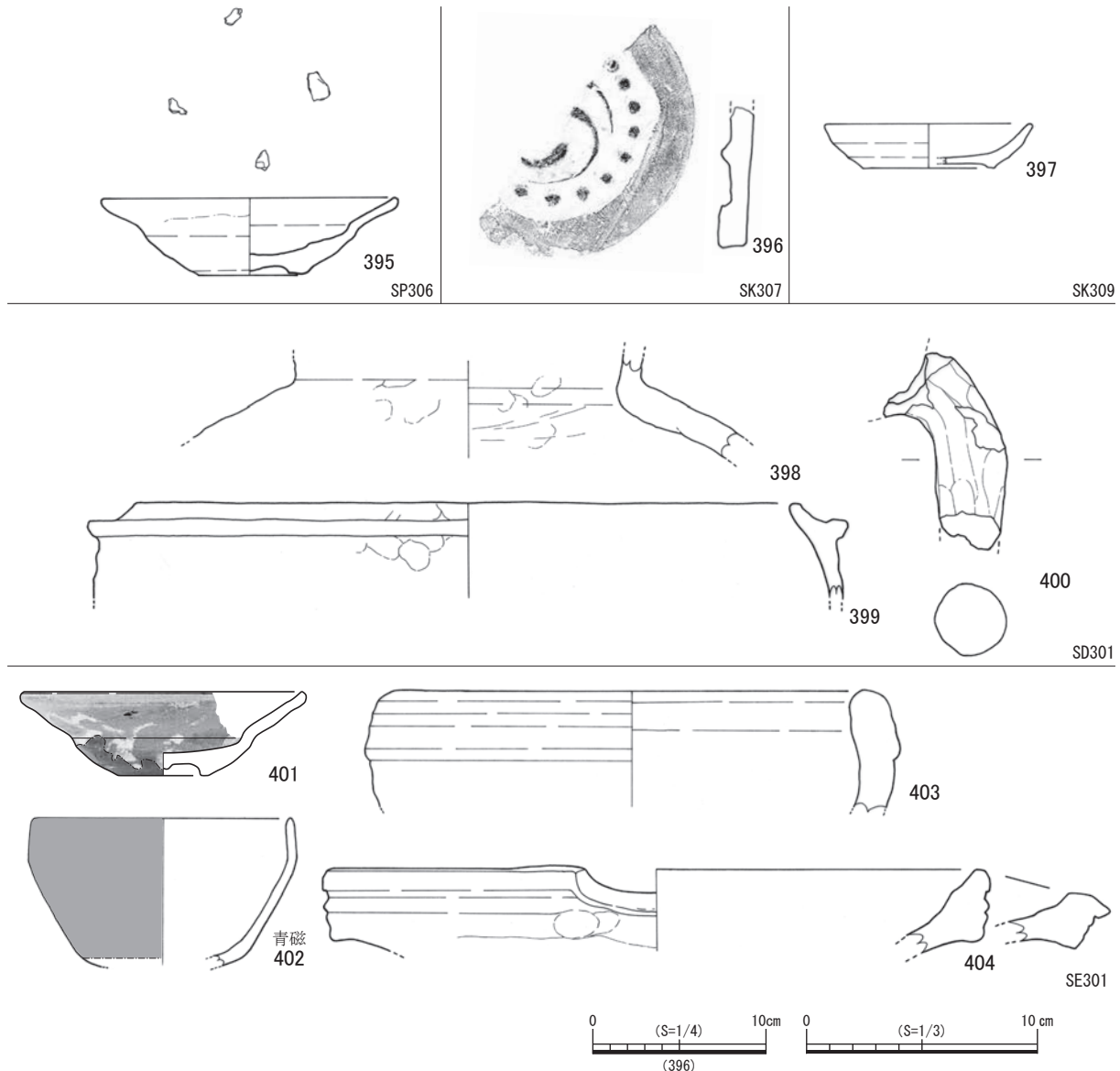
中位の木製井戸枠も完形であり、規模・構造ともに最下位の井戸枠と共通している。

最上位の木製井戸枠は下端付近15cm程度が残存するのみである。部分的な観察から、ハ字状に開く形態の井戸枠であり、下位2段分の井戸枠と共通することから、同様の規模・構造を呈するものであると考える。

井戸枠内埋土は3層に分類可能である。特に最下層埋土は直径5～10cm大の円礫を多量に含むことから、これらは人為的な埋戻し土であると考えられる。

(出土遺物) (第83図)

出土遺物は土師質皿口縁部と考えられる土師質土器小片1点のみである。



第83図 SP306・SK307・309・SD301・SE301 出土遺物

第4章 総括

第1節 検出遺構について

今回の調査によって、中世(14世紀中葉～15世紀前葉以降)、近世(17世紀前葉～19世紀末葉)における土地利用の履歴を確認することができた。また、一部で弥生時代～古墳時代の遺物も採取した。以下、各時期の土地利用形態の概要を記述する。

中世以前

本遺跡において中世以前の遺構は確認していない。しかしながら、SE101調査時に掘方埋土より弥生土器甕(下川津Ⅳ～Ⅴ式)や須恵器甕(TK43～209型式並行期)等が出土している。

第1章で触れたように、本遺跡周辺部における既往調査で、既に弥生時代の生活の痕跡が確認されている。松平大膳家上屋敷跡(高松城跡(丸の内地区))における調査では、近世の遺構面下位で竪穴建物跡や掘立柱建物跡であると考えられる柱穴群が確認されている(高松市教育委員会2004)。形成時期は出土遺物から弥生時代後期後葉(下川津Ⅳ～Ⅴ式)であると考えられる。また、他の調査地においても近世の遺構埋土等に弥生時代の遺物が混入している場合が多く見られる。いずれも後期後葉(下川津Ⅳ～Ⅴ式)の遺物である。高松城跡は香東川下流域に形成された中州状の地形面に位置する。当該砂州上に弥生時代には複数単位の建物群が形成されていた可能性が考えられ、当該地周辺部における土地利用の開始期が少なくとも弥生時代後期後葉までさかのぼる可能性を示唆する。弥生時代後期後葉には、高松平野においても集落数が増加しており、山間部や海岸線付近にまで居住域が進出する傾向が読み取れるが、それを示す一事例として、本遺跡出土弥生土器を位置付けることが可能である(池見2014、渡邊2014(P10参考文献で参照))。また、同様の傾向は、丸亀平野をはじめとする県内各地の平野部でも指摘できる(池見2014)。

一方、古墳時代の遺物の存在も、海浜の砂州上で当該期の居住域が形成されていた可能性を示唆する。ただし、周辺部の調査において、当該期の建物跡を確認した事例は存在しない。今後の調査事例の増加を待ち評価する必要があると考える。

中世(14世紀中葉～15世紀前葉以降)

第3遺構面において、当該期の遺構を確認してい

る。第3遺構面を構成する④層は砂質を呈する自然堆積層であると考えられ、北から南へ、また西から東へと上昇する調査地周辺部の原地形が残存している。当該期の遺構は溝1条のみである。溝の主軸は、座標北から約76°西に傾く状況を呈し、高松平野における条里地割の方向と近似する。よって、部分的な検出状況のみからの推測であるが、当該地周辺の海岸線付近にも一定の規則性と方位性をもった条里地割が施行された可能性が考えられる。明確に当該期に属する建物跡等溝以外の遺構は確認していないが、後世の削平により消失し、比較的掘方の深い溝のみが残存した可能性も考えられる。

近世(17世紀前葉～19世紀後葉)

中世から近世初頭までの土地利用形態の変遷は遺構の残存状況が不良であることから判然としない。近世の生活の痕跡は、様相2(17世紀前葉)段階から見られ、第1～3遺構面において、当該期の遺構を確認している。近世は3小期(I～Ⅲ期)に分けることができる。

近世Ⅰ期は様相2～3(17世紀前葉～中葉)に属し、中世の遺構面と同一面で確認した。掘立柱建物跡であると考えられる柱穴列や土坑、井戸等が見られる。このうち柱穴列の主軸方向は座標北から約78～80°西に傾く。後世の削平の影響も考えられるが、遺構密度は希薄である。

近世Ⅱ期は様相4～5(17世紀後葉～18世紀前葉)に属し、第2遺構面において遺構を確認した。第2遺構面を構成する③層は砂質を呈し、自然堆積層であると考えられる。また、少なくとも西から東へと上昇する調査地周辺部の原地形は未だ残存しているが、南北方向の地形の変化については判然としない。

当該期にも掘立柱建物跡と考慮される柱穴列や土坑、井戸が形成される点で近世Ⅰ期と共通するが、新たに溝が形成される。掘立柱建物跡の主軸方向は座標北から8°東に傾く。また、溝の主軸方向は座標北から84～86°西に傾く。

溝は合計5条確認したが、そのうち4条(SD202～205)は調査区中央付近に形成された井戸(SE202)及び井戸跡であると考えられる性格不明遺構(SX201)、落ち込み状の土坑(SD202東端落ち込み状土坑)に接続するような状況を呈する。SD205には木樋が設置されており、木樋接続部を粘土や丸瓦等を用いて入念に補強する状況が見られ、水漏れ防止のための措置であると考えられる。よって、少なくともSD205は

導水暗渠状の導水施設であると言え、他の溝も同様に導水施設であった可能性が考えられる。その場合、上記溝と井戸等が貯水・治水等水利用に関わる一連の遺構群であると捉えることも可能である。

加えて、SD201 上位には後述する第 1 遺構面の石列が形成されており、主軸方向も合致する。石列は土地区画のための柵列等の基礎であると考えられることから、下位に位置する SD201 は導水及び土地区画の機能を兼ね備えたものである可能性が考えられる。同様の主軸方向を有する SD202～205 も導水とともに土地区画機能を有していた可能性も考えられる。

水利用に関わると考えられる溝及び井戸等の遺構群が形成される点及び東西方向の区画施設が形成される点で、近世Ⅰ期とは土地利用形態の変化を指摘することが可能である。

生駒氏改易後、1642 年に松平氏が入封した。松平家初代藩主松平頼重は、城内の修築・再整備を行うとともに、城下の整備を行い、その一環として 1644 年に上水道の整備を行ったとされる。少なくとも 17 世紀後葉～18 世紀段階、本遺跡における近世Ⅱ期に相当する時期には新井戸、今井戸、大井戸をはじめとする大形貯水池状の石組み井戸が外堀外側の城下に形成されており、当該井戸からの衛生的な湧水、又は当該井戸に貯水された水が木樋や土管を用いた暗渠を通して安定的に城下へ配水される体制が整っていたと考えられる。本遺跡で確認した近世Ⅱ期の水利用に関わる可能性が高い溝や井戸等の複合的構造物は、このような背景のもと形成された可能性が考えられる。

近世Ⅲ期は様相 7～8(18 世紀後葉～19 世紀後葉)に属し、第 1 遺構面で遺構を確認した。第 1 遺構面を構成する①層は人為的な整地層であり、包含物や色調、土質により明確に区分可能な複数単位の整地土で構成されている。これらの整地土の重複状況及び出土遺物の年代から、整地土相互の差異を同一造成工事内での「作業工程差」や整地土の「形成時期差」として捉えることが可能である。加えて、様相 7 段階に形成された整地土(A～C・E～J・L・M 層)については、形成順序の復元から、計画的な作業工程の状況が読み取れる。

当該期にも掘立柱建物跡や土坑、井戸が形成されており、その点については近世Ⅱ期までと共通している。なお、掘立柱建物跡の主軸方向は座標北から約 11° 東へ、又は約 76° 西へ傾き、木桶据え付け土坑等も座標北から 77° 西へ傾く主軸方向を有するラ

イン上に並んでいる。また、何らかの構造物を転用したと考えられる廃棄土坑(SK150)の主軸方向も同様である。一方、近世Ⅱ期に見られた水利用に関わると考えられる溝と井戸等の複合的な構造物は見られず、代わって調査区西辺に沿って石組み溝が 1 条形成される。また、第 2 遺構面 SD201 上位に石列が形成される。石組み溝及び石列の主軸方向は座標北から約 82° 西へ傾く。後述するように、石組み溝は武家屋敷域と町屋域との境界付近に位置することから、導水と土地区画機能を兼ね備えた遺構であると言える。また、石列については検出状況から柵列の基礎等であった可能性が想定でき、当該期には溝から柵列等の構造物に土地区画施設が変更された可能性が考えられる。

また、木桶据え付け土坑群が調査区中央東寄りに、大形土器・陶器据え付け土坑が調査区全域に分布する状況も近世Ⅱ期以前とは大きく異なり、近世Ⅲ期の特徴として指摘可能である。なお、出土遺物やベース土である整地土の形成時期から、木桶据え付け土坑は様相 7 段階の一時期にのみ形成されたと考えられ、大形土器・陶器据え付け土坑は様相 7～8 段階まで形成され続けたと考えられる。

なお、第 2 遺構面を構成する③層上位や下位では面的に粗砂層の堆積を確認しており、河川の氾濫や高潮に伴う洪水砂の堆積であると考えられる。第 2 遺構面を構成する③層、第 3 遺構面を構成する④層ともに自然堆積層であると考えられることから、第 3 遺構面から第 2 遺構面への移行の主因として、上記水害に伴う社会基盤・生活基盤の破壊・埋没を挙げることが可能であると考ええる。また、第 1 遺構面を構成する①層と第 2 遺構面を構成する③層の間では、出土遺物の年代観から様相 5～6 に形成されたと考えられる焼土層(②層)を面的に確認している。同様の焼土層は周辺部における調査時にも、①層相当層～③層相当層間で確認されており、広範囲への分布が想定可能であることから、当該期に発生した災害の痕跡であると考えられる。想定される災害としては、1718 年に発生し、本調査地付近にまで被害が拡大したとされる「高松大火」を挙げることが可能であり、②層は当該火災に伴う焼土層であると考えられる。「高松大火」を契機に近世Ⅱ期に形成された社会基盤・生活基盤を放棄し、新たに近世Ⅲ期の遺構群が形成された可能性を想定することができよう。このように、近世Ⅰ～Ⅲ期にかけての土地利用形態の変化の背景の 1 つとして、各種災害の存在を想定することができよう。

近代以降

近代以降、複数回の整地を繰り返しながら土地利用され続けた状況が、調査区南壁及び東壁面における土層堆積状況の観察所見から指摘可能である。当該期には近世Ⅲ期に形成された石組み溝上位に新たな石組み溝が形成され、また石組み基礎を有する住宅が建設され、高松空襲によって廃絶した状況が読み取れる。なお、石組み溝、住宅基礎ともに主軸方向は座標北から約8°前後東へ傾く(第86図)。

第2節 絵図との比較

1 調査地の特定

今回の調査地は、平成21年度に高松市立旧城内中学校校内(高松城跡(大手前地区))で実施された発掘調査の際に確認された中堀の南延長上に位置する(高松市教育委員会(編)2012)。当該中堀は、17世紀後半に実施された東ノ丸造成に際して、町屋域である「いおのたな町」東辺に形成されたものであり、これにより、「いおのたな町」は内曲輪へと組み込まれることとなる。

東ノ丸造成に伴う中堀形成後の享保年間に描かれた「享保年間高松城下図」(享保3年以降(1718～1736))(第84図絵図2)においては、中堀南延長上に、南北に細長い区画「上横町」が存在し、その南西方向ではほぼ直角に折れ曲がるクランク状の道路が描かれている。当該クランク状の道路は、今回の調査対象地南西方向に現存しており、これを手掛かりに調査対象地を絵図にはめ込むと、調査対象地は「上横町」の一部に位置すると言え、本調査地は少なくとも18世紀前葉段階には町屋域であったと言える。「享保年間高松城下図」によると、高松城外堀内側にあたる外曲輪の大部分は武家屋敷域であるが、本調査地の位置する「上横町」から北東方向に向けて町屋域が広がる。よって、本調査地は町屋域の南西端部付近、武家屋敷域との境界に接する部分に位置すると言える。本節では、上記認識を出発点として、本調査地の歴史の変遷と検出遺構との関係を類推してみたい。

まず、松平氏入部前、生駒期の状況について概観する。「寛永四年高松城図」(寛永4年(1627))では、後に東ノ丸造成に伴い中堀が開削される部分に「町」との記載があり、その南方にも「町」と記載された小区画が見られ、当該小区画が後の「上横町」の一部にあたる。当該小区画から北東方向に向けて同様に「町」の記載が見られ、生駒期初期段階から既に外曲輪の

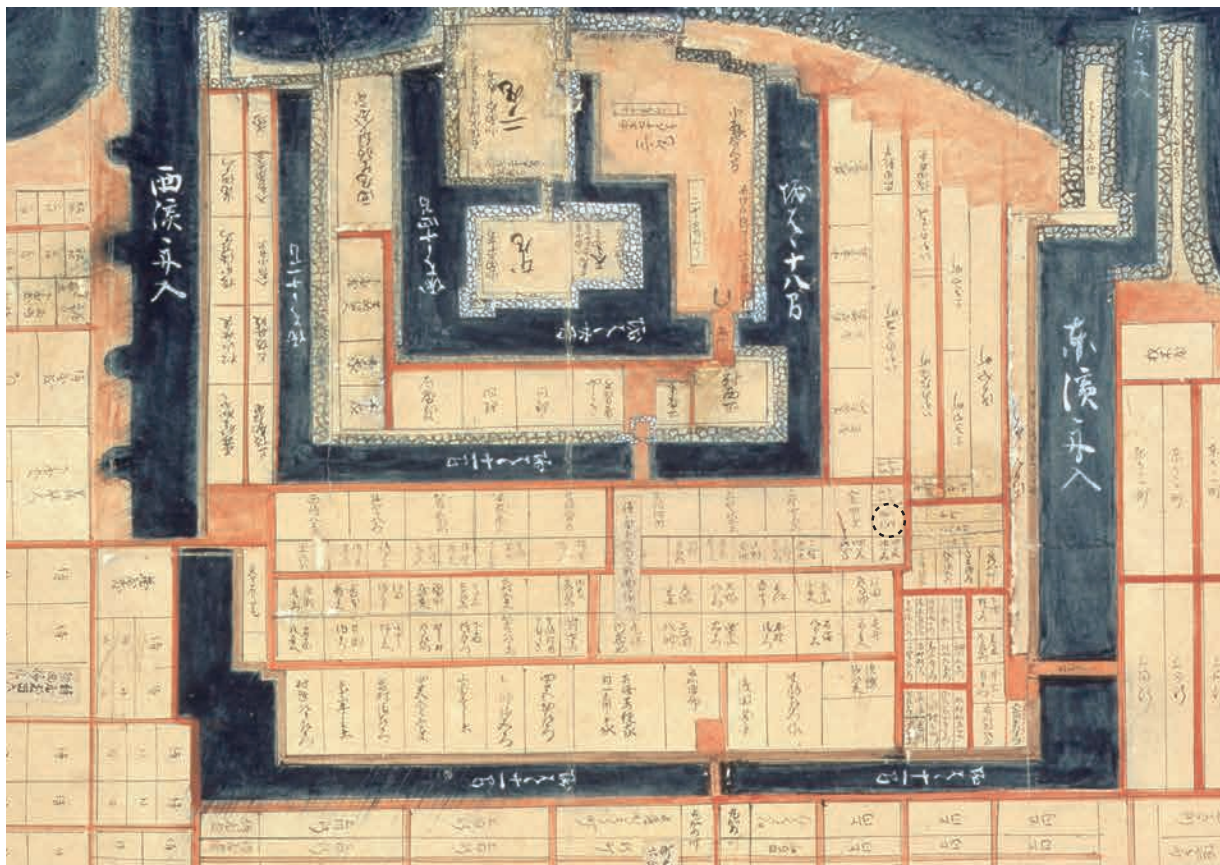
北東部の一部に町屋域が形成されていたと考えられる。当該期の町屋域の南西端部となる前述の小区画が本調査地の範囲にあたるか否かは明確に判断できないが、少なくとも、本調査地が武家屋敷域と町屋域との境界付近に位置するという事は指摘できる。「生駒家時代讃岐高松城屋敷割図」(寛永15～16年(1638～1639))(第84図絵図1)や「讃岐国高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時」(寛永17年(1640))では、前述のほぼ直角に折れ曲がるクランク状の土地割りが見られることから、本調査地の位置をある程度特定することができる。後に「上横町」となる部分については、「本町」「魚のたな」の記載が見られることから町屋域であったことが推測できる。一方、当該地の南隣及び西隣は武家屋敷域となる。よって、当該期にも本調査地が武家屋敷域と町屋域との境界に接する部分であったと言える。同様の時期に描かれたと考えられる「高松城下図屏風」(17世紀中葉)では、調査対象地である町屋域と武家屋敷域との境界に土塀状の構造物が描かれており、北に面する道路には、柵状の構造物が描かれていることから、町屋域と武家屋敷域を区分しようとする意図がうかがえる。

次に、東ノ丸造成後の状況について概観する。本調査地北方に形成されていた町屋の一部である「いおのたな町」が東ノ丸に組み込まれ、「いおのたな町」東辺に新たに中堀が形成されるが、それ以外の状況は生駒期と同様である。18世紀前葉に作成された前述の「享保年間高松城下図」や「高松地図」(元文5年(1740))において、本調査地周辺に「上横町」の記載が初めて見え、少なくとも近代初頭までは当該呼称が定着する(絵図により「上横丁」と記載する場合もある)。

ただし、19世紀前葉～中葉段階の絵図(「高松市街古図」(文化年間(1804～1818))(第85図絵図3)、「高松城下町屋敷割図」(弘化年間(1844～1848))、「高松市街之図」(19世紀))には、「上横町」に該当する南北に細長い区画が見られず、武家屋敷である「前御屋敷」の一部に組み込まれたような状況を呈する。同様の状況は、19世紀後葉の絵図(「安政四未年高松之図」(安政4年(1857)等))には見られない点、「上横町」に該当する南北に細長い土地割りが現代まで残存する点から、一時的な状況であると考えられる。

2 石組み溝(SD101)の位置付け

前述のとおり、本調査地は外曲輪の北東部の一部

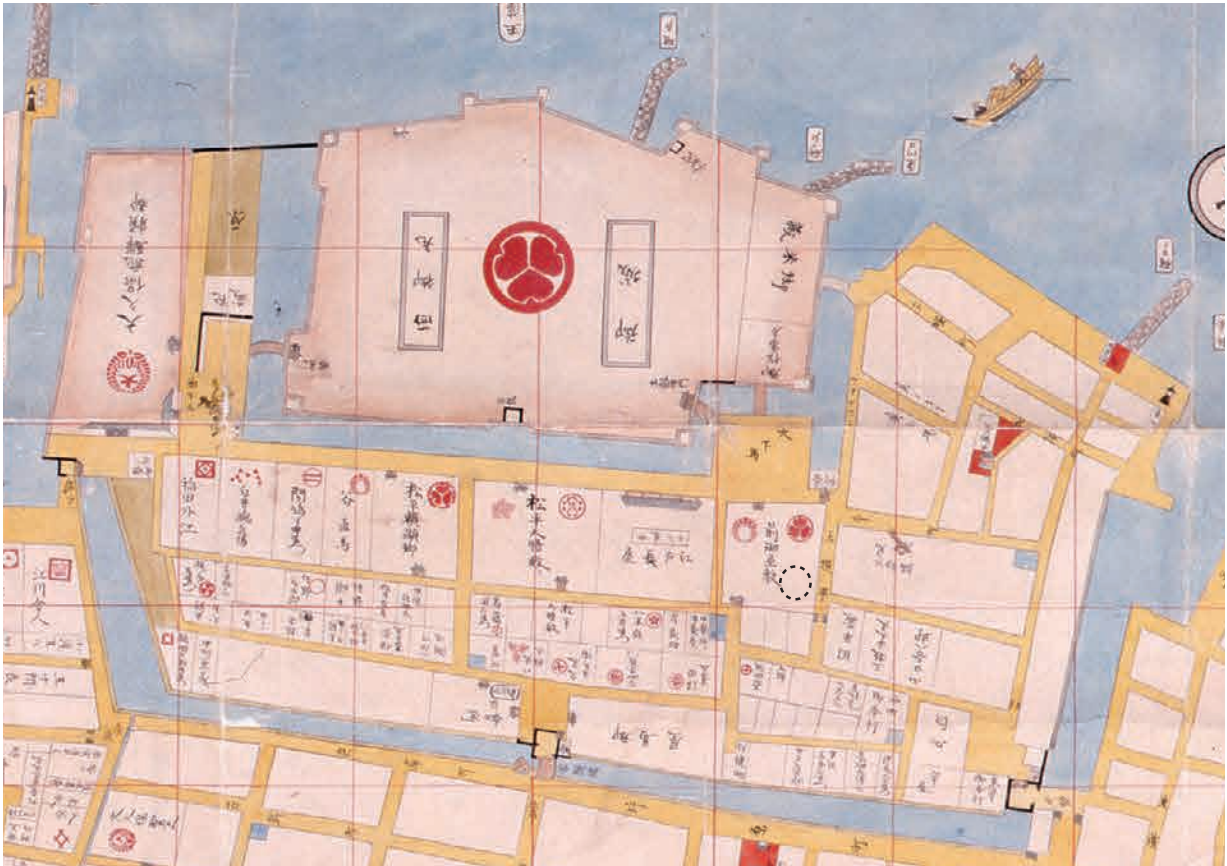


絵図1 生駒家時代讃岐高松城屋敷割図 (寛永15～16年(1638～1639)) (高松市歴史資料館所蔵)



絵図2 享保年間高松城下図 (享保3年以降(1718～1736)) (高松市歴史資料館所蔵)

第84図 高松城絵図(1)



絵図3 高松市街古図（文化年間(1804～1818)）（高松市歴史資料館所蔵）

○ 調査対象地推定地

第85図 高松城絵図(2)

に形成された町屋域の南西隅部付近に位置し、武家屋敷域と町屋域との境界に接する部分にあたる。今回の調査では、当該境界線上に位置すると考えられる調査地西辺において石組み溝(SD101)を1条確認した。第1遺構面上面に形成された遺構であり、裏込め土や溝埋土から出土した遺物の状況から、様相7に形成され様相7～8段階に人為的に埋め戻されたような状況を呈し、遅くとも様相8段階には完全埋没を遂げたことが判明している。

なお、第2遺構面では溝や柵等の区画施設を確認していないが、前述のとおり17世紀中葉段階に製作されたと考えられる「高松城下図屏風」においては、上記境界線上に土塀状の構造物が描かれていることから、何らかの境界構造物が設けられていたと考えられる。よって、石組み溝形成に際して破壊された素掘り溝や柱穴等が存在した可能性が考えられる。また、SD101下位では、第2遺構面においてSD101と同様の主軸方向を有する長方形の平面形を呈する土坑が南北に2基(SK221・227)並ぶ状況がみられることから、これらが柵の設置に伴い掘削された布掘り柱穴であった可能性も考えられる。しかしながら、

一部分のみでの検出であり、柱痕等も確認していないことから可能性として指摘するにとどめる。また、調査区西半部で調査できなかった第3遺構面において、境界構造物の痕跡が残存した可能性も考えられる。

さて、第1遺構面で確認した石組み溝は前述のとおり様相7に形成され、様相7～8にかけて人為的に埋め戻されたような状況を呈する。これについては、2通りの考え方が可能である。

まず、本節第1項で行った絵図の検討において、19世紀前葉～中葉段階の一時期についてのみ、調査対象地が位置する町屋域が西側の武家屋敷域に組み込まれるような状況を呈する点を指摘した。本遺構が人為的に埋め戻されたと考えられる様相7～8は19世紀前葉～中葉段階に属することから、境界構造物である石組み溝の人為的・意図的な埋戻しは、上記境界線の撤廃を意味する可能性が考えられる。

一方で、出土遺物の検討から、石組み溝埋土に包含された遺物は、石組み溝上面まで完全に覆う埋戻し土に包含された遺物よりも明らかに古相を示し、完全埋没までに一定の時間幅を要していることがわか

る。換言すれば、短期的な作業により一気に埋め戻されたような状況とは異なる。このように考えたとき、当該石組み溝はむしろ、武家屋敷域に町屋域が組み込まれたと考えられる19世紀前葉～中葉段階に機能し、再度分離される19世紀後葉段階に完全埋没を遂げた可能性も考えられる。

上記いずれの見方をするかにより、石組み溝の持つ機能・性格の評価は大きく異なる。類例の検証が十分に行えておらず、上記いずれの見方が妥当であるか判断し兼ねる。今後の課題である。

第3章 建物及び溝の主軸方向に関する検討

1 はじめに

今回の調査において、中世～近世の掘立柱建物跡であると考えられる柱穴列や溝跡等を確認している。これらは、調査対象地周辺の土地割りを含む土地利用形態の規制を直接的・間接的に受けて、同一時期の遺構については、主軸方向を統一しようとする傾向がうかがえる。一方で、時期により主軸方向に若干の変化が見られる。よって、ここでは各時期の建物跡等の主軸方向の変化から、調査地周辺部における土地割りに見られる特徴の検討を行う。

2 時期毎の建物跡等の主軸方向の変化

まず、中世(14世紀中葉～15世紀前葉)に属する遺構は溝1条である。当該溝の主軸方向は座標北から約76°西に傾く。

近世Ⅰ～Ⅲ期においても時期毎に差異が見られる。近世Ⅰ期(17世紀前葉～中葉)には掘立柱建物跡であると考えられる柱穴列が形成され、主軸方向は座標北から78～80°西に傾く状況を呈する。続く近世Ⅱ期(17世紀後葉～18世紀前葉)には、掘立柱建物跡であると考えられる柱穴列や溝跡が形成され、主軸方向は座標北から8°東・84～86°西へ傾く状況を呈する。一部で同様の主軸方向を呈する土坑も見られる。最後に、近世Ⅲ期(18世紀後葉～19世紀後葉)には、掘立柱建物跡であると考えられる柱穴列や石組み溝、石列、木桶据え付け土坑群、一部の土坑において主軸方向を揃える傾向が見られる。当該期に見られる主軸方向は2種類に分類でき、一方は座標北から約8°東・82°西へ傾くものであり、SD101や石列が該当する。他方は、座標北から約11°東・76～78°西へ傾くものであり、柱穴列や木桶据え付け土坑群、一部の土坑において見られる。

3 主軸方向変化の要因

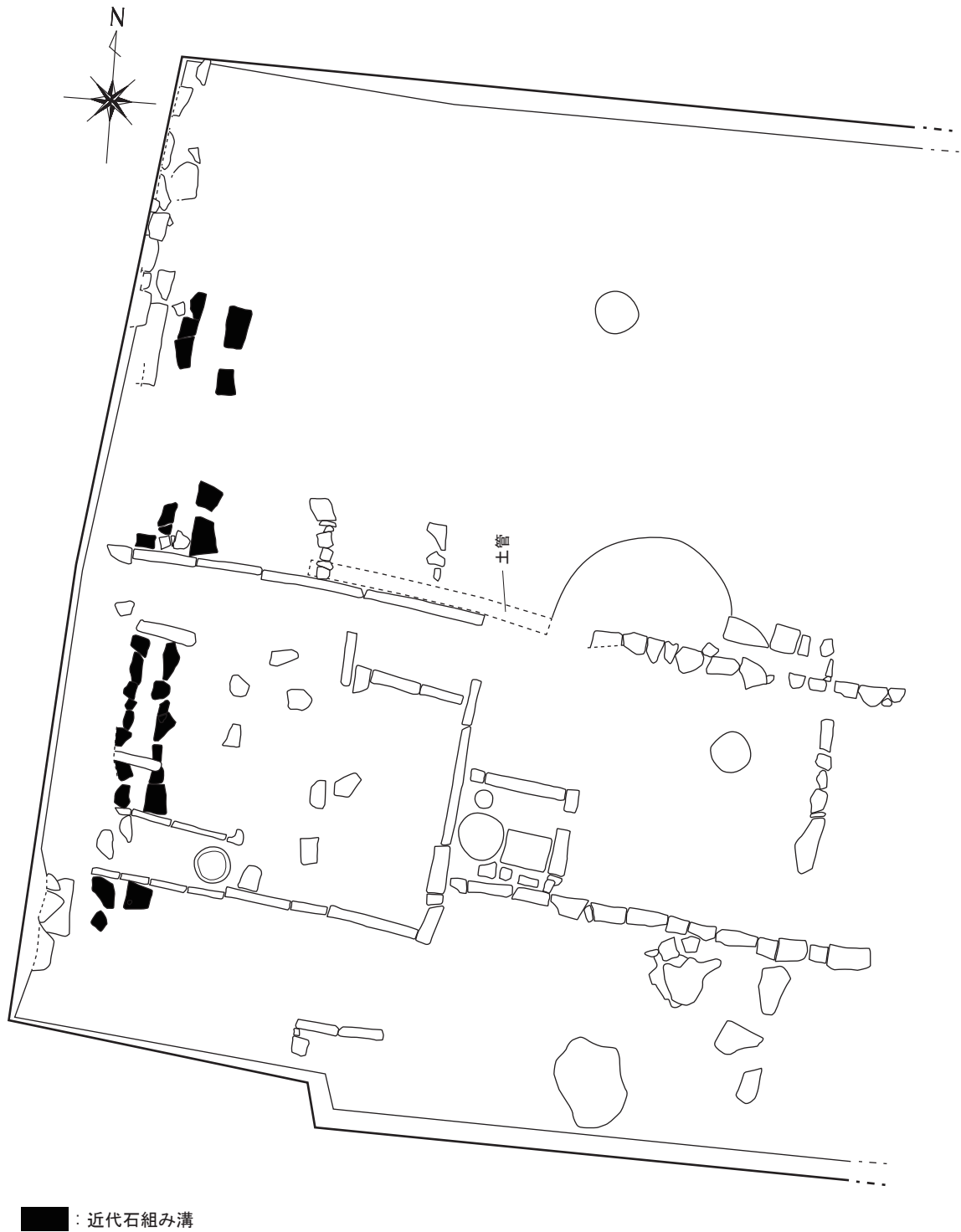
以上のとおり、時期毎に柱穴列や溝等の主軸方向に差異が指摘できる。ここで、各時期の柱穴列や溝等に見られる主軸方向と同様の主軸方向を呈するものを挙げ、主軸方向変化の背景を検討する。

まず、中世段階の溝に見られた主軸方向は、高松平野における条里地割の方向性と類似する。高松平野では、座標北から11°前後東に傾く方向で条里地割が整備されており、当該条里地割が14世紀後葉～15世紀前葉以降、海岸線付近の砂州帯にまで整備された可能性を指摘することが可能である。また、近世Ⅰ期にも同様の主軸方向を呈する柱穴列が形成されており、少なくとも17世紀前葉～中葉までは条里制に基づく土地割りが調査地周辺部における土地利用の基本原理となっていた可能性が考えられる。

近世Ⅱ期から状況が一変する。近世Ⅱ～Ⅲ期では、座標北から8°東・82～86°西に傾く主軸方向を呈する柱穴列や溝等が見られる。同様の主軸方向を持つ土地割りは、調査地周辺部において近代以降も残存しており、近代の石組み溝や住宅の主軸方向も同様の状況を呈する。ただし、近世Ⅲ期には、一部で座標北から11°東・76～78°西に傾く主軸方向を呈する柱穴列や土坑群が確認されている。しかしながら、ここでは土地区画に関わる遺構であると考えられる石組み溝や石列が前者の主軸方向を採用している点を重視したい。

近世Ⅱ期以降に主体となる主軸方向は、北側に位置する東ノ丸造成に伴う中堀の主軸方向と類似する。中堀の主軸方向は、座標北から約5°東に傾く状況を呈する。17世紀中葉以降、初代藩主松平頼重や二代目藩主松平頼常により高松城の再整備や修築が盛んに行われ、その中で東ノ丸造成を含む高松城の大規模な再整備「高松城普請」が実施され、ほぼ完成形に至る。同時に、上水道の整備や町屋域、武家屋敷域の拡大・再編を含む城下の整備も進めたとされる。17世紀後葉段階に属する近世Ⅱ期には、調査地周辺部でも外曲輪の再整備が行われたと考えられ、東ノ丸の主軸方向と合致させるような土地割りに変更されたと考えられる。近世Ⅲ期以降、近世Ⅱ期に形成された土地割りをほぼ踏襲する形で変遷し、現在に至る状況が読み取れる。

このように、少なくとも今回の調査地内での土地割りに見られる画期は、近世Ⅰ期と近世Ⅱ期の間に設定することが可能であり、画期の背景として高松城の再整備に伴う東ノ丸造成や外曲輪の再整備の影



第 86 図 近代住宅基礎及び石組み溝検出状況

響が考えられる。

17世紀中葉前後を境に土地割りの主軸方向に変化が見られる状況は、松平大膳家上屋敷跡（高松城跡（丸の内地区））（高松市教育委員会 2004）や高松城跡（寿町二丁目地区）（高松市教育委員会 2007）、高松城跡（大手前地区）（高松市教育委員会 2012）、高松城跡（丸の内地区）（香川県教育委員会 2003）におても指摘できる。松平大膳家上屋敷跡では、中世から17世紀前葉段階までは、座標北から約80°前後西に傾く土地割りが見られるが、17世紀中葉以降、土地割りの方位は座標北から85～86°東に傾く状況を呈する。高松城跡（寿町二丁目地区）では、中世から17世紀前葉段階までは、座標北から約10～13°東に傾く土地割りが見られる。一方、17世紀中葉以降、土地割りの方位は座標北から約5°東に傾く状況を呈する。高松城跡（大手前地区）では前述のとおり東ノ丸造成に伴い形成された中堀を確認しているが、当該中堀形成前の17世紀前葉段階には座標北から75°前後西に傾く土地割りが見られる。一方、中堀形成後の17世紀後半以降、土地割りの方位は座標北から約84°西に傾く状況を呈する。高松家庭裁判所移転に伴う高松城跡（丸の内地区）の調査では、中世から17世紀中葉までは、座標北から約10°東に傾く土地割りが見られるが、遅くとも18世紀後葉には土地割りの方位が座標北から約5°東に傾く状況に変化している。

調査地点により若干の角度のばらつきはあるものの、17世紀中葉前後を境に、土地割りの主軸方向がより正方位に近い状況に変化したと言える。同様の主軸方向は、中堀から北側、内曲輪においても採用されており、中堀南辺の主軸方向を基準として、当該期に外曲輪の土地割りが再編されたと考えられる。一方、外曲輪の南縁辺部、外堀内側ラインに近接した地点に位置する高松城跡（厩跡）（高松市教育委員会 2006）では、17世紀前葉～中葉段階以降、一貫して土地割りの方位は座標北から10°前後で東に傾く状況であり、変化が見られない。当該地点は外曲輪の南端部付近に位置し、前述の外曲輪中央以北の状況とは異なる。外曲輪南端部の外堀に沿う部分については、中世以降、土地割り方向に変化が生じなかった可能性が考えられる。現在の土地割りにおいても、外曲輪中央以北に該当する部分については、より正方位に近い主軸方向を呈する土地割りが残存するが、一方で外堀に面した区画については、座標北から10°前後東に傾く土地割りが残存する。外曲輪南端部

付近では、正方位に近い主軸方向よりもむしろ、条里地割の方向と合致する外堀のラインを基軸とした土地割りの形成状況が読み取れ、外曲輪中央以北の状況とは、対称的である。

以上、今回の調査地が位置する外曲輪においては、17世紀中葉以降、2種類の土地区画の主軸方向が見られる点を指摘した。主として外曲輪中央以北では、より正方位に近い内曲輪と同様の主軸方向を有する土地割りが採用される。一方、外曲輪南端部では中世以前の条里地割に沿って形成された外堀と同様の主軸方向を有する土地割りが採用される。同様の指摘は、佐藤竜馬氏（2006・2009）、大嶋和則氏（2007）渡邊誠氏（2015）によっても、既に指摘されている。

上記のような現象が生じる背景の検討は、今回の分析においては行えていない。城下町の整備手順や中世段階の土地利用のあり方、有効的な空間利用のあり方等の社会的・歴史的的事象や都市空間としての構造的課題等を総合的に評価して議論する必要があると考える。

参考文献

- 佐藤竜馬 2006 「高松城・城下の屋敷地と区画施設」『第7回四国城下町研究会 近世の屋敷境とその周辺』四国城下町研究会
- 大嶋和則 2007 「高松城跡の発掘成果から」『四国村落遺跡研究会シンポジウム港町の原像 - 中世港町・野原と讃岐の港町 - 』四国村落遺跡研究会
- 佐藤竜馬 2009 「初期高松城下町の在地的要素」『中世讃岐と瀬戸内世界 港町の原像上』岩田書院
- 渡邊 誠 2015 「香川の城下」『四国の近世 調査成果報告 講演会資料』公益財団法人徳島県埋蔵文化財センター
- 香川県教育委員会（編）2003 『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）』香川県教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2004 『新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）』高松市教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2006 『高松丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隣地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（厩跡）』高松市教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2007 『寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（寿町二丁目地区）』高松市教育委員会
- 高松市教育委員会（編）2012 『雨水管渠整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（大手前地区城内中学校跡地）』高松市教育委員会

遺物 觀 察 表

第4表 土器 観察表 (1)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(須臾、上絵)	焼成	様・ こげ	備考
					口径	器高	外面	内面							
1	整地A	陶器	鉢	—	—	(16.0)	[11.5]	施釉	—	5YR7/2灰黄	5YR3/4暗赤褐	—	良好	無	
2	整地A	陶器	片口鉢	瀬戸・美濃	—	—	7.2	施釉	—	7.5Y7/2灰黄	7.5Y7/2灰黄	—	良好	無	
3	整地A	陶器	角須	—	施釉、オシロコシ	—	[5.3]	施釉	—	10YR7/4Lに5S、黄緑	5YR4/6赤褐	イツチンがけ、明緑色、黒色	良好	無	
4	整地A	陶器	灯明皿	備前	回転ナデ、回転ヘラケズリ	8.0	1.2	3.8	塗土、回転ナデ、開口部2	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	—	良好	無	
5	整地A	陶器	鉢	備前	塗土、回転ナデ	12.6	6.3	(13.0)	回転ナデ	5YR4/3Lに5S、赤褐	5YR4/3Lに5S、赤褐	—	良好	無	刻印有り
6	整地A	陶器	灯明皿	備前	塗土、回転ヘラケズリ、回転赤切	8.5	1.0	5.0	回転ナデ、開口部3	—	5YR3/6暗赤褐 内:2.5YR5/4Lに5S、赤褐	—	良好	無	
7	整地A	陶器	播鉢	備前	回転ナデ、ヘラケズリ	(28.4)	10.2	(15.2)	回転ナデ、鉢口有り	—	外:2.5YR3/3暗赤褐 内:2.5YR4/4Lに5S、赤褐	—	良	無	底部砂粒付着
8	整地A	磁器	碗	肥前	施釉、染付、圈線	9.4	5.15	3.6	施釉	—	透明釉	呉須:濃青色へ淡青色	良好	無	
9	整地A	磁器	仏飯器	肥前	施釉、染付	(6.6)	5.2	(3.6)	施釉	—	透明釉	呉須:明青色	良	無	
10	整地A	磁器	碗	肥前	施釉、染付、圈線	11.0	6.6	4.4	施釉、染付、圈線	—	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
11	整地A	磁器	碗	肥前	施釉、染付	(13.8)	7.7	(6.5)	施釉、染付	—	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
12	整地A	土師質土器	皿	肥前	回転ナデ、回転赤切	8.1	1.0	5.8	回転ナデ	—	7.5YR7/4Lに5S、黄緑	—	有	有	
14	整地B	陶器	碗	肥前	施釉	(11.6)	[4.75]	—	施釉	—	10YR8/3濃黄緑	—	良	無	
15	整地B	陶器	碗	肥前	施釉、染付、圈線	—	[3.4]	(4.9)	施釉、染付	—	外:7.5YR5/2灰黄 内:1.0YR5/1褐灰	呉須:オリープ黒色	良	無	
16	整地B	陶器	鉢	京・信濃	施釉	—	[7.3]	—	施釉	—	2.5Y7/2灰黄	—	良	無	へこみ有
17	整地B	陶器	灯明皿	備前	回転ナデ、回転ヘラケズリ	7.3	1.65	2.6	塗土、開口部2	—	N7/0灰白	—	良	無	重ね焼き痕
18	整地B	陶器	鉢	肥前	施釉	(29.1)	[4.4]	—	施釉、ハケ	—	5YR4/1褐灰	—	良	無	
19	整地B	磁器	鉢	中国	施釉、青花	(20.7)	[4.5]	—	施釉、青花、圈線	—	内:5X3/2オリープ黒 外:5Y8/1明緑灰	—	良好	無	
20	整地B	磁器	碗	肥前	施釉、染付、圈線	(11.5)	[3.8]	—	施釉、染付、圈線	—	N8/0灰白	呉須:明青色	良好	無	
21	整地B	磁器	碗	肥前	施釉、染付	—	[1.9]	(4.6)	施釉、染付	—	N8/0灰白	呉須:淡青色	良好	無	
22	整地C	陶器	鉢	肥前	施釉、ハケ	(15.8)	[4.1]	—	施釉、ハケ	—	2.5Y6/7黄灰	—	良好	無	
23	整地C	陶器	甕	瀬戸・美濃	施釉、和かけ	—	[7.8]	(20.2)	施釉、和かけ	—	2.5Y7/1灰白	袖がけ、黒色	良好	無	底部に小石粒付着
24	整地C	陶器	播鉢	備前	回転ナデ	(37.1)	[9.0]	—	回転ナデ	—	2.5YR5/6明赤褐	—	良好	無	
25	整地C	陶器	碗	肥前	施釉	(10.7)	[5.3]	—	施釉	—	2.5Y7/2灰黄	—	良好	無	
26	整地C	磁器	小杯	肥前	施釉、染付	(6.6)	[3.7]	—	施釉、圈線	—	N8/0灰白	呉須:明・濃青色	良好	無	
27	整地C	土師質土器	皿	—	回転ナデ、回転赤切	9.6	2.9	5.09	回転ナデ	—	7.5YR7/4Lに5S、黄緑	—	良	有	
28	整地D	土師質土器	焜炉	—	ナデ、指オサエ	(28.4)	27.2	—	ナデ、板ナデ、ヨコハケ	—	5YR7/6橙	—	良	有	足3本(残1本)、接合痕有
29	整地D	土師質土器	火鉢	—	ナデ、板ナデ	—	[20.6]	—	ナデ、板ナデ	—	7.5YR6/4Lに5S、黄緑	—	良好	無	
30	整地D	土師質土器	火鉢	—	—	(21.6)	—	[12.4]	ナデ、ハケ、指オサエ、円孔1	—	外:1.0R5/8赤 内:5YR6/4Lに5S、黄緑	—	良	無	断面に燃熱痕
31	整地D	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉、染付	8.9	5.8	3.7	施釉、染付	—	N6/0灰	呉須:淡緑青色	良	無	
32	整地D	陶器	鉢	肥前	施釉、ハケ	—	[4.15]	5.3	施釉、ハケ、彫の目桶ハギ砂付	—	2.5Y6/2灰黄	—	良好	無	
33	整地D	陶器	甕	—	施釉、二彩、黄緑	(30.1)	[24.2]	—	施釉	—	10R4/4赤褐	二彩:2.5Y6/9明黄褐、10Y5/2黒 鉄粒、オリープ灰、2.5Y3/1黒褐	良	無	
34	整地D	磁器	猪口	肥前	施釉、染付	5.9	2.6	(2.7)	施釉	—	透明釉	呉須:薄淡青色	良好	無	
35	整地D	磁器	碗	肥前	施釉、青磁染付	(8.4)	4.5	(3.6)	施釉、圈線	—	外:5GY7/1明オリープ灰 内:透明釉	呉須:暗青色	良好	無	
36	整地D	磁器	碗	肥前	施釉、染付	(10.3)	5.9	5.0	施釉、染付、圈線	—	透明釉	呉須:明青色	良好	無	
37	整地D	磁器	猪口	肥前	施釉、染付	6.6	2.7	3.0	施釉、染付	—	透明釉	呉須:2.5GY4/1暗オリープ灰	良好	無	
38	整地D	磁器(白磁)	碗	肥前	施釉	(8.7)	5.1	4.0	施釉	—	白色	—	良好	無	
39	整地D	磁器	碗	瀬戸・美濃	施釉、染付	(8.7)	4.9	3.2	施釉、染付	—	透明釉	呉須:明・濃青色	良好	無	

第5表 土器 観察表 (2)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬、内外色調)	色調3 (呉須、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高	外面	内面							
41	整地E	陶器	鉢	肥前	施釉、波状文	—	—	—	—	2.5YR6/6橙	外:2.5YR4/6赤褐10YR4/2灰黄褐 内:2.5Y5/4にふい赤褐	—	良好	無	
42	整地E	陶器	壺	肥前	施釉	—	—	—	—	2.5YR7/3にふい赤褐	外:2.5YR4/6赤褐 内:2.5YR5/4にふい赤褐	—	良好	無	
43	整地E	陶器	擂鉢	備前	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ、目有り	黒色粒を含む	—	2.5Y7/2灰黄	外:2.5YR4/6赤褐 内:2.5YR5/4にふい赤褐 10YR6/4にふい黄橙	—	良	無	口縁部に重ね焼き痕
44	整地E	陶器	鉢	肥前	施釉、ハケ	施釉、ハケ	砂付着	—	—	にふい赤褐5YR5/3	外:5X3/1オリーブ黒5Y7/1灰白 内:10YR2/2黒褐	—	良好	無	
45	整地E	磁器	碗	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
46	整地E	磁器(白磁)	碗	肥前	施釉	施釉	施釉	—	—	N8/0灰白	白色	—	良好	無	
47	整地E	磁器	碗	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉、染付、団扇	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	
48	整地E	磁器	皿	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉、染付、団扇	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡・明青色	良好	無	高台裏付に砂付着
49	整地E	磁器(青磁)	皿	中国	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉、染付、団扇	—	—	N8/0灰白	10G/R6/1緑灰	—	良好	無	獣足の痕跡
50	整地E	土師質土器	皿	—	—	回転ナデ	回転ナデ	砂粒(ほとんど含まない)	—	—	10YR8/2灰白	—	良	無	
51	整地E	磁器	猪口	肥前	施釉、染付	施釉、染付	施釉、砂目3	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:濃暗青色	良	無	
52	整地E	陶器	碗	京・信楽	施釉	施釉	施釉、胎土目4	—	—	5Y8/1灰白	7.5Y8/1灰白	—	良好	無	
53	整地E	磁器	瓶	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:暗青白～明青色	良好	無	高台裏付に砂付着
54	整地E	磁器(青磁)	鉢	肥前	施釉	施釉	施釉、片彫	—	—	N8/0灰白	10G/R7/1明緑灰	—	良	無	
55	整地E	陶器	皿	肥前	施釉	施釉	施釉、砂目3	—	—	10YR6/4にふい黄橙 5YR7/4にふい黄	5YR7/1明褐灰	—	良好	無	高台内に砂目3ヶ所
56	整地E	陶器	皿	肥前	施釉	施釉	施釉、胎土目4	—	—	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	—	良好	無	
57	整地E	陶器	碗	京・信楽	施釉	施釉	施釉	—	—	2.5G/R7/1明オリーブ灰	2.5G/R7/1明オリーブ灰	—	良	無	
58	整地E	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	—	—	5Y8/1灰白	外:5Y8/3淡黄 内:5Y8/3淡黄	—	良好	無	
59	整地E	磁器	碗	肥前	施釉、染付、銘歌	施釉、染付、銘歌	施釉、染付	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	高台裏付に砂付着
60	整地E	磁器	小杯	肥前	施釉	施釉	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	—	良好	無	
61	整地G	陶器	碗	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉	—	—	7.5Y6/1灰	透明釉	呉須:淡緑青色・淡青色	良好	無	
62	整地G	陶器	碗	京・信楽	施釉	施釉	施釉	—	—	2.5Y8/1灰白	2.5Y7/1灰白	—	良好	無	
63	整地G	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉、染付	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	
64	整地G	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	—	—	2.5Y8/2灰白	外:7.5YR2/2黒褐5Y8/2灰白 内:5Y8/2灰白	—	良好	無	
65	SK101	磁器	小杯	肥前	施釉、染付、團扇	施釉、染付、団扇	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡明青色	良好	無	
66	SK101	陶器	碗	京・信楽	施釉、銘絵	施釉	施釉	—	—	2.5YR7/2灰黄	10Y7/1灰白	鉄絵、藍色～緑がかった茶色	良好	無	
67	SK101	土師質土器	お風呂	—	貼付押圧突帯3条、ナデ、貼付高台	貼付突帯3個、円孔1個、帯状の貼付突帯に円孔3個	2mm以下の石英・長石・赤色粒を含む	—	—	N6/0赤	外:1.0YR6/6橙 内:1.0YR7/3にふい黄橙	—	良	有	
68	SK101	陶器	水罐	瀬戸・美濃	施釉、彫滑文、灰点文	施釉	施釉	—	—	7.5Y6/2灰オリーブ	濃緑色	—	良好	無	
69	SK102	陶器	鉢	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	—	—	2.5Y8/2灰白	10YR2/2黒褐	—	良	無	
70	SK102	磁器	小杯	—	施釉、染付	施釉	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
71	SK102	磁器	皿	中国	施釉	施釉、青花	施釉、青花	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明・濃青色	良好	無	
72	SK102	土師質土器	井筒	—	ナデ、文様彫、粘土粗織目、板ハケのち指頭ナデ、板ナデ、指オサエ	ナデ、コホケのち板ナデ	1mm以下の石英・長石を含む	—	—	—	外:5YR7/4にふい橙 内:7.5YR6/4にふい橙	—	良	有	
73	SK103	陶器	甕	阿波	—	—	密	—	—	2.5YR3/4暗褐	2.5YR3/4暗赤褐	—	良	無	
74	SK110	土師質土器	甕(底部)	—	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	普	—	—	外:1.0YR7/3にふい黄橙 内:2.5YR7/2灰黄	—	—	良	無	
75	SK109	土師質土器	甕	—	ナデ、板ナデ、ハケ、指オサエ	ナデ、板ナデ	普	—	—	外:5YR7/6橙～6/3にふい橙 内:7.5YR5/2灰褐～7/2明褐灰	—	—	良	無	
76	SK111	磁器	猪口	肥前	施釉、染付	施釉	施釉	—	—	5Y8/1灰白	透明釉	呉須:淡青色	良	無	
77	SK111	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉、染付	施釉	—	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
78	SK111	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	—	—	5Y8/1灰白	外:5YR3/1黒褐5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白	—	良好	無	

第6表 土器 観察表(3)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(須臾、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高	外面	内面							
79	SK111	陶器	碗	瀬戸・美濃	—	[5.7]	—	施釉	施釉、底の目輪・ギョウナ砂付	7.5Y7/1灰白	外:7.5Y7/2灰白,10YR7/3にぶい黄 内:7.5Y7/2灰白	—	良好	無	
80	SK111	陶器	鉢	肥前	7.4	(6.5)	—	施釉	施釉、底の目輪・ギョウナ砂付	5Y6/1灰	外:5Y6/3オリーブ黄 内:5Y6/4オリーブ黄	—	良	無	
81	SK107	土師質土器	火鉢	—	[20.3]	—	—	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ、指オサエ	—	外:7.5YR6/3にぶい黄 内:7.5YR6/4にぶい黄	—	良	無	
82	SK107	土師質土器	甕底部	—	[7.4]	22.0	—	ナデ、板ナデ、ハケ	回転ナデ	—	外:10YR7/2にぶい黄 内:7.5YR6/3にぶい黄	—	良	無	内底面に被熱痕
83	SK116	土師質土器	お風呂	—	[33.8]	43.0	—	ナデ、貼付押圧突帯3条、貼付 高台	ハケ、指オサエ、貼付突帯3条、 白孔1、帯状の貼付突帯に白孔 3	—	外:7.5YR7/6橙 内:7.5YR7/4にぶい黄	—	良	有	
84	SK116	陶器	碗	瀬戸・美濃	—	(3.0)	(4.0)	施釉	施釉	—	外:10YR2/3黒褐 内:7.5Y8/2灰白	—	良	無	高台基付に陶器片付着
85	SK116	陶器	碗	京・信楽	8.8	[2.7]	—	施釉、上絵	施釉	—	7.5Y8/1灰白	上絵:10GY5/1緑灰	良	無	
86	SK116	陶器	碗	京・信楽	10.4	5.0	(3.75)	施釉	施釉	—	5Y7/2灰白	—	良好	無	内面見込みニピン痕1
87	SK116	陶器	鉢	肥前	(18.2)	[3.85]	—	施釉	施釉、ハケ	—	2.5Y6/1黄灰	—	良	無	
88	SK116	陶器	鉢	京・信楽	18.7	[5.4]	—	施釉	施釉	—	外:2.5Y(4/3)オリーブ褐 内:5Y7/1灰白,2.5Y(4/3)オリーブ褐	—	良	無	
89	SK116	陶器	灯明皿	備前	(10.2)	1.5	(6.0)	施釉	施釉	—	2.5Y7/1灰白	—	良	有	
90	SK116	磁器	碗	肥前	(10.35)	5.4	(4.5)	施釉、染付	施釉、染付、開口部2	—	10R5/4赤褐	—	良好	無	
91	SK116	磁器	瓶	肥前	2.9	[5.0]	—	施釉、染付	施釉	—	透明釉	—	良好	無	呉須・濃青色
92	SK116	磁器	碗	肥前	—	[3.2]	(3.3)	施釉、染付、絞款	施釉	—	透明釉	—	良	無	呉須・暗青色～淡青色
93	SK113	陶器	碗	瀬戸・美濃	(9.4)	[4.3]	—	施釉	施釉	—	8N/0灰白	—	良	無	
94	SK115	陶器	碗	瀬戸・美濃	4.85	[4.5]	3.3	施釉	施釉	—	8N/0灰白	—	良好	無	
95	SK115	磁器	紅濠口	肥前	1.8	1.4	—	施釉、腐	施釉	—	2.5Y8/2灰白	—	良	無	
96	SK115	磁器	碗	肥前	—	[5.2]	—	施釉、染付、腐	施釉	—	7.5Y8/1灰白	—	良好	無	
97	SK118	陶器	碗	京・信楽	9.1	5.5	3.2	施釉、上絵	施釉	—	8N/0灰白	—	良	無	呉須・淡青色
98	SK117	土師質土器	甕(底部)	—	[15.4]	43.0	—	ナデ	ナデ	—	10YR8/3浅黄橙	—	良	無	上絵:10R3/6暗赤
99	SK122-1	陶器	灯明皿	備前	11.0	2.0	—	施釉	施釉	—	10YR7/3にぶい黄	—	良	無	接合痕
100	SK122-1	陶器	甕	肥前	—	[17.8]	11.4	施釉	施釉	—	8N/0灰白	—	良好	有	
101	SK122-1	陶器	指鉢	備前	(34.6)	14.35	(16.1)	施釉	施釉	—	8N/0灰白	—	良好	無	
102	SK122-1	磁器	碗	肥前	(10.75)	[5.3]	—	施釉、染付、絞款	施釉、染付、絞款	—	2.5Y8/1灰白,2.5Y7/1灰白,5YR4/1 褐灰,10Y1.7/1赤黒	—	良	無	外面に重ね被さ真
103	SK122-1	磁器	皿	肥前	(12.2)	3.2	(7.3)	施釉、染付、絞款	施釉、染付、絞款	—	透明釉	—	良	無	
105	SK122-2	陶器	甕(水入れ)	—	(7.65)	3.8	(4.15)	施釉、絞款	施釉	—	5Y8/1灰白	—	良好	無	接合痕あり断面と内面に被熱痕
106	SK122-2	磁器	碗	肥前	(11.8)	7.5	(4.8)	施釉、青磁染付、絞款	施釉、青磁染付、絞款	—	10GY7/1明緑灰、透明釉	—	良好	無	高台基付に砂付着
107	SK122-2	磁器	皿	肥前	(13.9)	2.55	(8.7)	施釉、絞款	施釉、絞款	—	透明釉	—	良	無	
108	SK122-2	磁器	猪口	肥前	(5.9)	2.9	2.25	施釉、上絵	施釉	—	8N/0灰白	—	良好	有	
109	SK122-3	陶器	甕	瀬戸・美濃	9.8	5.0	4.0	施釉、染付、絞款	施釉	—	2.5Y8/2灰白	—	良好	無	高台内に陶器片付着
110	SK122-3	陶器	碗	肥前	(11.2)	6.0	3.8	施釉	施釉	—	10YR8/4浅黄橙	—	良	無	高台内に墨書、判読不能
111	SK122-3	陶器	碗	瀬戸・美濃	(9.8)	[4.7]	—	施釉	施釉	—	外:7.5Y8/1灰白,7.5YR3/9暗褐 内:7.5Y8/1灰白	—	良好	無	
112	SK122-3	陶器	灯明皿	備前	(11.0)	[1.8]	—	施釉	施釉	—	7.5YR6/1褐灰	—	良	無	
113	SK122-3	陶器	碗	瀬戸・美濃	—	[2.6]	4.0	施釉	施釉	—	5Y8/2灰白	—	良好	無	被熱痕
114	SK122-3	磁器	瓶	肥前	—	[7.0]	—	施釉、染付	施釉	—	透明釉	—	良好	無	被熱痕
115	SK122-3	磁器	蓋	肥前	(8.4)	[2.2]	—	施釉、絞款	施釉	—	透明釉	—	良好	無	砂付着
116	SK122-3	土師質土器	羽釜	—	(18.2)	[10.0]	—	ナデ、指オサエ	ナデ、ハケ、指オサエ	—	外:7.5YR1.7/1黒色6/2灰黄褐 内:7.5YR6/3にぶい黄	—	良	有	
117	SK122-3	土師質土器	焙烙	—	(26.6)	[6.8]	—	ナデ、ハケ、指オサエ	ナデ、ハケ、指オサエ	—	外:N3/暗灰～10R6/6赤褐 内:7.5YR5/1褐灰～10YR7/1灰白	—	良	有	

第7表 土器 観察表 (4)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整	内面	胎土		色調1 (胎土)	色調2 (釉薬、内外色調)	色調3 (呉須、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高			粗密	含有物など						
118	SK122-3	土師質土器	焙烙	—	(2.84)	[5.3]	ナデ, 指オサエ, 円孔1	ナデ, ヨココハネ	普	—	外: 2.5Y7/1灰白 内: 2.5Y6/1黄灰	—	良	有		
119	SK122-3	土師質土器	焙烙	—	(29.0)	[5.5]	ナデ, 指オサエ, 円孔2	ナデ	普	—	外: 1.0YR5/2灰黄褐 内: 1.0YR4/2灰黄褐	—	良	無		
120	SK122-3	土師質土器	焙烙	—	(29.0)	[5.06]	ナデ, 指オサエ, 粘土粗織ぎ目 痕, 円孔2	ナデ	普	—	外: 2.5Y3/1黒褐 内: 7.5YR7/4にふい, 燈	—	良	有		
121	SK123	磁器	皿	肥前	(13.6)	3.6	施釉, 染付, 團縁	施釉, 染付, 團縁	細	—	透明釉	呉須, 淡・暗青色	良好	無	高台内砂付着	
122	SK123	磁器	猪口	肥前	(6.0)	2.3	施釉, 染付	施釉, 染付	微	—	NS/0灰白	呉須, 暗青色	良好	無		
123	SK123	磁器	碗	肥前	(4.4)	(4.6)	施釉, ハネ	施釉, ハネ	微	—	10YR4/1褐灰	—	良好	無		
124	SK125	磁器	猪口	肥前	(5.8)	2.3	施釉, 染付	施釉	微	—	NS/0灰白	呉須, 濃青色	良好	無	高台内に付着物	
125	SK125	磁器	碗	肥前	(9.85)	5.25	施釉, 染付, 團縁, 銘款	施釉	微	—	NS/0灰白	呉須, 淡緑青色, 淡青色	良好	無	高台裏面に砂付着	
126	SK125	陶器	碗	京・信楽	(10.8)	7.0	施釉	施釉	細	—	5Y8/3淡黄	—	良	無	被熱痕	
127	SK124	陶器	鉢	肥前	—	[6.2]	施釉, ハネ	施釉, ハネ	細	—	2.5Y6/3にふい, 黄	—	良	無		
128	SK124	陶器	鉢	肥前	(23.6)	[5.4]	施釉, ハネ	施釉	微	—	外: 5YR7/1明褐色 内: 7.5YR3/2黒褐	—	良好	無		
129	SK124	陶器	碗	京・信楽	(8.7)	[3.4]	施釉, 鉄絵	施釉	微	—	NS/0灰白	鉄絵: 7.5YR4/4褐~7.5YR2/3極 暗褐	良好	無		
130	SK124	陶器	灯明皿	備前	8.5	1.55	施釉, 鉄絵	施釉	微	—	2.5YR6/6橙	—	良	無		
131	SK124	陶器	灯明皿	備前	(10.7)	1.8	施釉, 鉄絵	塗土, 回転ナデ	細	—	漆土: 2.5YR3/2暗赤褐	—	良	無		
132	SK124	磁器	猪口	肥前	4.8	1.85	施釉, 鐵	塗土, 回転ナデ, 開口部2	細	—	漆土: 5YR5/2灰赤	—	良好	無		
133	SK124	磁器	猪口	肥前	5.9	2.55	施釉, 染付	施釉	微	—	7.5Y8/1灰白	—	良好	無		
134	SK124	磁器	碗	肥前	(9.5)	[4.7]	施釉, 染付	施釉, 染付	微	—	NS/0灰白	呉須, やや淡青色	良好	無		
135	SK127	陶器	碗	肥前	9.3	6.2	施釉, 染付, 團縁	施釉	微	—	NS/0灰白	呉須, 淡青色	良好	無		
136	SK127	陶器	碗	京・信楽	(9.6)	[3.6]	施釉, 上絵	施釉	微	—	10YR3/1黒褐	呉須, 淡青灰色	良好	無		
137	SK127	陶器	碗	京・信楽	(10.85)	[3.2]	施釉, 上絵	施釉	微	—	2.5Y8/2灰白	上絵: 2.5Y5/黄褐, 10Y7/2灰白 上絵: 緑, 赤茶色	良好	無	空付襷端と底部に重む 焼痕あり, 開口部に粘土 の塊付着	
138	SK127	陶器	灯明皿	備前	9.8	1.4	施釉, 鉄絵	塗土, 回転ナデ, 開口部3	細	—	2.5Y7/1灰白	—	良	無		
139	SK127	磁器	碗	中国	(10.0)	[3.4]	施釉, 青花, 團縁	施釉, 團縁	微	—	NS/0灰白	呉須: 淡青色	良好	無		
140	SK127	磁器	皿	肥前	10.0	1.95	施釉, 染付, 團縁, 底の目凹形高 台	施釉, 染付	微	—	NS/0灰白	呉須, 明・暗青色	良好	無		
141	SK132	陶器	碗	肥前	(8.7)	5.2	施釉	施釉	微	—	5Y8/1灰白	—	良	無	被熱痕	
142	SK132	陶器	碗	京・信楽	—	4.0	(3.1)	施釉	微	—	2.5Y8/1灰白	—	良	無		
143	SK132	陶器	碗	京・信楽	8.4	4.75	(3.1)	施釉	微	—	5Y7/3淡黄	—	良	無		
144	SK132	陶器	碗	瀬戸・美濃	(9.9)	5.4	(4.0)	施釉	やや粗	—	10Y7/1灰白	—	良	無		
145	SK132	陶器	鉢	肥前	15.7 13.7	7.4	(6.0)	施釉, 鉄絵	施釉, 鉄絵	細	—	5Y8/1灰白, 10YR2/3黒褐	—	良	無	口縁は六角
146	SK132	陶器	猪口	—	(7.4)	4.8	(2.9)	施釉, 上絵	施釉	微	—	5Y8/1灰白, 10YR5/3にふい, 黄褐	鉄絵: 10YR4/2灰黄褐	良好	無	
147	SK132	陶器	碗	—	11.0	6.15	5.4	施釉, 上絵	施釉	細	—	10YR7/3にふい, 黄褐	上絵: 黒褐色, 灰白色, 淡緑色	良好	無	
148	SK132	陶器	灯明皿	京・信楽	(11.0)	2.05	(4.4)	施釉	微	—	5Y8/1灰白	—	良	有	被熱痕	
149	SK132	磁器	瓶	肥前	—	[11.4]	5.3	施釉, 染付	微	—	5Y7/2灰白	呉須, 淡青色	良好	無	被熱痕	
150	SK132	磁器	碗	肥前	11.75	5.65	4.7	施釉, 染付, 團縁, 銘款	微	—	NS/0灰白	呉須, 淡・暗青色	良好	無	被熱痕	
151	SK132	磁器	猪口	肥前	7.2	3.6	2.4	施釉, コーンニヤフ印判	微	—	NS/0灰白	呉須, 淡・暗青色	良好	無	被熱痕	
152	SK132	磁器	碗	肥前	8.4	3.7	3.0	施釉, 染付	微	—	5Y8/1灰白	呉須, 淡青色	良好	無	被熱痕	
153	SK132	磁器	碗	肥前	10.0	5.15	4.3	施釉, 染付, 團縁	微	—	5Y8/1灰白	呉須, 5Y4/2灰オリーブ	良好	無	被熱痕	
154	SK132	磁器	碗	肥前	(10.45)	5.4	(3.7)	施釉, 染付, 團縁	微	—	NS/0灰白	呉須, 淡青灰色	良好	無	被熱痕	
155	SK132	磁器	碗	肥前	(8.6)	[4.0]	—	施釉, 染付	微	—	NS/0灰白	淡灰色	良好	無	被熱痕	
156	SK132	磁器	碗	肥前	11.3	6.3	6.4	施釉, 染付	微	—	NS/0灰白	呉須, 明青色	良好	無	被熱痕	
157	SK132	土師質土器	皿	—	10.1	2.9	7.0	回転ナデ, 回転糸切り	普	—	5YR7/4にふい, 燈	—	良	有		
160	SK134	陶器	碗	—	—	[3.65]	(4.0)	施釉	微	—	2.5Y6/1黄灰	5Y5/2灰オリーブ, 灰	良好	無		
161	SK134	陶器	甕	瀬戸・美濃	—	[4.9]	(11.8)	施釉, 胎土目2	細	—	2.5Y7/2灰黄	7.5YR3/4暗褐	良好	無		
162	SK134	陶器	鉢	—	—	[6.7]	(16.4)	施釉	細	—	7.5YR4/2灰褐	—	良好	無		

第8表 土器 観察表 (5)

編文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬、内外色調)	色調3 (須臾上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高	外面	内面							
163	SKI134	軟質施釉陶器	土瓶(口 は急須 土瓶(口 は急須)	屋島	—	(9.2)	[3.0]	施釉, イッチンがけ	—	5YR6/4にふい橙	イッチンがけ: 7.5YR8/4浅黄橙	—	良好	無	
164	SKI134	軟質施釉陶器	土瓶(口 は急須)	屋島	—	(8.5)	[4.2]	施釉	—	7.5YR7/6橙	—	—	良	無	
165	SKI134	陶器	瀬戸・美濃	—	(14.9)	(6.9)	—	施釉	—	2.5Y8/2灰白	—	—	良	無	
166	SKI134	陶器	瀬戸・美濃	—	(6.2)	(5.2)	—	施釉	—	5.5YR4/3褐	—	—	良好	無	把手の痕跡
167	SKI134	陶器	瀬戸・美濃	—	10.0	6.3	4.8	施釉, 胎土目3	—	5Y8/2灰白	—	—	良	無	
168	SKI134	磁器	肥前	—	(10.4)	5.6	4.0	施釉, 染付, 團線	—	施釉, 淡青	—	—	良好	無	
169	SKI134	磁器	肥前	—	8.3	2.6	4.4	施釉, 口紅	—	施釉, 淡青	—	—	良好	無	
170	SKI134	磁器	肥前	—	(10.4)	5.9	4.0	施釉, 染付, 團線	—	白色	—	—	良好	無	
171	SKI134	磁器	肥前	—	20.5	3.25	11.6	施釉, 輪花	—	N8/0灰白	—	—	良好	無	高台内にヒンズル5分所, ガラスの施釉痕, 施釉痕
173	SKI134	土質質土器	程戸	—	18.3	15.4	18.3	彫刻文	—	外: 10YR6/3にふい黄橙 内: 10YR6/2灰黄橙	—	—	良	有	二重構造
174	SKI147	陶器	瀬戸・美濃	—	(8.9)	[4.45]	—	施釉	—	5Y8/1灰白	—	—	良	無	
175	SKI147	陶器	備前	—	(10.6)	1.7	—	塗土, 回転ヘラケズリ	—	2.5YR6/2灰赤	—	—	良	有	
176	SKI147	陶器	備前	—	10.1	1.45	(4.3)	回転ヘラケズリ	—	2.5YR7/6橙	—	—	良	有	
177	SKI147	磁器	肥前	—	(10.45)	[5.7]	(4.6)	施釉, 染付, 團線	—	施釉	—	—	良好	無	
178	SKI147	磁器	肥前	—	(9.9)	2.9	5.5	施釉, 染付, 團線	—	N8/0灰白	—	—	良好	無	
179	SKI147	陶器	土鍋	—	18.0	[1.01]	—	施釉	—	10YR7/1灰白	—	—	良	無	
180	SKI147	陶器	し瓶	—	7.0	16.8	15.0	施釉, 輪がけ, 回転ヘラケズリ	—	7.5YR3/4暗褐	—	—	良	無	
181	SKI148	磁器	肥前	—	10.3	6.2	3.8	施釉, 染付, 團線	—	施釉	—	—	良好	無	
182	SKI149	陶器	備前	—	7.8	1.15	4.2	塗土, 回転ヘラケズリ, 開口部3	—	10R4/4赤褐	—	—	良好	無	
183	SKI149	陶器	瀬戸・美濃	—	9.2	5.25	3.9	施釉	—	外: 5Y7/2黄赤, 7.1/黒 内: 5Y7/2黄赤	—	—	良好	無	
184	SKI150	磁器	肥前	—	(7.8)	4.45	3.0	施釉, 染付, 團線	—	N8/0灰白	—	—	良好	無	
185	SKI150	陶器	京・信楽	—	(9.4)	[3.2]	—	施釉, 上絵	—	2.5Y8/2灰白	—	—	良好	無	
186	SKI150	陶器	瀬戸・美濃	—	(9.9)	[3.8]	—	施釉	—	10Y7/1灰白	—	—	良好	無	
187	SKI150	陶器	瀬戸・美濃	—	8.8	5.7	3.8	施釉, 染付	—	外: 7.5YR2/3暗褐, 7.5Y7/3灰白 内: 7.5Y7/3灰白	—	—	良好	無	
188	SKI150	陶器	備前	—	12.4	6.5	13.6	塗土, 回転ヘラケズリ	—	2.5Y8/2灰白	—	—	良	無	
189	SKI150	陶器	備前	—	9.8	1.4	3.9	塗土, 回転ヘラケズリ	—	2.5YR5/6明赤褐	—	—	良好	無	
190	SKI150	陶器	備前	—	(10.2)	1.4	3.9	塗土, 回転ヘラケズリ	—	10R5/4赤褐	—	—	良	有	
191	SKI150	磁器	猪口	—	5.8	2.3	2.8	施釉, 染付	—	N8/0灰白	—	—	良好	無	
192	SKI150	磁器	小碗	—	(7.3)	4.3	2.9	施釉, 染付, 團線	—	N7/0灰白	—	—	良好	無	
193	SKI150	磁器	蓋	—	(9.8)	3.1	(4.0)	施釉, 青磁染付, 新紋	—	5Y7/1灰白	—	—	良	無	
194	SKI150	磁器	蓋	—	11.9	2.55	4.65	施釉, 染付	—	施釉	—	—	良好	無	
195	SKI150	土質質土器	井側	—	(67.6)	[16.6]	—	回転ヘラケズリ, 文様帯	—	5YR7/6橙	—	—	良	無	
198	SKI152	陶器	碗	肥前	—	(10.0)	[3.5]	施釉, ハケ	—	外: 5YR6/3にふい褐 内: 5Y8/3淡黄, 10YR6/2灰黄褐	—	—	良好	無	
199	SKI152	陶器	皿	瀬戸・美濃	—	(12.0)	2.9	(5.2)	施釉	5Y8/1灰白	—	—	良	無	
200	SKI152	軟質施釉陶器	土瓶(口 は急須)	屋島	—	(11.3)	[4.0]	—	—	5YR6/4にふい橙	—	—	良	無	
201	SKI152	陶器	灯明皿	備前	—	(7.8)	1.0	(4.2)	塗土, 回転ヘラケズリ, 開口部1	—	5YR4/3にふい赤褐	—	良好	無	
202	SKI152	磁器 (青磁)	香炉(有 三足備 平筒形)	中国	—	10.55	5.0	4.0	施釉, 有三足(脚付)	—	—	—	良好	無	

第9表 土器 観察表 (6)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)			文様・調整		胎土 含有物など	色調1 (胎土)	色調2 (釉薬、内外色調)	色調3 (灰須、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高	底径	外面	内面							
203	SK152	陶器	擂鉢	備前	(85.6)	[10.5]	—	塗土、回転ナデ	回転ナデ、鈎目有り	—	塗土:2.5YR5/6明赤褐 2.5YR4/3にぶい赤褐色	—	良	無		
204	SK152	土師質土器	火鉢	—	—	[12.2]	(25.4)	ナデ	指ナエ、板ナデ	—	外:2.5YR6/6橙赤 内:2.5YR6/6橙赤~3/1暗赤灰色	—	良好	有	脚1	
205	SD101 II層	陶器	碗	肥前	(10.6)	7.4	(4.8)	施釉、染付、圈線	施釉	—	透明釉	異須:2.5GY3/1暗オリーブ灰~ 2.5GY6/1オリーブ灰	—	良好	無	
206	SD101 II層	陶器	碗	肥前	—	[5.2]	4.4	施釉、白塗土	施釉、ハケ	—	外:2.5Y8/1灰白 内:2.5Y8/2灰白,10YR6/1褐灰	—	良	無		
207	SD101 II層	陶器	碗	瀬戸・美濃	(9.0)	5.1	4.0	施釉	施釉	—	外:5Y7/1灰白 内:7.5Y7/1灰白	—	良	無		
208	SD101 II層	陶器	碗	瀬戸・美濃	9.4	6.3	4.3	施釉	施釉	—	外:10Y5/2オリーブ灰,7.5YR3/4明 褐 内:10Y5/2オリーブ灰	—	良	無		
209	SD101 II層	陶器	鉢	肥前	(20.0)	6.05	(8.3)	施釉	施釉、ハケ、蛇の目軸ハギ	細	10YR7/3にぶい黄橙	—	良	無		
210	SD101 II層	陶器	碗	京・信楽	(8.8)	5.1	3.0	施釉、鉄絵	施釉	微	N8/0灰白	鉄絵:7.5Y3/1オリーブ黒	—	良好	無	
211	SD101 II層	陶器	碗	京・信楽	(9.0)	5.7	(3.4)	施釉	施釉	細	5Y8/3淡黄	—	良	無		
212	SD101 II層	陶器	碗	京・信楽	(8.75)	5.25	2.75	施釉、上絵	施釉、上絵	細	10Y7/2灰白	上絵:赤褐色・オリーブ灰色	—	良好	無	
213	SD101 II層	陶器	碗	京・信楽	—	[4.8]	(3.2)	施釉、上絵	施釉	細	5Y8/2灰白	上絵:明緑色	—	良	無	
214	SD101 II層	陶器	香炉	—	6.15	2.7	4.3	施釉	施釉	細	5Y7/2灰白	—	良好	無	内部に付着物	
215	SD101 II層	陶器	皿	京・信楽	(9.2)	2.2	4.1	施釉	施釉、鉄絵	微	5Y8/2灰白	鉄絵:10YR5/3にぶい黄褐	—	良好	無	
216	SD101 II層	陶器	鉢	備前	(14.0)	7.3	13.7	塗土、回転ナデ	塗土、回転ナデ	微	塗土:2.5YR3/3暗赤褐 7.5YR6/2灰褐	—	良好	無		
217	SD101 II層	陶器	碗	京・信楽	(11.0)	5.2	(4.1)	施釉、鉄絵	施釉	細	7.5Y7/1灰白	鉄絵:2.5Y3/1黒褐	—	良好	有	
218	SD101 II層	陶器	蓋	—	(7.3)	[2.4]	—	施釉、上絵、鉄絵	—	微	2.5Y8/1灰白	上・鉄絵:7.5YR4/2灰褐,暗青色	—	無		
219	SD101 II層	陶器	灯明皿	備前	(10.5)	[1.3]	—	塗土	塗土	細	塗土:5YR4/2灰褐,2.5YR4/1黄灰	—	良好	有		
220	SD101 II層	陶器	灯明皿	京・信楽	(10.4)	1.75	4.4	施釉、回転ヘラケズリ	施釉、開口部1	微	灰白5Y8/1	—	良好	無		
221	SD101 II層	陶器	灯明皿	備前	(9.6)	1.25	(5.0)	回転ナデ、回転ヘラケズリ	塗土、回転ナデ、開口部2	細	10YR6/4にぶい黄橙	—	良	無		
222	SD101 II層	陶器	鉢	肥前	(9.0)	[5.6]	—	施釉	施釉、ハケ	微	外:5Y7/2灰白 内:10YR8/2灰白,10YR4/1褐灰	—	良好	無		
223	SD101 II層	陶器	甕	肥前	(25.0)	[11.5]	—	施釉	施釉	微	外:5YR4/3にぶい赤褐 内:5YR3/1黒褐	—	良好	無		
224	SD101 II層	磁器	皿	肥前	13.5	3.7	8.2	施釉、染付、圈線、銘歌	施釉、染付	細	2.5Y7/2灰黄	異須:暗青色,2.5GY4/1暗オリーブ 灰,10Y3/2オリーブ黒	—	良好	無	高台に砂付着
225	SD101 II層	磁器	碗	肥前	(10.6)	5.0	3.6	施釉、染付	施釉、蛇の目軸ハギ	微	透明釉	異須:明青色	—	良	無	高台に砂目痕
226	SD101 II層	磁器	碗	肥前	(11.1)	4.9	4.1	施釉、染付	施釉、蛇の目軸ハギ、砂付着	微	透明釉	異須:明青色	—	無	無	高台に砂付着
227	SD101 II層	磁器	碗	肥前	11.6	6.4	3.8	施釉、染付、圈線	施釉、染付、圈線	細	N7/0灰白	異須:暗青色	—	良	無	高台に砂付着
228	SD101 II層	磁器	碗	肥前	(9.65)	[4.95]	—	施釉、染付	施釉、染付	微	N8/0灰白	異須:淡青色	—	良好	無	
229	SD101 II層	磁器	碗	肥前	(10.2)	5.8	3.6	施釉、染付、圈線	施釉、染付、圈線	微	N8/0灰白	異須:明・暗青色	—	良好	無	

第10表 土器 観察表(7)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	質量(cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	焼成	煤・ こけ	備考
					口径	器高	外面	内面							
230	SD101 II層	磁器	皿	肥前	口径 (12.4)	器高 3.8	底径 4.3	施釉	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
231	SD101 II層	磁器	瓶	肥前	口径 1.9	器高 6.0	(4.2)	施釉,染付	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色,淡青色	良好	無	高台に砂付着
232	SD101 II層	磁器	瓶	肥前	口径 2.4	器高 [5.5]	—	施釉,染付	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明・濃青色	良好	無	
233	SD101 II層	磁器	蓋	肥前	口径 8.2	器高 2.8	3.5	施釉,有底染付	—	N8/0灰白	透明釉,10Y7/2灰白	呉須:明青色	良好	無	高台量付に砂付着
234	SD101 II層	磁器	猪口	肥前	口径 (5.35)	器高 2.35	(2.9)	施釉,染付	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	
235	SD101 II層	磁器	猪口	肥前	口径 6.8	器高 3.6	2.6	施釉,染付	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	高台に砂付着
236	SD101 II層	磁器	皿	肥前	口径 (13.2)	器高 3.9	(7.8)	施釉,染付,團縁,輪花	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良	無	
237	SD101 II層	磁器	皿	肥前	口径 (13.3)	器高 3.7	(7.5)	施釉,染付,團縁,龍 台	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:暗青色	良好	無	
238	SD101 II層	磁器	皿	肥前	口径 (25.6)	器高 4.5	14.8	施釉,染付,團縁,銘款	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明・暗青色	良好	無	高台内ン痕
243	SD101 II層	土師質土器	井側 土器	—	口径 (47.0)	器高 [24.3]	—	ナデ,ハケ	2mm以下の石英・長 石を含む	—	外:7.5YR7/3にふい,黄 内:N6/0灰	—	良	無	
244	SD101 II層	土師質土器	井側	—	口径 (42.6)	器高 [12.4]	—	ナデ	1mm以下の黒雲母, 金雲母を含む	—	10YR7/3にふい,黄橙	—	良	無	半径1cmぐらゐの穴跡が 1つ下部に有り
245	SD101 II層	土師質土器	甕底部	—	口径 —	器高 [7.5]	(27.9)	ナデ	石を含む	—	2.5Y7/2灰黄	—	良	無	
246	SD101 III層	土師質土器	羽釜	—	口径 20.6	器高 [13.0]	—	ナデ,面取り	砂粒ほとんど含まな い	—	10YR5/4褐灰	—	良	有	
247	SD101 III層	陶器	鉢	肥前	口径 —	器高 [4.6]	—	ナデ,ハケ,指オサエ	—	5YR7/4にふい,橙	10YR6/4にふい,黄橙,5Y8/2灰白	—	良好	無	
248	SD101 III層	陶器	碗	京・信楽	口径 (8.8)	器高 [4.8]	—	施釉	—	7.5Y8/1灰白	7.5Y7/1灰白	—	良好	無	
249	SD101 III層	陶器	鉢	肥前	口径 (17.9)	器高 [3.2]	—	施釉	—	7.5YR6/3にふい,濁	7.5YR4/2灰褐	—	良好	無	
250	SD101 右組裏込	磁器	火入れ	肥前	口径 (7.3)	器高 [3.9]	—	施釉,染付,團縁	—	N8/0灰白	2.5GY8/1灰白	呉須:やや濃青色	良好	無	
251	SD101 右組裏込	陶器	碗	肥前	口径 9.4	器高 [4.2]	—	施釉	—	2.5Y8/3淡黄	10YR6/4にふい,黄橙	—	良	無	
252	SD101 右組裏込	陶器	碗	肥前	口径 (10.9)	器高 [3.5]	—	施釉,染付,團縁	—	7.5Y6/1灰	透明釉	呉須:淡青色	良	無	
253	SD101 右組裏込	陶器	灯明皿	備前	口径 (9.6)	器高 1.5	(3.2)	回転ナデ,回転ヘラケズ	—	—	赤土:2.5YR4/3にふい,橙 外:2.5YR5/3にふい,橙	—	良好	無	
254	SD101 右組裏込	陶器	灯明皿	備前	口径 (9.2)	器高 1.8	—	塗土,回転ナデ	—	—	赤土:1.0R4/4赤褐 外:5YR5/4にふい,赤褐	—	良	有	
255	SD101 右組裏込	磁器	猪口	肥前	口径 (6.6)	器高 3.15	3.3	施釉,染付	密	N8/0灰白	2.5GY7/明オリーブ灰	呉須:2.5GY4/1暗オリーブ灰	良好	無	内面足みに石粒状付 着物あり
256	SD101 右組裏込	磁器	碗	肥前	口径 (12.4)	器高 [3.9]	—	施釉,染付	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:暗青色	良好	無	
257	SD101 右組裏込	磁器	碗	肥前	口径 —	器高 [2.6]	(4.3)	施釉,染付,團縁,銘款	—	5Y7/1灰白	透明釉	呉須:7.5GY6/1緑灰	良好	無	
258	SD101 I層	軟質施釉陶器	鍋	豊島	口径 (11.0)	器高 [3.05]	—	施釉	—	5YR6/4にふい,橙	2.5YR5/8明赤褐	—	良好	無	
259	SD101 I層	陶器	甕	大谷	口径 —	器高 [8.1]	(9.2)	施釉	—	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR3/2暗赤褐	—	良好	無	
260	SD101 I層	陶器	小壺	備前	口径 1.5	器高 4.8	3.8	回転糸切り	—	5YR5/3にふい,赤褐	—	—	良好	無	自然釉
261	SD101 I層	陶器	碗	京・信楽	口径 (12.0)	器高 5.4	(3.6)	施釉	—	2.5Y7/2灰黄	5Y7/2灰白	—	良好	無	

第11表 土器 観察表 (8)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	質量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	焼成	煤・ こけ	備考
					口径	器高	外面	内面							
262	SD101 I層	陶器	灯明皿	京・信美	底径 5.7 (8.2)	5.7	施釉	施釉,開口部1	—	10YR8/3浅黄橙	10YR8/2灰白	—	良	有	被熱真
263	SD101 I層	磁器	碗	肥前	口径 [4.7] (9.3)	—	施釉,染付	施釉	—	N8/0灰白	透明釉	呉須,明青色	良	無	
264	SD101 I層	磁器	碗	肥前	口径 5.0 (4.0)	4.0	施釉,染付,團縁	施釉,團縁	—	5Y8/1灰白	透明釉	呉須,濃青色	良好	無	
265	SD101 I層	磁器	補委器 口	肥前	口径 7.8 (6.3)	6.3	施釉,染付,口紅,團縁,疵の目 凹形高台	施釉,染付	—	N8/0灰白	白色	口紅,7.5YR5/6明緑	良	無	
266	SD101 I層	磁器	蓋	肥前	口径 8.75 (13.1)	2.8	施釉,染付,團縁	施釉,染付,團縁	—	N8/0灰白	透明釉	呉須,明・暗青色	良好	無	
273	SE101	歌生土器	甕	—	口径 [4.1] (13.1)	—	ナデ,タタキ	ナデ,指オサエ	4mm以下の石英・長石・雲母・角閃石等を含む	—	外:7.5YR5/4にふい,濁~3/1黒褐 内:7.5YR3にふい,濁~4/1褐灰	—	良	無	
274	SE101	土師質土器	壺	—	口径 [8.0] (10.9)	—	ナデ,指オサエ	ナデ,板ナデ	5mm以下の石英・長石・雲母・角閃石等を含む	—	外:10YR7/8黄橙~6/3にふい,黄橙 内:7.5YR6/6橙~6/4にふい,橙	—	良	無	
275	SE101	須臾器	囊体部	—	口径 [10.9] (10.8)	—	格子状タタキ	青海波紋	精良	—	外:5Y6/1灰白	—	良	無	
276	SE101	土師質土器	体部	—	口径 [10.8] (10.0)	—	ハク,指オサエ	ナデ,指オサエ,板ナデ	2mm以下の石英・金雲母等の砂粒を含む	—	外:7.5YR4/1褐灰~5/2灰褐 内:7.5YR5/4にふい,濁~4/2灰褐	—	良	無	
277	SE101	土師質土器	体部	—	口径 [10.0] (2.0)	—	ハク,指オサエ	ナデ,指オサエ,板ナデ	4mm以下の石英・長石・金雲母等含む	—	外:7.5YR7/4にふい,濁~3/1黒褐 内:10YR7/4にふい,黄橙	—	良	無	
278	SK201	陶器	皿	肥前	口径 [2.0] (4.4)	4.4	施釉	施釉,胎土目2	微細粒含む	2.5YR6/4にふい,濁	2.5Y7/2灰黄	—	良好	無	
279	SK201	陶器	皿	肥前	口径 [4.5] (20.8)	4.5	施釉	施釉,赤絵	微	10Y6/1灰	5Y6/2灰オリーブ	鉄絵,7.5Y3/2オリーブ黒	良	無	
280	SK201	陶器	皿	肥前	口径 [4.0] (9.3)	4.0	施釉	施釉	細	7.5YR6/4にふい,濁	2.5Y8/1灰白	—	良	無	
281	SK201	土師質土器	大甕	—	口径 (61.5) (87.1)	87.1	ヨコナデ,板ナデ,ハクのちナデ	ヨコナデ,ハク	2mm以下の石英・長石・黒色粒を含む	—	外:10YR8/3浅黄橙 内:10YR8/3浅黄橙	—	良	無	接合痕有り,墨書
282	SK202	陶器	皿	肥前	口径 12.2 (4.4)	4.4	施釉	施釉,砂目2	細	N8/0灰白	2.5Y8/1灰白	—	良	無	
283	SK202	陶器	皿	肥前	口径 (12.2) (3.7)	4.6	施釉	施釉,砂目2	細	N8/0灰白	2.5GY7/1明オリーブ灰	—	良	無	外面に砂目痕
284	SK202	陶器	皿	肥前	口径 13.0 (4.6)	4.3	施釉	施釉,砂目2	微	5Y7/1灰白	5GY7/1明オリーブ灰	—	良	無	高台に砂目痕
285	SK202	陶器	皿	肥前	口径 (9.2) (2.6)	2.6	施釉,回転糸切り	施釉,回転糸切り	細	N7/6灰白	2.5GY7/1明オリーブ灰	—	良	無	
286	SK202	陶器	皿	肥前	口径 (12.7) (3.1)	3.7	施釉	施釉,砂目2	細	N8/0灰白	7.5Y6/2灰オリーブ	—	良	無	外面に砂目痕
287	SK202	陶器	碗	肥前	口径 10.2 (4.7)	8.0	施釉	施釉	細	5Y8/1灰白	10YR7/1灰白	—	良	無	高台に砂目痕
288	SK202	陶器	甕	備前	口径 (51.9) (10.3)	10.3	回転ナデ	回転ナデ	細	5YR3/1黒褐	5YR4/1褐灰	—	良	無	高台に砂目痕
289	SK202	陶器	槽鉢	備前	口径 (17.5) (5.2)	5.2	回転ナデ,ナデ,脚目有り	回転ナデ,ナデ,脚目有り	細	N6/0灰	外:N6/0灰 内:10R5/2灰赤	—	良好	無	片口
290	SK202	磁器	器口	肥前	口径 (6.0) (2.6)	2.6	施釉,團縁,染付	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須,淡青色	良好	無	
291	SK202	磁器	皿	肥前	口径 (12.9) (2.3)	2.3	施釉	施釉,團縁	微	N8/0灰白	透明釉	呉須,淡青色	良好	無	
292	SK202	陶器	底部	瀬戸・美濃	口径 [2.4] (6.2)	6.2	施釉,赤絵	施釉,赤絵	粗	2.5Y8/2灰白	7.5Y8/4灰白	鉄絵,7.5YR4/2灰褐	良	無	
297	SK205	磁器(青磁)	瓶	肥前	口径 [6.7] (4.5)	4.5	施釉,上絵	—	微	N8/0灰白	2.5GY7/1明オリーブ灰	上絵,N5/0灰	良好	無	上絵ぼんど剥落している
298	SK207	陶器	碗	瀬戸・美濃	口径 (10.7) (6.8)	6.8	施釉,色絵	施釉	細	10YR8/2灰白	2.5Y8/4淡黄	色絵,濃緑色~淡緑色	良	無	高台内に砂付着
299	SK207	磁器	碗	肥前	口径 (11.2) (4.3)	4.3	施釉,染付	施釉,染付	微	N8/0灰白	透明釉	呉須,淡青色	良好	無	
300	SK207	磁器	皿	肥前	口径 [3.3] (5.0)	3.3	施釉,染付,疵の目,高台	施釉,染付,團縁	微	N8/0灰白	透明釉	呉須,明青色	良好	無	高台に砂目痕
301	SK207	磁器	皿	肥前	口径 (13.0) (2.8)	2.8	施釉	施釉,染付,團縁	微	N7/0灰白	透明釉	呉須,10Y5/2オリーブ灰	良好	無	高台に砂付着
302	SK207	土師質土器	皿	—	口径 (10.8) (2.1)	2.1	回転ナデ,回転糸切り	回転ナデ	細	—	2.5Y7/2灰	—	良好	有	
303	SK211	陶器	皿	肥前	口径 (13.0) (3.5)	3.5	施釉	施釉,胎土目4	微	2.5Y7/2灰黄橙~ 2.5YR6/6橙	5Y5/2灰オリーブ	—	良好	無	
304	SK211	土師質土器	皿	—	口径 8.6 (2.0)	2.0	回転ナデ,回転糸切り	回転ナデ	細	外:2.5Y8/2灰白 内:2.5Y8/3淡黄	—	—	良	無	
305	SK211	土師質土器	皿	—	口径 9.0 (2.2)	2.2	回転ナデ,回転糸切り	回転ナデ	普	—	外:5YR7/6橙 内:5YR7/4にふい,濁	—	良	無	
306	SK212	陶器	皿	肥前	口径 12.8 (3.75)	3.75	施釉	施釉,胎土目4	微	7.5YR7/4にふい,濁	7.5Y6/4にふい,濁	—	良好	無	被熱真,高台に回転糸切り 9痕

第12表 土器 観察表 (9)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1 (胎土)	色調2 (油蒸、内外色調)	色調3 (須臾、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	底径	外面	内面							
307	SK212	陶器	皿	京・信楽	施釉	施釉、上絵	施釉、上絵	細	—	10YR8/2灰白	2.5Y7/3黄	上絵:2.5YR4/8赤褐色、5Y8/2灰白 リナー:5B7/1明燐灰	良	無	被燻真
308	SK212	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、胎土目4	施釉、胎土目4	細	—	7.5YR8/6浅黄褐色	10YR6/4にぶい、黄褐色	—	良	無	被燻真
309	SK212	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、胎土目4	施釉、胎土目4	細	—	2.5Y8/2灰白	7.5YR7/2明燐灰	—	良好	無	被燻真
310	SK212	陶器	碗	肥前	施釉	施釉	施釉	細	2mm以下の黒色粒を含む	5YR6/6橙	10Y6/1灰	—	良	無	被燻真
311	SK212	陶器	碗	肥前	施釉	施釉	施釉	細	2mm以下の黒色粒を含む	5YR5/6明赤褐色	5Y7/1灰白	—	良好	無	被燻真
312	SK212	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉	施釉	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:濃青色～淡青色	良好	無	被燻真
313	SK212	陶器	大皿	肥前	施釉	施釉、胎土目2	施釉、胎土目2	細	—	10YR8/3浅黄褐色	7.5YR7/1灰	鉄線:10BG5/1青灰	良	無	被燻真
314	SK212	土師質土器	皿	—	回転ナデ	回転ナデ、回転赤切り	回転ナデ	普	2mm以下の赤色、 1mm以下の茶色粒 英・長石を含む	—	10YR7/3にぶい、黄褐色	—	良	有	—
315	SK212	土師質土器	皿	—	回転ナデ	回転ナデ、静止赤切り	回転ナデ	普	1mm以下の赤色粒 を含む	—	外:2.5Y6/1黄褐色 内:2.5Y5/1黄褐色	—	良	有	高台に砂目痕
317	SK218	陶器	碗	肥前	施釉	施釉	施釉	微	—	N8/0灰白	7.5YR3/2黒褐色、7.5YR8/1灰白	—	良	無	高台に砂目痕
318	SK218	陶器	碗	肥前	施釉、ハケ	施釉、ハケ、蛇の目軸ハギ	施釉、ハケ	細	—	10R6/4にぶい、赤褐色	7.5YR3/2黒褐色、7.5YR8/1灰白	—	良	無	高台に砂目痕
319	SK218	磁器	碗	肥前	施釉、染付、墨線	施釉	施釉	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:2.5GY5/1オリーブ灰、淡青色	良好	無	—
320	SK221	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	微	—	5Y8/1灰白	5Y7/2灰白	—	良	無	—
321	SK221	陶器	瓶	肥前	施釉、ハケ	施釉	施釉	微	—	N5/0灰	外:2.5Y3/3暗オリーブ褐色、5Y8/2灰白	—	良好	無	高台内に砂目痕
322	SK221	陶器	皿	京・信楽	施釉	施釉、色絵	施釉、色絵	微	—	5Y8/1灰白	2.5Y6/3にぶい、黄褐色	色絵:2.5Y6/1オリーブ褐色	良好	無	—
323	SK221	磁器	皿	肥前	施釉	施釉、染付、蛇の目軸ハギ	施釉、染付、蛇の目軸ハギ	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	—
324	SK221	磁器	猪口	肥前	施釉	施釉、上絵	施釉	微	—	2.5Y8/1灰白	10Y8/1灰白	上絵:2.5Y4/6赤褐色	良好	無	—
325	SK221	磁器	猪口	肥前	施釉	施釉	施釉	微	—	10Y9/1灰白	透明釉	—	良好	無	—
326	SK221	磁器	皿	肥前	施釉、染付	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	被燻真
327	SK221	磁器	皿	肥前	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	被燻真
328	SK221	磁器	皿	肥前	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:明青色	良好	無	被燻真
329	SK221	磁器	碗	肥前	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	—
330	SK221	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉、染付	施釉、染付	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良	無	ガラス焼継痕あり
331	SK221	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉、染付	施釉、染付	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良	無	高台内部に砂目痕
332	SK221	磁器	碗	肥前	施釉、青磁染付	施釉、墨線、コンニャク印判	施釉、墨線、コンニャク印判	細	—	N7/0灰白	透明釉	呉須:暗青色	良	無	—
333	SK221	陶器	摺鉢	備前	回転ナデ	回転ナデ、斜目有り	回転ナデ	普	黒色・赤色粒を含む	7.5YR7/1明燐灰	外:7.5R3/4暗赤～5YR6/3にぶい、赤褐色 内:7.5R3/4暗赤～5YR6/3にぶい、赤褐色	—	良好	無	—
334	SK224	陶器	皿	肥前	施釉	施釉	施釉	微	—	10YR7/1灰白	外:2.5Y7/2灰黄 内:1.0C6/1緑灰、7.5Y5/2灰オリーブ、細線	—	良	無	—
335	SK224	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、砂目3	施釉	微	—	7.5YR7/6橙	5Y8/1灰白	—	良	無	高台内に砂目痕
336	SK224	陶器	摺鉢	備前	回転ナデ	回転ナデ、斜目有り	回転ナデ	普	—	N6/0灰	外:2.5YR5/2～4/2灰赤 内:5YR4/2灰褐色	—	良好	無	—
337	SK224	磁器	鉢	肥前	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	施釉、染付、墨線	微	—	N8/0灰白	透明釉	呉須:淡青色	良好	無	—
338	SK228	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、砂目2	施釉	細	—	7.5R7/6橙	5Y8/2灰白	—	良	無	—
339	SK228	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、砂目2	施釉	微	—	N8/0灰白	7.5GY8/1 明緑灰	—	良	無	高台に砂目、赤切り痕
340	SK230	陶器	皿	肥前	施釉	施釉	施釉	微	—	2.5YR6/6橙	2.5Y8/1灰白	—	良	無	—
341	SK230	磁器	碗	肥前	施釉、染付	施釉	施釉	微	—	N8/0灰白	10Y7/1灰白	呉須:暗青色	良好	無	—
342	SK230	土師質土器	皿	—	回転ナデ	回転ナデ、回転赤切り	回転ナデ	普	砂粒ほどんど含まない	—	10YR7/2にぶい、黄褐色	—	良	無	外面に付着物
344	SD202	陶器	皿	肥前	施釉	施釉、胎土目3	施釉	細	—	7.5Y6/1灰	7.5Y6/2灰オリーブ	—	良	無	—
345	SD202	陶器	鉢	肥前	施釉、二彩	施釉	施釉	微	—	10YR7/3にぶい、黄褐色	10YR7/1灰白	2.5Y4/6オリーブ褐色	良好	無	—
346	SD202	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	施釉	施釉	細	—	10YR8/2灰白	2.5Y7/3浅黄	—	良	無	高台内部に砂目痕
347	SD202	陶器	碗	肥前	施釉	施釉	施釉	細	—	2.5GY8/1灰白	5GY7/1明オリーブ灰	—	良	無	—

第13表 土器 観察表 (10)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量 (cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(油薬、内外色調)	色調3(須臾、上絵)	焼成	煤・ こげ	備考	
					口径	器高	外面	内面								粗密
348	SD202	陶器	鉢	瀬戸・美濃	—	[5.9]	—	—	—	7.5YR6/1褐灰	外:濃緑色,淡緑色 内:濃緑色	—	良	無		
349	SD202	陶器	瓶	備前	回転ナデ	[12.2]	7.0	回転ナデ	—	N4/0灰	—	—	良好	無		
350	SD202	陶器	摺鉢	備前	回転ナデ	[8.0]	(14.0)	回転ナデ, 目有り	黒色粒含む	N6/0灰	外:7.5R4/3に赤い赤褐 内:7.5R4/2灰赤	—	良好	無		
351	SD202	陶器	火入れ	備前	塗土, 回転ナデ	[9.6]	(12.4)	回転ナデ	—	2.5YR6/6橙	塗土:2.5YR7/6赤褐 内:5YR7/8橙	—	良好	無	底部にへろ記号	
352	SD202	磁器	皿	肥前	施釉, 染付, 團縁, 銘歌	(14.2)	2.1	施釉, 染付	微	N8/0灰白	呉須, 明青色	—	良好	無	底部にピン痕	
353	SD202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁, 銘歌	—	[3.1]	施釉	微	N8/0灰白	呉須, 淡青色~暗青色	—	良好	無		
354	SD202	磁器	碗	中国	施釉, 青花, 團縁, 銘歌	—	[3.9]	施釉	細	2.5YR8/1灰白	呉須, 淡青色	—	良好	無		
355	SD202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	(8.9)	5.6	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須, 10Y4/2オリーブ灰~ 10Y3/1オリーブ黒	—	良好	無	高台内に砂付着
356	SD202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	(9.4)	5.7	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須, 明青色	—	良好	無	高台内に砂付着
358	SD204	陶器	鉢	肥前	—	[6.5]	10.0	施釉	細	2.5YR5/4に赤い赤褐	2.5YR3/1暗赤灰	—	良好	無		
359	SD204	陶器	灯明皿	中国	回転ヘラケズリ	(8.5)	2.3	施釉, 青花, 團縁	微	5YR7/6橙	塗土:2.5YR5/6明赤褐	—	無	無		
360	SD204	磁器	皿	中国	回転ナデ, 回転, 糸切り, 板状痕	14.0	[3.4]	施釉, 團縁, 虎の目軸ハギ	微	2.5YR8/2灰白	呉須, 5GY6/1緑灰, 淡青色	—	良	無		
361	SD204	土師質土器	皿	—	回転ナデ	(11.2)	2.3	回転ナデ	普	—	10YR7/2に赤い黄橙	—	良	無		
363	SE202	陶器	皿	—	施釉	(10.8)	3.6	施釉, 虎の目軸ハギ	微	7.5YR8/1灰白	外:10YR8/1灰白 内:7.5YR5/3灰オリーブ, 銅緑	—	良	無	内面皿込みに陶器片付 着	
364	SE202	陶器	底部	肥前	施釉	—	[3.1]	—	細	10YR6/1褐灰	10Y7/1灰白	—	良好	無		
365	SE202	陶器	底部	肥前	施釉, 團縁	(5.9)	(7.2)	—	微	5Y7/1灰白	—	—	良好	無		
366	SE202	陶器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	(9.4)	6.6	施釉, ハケ	細	N4/0灰	5YR3/2暗赤褐, 5YR8/1灰白	—	良	無		
367	SE202	陶器	碗	肥前	施釉, ハケ	(11.5)	[3.4]	施釉, ハケ	微	5YR4/2灰褐	—	—	良好	無		
368	SE202	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	(9.8)	5.6	施釉	微	5Y8/1灰白	外:7.5YR3/4暗褐, 5Y7/2灰白 内:5Y7/2灰白	—	良好	無		
369	SE202	陶器	香炉	肥前	施釉	8.4	[5.4]	—	細	2.5YR8/2灰白	5G5/1緑白灰, 銅緑	—	良	無		
370	SE202	陶器	碗	瀬戸・美濃	施釉	(10.8)	4.9	施釉	細	5Y8/2灰白	10Y7/2灰白, 10YR3/2暗褐	—	良好	無		
371	SE202	磁器	碗	肥前	施釉, 團縁	—	[3.7]	施釉	微	2.5GY8/1灰白	呉須, 明青色	—	良好	無	高台内に砂付着	
372	SE202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	—	[5.1]	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須, 明青色	—	良好	無	高台内に砂付着
373	SE202	磁器	猪口	肥前	施釉, 染付, 團縁	6.4	2.4	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須, 明青色~暗青色	—	良好	無	高台内に砂付着
374	SE202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	(7.55)	[2.95]	施釉	微	N8/0灰白	7.5GY8/1明緑灰	—	良好	無		
375	SE202	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁	—	[2.2]	施釉	微	N8/0灰白	透明釉	呉須, 淡青色	—	無	無	高台内に砂付着
376	SE202	陶器	皿	備前	回転ナデ, 回転, 糸切り	11.3	2.4	回転ナデ	細	2.5YR5/6明赤褐	—	—	良	有		
378	③腐直 上・②腐 (焼土層)	陶器	皿	肥前	施釉	(12.3)	4.2	施釉, 胎土目4	細	—	N7/0灰白	—	良	無	被熱痕	
379	⑤腐直 上・②腐 (焼土層)	陶器	甕	信楽	板ナデ	—	[12.3]	ナデ	微	2.5YR6/1赤灰	外:10R5/6赤 内:2.5YR4/1赤灰	—	良	無		
380	⑤腐直 上・②腐 (焼土層)	陶器	甕	備前	ナデ	(23.3)	[15.8]	ナデ	細	—	10R4/2灰赤	—	良	無	へろ記号, 自然釉	
381	⑤腐直 上・②腐 (焼土層)	陶器	甕	備前	ナデ, ケズリ	—	[20.1]	ナデ, 押オサエ, 粘土紐継目痕	細	—	10R5/6赤	—	良	無		
382	⑤腐直 上・②腐 (焼土層)	磁器	碗	肥前	施釉, 染付, 團縁, 銘歌	(9.8)	5.2	施釉, 染付, 團縁	微	白色	透明釉	呉須, 淡青色	—	無	無	高台内に砂付着
383	SK301	陶器	皿	瀬戸・美濃	施釉, 印花文	(10.3)	1.9	施釉	微	2.5YR7/1灰白	5Y6/3オリーブ黄~4/2灰オリーブ	—	良好	無		
384	SK301	陶器	碗	肥前	施釉, 鉄絵	(12.7)	6.9	施釉	細	10YR7/2に赤い黄橙	2.5Y6/4に赤い黄	鉄絵:2.5Y3/1黒褐	良	無	被熱痕	
385	SK301	陶器	皿	肥前	施釉	9.8	3.4	施釉	微	7.5YR5/4に赤い褐	7.5Y6/4灰	—	良好	無	底部に墨書	
386	SK301	陶器	皿	肥前	施釉	11.5	3.2	施釉	微	2.5Y6/1黄灰	5Y4/2灰オリーブ	—	良好	無		
387	SK301	陶器	摺鉢	備前	回転ナデ, ナデ	(28.1)	[7.1]	回転ナデ, 目有り	密	—	外:2.5YR5/6明赤褐 内:2.5YR5/8明赤褐	—	良	有	被熱痕	

第14表 土器 観察表(11)

観文 番号	出土遺構	種別	器種名	産地	法量(cm)		文様・調整		胎土 含有物など	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(灰須・上絵)	焼成	煤・ こげ	備考
					口径	器高	外面	内面							
388	SK301	陶器	皿	瀬戸・美濃	施釉	(19.4)	[3.5]	施釉	—	5Y7/2灰白	5Y7/3浅黄	—	良	無	
389	SK301	陶器	甕	備前	回転ナデ	—	[11.7]	回転ナデ	1mm大の赤色 粒・5mm以下の砂粒 を含む	2.5Y6/1黄灰	外:2.5YR2/3極赤褐 内:10YR3/1黒褐	—	良	無	自然釉
391	SK301	土師質土器	—	—	ナデ、ハケ	(32.0)	[5.2]	ナデ	1mm以下の砂粒・金 葉母を含む	—	外:5Y7/1灰白 内:5Y7/1灰白~6/1灰~7.5R2/1 赤黒	—	良	有	
392	SK301	土師質土器	外耳付 罎	—	指オサエ、横ナデ	(22.4)	[10.3]	ハケ、ナデ、指オサエ	砂粒ほとんど含まな い	—	外:5YR8/4淡橙 内:10YR8/3浅黄橙	—	良好	有	外耳に凹孔
393	SK301	土師質土器	外耳付 罎	—	ナデ、指オサエ	(28.8)	[11.0]	ナデ	0.5~1mm以下の石 炭・長石・金葉母を 含む	—	外:2.5Y7/3浅黄 内:2.5Y8/3淡黄	—	良	有	外耳に凹孔
394	SK301	土師質土器	甕	—	ナデ、指オサエ	—	[11.4]	ナデ、ハケ、指オサエ	3mm以下の石英・長 石・金葉母等を多く 含む	—	外:10YR7/2にふい、黄橙 内:2.5Y7/3浅黄~10YR7/2にふい 黄橙	—	良好	無	
395	SP206	陶器	皿	肥前	施釉	(12.6)	3.25	施釉胎土目4	1mm以下の砂粒含 む	10YR8/4浅黄橙	10YR7/1灰白	—	良	無	
397	SK309	陶器	皿	瀬戸・美濃	施釉	(8.6)	[1.9]	施釉	—	5Y7/1灰白	5Y7/3浅黄	—	良好	無	
398	SD301	陶器	甕	—	ナデ	—	[4.5]	ナデ	4mm以下の石英・長 石等を含む	10YR6/1褐灰~6/2灰黄 褐	内:10YR6/3にふい、黄橙	—	良好	無	自然釉
399	SD301	土師質土器	足釜 (口縁部)	—	指オサエ	(28.5)	[4.1]	ナデ	3mm以下の石英・長 石等を含む	—	外:2.5YR6/6橙 内:5YR4/1褐灰	—	良	無	
400	SD301	土師質土器	足釜 (脚部)	—	ナデ、横ナデ、指オサエ	長さ (8.4)	幅 3.0	—	2mm以下の石英・長 石等を含む	—	外:7.5YR6/4にふい、橙 内:2.5YR6/4にふい、橙	—	良好	無	
401	SE301	陶器	皿	肥前	施釉	(12.0)	3.65	施釉	—	5YR6/4にふい、橙	5Y6/2灰オリーブ	—	良	無	
402	SE301	磁器(青磁)	碗	中国	施釉	(11.0)	[6.3]	施釉	—	5Y8/1灰白	外:10Y5/2オリーブ灰、7.5YR3/3暗 褐 内:7.5CY8/1明緑灰、7.5GY6/1緑 灰	—	良好	無	
403	SE301	陶器	甕	備前	回転ナデ	(19.8)	[5.3]	回転ナデ	—	—	7.5R3/1暗赤灰	—	良好	無	
404	SE301	陶器	擂鉢	備前	回転ナデ	(27.6)	[3.5]	回転ナデ	—	10YR7/1灰白	7.5YR3/2黒褐	—	良	無	片口

第15表 瓦 観察表

報文 番号	出土遺構名	種別	法量(cm)			軒部法量(cm)			調整			瓦頭部の文様	胎土	色調(器面)	焼成	キヤロ	備考
			全長	幅	高さ	高さ	幅	厚さ	凹面	凸面							
13	整地A	軒丸瓦	[10.0]		1.6		14.2	1.9	ナデ	ナデ	ナデ	精良		7.5Y8/1灰白	良好		
40	整地D	軒丸瓦					12.1	2.4	ナデ	ナデ	ナデ	精良		N8/0灰白	良好		
104	SK122-1	軒丸瓦	[10.9]		1.4		12.6	10.7	ナデ	ナデ	ナデ	精良		7.5Y8/1灰白	良好		
158	SK132	軒平瓦	[15.2]		1.5		4.3	2	ナデ	ナデ	半截花菱文(上向)	普		N8/0灰白	良	○	
159	SK132	軒丸瓦	[9.8]		1.45		12.7	1.5	ナデ	ナデ	ナデ	やや粗/石英・長石・3~5mmの小石を含む		5Y8/1灰白	良	○	釘穴1
172	SK134	軒丸瓦				[7.5]	[12.8]	1.7	ナデ	ナデ	ナデ	普		5Y7/1灰白	良好		
196	SK150	軒棧瓦					○5.8 □3.8	○1.3 □1.4	ナデ	ナデ	宝珠文・巴文(右巻き)	普		N7/0灰白	良	○	
197	SK150	軒棧瓦	[7.8]		1.7		○(3.8) □3.9	○(0.8) □0.9	ナデ	ナデ	巴文(右巻き)	普		5Y7/1灰白	良好	○	
239	SD101 II層	軒丸瓦				[6.95]	[1.7]		ナデ	ナデ	巴文(左巻き)・赤色粒を含む	普		N6/0灰,N8/0灰白	良		
240	SD101 II層	軒丸瓦				9.2	1.75		ナデ	ナデ	巴文(右巻き)・赤色粒を含む	普		N7/0灰白	良		
241	SD101 II層	軒丸瓦				[9.45]	1.8		ナデ	ナデ	普			N7/0灰白	良		
242	SD101 II層	軒丸瓦				13.4	1.6		ナデ	ナデ	普			5Y7/1灰白	良		
267	SD101 I層	軒丸瓦	[10.5]	13	1.4		13.4	1.8	ナデ	ナデ	普			N8/0灰白	良		釘穴1
268	SD101 I層	軒丸瓦	[6.0]	11.8	1.4		12.1	1.4	ナデ	ナデ	普			5Y6/1灰	良好	○	
269	SD101 I層	軒丸瓦	[19.6]		1.8		○6.4 □4.1	○2.4 □2.0	ナデ	ナデ	半截花菱文(下向き)・巴文(左巻き)	普		5Y7/1灰白	良好	○	
270	瓦溜葺少	軒丸瓦				[8.9]	[2.3]		ナデ	ナデ	普			5Y8/1灰白	良		燃熟痕
271	瓦溜葺少	軒丸瓦				[9.6]	1.4		ナデ	ナデ	普			2.5Y8/1灰白	良		
272	瓦溜葺少	軒平瓦	[6.5]		[1.7]		[3.6]	[2.0]	ナデ	ナデ	三葉唐草文	やや粗/石英・長石・小石を含む		5Y8/1灰白	良		
293	SK202	軒丸瓦						1.35	ナデ	ナデ	普			N5/0灰	良好		
294	SK202	軒平瓦	[5.8]		1.2		3.5	1.6	ナデ	ナデ	普			10Y8/1灰白	良		
295	SK202	軒平瓦	[9.4]		1.7		3.3	2.0	ナデ	ナデ	連珠文	普		N8/0灰白	良		
296	SK202	軒平瓦	[6.2]		1.6		[3.3]	2.0	ナデ	ナデ	連珠文	やや粗/石英・長石を含む		2.5Y8/1灰白	良		
316	SK212	軒丸瓦	[11.7]		1.65		13.8	1.9	ナデ	ナデ	巴文(右巻き)・珠文:24	普		7.5Y8/1灰白	良		
343	SK233	軒丸瓦				[13.3]	1.65		ナデ	ナデ	粗/2~3mmの石英・長石・小石等を含む	普		N8/0~N7/0灰白	良		
357	SD202	軒丸瓦				8.3	1.85		ナデ	ナデ	普			10Y7/1灰白	良		
362	SD205	丸瓦	26.1	12.1	1.65				ナデ	ナデ	普			N7/0灰白	良		
377	SE202	軒平瓦	[13.0]		1.5		[15.5]	[2.65]	ナデ	ナデ	四目紋	普		N8/0灰白~N6/0灰	良		
390	SK301	軒平瓦	[19.5]		1.8		[12.5]	3.0	ナデ	ナデ	普			N8/0灰白	良		
396	SK307	軒丸瓦				[7.7]	1.55		ナデ	ナデ	巴文(左巻き)・珠文:(9)	やや粗/石英・長石・2mm程の赤色粒を含む		N7/0灰白,10YR7/2に ぶい・黄橙	良		

第 16 表 木製品 観察表

報文番号	出土遺構名	器種	法量(cm)			備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
W1	SE202	椀	口径(10.2)	底径5.2	器高4.15	外面:漆絵・漆膜(黒漆) 内面:漆膜(黒漆)
W2	SE202	椀	口径(11.9)	底径(5.6)	器高8.2	外面:漆膜(黒漆のち赤漆) 内面:漆膜(黒漆のち赤漆)
W3	SE202	不明	13.3	7.1	1.6	
W4	SE202	下駄の歯	12.45	10.4	1.6	
W5	SE202	櫛	[8.5]	4.7	1.1	
W6	SE202	櫛	10.45	5	0.8	
W7	SX201	椀	口径(13.0)	底径(6.1)	器高7.55	外面:漆絵・漆膜(黒漆) 内面:漆膜(黒漆)
W8	SK301	下駄の歯	(21.4)	[5.5]	1.4	高さ(3.4)
W9	SK301	鋳の先	21.1	10.7	2.6	
W10	SK301	椀	—	底径7.0	器高(7.8)	内面:漆膜(赤漆)

第 17 表 金属製品 観察表

報文番号	出土遺構名	種類	種別	法量				備考
				長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
M1	整地A	銅製品	銅銭		2.4	0.1	2.9	「寛永通宝」
M2	整地E	銅製品	銅銭		2.4	0.1	1.9	「寛永通宝」
M3	整地層L	銅製品	銅銭		2.6	0.15	2.9	「寛永通宝」「文」
M4	SK126	銅製品	銅銭		2.3	0.1	2.5	「寛永通宝」
M5	SK124	銅製品	銅銭		2.3	0.1	2.4	「寛永通宝」
M6	③層直上・②層(焼土層)	銅製品	筭	14.0	1.5~1.6	0.2~0.4	18.3	穿孔有り(腐食による?)

写真図版



1. 調査前状況（北西から）



5. 第1遺構面SD101検出状況（北から）



2. 近代住宅基礎等検出状況（東から）



6. SP101～105完掘状況（西から）



3. 近代石組み溝検出状況（北から）



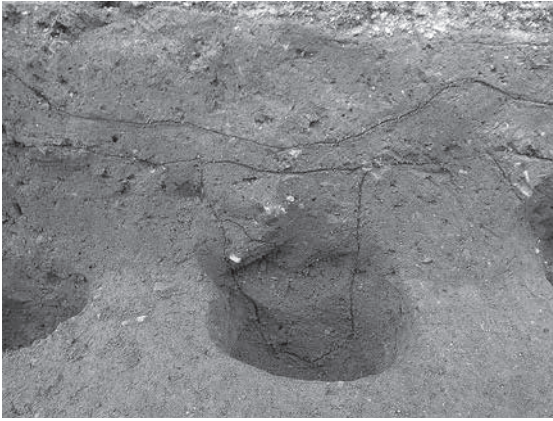
7. SP106断面（南から）



4. 第1遺構面（西半）遺構検出状況（東から）



8. SP109断面（南から）



9. SP115 断面（北から）



13. SP132 断面（南から）



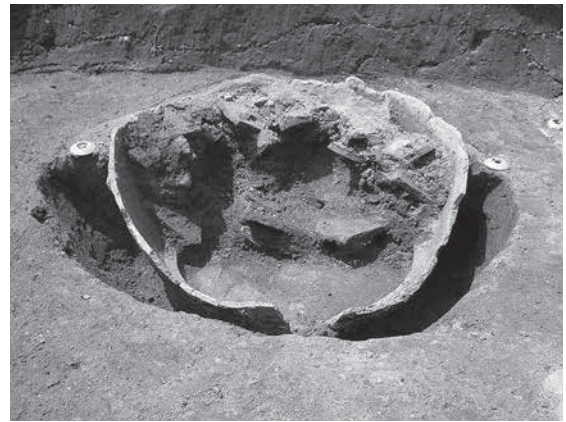
10. SP122 断面（北から）



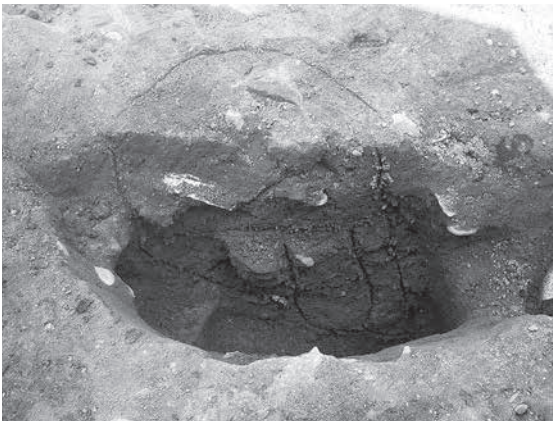
14. SP133 断面（南から）



11. SP124・125 断面（南から）



15. SK101 断面（北から）



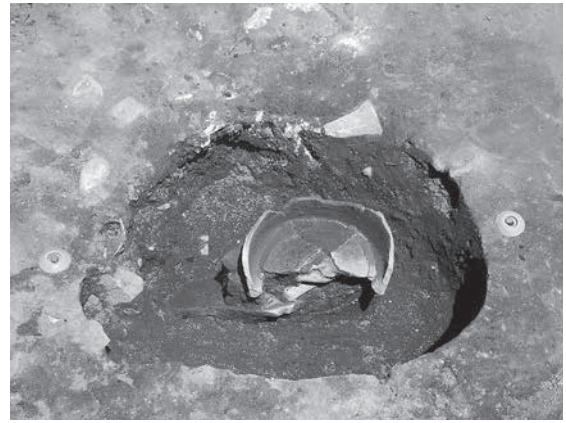
12. SP127 断面（西から）



16. SK101 土器出土状況（北から）



17. SK103 断面 (南から)



21. SK107 土器出土状況 (南から)



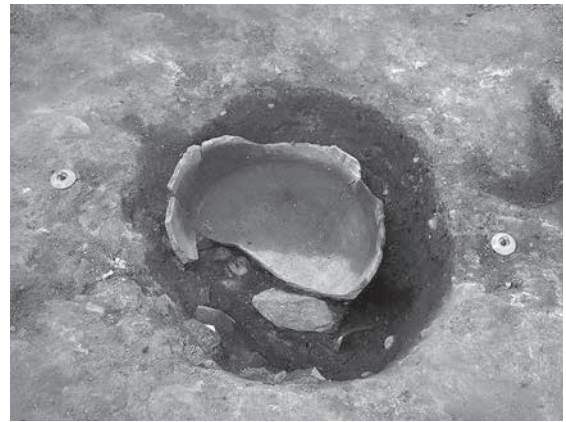
18. SK103 土器・陶器出土状況 (南から)



22. SK110 断面 (南から)



19. SK106 断面 (南から)



23. SK110 土器出土状況 (南から)



20. SK107 断面 (南から)



24. SK111 断面 (西から)



25. SK112 断面 (南から)



29. SK116 断面 (南から)



26. SK114 断面 (南から)



30. SK116 土器出土状況 (南から)



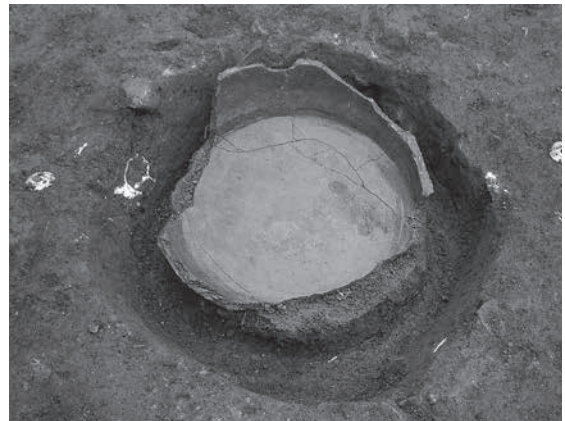
27. SK114 土器出土状況



31. SK117 断面 (南から)



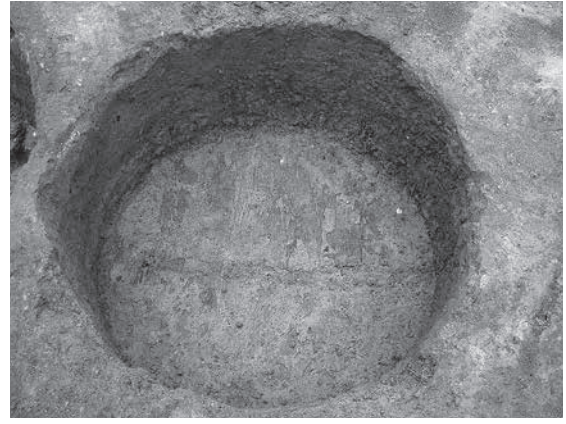
28. SK115 断面 (西から)



32. SK117 土器出土状況 (南から)



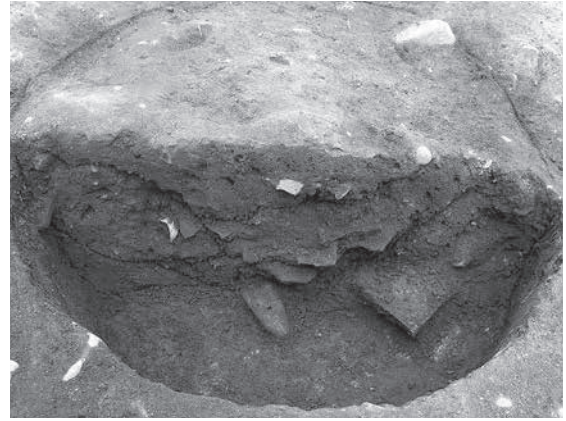
33. SK121 断面 (南から)



37. SK122-1 木桶出土状況 (南から)



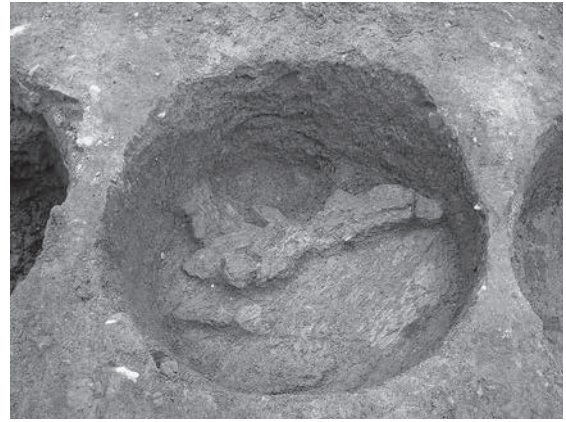
34. SK121 完掘状況 (南から)



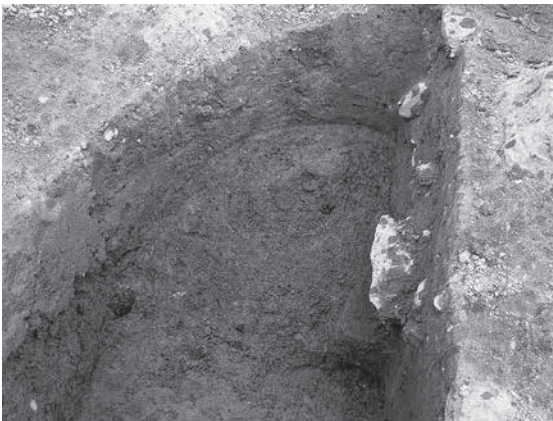
38. SK122-2 断面 (南から)



35. SK122-1 断面 (南から)



39. SK122-2 木桶出土状況 (南から)



36. SK122-1 銅銭出土状況 (東から)



40. SK122 ~ 126 木桶出土状況 (東から)



41. SK122 ~ 126 完掘状況 (東から)



45. SK150 完掘状況 (西から)



42. SK134 断面 (北から)



46. SD101 断面 a (北から)



43. SK147 陶器出土状況 (南から)



47. SD101 断面 b (北から)



44. SK150 断面 (西から)



48. SD101 完掘状況 (南から)



49. SD101 西側側壁（古階段）検出状況（北東から）



53. SD101 東側側壁裏込め断面（北から）



50. SD101 西側側壁（古階段）検出状況（東から）



54. 瓦溜まり検出状況（南から）



51. SD101 西側側壁（北東から）



55. 石列全景（西から）



52. SD101 東側側壁（北西から）



56. 石列西側断割り断面（北半部）（西から）



57. 石列西側断割り断面(南半部)(西から)



61. 整地 A-B 間断割り断面(南東から)



58. SE101、SK118・148 重複状況(南から)



62. 整地 E-F 間断割り断面(東から)



59. SE101 断面(東から)



60. SE101 木製井戸枠検出状況(東から)



63. 第1遺構面（東半）完掘状況（西から）



64. 第1遺構面（西半）完掘状況（西から）



65. 第2遺構面（西半）遺構検出状況（東から）



69. SK201 断面（南から）



66. SP204 断面（西から）



70. SK201 土器出土状況（南から）



67. SP206 断面（西から）



71. SK201・212・213 完掘状況（南から）



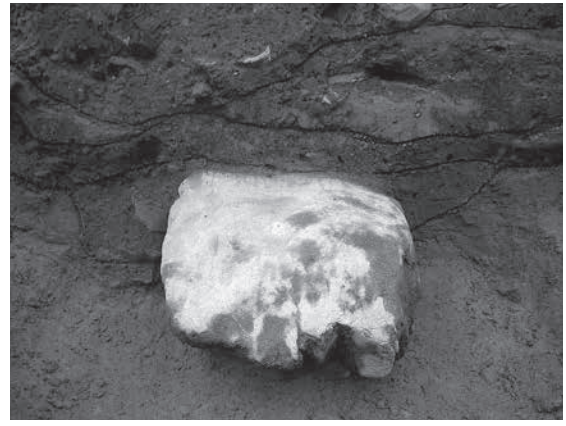
68. SP204～208 完掘状況（北西から）



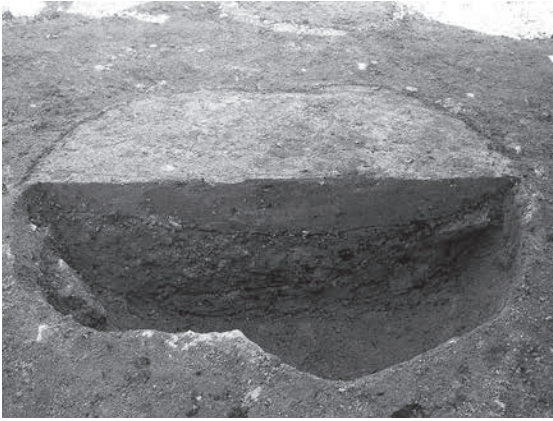
72. SK202 断面（北から）



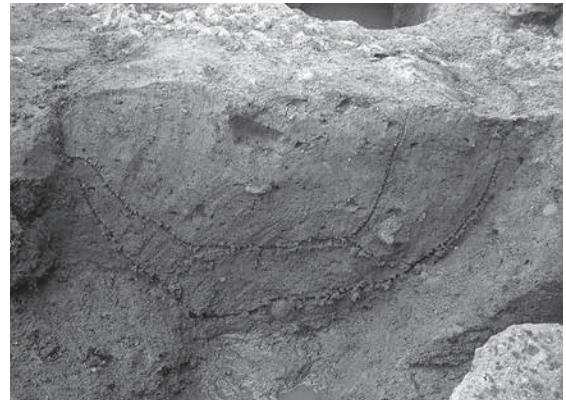
73. SK204 断面 (南から)



77. SK211 断面 (西から)



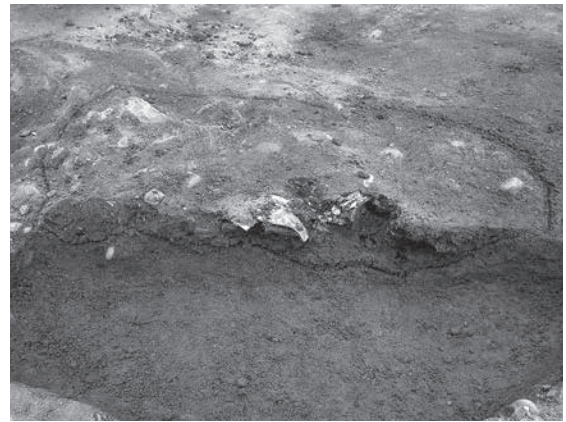
74. SK205 断面 (南から)



78. SK222 断面 (北から)



75. SK206 断面 (南から)



79. SK224 断面 (南から)



76. SK209 断面 (南から)



80. SK227 断面 (南から)



81. SK228 断面 (南から)



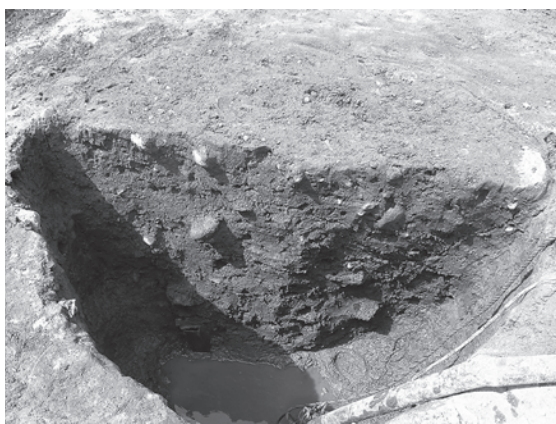
85. SX201 井戸枠状木製構造物検出状況 (東から)



82. SK232 断面 (西から)



86. SD201 断面 (西から)



83. SX201 断面 (南から)



87. SD202 断面 b (東から)



84. SX201 桁状木製品出土状況 (南から)



88. SD201・202 完掘状況 (西から)



89. SD203 断面 (西から)



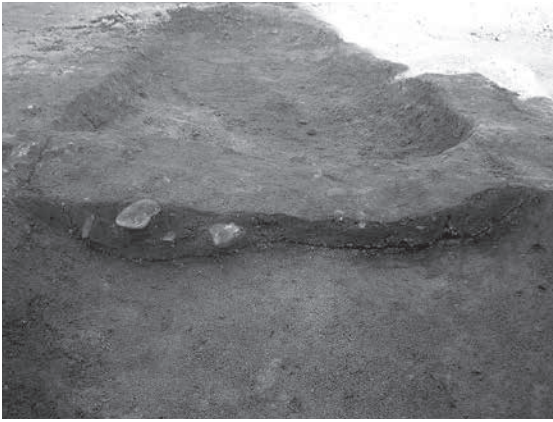
93. SD205 木桶検出状況 (北西から)



90. SD204 断面 a (西から)



94. SD205 木桶痕検出状況 (西から)



91. SD204 断面 b (西から)



95. SD205 断面 a (西から)



92. SD204 完掘状況 (西から)



96. SD205 断面 b (西から)



97. SD205 接続部検出状況（北西から）



101. SE202 下位列石検出状況（南から）



98. SD205、SX201 完掘状況（西から）



99. SE202 断面（1）（南から）



100. SE202 断面（2）



102. 第2遺構面（東半）完掘状況（西から）



103. 第2遺構面（西半）完掘状況（西から）



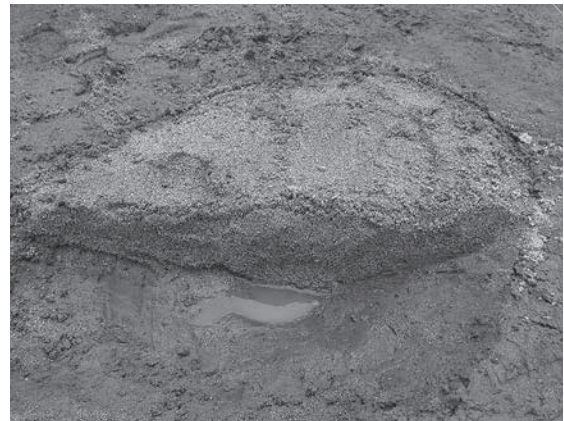
104. 第3遺構面遺構検出状況（西から）



108. SK301 断面（北西から）



105. SP301 断面（南から）



109. SK308 断面（南から）



106. SP305 断面（南から）



110. SD301 断面（西から）



107. SP310 断面（南から）



111. SD301 完掘状況（西から）



112. SE201 断面 (南から)



114. SE302 断面 (2) (南から)



113. SE302 断面 (1) (南から)



115. 第3遺構面完掘状況 (西から)



116. 調査区南壁断面（北東から）



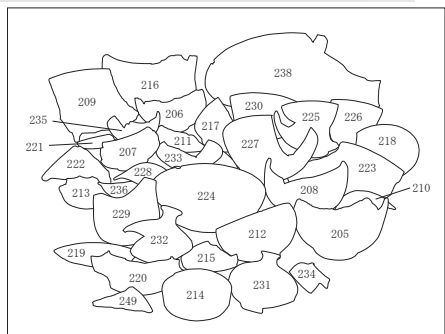
117. 調査区東壁断面（南半）（西から）



118. 調査区東壁（北半）①～③層堆積状況（北西から）



1. SD101 出土遺物 (1)



2. SD101 出土遺物 (2)



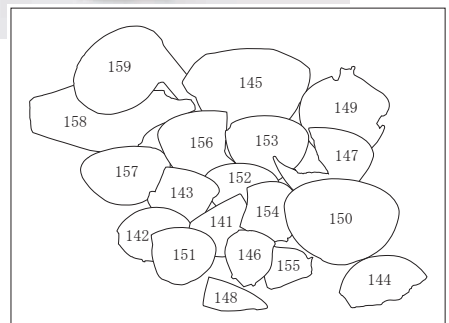
3. SD101 出土瓦 (3)



4. SK122 出土遺物 (1)



5. SK132 出土遺物

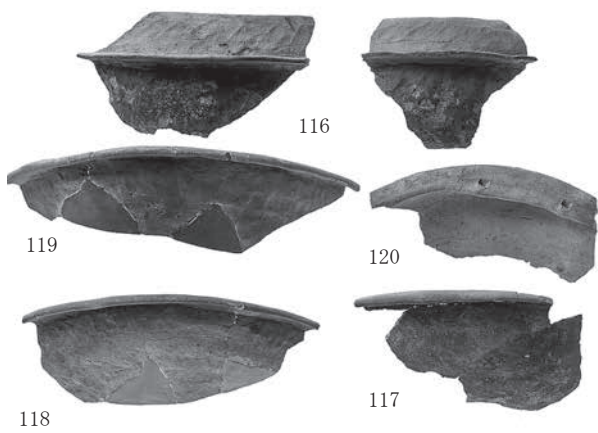




6. SK134 出土遺物



7. SK150 出土遺物



8. SK122 出土遺物 (2)



11. SK150 (195)・SD101 (243) 出土遺物



9. SK103 出土遺物



12. SK147 出土遺物



10. 整地D層 出土遺物



13. SE201 出土遺物



14. SK109(75)・SK110(74)・
SK107(82)・SK117(98) 出土遺物



15. SK116(83)・SK101(67) 出土遺物



16. SK116(83) 上面



17. SD202 出土遺物



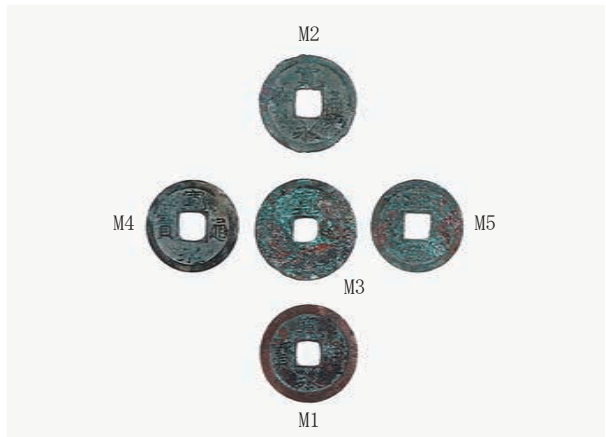
18. SK202 出土遺物



19. SK212 出土遺物



20. SK201 出土遺物



21. 銅錢



22. ③層直上・②層(焼土層)出土遺物



23. SK301 出土遺物



24. SE301 出土遺物



26. SK301 出土漆器 (外面)



25. SD301 出土遺物



27. SK301 出土漆器 (内面)



28. 木製品集合



29. 曲げ物



31. SE202 出土漆器 (1)



30. SE202 出土漆器 (2)



32. SX201 出土漆器



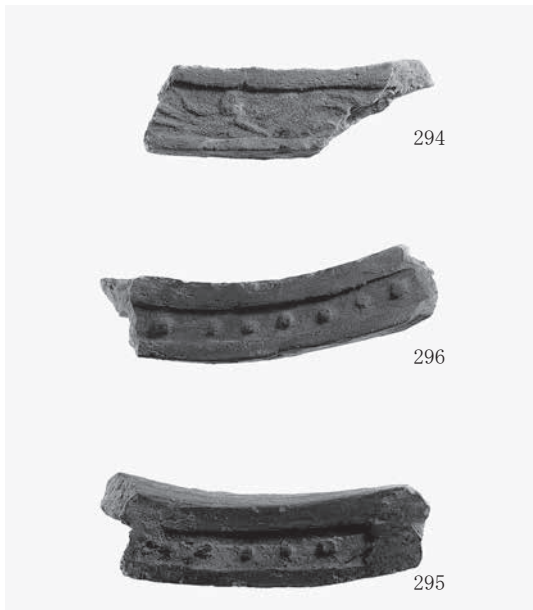
362 (凸面)

33. SD205 出土丸瓦 (凸面)



362 (凹面)

34. SD205 出土丸瓦 (凹面)



294

296

295

35. SK202 出土瓦



270

271

272

36. 瓦溜り 出土瓦



293

377

37. SK202 (293) ・ SE202 (377) 出土瓦



390

38. SK301 出土瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	たかまつじょうあと（まるのうちちく）							
書名	高松城跡（丸の内地区）							
副書名	丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第163集							
編著者名	池見 渉							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	西暦2015年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
たかまつじょうあと 高松城跡 まるのうちちく （丸の内地区）	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 まるのうち 丸の内	37201		34° 34′ 77″	134° 05′ 32″	2014.4.21 ） 2014.6.30	350 m ²	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
高松城跡 （丸の内地区）		近世	柱穴 土坑 井戸 溝 石列 瓦溜り	弥生土器 土師質土器 須恵器 陶磁器 瓦 木製品 金属製品				
要 約	<p>本調査地は、近世城郭である「高松城」の外曲輪内にあたり、絵図との比較検討から、武家屋敷域と町屋域との境界付近に位置すると考えられる。当該地において、高松城築城後にあたる17世紀前葉～19世紀の遺構・遺物を多量に検出し、当該期間における土地利用形態の変遷過程を把握することができた。特に、第1・2遺構面で確認した溝は、水利用のあり方や土地区画のあり方を推測する上で、極めて示唆的である。また、遺構面間に介在する火災に伴う焼土層や洪水砂の存在は、土地利用形態更新の背景を考える上で重要である。</p> <p>一方、高松城築城以前、14世紀中葉～15世紀前葉の溝も一条検出しており、調査地付近にも条里地割が施工されていた可能性が推測できる。これら、中世から近世の遺構の主軸方向の検討を通して、土地割りの方向が変化する状況を確認できたが、このことは、城下の整備過程を検討する上で、重要であると考えられる。</p>							

丸の内共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡(丸の内地区)

平成 27 年 7 月 31 日

発 行 高松市教育委員会
穴吹興産株式会社

印 刷 有限会社 中央ファイリング